

空に太陽があるかぎり

つみれ@インド産

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

羽沢珈琲店の跡取りは色々と謎が多い。

無愛想で、鋭い眼光は他人を寄せ付けない。話しかけても最低限の受け答えしか返さない。いざ会話が成り立ったと思っても、突き放すような言動ばかり。

友情を嫌い、馴れ合いを嫌い、対話を嫌い、調理師免許と叩き上げの腕のみで店を切り盛りする。

この一匹狼の名こそ――

「盛り上がっているところ悪いが、それは果たして面白いと思っっているのか？俺にはそうは到底思えんが」

「変なところで言葉を省かないの、お兄ちゃん。たぶん『自分のようにつまらない人間のことを話題にしても、そう大して面白いと思えないが』って言いたいんだらうけど、今のだと相手がつまらないみたいに聞こえちゃうからね！」

「そうなのか」

なお、本人としてはそんなつもりは一切ない模様。

これは、ほんの少しだけ天然で、口下手で、感情表現な苦手なだけのひとりの男、羽沢和那が、その言動で従妹を中心とした少女たちを振り回す物語である。

## 目次

|          |                         |     |
|----------|-------------------------|-----|
| Prologue | 理想と現実                   | 1   |
| 1話       | 目指す先はまだ長い               | 7   |
| 2話       | 誰のせい?                   | 14  |
| 3話       | 妹として                    | 26  |
| 4話       | “いつも通り”                 | 39  |
| 5話       | 違い                      | 55  |
| 6話       | ブレない芯                   | 70  |
| 7話       | 角砂糖をひとつ                 | 92  |
| 8話       | 経験者は語る                  | 110 |
| 9話       | お客様のの中にパン屋様はいらっしゃいませんか? | 128 |
| 10話      | 神様、仏様、<br>様(前編)         | 143 |
| 11話      | 神様、仏様、<br>様(後編)         | 162 |
| 幕間       | 成長に乾杯                   | 182 |
| 12話      | 余計な一言                   | 196 |
| 13話      | きっかけの“きっかけ”<br>(前編)     | 215 |
| 14話      | きっかけの“きっかけ”<br>(後編)     | 232 |
| 15話      | 祭囃子の前振り                 | 254 |
| 16話      | 響け、届け、この<br>(前編)        | 272 |
| 17話      | 響け、届け、この<br>(後編)        | 293 |
| 18話      | ゆー・あー・まい・ひーろー           | 313 |
| 19話      | 六人目なぞいない                | 337 |
| 20話      | 知っている／知らない表情(かお)        | 359 |
| 21話      | ランブリングメモリー(前編)          | 382 |
| 幕間       | 二人っきりの誕生日(つぐみ誕生日回)      | 399 |

## Prologue 理想と現実

幼少のころ、事情があつて親元を転々としていたためか、親、と呼べる人間には何人か心当たりがあつた。

ひとりは、俺をこの世に産んでくれた母。

ひとりは、俺に俗世を教えてくれた一人の男。

そして、俺に家族の温もりを教えてくれた叔父夫婦だ。

彼らは、俺の人格を形作る上では欠かせない存在であることには違いない。

母に関する記憶は既に薄れてしまっている。

恥ずかしいことに、どんな性格なのか、何が好きなのか、ほとんど憶えていない。

ただ、赤子のときから身を粉にして働き、俺を育ててくれた人間であることは覚えている。

夜遅くまで家を留守にし、されども俺への食事は欠かさず用意してくれた。

それだけでも充分に立派な親だと言えるだろう。

母の元から離れ、俺はとある男に引き取られた。

彼には帰るべき家が無かつた。かといって各地を巡っているわけではなかつた。

ただ、一日一日を必死に過ごし、辛うじて生きながらえているような、世間一般で言う”ろくでなし”であつた。

お前を引き取つたつもりなんてない、と口癖のように言う彼の背中を縫りつくように追いかける。そんな奇妙な関係であつた。

苦しくなかつたといえは嘘になるが、あの生活があつたからこそ、俺は世の中というものを知ることができた。

——そして、最後に行き着いた先が、母の弟夫婦の元であつた。彼らは他人に等しい俺を、本当の息子として育てると言った。事

実、彼らにはそのような育ててもらった。当たり前前に、当たり前前の家族のように。

思い起こすのは、初めて叔父夫婦と出会ったときのこと。

優しい笑顔で迎え入れる叔父叔母の後ろに隠れながら、顔だけを覗かせて俺を見る小さな女の子の姿が特に印象に残っている。

女の子は俺の身なりに面食っていた。

しかし、たしかに小さな声でこう言った。

「こ、これからよろしくね。お、おにいちゃん」

優しき”親たち”に出会えた俺は恵まれている。

ならば、俺も当たり前前のようにこの小さな従妹を支えよう。恵まれていると思えるような人生を送らせてやるべきだ。いや、しなければならぬ。

それこそが、俺を育ててくれた”親たち”への最高の返礼と信じて。

この出会いをもって、俺の生き方は決定づけられた。



「ねえーつぐー、聞いてよー」

「はいはい、どうしたのー」

ある休日の朝方のことだった。

羽沢珈琲店に客が来なくなるこの時間帯で、この話の切り出し方をした上原ひまりの話は決まっている。

つぐ、と呼ばれた羽沢つぐみも、それをわかっており、手が空いたところでひまりがいるテーブルに歩み寄った。

「なんでモカはあんなに食べるのに体型変わらないのー？やっぱり前言ってたようにカロリーを誰かに送っているのかなー？うらやましーなー」

「それはモカちゃんのいつものじや…それより何で今その話が…」

つぐみがそう言いかけたところで「あつ」と何かを察した。

「そう！ そうなのつぐ！ どうしよ〜…」

「え、ええと、大変だね」

つぐならわかってくれると信じてた、と言わんばかりに声が大きくなるひまり。他に客がいなくて本当に良かった。

察しの悪い者でも今の一連の会話を聞けばわかるに違いない。

そう、つまりは体重が増えたのだ。

「もう。こうなったらもう食事制限するしかないんじや〜うう、あまいものが恋しい…」

「そうか。だが、こうしてその『あまいもの』を注文しているあたりお前の決意の柔らかさは相変わらずのようだな」

「違うもん〜これ食べた後からスタートするから…って」

ひまりがゆつくりと、突然口を挟んだ俺に振り向いた。

…目と目が合う。

この店の時間が止まったかのような静けさが続く。

やがて、目の前にいたひまりが普段見ないような俊敏さで後ずさった。

さすがテニス部。瞬発力はなかなかだ。

「かつ、かかかかカズさん!!? いたんですか!?!」

「ここは俺の家だ。休日の午前中であれば、普段どおり店にいてもおかしくないだろう」

「も、もももしかして、今の話…」

「この店の落ち着きようで『聞くな』と言われても無理があるな。そもそも、お前が店にきたときに声をかけたはずだったんだが、気づいてなかったのか」

「ご、ごめんね、ひまりちゃん。止めようとしたんだけど、ひまりちゃんが勝手に話し始めちゃったから……………」

つぐみがか話に話を遮ろうとしていたのは俺も知っている。とは言え、ひまりの口を抑えるには少し強引さが足りなかったようだ。

……………しかし、食事制限か。

過度な我慢は毒にしかならないと言うのに。

「食事制限をしたところで、お前が満足する結果になるとは思えんがな。それに—————いや、何でもない。さて、ご所望のガトーシヨコラだ。ここ一週間で会心の出来だ。心して味わうがいい」

カチャリ、と紅茶とともにテーブルに置く。

以前、ひまりからもらったアドバイスを参考に紅茶はストレート。淹れ方、蒸らし時間、全て完璧に仕上げてある。当然、甘さは自分で調整できるように角砂糖もセットだ。

さて、たとえ”珈琲店”として看板を掲げていても、カフェである以上は紅茶も美味であることを証明してみせよう。

「う、ううう……………」

「どうした、ひまり？なぜ泣く？」

「もういいですよっ！カズしゃんのバーカード天然！とーへんぼく！もうかえる!!」

だが、返ってきた言葉は、普段言い慣れていないことが明らかにわかるような罵倒。

そんな捨て台詞を吐いて、ひまりは扉を壊してしまうかのように出

ていった。

例によつて、店の中に他に客がいないことに安堵する一方、半泣きのひまりの顔に罪悪感を覚えてしまう。

「……また何か余計なことをしてしまったようだな」

「ひまりちゃんの自爆もあるけど、タイミングが悪すぎだよ、もう」

「すまない。店の手伝いは俺がやっておくから、フォローを任せていいか?」

「はいはい、本当しようがないんだから。お兄ちゃんは」

こういう時の従妹いもうとは本当に頼りになる。

おそらく、あの幼馴染四人と俺が未だに良好な関係を保っているのは、つぐみのおかげと言つても過言ではないかもしれない。

「あつ、そうだ。さつき、お兄ちゃん何か言いかけたよね? 何言おうとしたの?」

「む、『俺としては嬉しそうに食べるひまりの方が好ましいからな』と言おうとした。俺の所感なんて言うまでもないと思つて言わなかったが」

「……本当、なんで肝心なところ言わないかなあ」

「そうなのか?」

「ううん、なんでもないよー。行つてきまーす」

つぐみが出ていく背中を見て、ふと気づいてしまった。

この家に身を寄せた時、俺はつぐみを支えられるような存在になるつもりだったはず。

しかし、現実はこちらだ。

——これではまるで逆ではないか?

「……どうしてこうなった」



カランコロン、ドアベルの音が虚しい心に響いた。

「おっす、って、カズだけか？今日、ひまりと約束してたんだけど、来てないか？」

「……よく来たな、巴。ひまりならついさつき出て行ってしまったところだ。そんなわけで、ひまりの代わりにこれを食べてくれ。そして少しでもひまりにカロリーを送ってやってくれ」

「よくわかんないけど、またカズがやらかしたことはわかった。話聞いてやるから、とりあえず座っていいか？」

「助かる」

俺だけではさらに拗らせてしまうことになるのは目に見えて予想できる。仕方ないので、つぐみと入れ替わりに来た巴に胸を借りるとしよう。

……年上として恥ずかしいことこの上ないが、ひまりやつぐみに軽蔑されるのはかなり堪える。背に腹は代えられない。

人生とは総じてままならないものだが、出来る限りのことはしなければならぬ。

そう、俺——羽沢和那は、とりあえずひまり用のパフェの作成の準備に入ることとした。

## 1話 目指す先はまだ長い

宇田川巴は、俺にとっては妹の幼馴染、という関係だけに留まらな  
い。

いや、良き友人という点では他の3人も同様ではあるが、巴に限つ  
ては他の3人よりも対等な関係性であるように思っている。

実際に、店内で二人になったときには俺が相談事を持ちかけたり、  
逆に巴から相談事を持ちかけられたりすることもある。

……ここ最近は前者の方が圧倒的に多いのだが、そこは目を瞑って  
ほしい。年頃の従妹との接し方はわからないことだらけなのだ。

巴自身、妹がいるせいか、嫌な顔せずによく引き受けてくれるから、  
つい甘えてしまうのかもしれない。

以前、ひまりが『巴が男だったら放っておかない』と言っていたが、  
確かにその通りだ。

俺も巴が……いや、よそう。

とにかく友としては絶対に放っておかないだろう。

そして、今日も同様に二人になったので、俺から相談している最中  
だ。内容は、ひまりが泣いて店を飛び出してしまった件について。

つぐみから原因は指摘されているが、今後俺が取るべき行動につい  
ても含めて聞いてもらっている。

全て話し終えたところで、状況は大体わかった、と巴から話が切り  
出された。

「さて、その上でお前は体重を気にしているひまりのために、糖分とカ  
ロリーたっぷりのパフェを作ろうとしてるんだな。鬼畜だな」

「……………返す言葉もない」

……よくよく考えれば確かにそうだ。体重を気にしている者にパフェなんてものを差し出すなんて真似をしようとしたのだろうか。

ちなみに、ひまりとつぐみは先ほど店に戻ってきた。ひまりは泣き止んでいたが、先ほどから恨めしそうな視線が俺の心に刺さる。正直なところ、今すぐ背を向けたいくらい痛い。

俺の醜態には、さすがの巴も溜息が溢れてしまうようだ。

「相変わらずお前の天然思考とコミュ力のなさには呆れるよ、全く」「なんだと」

ここは反論すべきだろう。

天然で、コミュ力がない。

巴は間違いなく俺のことを指してそう言った。

……そうか。

……なるほど、そうなのか。

「え？嘘だろ。もしかしてお前、今の今まで自覚がなかったのか？」

「そんなことはない。多少はあった。だが、俺としては理解力が不足しているせいだと思っていたのだが、違うのか？」

「……すまん、お前が言っている“理解力”の意味がわからないんだが」

「む、“相手の心情や感情を読み取る力”と言う意味の理解力だが、伝わらなかったのか？」

「わかるか！まず言葉そのものが足りてないだろ！」

巴としては、今の俺の返答では『聞き手の理解力不足が原因だろ。俺は悪くない』という意味に捉えられかねないらしい。そういうもの

なのか。

「まったく、自分の伝えたいことがそのまま伝わっていないな、って普通感じ取れるだろう？なんでその時に訂正しないんだよ」

「!!……………そうだな。これからは心がけるとしよう」

「今、『その方法があったか!!』みたいな顔したな…たまにお前が年上ってこと忘れそうになるよ…」

相手に自分の想いが伝わらない。

そんなことは日常茶飯事だろう。人間、自分の意図を100%そのまま相手に伝えることなんて不可能に近いのだから。

……………しかし、そうか。

他の人はそこで『違う、そういう意味じゃない』としつかりと意思表示をして訂正すればいいのか。

俺としては、相手がどのような捉え方をしようと、それは相手の自由であり、俺に侵害する権利はないと考えていたのだが、どうやら違うらしい。

巴だけでなく、つぐみからも耳にタコができるほど聞かされているように、俺は人一倍、言葉を尽くす能力が欠けているようだし、今後は気をつけなければならぬ。

「いや、そこまで思い詰めなくても……………おい、ひまり。カウンターの裏にいるのはわかってるぞ」

「えっ、嘘?!いつから気づいてたの巴?!」

「出ていったフリして、さっき従業員用の出入り口から戻ってきたのハッキリ見てたからな」

……………実のところ、この20年間の人生で、やたら対人トラブルに多く遭遇していたかと思っていたが、そうだったのか。原因がはつきりとした今では悔いが残るばかりだ。

専門学校時代の実習先で店長が軽いノイローゼになってしまったのは、実は俺が原因だったのか。  
彼にも守るべき家族がいるだろうに。  
本当に申し訳ないことをした。

——俺も強く生きるから、あなたもどうか強く生きてくれ。

「おおかた、『カズさんに酷いこといつちやった〜！どうしようつぐ〜！』ってなった結果だろ？よし、あとは任せた」

「ぎくつ！もしかして巴ってエスパー!?…でも、待つて！そもそも何でこのタイミングで私に振るの〜!?」

「何言つてんだよチャンスだぞ！ここでビシツとフォローしてやれば仲直りもできるし、あわよくば幼馴染から先に進展するかもしれないだろー！」

「…はっ！な、なるほど！よし！頑張れひまり！私だつてやればできるんだから！」

まあいい。過去のことは過去のこと。

落ち込んでいる暇などない。

問題は今後の羽沢珈琲店の行き先だ。

叔父叔母は優しい。だが、接客に支障をきたすほどコミュニケーション能力を欠いた人間をこのまま使ってくれるほど甘い考え方はしないだろう。

こうなれば、矯正されるまで接客はずつつぐみかイヴに任せただろうが…。

「あ、あのー！そこまで落ち込まないでください、カズさん！」

そう考えたところで、今度はいつのまにか店に戻っていたひまりから声が飛んできた。

さすがつぐみだ。ひまりのフォローに関しては巴レベルだな。

俺としては今後について真剣に考えていただけなのだが、どうやら傍から見たら落ち込んでるように見えたらしい。

ひまりは顔を赤くしながら——「されども、俺の目をしっかりと見据えながら口を開いた。

「カズさんが、その…普段何を考えてるかわから…いえ、その、ほんの少し会話が苦手でも、私たちを大事にしてくれていることは分かっていますから！だから、カズさんもそこまでおもいつめずに、今まで通りでいいんですよ！心配しないでください！」

「…ひまり」

一瞬本音がちらついたことや、なぜか少しばかり邪な感情が含まれていることについては幾ばくか疑問が残る。…いや、よそう。俺の所感は信用できないことはわかりきっているだろうに。

だが、ひまりが本心から俺を気遣っていること、それだけは伝わった。

ならば、俺もひまりのためを思って忠告しなければならぬだろう。

「そうか、「俺のことを気にしてくれるのはありがたいが」お前こそ自分の心配をしたほうがいい。その気持ちを少しでも自制に向けるべきではないだろうか？「もちろん俺も少しずつ努力して直していくからお互い頑張ろう」…ん？」

声のした方向に視線を移す。

俺の言葉に重ねて発言したのは、カウンターの裏で頼杖をついているつぐみだった。

「お兄ちゃんってば、本当に一言少ないんだから。フォローする私の身にもなってよねっ」

「そうだな、いつも助かってる」

そんなこと、わざわざ言葉で伝えるまでもないとは思いますが、つぐみがそういうならそうなのだろう。今後の参考にさせてもらおうとしよう。

ふと、時計に目が行った。

……少し話し込みすぎたようだ。ひまりと巴も元々別の約束があるのに引き留めすぎてしまった。そろそろ仕事に戻るとしよう。

「そろそろ失礼する。ひまり、そういう訳だ。さつきは悪かった」

そう言ったところ、「えっ、はい」「お、おう」と各々から返ってきた。

……ちゃんと俺の謝罪の意思が伝わっているのか心配だが、ひとまずその場を後にした。

しかし、またつぐみに助けられてしまった。

一体いつになったら俺は頼りにされるような従兄あにになれるのか。

「見ろ、ひまり。あれがお前の目指す姿だ」

「まだまだ、目指す先は長いんだね……」

その通りだ。まだまだ目指す先は長い。

現に、またひまりが落ち込んでしまっている。

コミュニケーション——俺には荷が重いが、これからも精進あるのみだ。

……余談だが、この一件以来、Afterglow内にて俺の言葉が「カズ語」と呼ばれるようになり、また、カズ語によって勘違いを起きていることを指す「カズっている」という造語が生まれることとなった。

本当に、モカには困ったものだ。

「あと、もしかしてカズのコミュカが上がらないのって、つぐがそうやってすぐフオロー入れるからじゃね?」

「……………えっ?……………ええっ!?!」

「従兄も従兄で、従妹も従妹か……………」

そんな、休日的一幕。



## 2話 誰のせい？

今日は週に一日の定休日だ。

いつもは慌ただしい毎日であるが、喫茶店が開いていない、今日のようない日は時間の流れが穏やかだ。叔父叔母もどこかで休日を謳歌していることだろう。

当然、俺も休みをもらっているが、今日は約束があるので家にいた…が。

「何をしている、モカ」

「……ん〜？」

見慣れた人影がフラフラと寄ってくるのを見かけたので、こうして出迎えに来たわけだ。

今、店の前でおぼつかない足取りをしているのは青葉モカ。つぐみと幼馴染で、“ツグってる”や“カズ語”なる造語を世に生み出した、類稀なるセンスを持っている者だ。

俺を見つけたモカは倒れかかるかのように素早い動きで距離をためてきた。

「モカちゃんは一、バイトあがりなのでーす」

「む、そうか。ご苦労なことだな」

「うむ、苦しゅうなくい」

そう、何を隠そう、モカはコンビニでアルバイトをしている。

ひまりがコンビニスイーツ目当てに通いつめている姿に影響を受けたのかどうかはわからないが、とにかくコンビニで働いているのだ。

このモカの状態を見る限りは朝から今まで働いてきたのだろう。

「…で、なぜ店の前にいる？今日は定休日だぞ？」

「それはカズくんにも言えることだよ。なんでカズくんはお休みの日なのに店にいるの〜?」

「俺の家だからな、俺がいてもおかしくはないだろう」

「でも、カズくんがいるってことは、もはや営業中ってことじゃないかな〜」

「それは俺が決めることではない。この扉にぶら下がった“CLOSED”という文字が読めないほど憔悴しているわけでもないだろう?」

コンコン、と扉に吊るされたプレートをわざとらしく叩く。モカは確かに疲労を抱えていることはわかるが、そのまま家に帰る体力は絶対に残っている。俺の目に狂いはないはず。

にもかかわらず、ここに立ち寄ったと言うことは……

「まあいいや〜。とりあえず何かちよくだ〜い」

「やはり集りに来たのか。初めからそう言えばいいものを」

「むー。カズくんはもう少し会話を楽しむことを覚えたほうがいいと思うよ〜」

「……俺には高いハードルだな。他をあたるといい」

ひどーい、と文句を垂れるモカを連れて店に入り、俺は愛用のエプロンを身につける。

モカは歩く余力がないのか、そのまま入口に置いている荷物置き場の脚長のテーブルに身を預けた。

「…全く、今のやりとりにエネルギーを使う価値があるとは思えんな」

「ふっふっふ、そこがモカちゃんの愛嬌なのだよ〜」

「なるほど。そんなだらしな性格好で放つ言葉には何とも言えない力を感じるな。是非ともその愛嬌とやらを理解できる者が誰か教えてほしいものだ」

「ん〜、蘭とか〜?」

ふと頭に出てきた人の名を口にしたのだろう。

蘭——美竹蘭とはつぐみの幼馴染のひとりだ。

Afterglowのバンドの花形とも言えるギター&ボーカル担当。普段は素っ気ないような態度をしているが、おそらく誰よりも音楽を：幼馴染の絆を大事にしているのが蘭だ。

モカが蘭の名前を出したのは直感によるものであっても、適当に口にしたわけではないだろう。

実際、確かに蘭なら理解できそうだ。

本人が口にするかという問題はさておくとして。

「——だ、そうだ。蘭、わかるのか？」

なので、現在進行形でカウンター席に座って頭を抱えている本人に聞いてみるとしよう。

「……えっ、何か言った？」

「おー、蘭だろ。おっすー」

「あれ、モカもいる。いつの間に……」

蘭は考えに没頭していたせいか、途中で俺が外に出たことや、モカを引きずって戻ってきたことも気づいてなかったようだ。

モカも本人がいるとは思わなかったのか、少しの間面食らっていた。貴重な表情だった。

「お前が頭を悩ませている間に店の前に倒れていたのを拾っただけだ。考え込むのは構わないが、少しは周りを気にしてからにしたらどうだ？」

「その言葉、そっくりそのまま返すから」

「そういえば、蘭はどうしてここにいるの？ 今日はこちら定休日だよ？」

「…同じこと二度も言わせないですよ」

普段より言葉にキレのないことから、蘭自身も疲れていることがわかる。

……本人から固く口止めされているため、この場では口にしないが、実のところ蘭は営業時間外来店の常習犯だ。

誰かと一緒のときは営業時間内に来るのだが、今日みたいな一人の時は、朝の仕込みの時間や夜の片付けの時、定休日にくらつと来るのだ。

その際の蘭は大抵何かしら抱えてやってくるからこそ質が悪い。俺も、なまじそれに気づいてしまうから余計に追い出せず、こうしてずるずると試作品のメニューの味見役などを依頼してしまうからなおのこと質が悪い。

今日は事前に連絡を入れているので良しとしているが。

「まあいいやー。とりあえずお腹ペコで動けないモカちゃんをテーブルまで運んでおくれ」

「……ああ、そういうこと。本当、お人好しなんだから」

蘭もここまで来た経緯を察してくれたのか、モカを隣のテーブルに運んでくれたようだ。

さすが、モカの扱い方は慣れたものだな。俺も手が空いたおかげで、その間にコレを用意することができた。

「出来たぞ、余り物のフルーツ盛り合わせだ」

モカの前に出したのは、何の変哲もない色とりどりの果物——その盛り合わせだ。

「おお、余りものとか言う割に切り方とか凝ってるね」

「当然だ。他人に出す以上、妥協なんてものは論外……と、言いたいと

ころだが、正真正銘の余り物だ。量もざつと2人前と言ったところか。悪く思え」

「もーまんたいい。じゃあいただきますーす」

俺がモカに説明したように、これは何てことの無いフルーツの盛り合わせ。まさに廃棄する前のものだが、俺が練習で様々な形に切ったものをそれらしく盛り付けたただけだ。

ただ、盛り付け方の参考元が特殊なだけだ。

「———それ、って」

蘭も気づいたようだ。

それも当然だ。

何せ、誰よりも近くでこれを見たことがあるはずなのだから。

「———さて、蘭」

やっと意識がこちらに向いた。

ようやく話の続きをすることが出来る。

「……嘘、今するの?」

「何を言っている。お前はわざわざ時間潰しのためだけにここに来るほど暇をしているのか?」

「ま、待って、ちよつと待って。まだ心の準備が……」

……間違いない。弱気になっている。

いつもなら『何してるの?早く行くよ』と顔色変えずにさつさと済ませるのが美竹蘭という人間だ。

だからこそ、その蘭をここまで逃げ腰にさせるほど、今抱えているものの解決には勇気があることなのだろう。

「準備など今更だろう。モカが来る前はあれほど饒舌に話していたというのに——ああ、モカがいるからこそ言いつぶらくなったのか」

「そこまで察してるなら黙っててよー!」

「ほー、なるほどー。まさか、また蘭が隠し事をするとは…モカちゃん  
は悲しいよ…およよ…」

「モカも悪ノリしないでいいから!あと、そんなんじゃないから!」

目の前の栄養に夢中になっているものだと思っていたが、モカも会話に入ってきた。

挟み撃ちになり、ますます逃げ場がなくなる蘭。しかし、一向に話が進まない。困ったものだ。

「…：難儀なものだな。そこまでして恥ずかしがることでもないと思うのだがな」

「っーもういい!帰るからー!」

耐えきれなくなった蘭が立ち上がって出ていこうとする。

その横顔から見る蘭の顔は赤い。目元も潤んでいるように見えた。

…：いかなな、急ぎすぎたか。

モカの言葉を借りるなら、どうやらまたカズってしまったようだ。

この状況でこのままにするのは不味い。愚鈍な俺もそれだけはわかった。

だからこそ、巴の言葉を思い出せた。

「待て、蘭」

「…：…?」

…：足を止めてくれたが、困った。

さつき言った発言を訂正しようにも、どこを訂正すればいいのかが

わからない。

何が悪いのかわからないのに謝罪するのは悪手だろう。

「参考になるかはわからないが、一言だけ聞いておけ」

——ならば、伝えたいことは全て伝えてしまおう。

「ひとつ。贈り物とは、〃相手にとって必要なものを贈ること〃だけしか喜ばれない、とは限らないものだ。確かに、相手の立場になって考えることは大事だが、その点だけは履き違えるな。視野は広く持て」

「ふたつ。贈り物とは、その想いの深さこそが価値を高めるものだ。お前の悩みや葛藤は当たり前前に伴うものだが、——その悩みや葛藤こそが、相手にとって特別でないものを特別なものにしてくれるはずだ。安心して悩み抜くがいい」

……俺が言えることはここまでだ。

正解かどうかもわからないただの個人的な所感だが、これ以上の助言役となるには、どうやら俺は力不足すぎる。

「……………」

カランコロン、と虚しい音が響いた。

蘭は何も言わず出ていった。

……再び、休みの店内に静けさが戻る。

「……………行っちゃったね」

「……………行ってしまったな」

同じ言葉だが、俺とモカではどこか温度差があり、対照的であった。しかし、こう見えてもモカは駄目なときは駄目と言う人間だ。その

モカが何も言わない、ということが悪い結果にはならないような気がした。

「蘭ってさく、昔からカズくんには弱いよね〜」

「それはお前たち幼馴染にも同じことが言えるだろう。あと、これでも年上だからな。少しは距離感に違いが出るのは仕方のないことだ」

「ふっふっふ、それだけかな〜?」

「……………どうだろうな」

蘭に限ってそんなことはないだろう。

偶然に、周りの年上の人間が俺だっただけでこのことで、偶然に、俺が頼られる機会に恵まれているだけのことだ。

特別なことなど何一つない。

明日以降も、蘭も含めていつも通り過ごすことができそうで何よりだ。

すると、あつ、そう言えばー、と隣から声が聞こえた。

「結局、何の話だったの〜?何か贈り物とか何とか言ってたけど…誰かの誕生日とか近かったつけ〜?」

……………モカには何も話していなかったか。

だが、鋭い予想だ。こうなれば俺が黙ってようがいまいが自ずとわかることだから、素直に白状するとしよう。

「誕生日ではあるが、俺達よりも身近な人間だ。誰かに贈り物を贈る日で、なおかつ蘭があそこまで思いつめるような相手に心当たりはあるだろう?」

「……………なるほどね〜。ふむ……………」

無粋にもわざわざここまで言葉にしたのだ。あとはもういいだろ



う。

そう思った俺は踵を返し、厨房に戻ることにした。

「やっぱり、蘭はカズくんには弱いよ」

モカもそう言っただけで食事に戻り、皿に残っていたオレンジを口に入れた。



「……………むっ」

夜——ふと、人の気配がした。

自慢ではないが、この家もかなり広い。

幸い、持て余す真似はしていないが、今日の夜は一段と静けさが悪目立ちする。

自然と居間に足を動いた。

暗い廊下を歩いていると、まるで自分だけがこの家に取り残されたような錯覚がした。

馬鹿馬鹿しい、と思考を断ち切ったところで、ちょうど居間にたどり着いた。

襖の隙間からは淡い光が差し込む。

どうやら、誰かが中にいるらしい。

……………十中八九、娘だろう。

確かライブが近づいていることは聞いていたが、今日も練習に明け暮れていたのか。

「また、小言のひとつでも口にしてしまうかもしれんな」

悪癖だな、と自嘲しながら襖を開けた。

「……………」

——しかし、そこには誰もいなかった。

明かりがついているのは一部だけ。

さらに、その明かりが照らす先に小包がぽつん、と取り残されていた。

近寄ってみると、その包は簡素ながらも丁寧に包まれた、れっきとした贈物であった。

そして、その下に無造作に置かれた手紙。

「これは、そうか、今日は——」

ようやく思い出した。今日が何の日か。

年を取るごとに無意識的に考えないようにし、逆に、意識的に家族や友人のことばかり考えていたこそ——この贈り物は衝撃的だった。

小包を開けると、中にはもう一つケースがあった。

さらにケースを開けてみると、中には見慣れた造形のものが見え隠れしていた。

それは、いつも自分が身につけているものよりも少しカジュアルさが増したフレームの眼鏡だった。

「——全く、余計なお世話だと言うのに」

置き手紙——とは名ばかりの簡素なメモ書きに自然と笑みがこぼれる。言葉とは裏腹に、感極まっている自分の心を確かに実感していた。

『Happy Birthday』

度数はスペアのやつと同じ物だから大丈夫だと思う。もう少しこだわった方がいいんじゃない』

そんなことが書かれた紙を手際よく折りたたみ、彼も自室に戻っていく。

荷物は多くなったのにもかかわらず、その足取りはどこか軽くなっていた。



「あー、もうー！」

一方、蘭は自室で悶えてた。

無論、心の中でのことだ。仮にその状況を父にでも見られたら間違はなく家出するに違いないからだ。

「ほつんと、慣れないことするんじゃない！なんで『余計なお世話だと言うのに』とかいいながらニヤニヤしてんの!?!わけわかんない！」

……追記しよう。

蘭の父も、今の蘭の状況を見てしまった際には、間違いなく自室から出てこなくなるに違いない。

似たもの親子であった。

「和那も和那だし！モカの前で話の続きしようとするのほんと意味わかんない！しかも、何あのフルーツの盛り合わせ！なんで露骨に父さんの作品に似せて盛り付けしてんの!?!あてつけなの!?!」

傍から見たら絶対にそう見えるだろうが、アレはアレで注意を引きたい思いひとつでやったことで、当人には一切悪意がない。

だからこそ全面的に怒れず、モヤモヤとしてしまう。本当に質が悪

い。

とにかく、明日は確実にモカにからかわれることは決定事項だ。いつもならそれだけで憂鬱になってしまいそうだ。

……………そう、いつもなら。

「……………父さん、喜んでた」

不思議な感覚だ。

腹が立つのに心地良い。

腹が立つのに、心のどこかで報われたと思ってしまう自分にモヤモヤする。

浮足立ってる、とはまさにこの状態を指すのか。

「……………バカ。バカズナ。天然。鬼畜。サイテー」

そうだ。こんなに浮足立ってるのも全部和那が悪い。

相変わらず口下手で、何考えているかわからないし、そのくせ他人が隠したいことはどんなに取り繕っても看破してくるし、なににより、ほんの少しだけコミュ力不足に改善の兆しが出ていることにも無性に腹が立つ。

「あいつが欠点なくなったら……………もう絶対に——」

そこまで考えた蘭は思考を無理矢理シャットアウトするように、明かりを布団を頭から被った。

その際の彼女の表情は、彼女自身もわからなかった。

### 3話 妹として

従兄あにが兄になったのはいつのことだっただろう。

無論、初めから一緒に生活していたわけではない。

父の姉の息子、と聞いていて、身寄りがなくなつたために引き取る  
こととなつた——と、親たちから聞いていた。

ただ、そう聞かされた幼い自分は「そういうものか」と思い、すんなりと受け入れることができなかつた。

当時はその理由なんて自覚できる年ではなかつたが、今になって分析してみると、色々わかることがある。

家族が増えることが嫌だつたわけではないし、むしろ喜ばしかつた。

両親とも喫茶店で働いているため、仕事中は構ってもらえないことに年相応の寂しさを抱いていたため、ずっと兄弟が欲しいとは思っていたからだ。

ただ、それとは別に—— “なんで本当の両親と一緒に居られないのか” という点に無意識に疑問を持つてしまった。

もし自分が両親と離れ離れになつてしまつたらとても悲しい。

考えただけでも心細くなつてしまい、泣いてしまふくらいに。

これから新しい家族になる人は、まさにそんな想いを一身に背負つている。自分ならば絶対に耐えられない。

そんな心細さを抱えている人にどうやって向き合えばいいかわからない。

幼い自分はそんな憂いを抱きながら、母の背中に隠れながら会うことになつた。

そして、初めて対面した時の彼は——



「た、ただいまっー」

荒くなった呼吸をそのままに部屋に鞆を投げ捨てた。  
休む暇なくいつも使っているエプロンに袖を通す。

今日は生徒会の仕事もバンドの練習もない。

生徒会は季節的に特に集まって会議などするようなことはなく、バンドの練習は突然ひまりから中止の連絡が入ってきた。

どうしたんだろう、とは思ったが、モカはともかく、蘭や巴が何も理由を聞かなかったので、つぐみも聞かないことにした。

そのため、授業を終えたら家の手伝いをする予定だった……のだが、頼まれ事を引き受けてしまっていたら随分と遅くなってしまった。

生徒会という役割は良くも悪くも頼りにされてしまうものだ。それがやり甲斐であるが、一方でこうして振り回されてしまうことも珍しくない。

ちなみに、帰りが遅くなることを事前に連絡はした。

兄からの返信は『必要ない』の一言のみ。

本人は『家のことは気にしないで放課後を有意義に使いなさい』と氣遣っているつもりなのだろうが、圧倒的に言葉が足りていない。

家族である自分や、付き合いの長い幼馴染なら察することができるだろうが、赤の他人からみれば突き放しているようにしか見えないだろうに。

それはそれとして  
閑話休題。

ひとまず、店の前で深呼吸して息を整える。

幸い、羽沢珈琲店は家族の他にもアルバイトがいるので、それほど心配はしていない反面、何かしら手伝いをしなければ気が済まなかった。

喫茶店の店主の娘としての使命感から来るものなのか、それとも別の理由からなのか。

とにかく、考えるよりも体を動かしたい気分であった。

「ごめんなさい、遅くなっちゃった！」

従業員用の出入口から店に入る。

店内は騒がしい様子はなく、既にピークは去っていた。想像通り、何も問題は起きていない。

「へい、ラッシャーイ！」

「へい、ラッシャーイ！」

「二人とも何やってるの!?!」

従業員二人を除いて、であったが。

店に入って早々に声を上げると、兄の和那が特に焦った様子もなく振り向いた。

「つぐみか。おかえり。見てわからないのか？仕事をしているだけだが？」

「そうじゃなくて！その接客！」

「…ああ、これか。イヴから教わった。喫茶店でそれはいかなものかとも考えたが、やはり日本人としては国独自の文化というものは重んじる必要があると思ったわけだ」

「う、うーん…考え方は立派かもしれないけど、そこまで考えて何でやっちゃうかなあ…これじゃあお寿司屋さんだよ…」

「一応、寿司なら一通り作れるぞ。自慢するのは恥ずかしいが、これでも本場の板前から賞賛されたこともある」

「そういう問題じゃなくて！ここはカフェだからね！だからドヤ顔しないの！」

ため息混じりに嘆く自分の顔を見てか、貴重なドヤ顔をしていた兄も目を伏せた。

一見、普段通りに見えるかもしれないが、このような表情をした兄はかなり落ち込んでいるのだ。

「どうやら、また俺は頓珍漢なことをしてしまったか」

「大丈夫です！いつかツグミさんもわかってくれます！」

「…そうか、そうだな」

——あれ、これ私がおかしいみたいになってる？

一瞬だけ自分の常識を疑ってしまいそうになったつぐみだが、すぐに気を取り直して仕事に入る。

ちなみに、兄とともに働いていた彼女は若宮イヴ。

簡単に紹介すれば、フィンランド人の母と日本人の父の間から生まれたハーフで、花咲川女子学園の茶道部と華道部と剣道部に所属しながらこの羽沢珈琲店でアルバイトをしている現役アイドルだ。

…これだけでも並のアイドルを没個性にすることができるほど



の強烈な個性を持った彼女であったが、口数が少なく、他人を寄せ付けず、常時仏頂面の、彼女とは別の意味で個性的な兄とも良好な関係を築いていた。

「あの、カズナさん」

「？」

「これ、作れますか？」

店の中が落ち着きを見せ、日が陰り始めたころ。

イヴが兄に見せたものは雑誌の1ページであった。

遠目から覗き込んでみると、そこには儂いピンク色と葉の緑色が鮮やかな和菓子が写っていた。

「ふむ、桜餅か。作れるぞ」

「本当ですか!? さすがです!」

「だが材料が足りんな。桜の葉の塩漬はないが、それでもいいか？」

「はい! お願いします!」

「では準備が終わったら声をかけよう。それまでしばらく待つがい  
い」

そう言い残した兄は厨房に消えていった。

生徒と先生。これがあの二人の関係だった。

兄が作れる料理は、この店のメニューだけに留まらない。

基本的な料理は勿論のこと、特に菓子類のレパートリーは豊富で、喫茶店で定番の洋菓子や和菓子にも広く精通していた。

本人曰く、専門学校時代に実習先で技を盗んでいたらこうなった、とのことであった。

……正直、自分以外の幼馴染たちも、兄の専門学校は実はパティシエ養成のための学校であったのでは、と疑っているのは内緒だ。

そんな兄に、店長である父の気まぐれで作らせたわらび餅をイヴが試食役になったことが全ての発端であった。

作り方は簡単だから家でもやってみるといい、と兄が乗り気でレシピを教え、勤勉な性格のイヴは兄を慕うようになった。

こうして和那の『授業』は、この店ではよく見る光景となった。

……きつと、ひまりがこの現場を目撃した暁には、ぷりぷり怒りながらずっとこの店に入り浸ることになるだろう。

「……むう」

自分の幼馴染以外にも交友関係を築けていることに嬉しい。反面、兄とイヴ、二人の空間が作られてしまうと、——当人たちがそんな意図がないことを理解していても——、自分だけ仲間はずれにされるような感覚を覚えてしまう。

……私って、こんなにわがままだったっけ？

そんな疑問を胸に抱きながら、自然と厨房へと身を投じた。何を言いたいのかまとまらないが、あれこれ考えながら声をかけた。

「お、お兄ちゃん」

「わかった。だが駄目だ」

……今の「お兄ちゃん」だけで、一体何がわかって何が駄目なのだろうか。

さすがに一番古い付き合いでも、こればかりはわからなかった。

「……まだ何も言ってないのに」

「お前の言いたいことはわかる。材料も足りる。だが、お前に教えることは何もない。悪いが、それは譲らん」

相変わらず言葉が足りていないせいで、突き放す言動をしてしまっているが——学校から急いで帰ってきたことを気遣っていることはわかる。

「……待て、なぜ不服そうな顔をする？また言葉が足りなかったか？」  
「違うもん。お兄ちゃんはイヴちゃんと二人きりでいたいから、妹は邪魔なのかなー、って」

「そうだな。お前がこの場にいないで欲しいのは俺の個人的な願望ではあるが……まさか、理由を言わなければわからないのか？」

気づかないことに呆れながら問いかけをされても、本当にわからないから困る。今日のカズ語は一段と難解だ。

……もしかして、本当にイヴのことが——!?

「違う」

「あうっ」

そんな思考を断つように、指で額を小突かれた。

確かにそれはないな、とは思ったが、では何だ言うのか。

さらに不服そうな視線を向けると、観念したのか、兄は溜息をつきながら口を開いた。

「以前、ライブが近いと言っていたな」

「う、うん。あと1週間切ってるから、もっと練習しないと……」

「そうだな。だが、現に今日は全体練習は無しになった。理由は？」

「理由？」

そう言えばそうだ。

普段なら可能な限り練習を詰め込んで本番に備えるはずなのに、今

日は中止になっている。

結局、ひまりには理由を聞かなかったが、なぜ今になって中止にしたのだろう。

「……………ガルジャム」

「……………あっ!？」

その単語のみで全て察することができた。  
まるで点と点が線になったようにつながった。

少し前の話だ。

ガルジャム、と呼ばれるライブイベント出演に向けて活動していた時、自分が過労で入院してしまったことがある。詰め込みすぎた練習を続け、その上で生徒会の仕事と家の手伝いを併せて行っていたことが原因だった。

それに追い打ちをかけるように蘭の家の事情が重なり、バンド内の関係がギクシャクしてしまった。

結果的にライブは成功し、蘭の父にも一定の成果を見せることに成功したが、もう二度と倒れるようなことはしないように心に決めていた。

「……………なら、初めから『休め』って言うてくれれば良かったのに」

「そう言えばお前は休んだのか?」

ちゃんと休む、と言おうとしてつぐみは口を噤んだ。

何だかんだで動いていないと落ち着かず、勝手に自主練をしてしまう自分を想像できてしまったからだ。

きつと、幼馴染たちも兄に味方するに違いない。

「反省したようで結構。だから部屋に戻るといい。お前は充分手伝ってくれた」

今度こそもう話すことはないのか、背を向けて厨房から出ていった。周りを見ると材料は全て机の上に置いてあった。話し込んでいる間に準備を終えていたことに気づかなかつた。

「……むう」

……今回は兄が正しい。

基本的にイエスマンで、よく変な勘違いをすることはあるが、こうして意見を譲らないときは、決まって兄の方が正しいことが多い。

しかし、心の中ではまだモヤモヤしていた。

休むべきであることは納得したが、実際に仲間はずれにされていることには変わらない。

自分だけ置いてけぼりにされるのは御免だ。

置いてけぼり——ああ、思い出した。

そう言えば、初めて兄とあった時もそんな感情を抱いたのだった。

この人は、いずれは自分や両親を置いてどこかに行ってしまう。

しかも、それは彼の意図的なものではなく、誰も止めることができないような自然な形——まるで、太陽が沈むことを人間が止められないように、いつの間にか消えてしまうような、そんな予感がしたのだ。

だからこそ、彼の妹として、自分は——



「準備ができたぞ、イヴ。店の片付けは終わったか？」

「はい！バツチリです！」

「よし」

閉店の準備が整ったので、もはや定例となったイヴへの授業を始めることにした。

今日教えるのは桜餅。ありあわせの材料で作ることができギリギリのラインではあったが、イヴが見せた雑誌よりも高い品質のものを作れるように努めよう。

「カズナさん、厨房でツグミさんと何の話をしていたんですか？」  
「少しは休め、という話をな。なかなか首を縦に振らなかったが」

そう、今日のつぐみは珍しく食い下がった。

幼馴染＋俺が計画した“つぐをツグらせない大作戦（命名：ひまり）”。

再びつぐみが倒れることのないように予防として決行されたそれは、俺がガルジヤムの話を持ち出した時点で露見した。

それに気づいたつぐみは、そう言った厚意を無下にはしないと想ったのだが……もはや、体が勝手に動いてしまうレベルにツグってしまうのだろうか。

「ふふっ、お二人とも仲が良いんですね！」

「今のところは、な。いつも助けられている身としては、愛想を尽かされないように、もう少ししっかりしたいものだな」

だからこそ、今日くらいは俺に任せて休んでほしいものなのだが。

それはそれとして  
閑話休題。

とにかく、今日やることはほぼ終わったようなものだ。あとはイヴに付き合っただけの仕事が終わるとしよう。

——と、厨房に戻ってきたときだった。

「……何をしている、つぐみ」

「……………」

つーん、とそっぽを向きながら厨房の端つこに座る従妹いもうとがいた。

「俺は休め、と言ったはずだが、お前の休むところは厨房だとも言う気なのか?」

「休んでまーす。お二人は私にお構いなくやって?ほらほら」

つーん、と素っ気ない返事で突っぱねる従妹いもうとが椅子に座っていた。

——どういう状況なのだろうか、これは。

従妹いもうとの態度が素っ気ない。それでいてどこかソワソワしながらこちらをチラチラ見ている。

また肝心なことを伝え忘れたのだろうか。

……いや、もう言葉は尽くした。文字通り、つぐみに言うことはない。

では、後はどうすればいいのだろうか?

「ツグミさん?少し手伝ってくれませんか?」

そんな困っている俺を差し置いて、イヴが助け舟を出してくれた。だが、それはいけない。蘭たちに頼まれた以上、つぐみがリフレッシェンできたという結果を残さなければならぬ。

「イヴ、それは——」

できない相談だ、そう言いかけたが言えなかった。

なぜなら、有無を言わさないとばかりに視線が二人分こちらに集中していたからだ。イヴは自覚がないようだが、つぐみは『ここまで言わせておいて、それはないんじゃない?』とばかりに圧力をかけてきていることがわかる。

……。

……………結局、こうなるのか。

「……………頼めるか?」

「…………… うんっ!」

俺の意志は煮崩れた芋のように脆く、ボロボロであった。

従妹いもうとのわがままを聞くのも従兄あにの役目として、自身を無理矢理納得させることにした。

なお、別に何もしないことがリフレッシュになるわけではない、とは本人の談。

その裏には仲間はずれにされたくない思いがあっただのが見え隠れしていたが、つぐみ自身も俺が察していることに気づいているようなので黙っておくことにした。

「では、始めるとしよう」

「はい!よろしくお願いします!」

さて、教師など柄ではないが、頼まれた以上は期待以上の成果をもつて全うするでしょう。

思考を切り替え、シャツの袖を捲った。

「……………今度、紗夜さんも呼んでみようかな」

「? 何か言いました、ツグミさん?」



「ふふっ、何でもないよー」

それはそうと。授業中にそんな不穏なやり取りを耳にしてしまった。

……今後、生徒が増えることも想定しておくべきなのかもしれない。

## 4話 “いつも通り”

隣人の顔が辛うじて見えるかどうかの暗い一室。

スポットライトが静かに照らすのは五人の少女たち。

彼女らの姿が見えた途端、幾多の歓声がこの一室に響きわたる。

「騒々しいな」

ぽつり、と漏れた感想すら、この場では歓声によって儚く消え去る。ここにいる観客たちがそれほど彼女たちの登場を待ち望んでいた証拠だろう。

今、ここにいる俺など、彼らにとっては気に止めることすら無駄なほど、ちっぽけな存在であることを実感できる。

そんな熱狂的な視線を集めているステージの上にいる彼女たちの顔つきもまた、普段のそれとは違っていた。引き締まったその表情からは、音楽に対する真摯な気持ちやダイレクトに伝わってくる。

ボーカルの蘭が口を開くと、自然と歓声も止む。

蘭が放った言葉はただ一言だけ。

一曲、聞いてください、と。

飾り気のない、率直で素直な言葉を皮切りに始まる演奏はさらなる歓声を呼び起こした。

その光景を、俺はただただ俯瞰する。

退屈なわけではない。むしろ、音楽には疎い俺でも、聞いているだけで気分が高揚している。

少し恥ずかしいが、この場にいる観客と同じように腕を掲げてもいいかと思えてくるほどに。

だが、俺は俯瞰することしかできない。

なぜなら――

「……………そろそろ血流が悪くなってきた気がするな」

――全身に縄で簀巻きにされているせいで、物理的に身動きが取れないからである。



遡ること、一時間前。

今日は待ちに待ったライブ当日。

いつぞやのガルジヤムのような規模のライブイベントではないが、それでも従妹いもうとたちは懸命に準備してきたことは知っている。

音楽関係では役立たずの立場として、せめて本番直前直後くらいは労いをする必要があると思っっている俺としては、いつも家から手軽な菓子類を持っていくことにしている。

こうして訪れた楽屋裏にて対面した巴とひまりに差し入れを渡し、すぐに退散する……はずだった。

気がついたら既に手足を縛られ、なすすべも無くつぐみたちが待つライブハウス裏に連れてこられた。

何かなんだがさっぱりだが、『痛くしませんからねー、ちよつと待つ

てくださいねー』と言うひまりの言葉に大人しく従っていたらこうなっていたのだ。

「さて、そろそろ聞かせてもらいたい……これは新しいパフォーマンスのための準備か何かなのか?」

「そ、そんな演出とかしないからね!」

「実行したアタシたちが言うのもアレだけど、カズも何で抵抗しなかったんだよ……」

つぐみと巴から冷静かつ至極当然の指摘が飛んできた。

……ふむ、いつも通りの反応だ。

どうやら本番を前にして正気を失ったわけではないようだ。伝聞どおり、Afterglowは王道なガールズロックバンドなのだろう。観客の誰かを縛ってステージから放り投げるようなハードな演出をしないように心の底から安堵した。

「抵抗しなかった、と言うよりは抵抗できなかった、と言う方が適切だな。実に見事な手際だった。こうして俺が身動きできないようにされたのはお前たちが初めてだ。胸を張って誇るがいい」

「な、なんだこの強キャラ感……」

「傍から見たらすごい間抜けな構図だけどね」

「もしかして密かに練習していたのか?そんな暇があるなら楽器を弾いている方がもっと有意義だろうに」

「し、してませんよっ!人聞きの悪いこと言わないでください!」

練習なしであの手際の良さは、それはそれで問題があることに気づいていないのか。

そう言葉にしようとしたが出なかった。先ほどから形容し難い視線が飛んできていたからだ。

「じ〜」

視線の主は目の前にいるモカから。

俺が作った林檎のタルトタタンをもしやもしかやと頬張りながら、ある一点を見つめていた。

その先は、乱れた俺のシャツの裾。

巴が言ったように、特に抵抗していなかったことから縛られている最中に出てきたとは考え難い。つまり、その前から乱れていたままと  
いうことになる。これは恥ずかしい。

すると、突然モカはその部分を掴み、

「よいしょー」

おもむろに引っ張り上げた。

「へっ!？」

「なっ!？」

「っ!？」

「も、モカちゃん!？」

視線が俺の腹部に集まる。

一同、驚愕しているようだが、一番驚いているのは他ならぬ俺であつた。

「…………お前は何をしている」

「ん、服をめくってるー。って、相変わらず細いねー。男の子なんだからもつと食べないとー」

「お前ほど大食いにはなれんし、いらん世話だ。そもそも、本番前にこの行為をする意味はあるのか?」

「ん? わかんないけど、需要ならあるよー」

「そんな物好きがいるのか」

そう言いながらモカの背後にいる四人に視線を移す。

苦笑いを浮かべている者もいれば、必死に視線を逸らそうとしている者、両手で顔を覆いながら指の隙間から凝視している者まで反応は三者三様だったが、明らかな供給過多なのは見ればわかる。

「も、モカちゃん！めっ！」

「ちえ〜」

そんな暴挙に出たモカも、つぐみによって制された。

シャツも重力に従い、俺の腹部を覆う。

一旦、冷静になったことでモカの意図にも気づくことができた。

「こ、こらモカ！公衆の面前でそんなことしちや駄目でしょー！もー！」

「そう言ってやるな。本番前だからこそ、ああすることで緊張を和らげようとしたモカの気持ちを読み取ってやれ。現につぐみの肩の力が抜けていることから一定の効果はあったようだ」

「……えっ、あつ本当だ」

「ふっふっふー。これもモカちゃんの作戦のうちなのだー」

「だからって、他に方法はなかったのかよ……」

ドヤア、と胸を張るモカを前に、巴から溜息が溢れる。

「どうやら、巴も途中から気づいていたようで、あの苦笑いは『そんな強引でいいのか』という意味だったようだ。」

話を戻そう  
閑話休題。

本題は、手足の自由を奪った上でここに連れてこられた理由だ。別に服をただけさせることで本番前の緊張を和らげるためではないことくらいはわかる。

「…で、結局これは何なんだ。俺も暇ではないんだ。はやく開放してほしいんだが」

……言い方が悪いかもしれないが、これが俺の本心だ。応援する気持ちは確かにあっても、それはそれだ。これ以上、長居をするつもりはない。

「でも今日非番だろ。つぐから確認は取ってるぜ？」

「お父さんたちからも『必要ない』って聞いてるからね！仕事は理由にならないよ、お兄ちゃん！」

……ふむ、裏取りは完了していたようだ。元々仕事を理由に去るつもりはないが、そんな根回しまでやっていたことには素直に驚きだ。

だが、俺にはここに居続けてはいけないことには変わりない。何とかしてこの場を切り抜けなければならない。

「ねえ、和那。正直に答えて」

今まで沈黙を保っていた蘭がとうとう口を開く。そして、ある事実を俺に向けて突きつけた。

「——私達のライブ、一度も参加したことないでしょ」

先ほどのやり取りが嘘のように静かになった。

この場に全員が俺の返事を待っている。

……ここまで場を整えられては、腹を割るしかない。

「ああ、その通りだ」

俺は肯定した。

蘭の言うとおりに、俺は結成してから一度たりとも A f t e r g l o w のライブには参加していない。

荷物の搬入の手伝いや差し入れをするときに少しだけ練習に関わることはあれど、バンドとしての活動に介入することは意識的に最小限にしていた。

「ど、どうしてですか？いつも差し入れは欠かさず持ってきてくれるのに……」

恐る恐る、ひまりが問いかける。

「もしや、バンド活動に反対しているとも捉えられたのか。」

「まあ、無理もないか。」

現に一度、無理がたたったせいで家族が入院したのだ。あれは他にも要因が重なった結果によるものなので、バンド活動を一方的に責められるものではないのだが、理由としては充分機能する。

「しかし、それは否だ。」

むしろ俺は応援している側だ。そうでなければ、こうして非番の日に手製の差し入れなぞ持ってこないだろう。

「答えはもつと単純な話だ。」

「席は限られているからな」

そう言うと、皆が口を開けたまま沈黙した。

「えっ、席だったら私達が確保して……」

「それは余計というものだ。お前たちの演奏は俺だけのものではない。他にも聞きたい人間は大勢いる。その中には、あぶれてしまう者がいるだろう」

「それは、そうだな」

学生によるガールズバンドとは言え、根強いファンはいる。



ライブに参加したいと思い、必死に予定を調整してきても、席が取れなかったために泣く泣く断念せざるを得ないことは珍しくない。

定員が決められていようなものにおいて、切り捨てなければならぬ時は、いつだって非常であるのだ。

「ならば、その席はお前たちの演奏を楽しみにしている誰かのためにあるべきものだ。断じて、俺が座るものではない」

それを『演者の身内だから』という理由で貴重な一枠を埋めてしまうような真似はできない。悪いこととは言わないが、少なくとも俺はそんな真似はできない。

俺よりも彼女たちの演奏を待ち望んでいる者に譲るのが筋だろう。

……いかな、回りくどくなってしまった。

俺が言いたいことをそのまま口にしてしまったせい、要領を得ない言葉になってしまった。

何か、上手くまとまった言葉がイマイチ思いつかない。

会話が途切れてしまうのもテンポがわるくなってしまっているので、頭の中で要約した言葉を口にするこゝとした。

「つまり、お前たちの演奏は、俺が聞くに値するものではないと言うわけだ。悪く思え」

そう言葉にした瞬間。

プチッ、と何が切れる音がした。

……今の発言に何かおかしな点があっただろうか。いや、あったのだろう。

現にこうして五人から見下されている視線が一気に冷たくなったのだから間違いない。

「田、ひまり。お願い」

「よーしわかった。いつそのことスピーカーに括り付けてやる」  
「どうする、巴？縄の本数増やす？」

巴とひまりが近づいてきた。

スパアン！と手に持った縄を引つ張る音が実に不穏で、背中から冷や汗が垂れる。

……どういふことだ。なぜ目の前の二人から発せられる殺気を浴びなければならぬ。

そうだ、つぐみだ。また頼るのは恥ずかしいが、こういう時は従妹いもうとに助けを求めるしかない。

「あーあ。盛大にカズったね。みんな火がついちやったよ」

「そういうモカちゃんも頭に來てるよね？」

「……どうだろうね。ツグは？」

「私は、いつも通り」だよ？慣れてるし」

助け舟どころか、視線すら合わせずに会話に没頭していた。

薄情、とまでは言わないが、せめて意識くらいはこちらに向けてほしい。さすがに俺も傷つく。

……無理矢理、頭を冷静にして、ようやく理解した。

俺としては『音楽センス皆無の俺なんか聞くのは憚られる』と言葉にしたつもりだった。

一方、あちらには『お前たちの演奏など俺の耳に入る価値すらないと捉えられてしまったようだ。なるほど、それは憤りを感じるのは当然だ。

俺とて、手間をかけて作った料理を目の前で台無しにされたら怒るに決まっている。

だが違う。違うんだ。

俺の伝えたいことはそうじゃない。いや、それは向こうもわかっているはず。少なくとも、つぐみは絶対にわかっている。他の四人もわかってくれるに違いない。

ならば、訂正しよう。

「……すまん、一言足りなかった。あれは——」  
「もう遅い。このバカズナ」

しかし、現実是非情。

俺の発言は、蘭のゴーサインによって遮られた。

結局、弁明の機会すら与えられず、俺は巴とひまりに引きづられていくのであった。

この一件で学んだ教訓としては、これだろう。

“たとえ間違いに気づいても、訂正する機会は必然的に与えられるものとは限らない。”

……もつと早く知りたかった。

そんな後悔は、さらに体中に巻き付かれる荒縄のように俺の心を縛り上げた。



そして、今に至る。

こうしてライブハウスに簀巻にされて柱に括り付けられている様は、傍からみてどんな姿に見えるのだろうか。

搬入された備品置場に放逐されていることで他の観客からは絶妙に見えないようにされている為、見つかることの心配はない。このような配慮を欠かさないあたり、やはりあのやり取りは悪ふざけの一環なのだろう。

そこまで準備をしてくれた以上は袖にすることもできず、こうして現状に甘んじ、素直に演奏を聞いているわけだが……。

「……………」

ただ、圧倒されていた。

各々、異なる楽器にもかかわらず、互いの邪魔をすることでどこか、むしろ引き立たせるように重なり合う音が、的確に心を揺さぶっている。

平常心でいるはずなのに、いつのまにかこの空間に取り込まれているような錯覚に陥ってしまう。

なにより、その一体感を作り出しているあの五人が、この空間で最も輝きに満ちていた。

「これが、ライブか」

確かにこれは癖になる。

未知の感覚に戸惑いながらも、この場にいる俺は恵まれていることは確かだ。

「っ！」

ふと、背後から人の気配がした。

これはまずい。

この姿を見られて失墜するのは俺の名誉だけではない。気休めにするならないだろうが、必死に顔を逸らして誤魔化そうとする。

つぐみたちと同じ演者か、それともスタッフか。

思い当たる人間はいくつかいるが、今回はその誰でもなかった。

「……………君か」

「……………ご無沙汰しています」

俺が挨拶した先には、和服を身に纏った男が立っていた。

さらには眼鏡とマスクで顔の半分以上が隠れている。明らかにラ  
イブハウスには不釣り合いな不審者の装いをしている。

だが悲しきかな。この不審者こそ他ならぬ蘭の父であった。

「待て、それはどうしてそうなった？」

……………訂正しよう。

簀巻きにされている俺も人のことを言える立場ではなかった。

「貴方には関係のない話です。気にしないでください」

「そ、そうか」

こうなった経緯については互いに詮索しないことになった。話が  
早くて助かる。

こうして異様な風貌をした男二人が端でコソコソとしている姿を、  
傍からはどう見えるか心配だが、とりあえず今は考えないことにし  
た。

「ここに来ていること、蘭は知っているんですか？」

「だろうな。それより、敬語はやめなさい。……………なんというか、ところ  
どころ棒読みでむず痒くなる」

「そうか、ならばそうさせてもらう」

こういうところも話が早くて助かる。

一応、外なので慣れない敬語を使ってみたが、不評のようで何より  
だ。

「そうだ、今日は何を持ってきたんだ？」

突然、彼はそんな風に話を切り出してきた。

何とは……………ああ、差し入れのことか。

「林檎のタルトタタンだ。あえて甘さより酸味の強いヒメリンゴを使い、一口サイズに仕上げたことで、ライブ前に手軽に補給できるようにした。我ながら力作だと自負している」

「タルト…ふむ、君には負けんよ」

「そう言えば、貴方も差し入れを持っていくことが多いのだったな」

——さすがに差し入れにプレインのベーグルはないでしょ。

頬を緩ませながら愚痴を言っていた蘭の顔が思い浮かんだ。

なるほど、どうやら彼は差し入れの評判を気にしているようだ。

「その対抗意識は無意味だな。そもそも勝負になると思っ——

いや、失礼した。俺は本職として手作りで、貴方は市販のもの。競い合う土俵が違ってている。それに、差し入れの差など彼女たちには関係のない話だろう、という訳だ」

無意識に出てきた言葉を途中で言い直す。

今日は既に一度カズっている以上、二度続けて過ちをするわけにはいかないのだ。

そんな姿を見た蘭の父は、ほう、と感嘆した。

「少しは進歩しているな。だが、まだ君の言葉は直裁的すぎる。角が立ちすぎだ」

「恐縮だが、そういう貴方も随分と丸くなったな。娘が華道以外に現を抜かすことを頭ごなしに否定していた頑固頭が、一体どういう風の吹き回しだ?」

「……その頭の固さを正面から盛大にこき下ろした若造はどこ誰だったか」

マスク越しで隠れているが、間違いなく顔を引きつらせていたことはわかった。

まだまだ精進が必要なのは自分が一番知っている。

そんな風に、演奏を聞きながらも、ぽつりぽつりと雑談する。

こういった慣れない場にいるためか、必要以上の会話をしないような俺たちも、自然と口数は多くなるようだ。

やがて、彼女たちの出番も終わりが近づく。

セツトリストも、残り一曲と言ったところだろう。

「娘——蘭の音楽を『ごっこ遊び』と評したことがあった」

すると、そんな言葉が隣から溢れた。

「あった」、か。

「過去形ということとは、今はそうではないと言うことか」

そのように尋ねると、彼はわざとらしく目を逸らす。

実のところ、複雑なのだろう。

歴史深い名家の家主としては、一人娘には華道に打ち込んでほしいに決まっている。しかし、その一方で、一人の父としては娘の気持ちを尊重してやりたいのだろう。

「……………親というものは、難しいものだな」

自嘲するように呟かれたその言葉は、今まで彼から聞いたどの言葉よりも重みがあった。

家の問題と、個人の想い。

蘭だけではない。他ならぬ彼もまた、その両方から板挟みになっているのだ。

「俺は誰かの親になったことはない。子ども一人育てたことがない人間に、親とは、と説けるほど大した人間ではない」

当然、彼らのように、しがらみがあるわけでもない。

そんなもの捨ててしまえ、とは口が裂けても言えるわけがない。

「こうして立ち止まって、親として在り方を見つめ直すことのできる親になれただけでも、喜ばしいことだろう。子の側からしたら、な」  
それでも、二人とも確実に前に進んでいることは断言できる。

最近、心当たりはあるんじゃないか、と尋ねると彼はわざとらしい咳払いをした。以前、会ったときは異なる意匠の眼鏡がライブハウスの照明を反射させていた。

「まあ、とにかく最終的に戻っていきさえすればいい。それまでは好きにさせる」

「そうか。俺が口にするのは変かもしれないが、もし音楽から戻ってこなかった際はどうする？」

「……………その場合の備えも——いや、気にするな。こちらの話だ」

……………何やら思惑があるのだろうか、そこまで他人の家の事情について知る必要もないだろう。

これ以上は深く詮索しないこととした俺は、簀巻きにされる前に仕込んでおいた細工を解いた。

はらはら、と固く結ばれた縄が地面に落ちる。

体に痕がついていないことを確認していると、隣が面食らった表情をしていた。

「縄抜けできたのか」

「昔、練習したことがあるからな。さて、今度こそ俺は店に戻って、打ち上げの準備をする。貴方もそろそろ立ち去った方がいい」

実のところ名残惜しいが、仕方のないことだ。

ステージの外にいる自分は「迎える側」で、ステージの上にいるあの五人は「迎えられる側」。



たとえ、どれほど長い付き合いでも、同じ場所には立つことができない以上、この役割だけは果たさなければならぬ。

蘭の父も同じく帰路につくらしい。

それもそのはず。もし娘に見つかってしまったら、お互い色々いたたまれない気持ちになるのは目に見えてわかるのだから。

「今度、また家に来るといい。その時は前回の続きから教えよう」

「ああ、その時は世話になろう」

そう言つて俺達は別れた。

……相変わらず、蘭の父は不器用な人間だった。

普段は厳しいが、暇さえあればこうしてライブに赴いている。娘だけでなく、その周りの人間も含めて気遣おうとしている、

「そういう男だからこそ、蘭のような娘に恵まれたのかもしれない」

こんな俺にも分け隔てなく接してくれる上に、時間があれば生花を教示してくれている。根っからの優しさはまさに蘭そっくりだ。

特に後者は本当にありがたい。生花の色彩やバランスの知識は料理の飾り付けに大変参考になるからだ。

……しかし、弟子として受け入れずにおいそれと技を教えるのは、由緒正しい名家としてはアリなのだろうか。

そんな疑問が生まれたときには、既に家に到着していた。

「さて、始めるとしよう」

勝負服エプロンに身を包み、意識を切り替える。

あの五人へのお礼と考えれば、自然とやる気にもなれる。

「いつも通り」やり遂げた彼女たちを、いつも通り「迎える」としよう。

## 5話 違い

人間が陸で生活するようになって、海とは切っても切れない関係にある。

我々が生活する陸地など、地球単位で見れば三割ほどの広さに過ぎず、大部分は海でできている。

それでいて、海にはまだまだ未知の生き物が多く存在している。普段、食卓に並ぶ魚料理など、その一握りの生命に過ぎない。

そんな未知に魅入られた者たちが、今日も今日とて日々研究に励んでいる。

松原花音もまた、その未知の生物の存在に心を踊らせる者であった。

………もつとも、彼女に限っては「主にクラゲ」という注釈がつけられるが。

そんな彼女であるが、今日は友人とともに水族館に訪れていた。

あらゆる生物が展示されている水族館という場所は、ある意味では海や川の縮図と言っても過言ではないのかもしれない。

「ふええ………(こ)ど(こ)お………?」

だが、花音はまるで群れからはぐれた小魚のように、一人取り残されていた。

何を隠そう、花音は重度の方向音痴である。

ショッピングモールなど人混みの多い場所では、こうして迷子になることは日常茶飯事であった。

とは言え、仮に迷子になったとしても、現代日本においてはいくらかでも解決手段はある。

花音は慣れた手つきで携帯電話を取り出した。同伴していた者に

連絡を取り、今後について相談する。

「どうしよう、美咲ちゃん……」

『えっと、じゃああたしが探しますから、花音さんは今いるところで待っていてくださいね。ちなみに、今一番近くにいる水槽ってどこですか?』

「えっと……あつ、ダイオウグソクムシ!意外と大きい!」

『か、花音さん!お願いだから、動かないでくださいーい!!』

このようなやり取りの後、花音はその場に待機して迎えを待つことになった。

迷子を探す鉄則としては、探す対象に目立つ場所で見つとして貰うことが一番なのだ。

「いつもごめんね。今度お礼するから」

『いいですって。気にしないでください』

そう言って花音は電話を切った。近くの水槽は伝えたので、あとは職員の人に尋ねればすぐに場所は特定できるだろう。

自分の方が年上なのに情けないなあ、と同伴者の彼女に申し訳ない気持ちになる。

しかし、迷子になってしまった以上は仕方ないので、この場を動かずに周りの水槽を眺めることにした。

「すごいなあ……」

水族館にはよく足を運ぶ方だ。

その際に、好きなクラゲばかり見ているわけではないが、こうして立ち止まって他の生き物を見ると、花音はいつもより新鮮な気持ちで見ることができた。

例えば、ダイオウグソクムシの隣の水槽にあるこの大きなカニ。

説明文に目を通すと、どうやら深海に生息しており、不安定な地形に適應するために足が長くなったそうだ。珍しいカニらしいが、どこかで見たことのあるような形をしていた。

「カニか。カニならば余計な手を加える必要はない。シンプルに焼きガニやボイルしたものをそのまま食べるのが一番だな」

そう、まるで店で売っているようなタラバガニの足をそのまま長くしたような――

……そこまで考えたところで首を振る。

展示されている生き物たちは食用ではない。

続いて、足の長いカニがいる水槽の、足元近くにある別の水槽に目を向けた。そこには、掌よりも小さいカニがのんびりと足を動かして歩いていた。可愛らしく、無意識に笑みがこぼれてしまう。

「小さくて剥くのが面倒なら、いつそのこと調理の間に剥いてしまうのも手だ。身だけを取り出してカニクリームコロッケやサラダと和えるのも捨てがたい。俺だったらパスタにする」

これも、普段スーパーなどに並んでいるワタリガニのような姿で――

……再び首を振って思考を中断させる。

二度目になるが、展示されている生き物たちは食用ではない。断じてない。

ほら、このハサミが特徴的なカニは体中に黒い点のようなものがついている。ブツブツとしたそれは微生物か何かなのかはともかく、食べる気にはならないものであった。

「殻に黒い斑点のようなものが付いているものは新鮮な証拠だ……ああ、待て。殻は必ず茹でてアラ汁にしてから捨てる。そのまま捨てる愚行は許さんぞ」

花音はカニがいる水槽から目を離すことにした。

まさかこの黒い斑点が良いものだったとは初めて知った。

いつ役に立つのかはわからない情報であるが、花音としては、少なくとも今この場では、知りたくはなかったことである。

それはさておき。  
閑話休題。

改めて言及するが、ここは水族館である。

ダイオウグソクムシやカニ以外にも生き物は沢山展示されている。

どうやらここは甲殻類の水槽が集まっているのだろう、と花音は何度目かの水族館巡りの経験から察した。

現に、別の水槽を見てみれば、そこには長細い体をしたエビがふよふよと泳いで――

「海老か。海老ならば定番の揚げ物だろう。フライと天ぷら……どちらにするかは各々の判断に任せるが、加熱すると身が丸くなってしまふ。加熱前に筋繊維が切れる音がするまで、しかし身を完全に崩さない程度に潰しておくことが基本だ」

少し先の水槽を眺めると、素早い動きで魚が泳いで――

「カンパチ…青物か。刺身、煮付け、照り焼き…レパートリーは多彩

だ。ただ、鱗が細かい分、捌くのは苦勞するぞ。鱗取りは念入りにな——ひよつとして、この人はここを生け簀か何かと勘違いしているのではないか？

時折耳に入ってくる魚の調理法や豆知識の発信先に顔を向ける。ちようど、花音の左側——順路的には花音の先に立っていたのは一人の男性であった。

花音よりも二頭身ほど高い身長に、服越しからでもわかるくらいの身の細さ。それに加え、水槽を照らす照明に溶け込むような白い肌をしていた。彼はぼんやりと水槽を泳ぐ魚を見ながら、花音が聞こえるくらいの大ききさで発言していた。

……もしかして、自分に話しかけているつもりなのだろうか。そんな風に考えてしまった、その時であった。

「……む？」

「……わ、わっ！」

花音の視線が気になったのか、男が目を向けた。目を合わせないように、花音は素早く水槽の方に体を向けた。

「……………」

彼も気のせいかと考えたのか、すぐに水槽の方に視線を戻した。

「ふ、ふええ……」

思わず声が出てしまう。

一瞬、目を合わせてしまいそうになったが、男の視線が痛い。目が細いわけではないのだが、突き刺さるような鋭さが伴ってい

た。

接客のアルバイトをしているとは言え、女子校育ちでそのような男性には耐性を持ち合わせていない。

そんな視線を正面から受けては身が持たないと考えた花音は、気を紛らわせるように素早く背後の水槽に目を向けた。

「あつ、クラゲだー！」

幸運にも、そこには彼女が好きなクラゲのいる水槽であった。自由気ままに、海を漂うその姿には釘付けにされてしまう。

「クラゲ…クラゲだとう？」

隣の男性も花音につられたのか、クラゲのことを言及していた。

どうやら、クラゲを見つけた時に花音の声が入ったのだろうか。

恥ずかしいが、あえてそちら側には意識を向けないようにする。先程まではカニやらエビやら食用として馴染み深い生き物だった。だからこそ、食に関する情報が偶々耳にする機会になっただけだ。

しかし、クラゲならば、そのような形で水を差される心配は――

「食べられるぞ」

「嘘おっ!？」

――松原花音。本日一番の衝撃を受けた。

「すべてのクラゲが食べられるものではないが、食用のクラゲは確かにある。店頭ではあまり取り扱っていないから馴染みはないだろうが、中華料理屋に足を運べば取り扱っている店は珍しくない」

初耳だった。

このクラゲたち……とは限らないが、海を超えた別の国でクラゲ料理が存在するなんて思わなかった。

まさに青天の霹靂。カルチャーショックと言っても過言ではなかった。

一体どんな料理があるのか、その先の情報を聞き逃さないように、もはや形振り構わず隣の男性に顔を向ける。

「待て、キクラゲはクラゲの仲間ではないぞ」

そんなことは知っている。

違う、そうじゃない。知りたいことは、クラゲ料理はどんな調理をするのかだ。

焼くのか、煮るのか、揚げるのか、それとも刺身があるのか……はやく答えを教えて欲しい。

………いつそのこと、こちらから質問しようか。

そう考えた矢先だった。

「……仕方ない。今からそちらに向かうから、どこかで待っている。そこまで時間はかからないだろう」

そう言いながら、その男性は花音の横を歩いていった。

通り過ぎる瞬間、花音の視線は彼が手に持っているものを捉え、腰の力が一気に抜けた。



「で、電話してたんだ……」

彼の手には携帯電話が握られていた。

花音にとっては死角側の耳に当てていたせいで見る事ができなかった。彼は花音を含めた他の来場者に語りかけていたわけではなく、電話越しに離れた誰かに話をしていただけであったのだ。

自分に話しかけていたと勘違いしかけていた。

酷い自意識過剰だったと考えると、花音の顔はみるみる赤みを帯びて――

「花音さん？」

「ひゃああっ！」

飛び跳ねてしまいそうな勢いで声を出してしまった。

恐る恐る声のした方向に振り向くと、そこにはこの水族館まで同伴してきた奥沢美咲がいた。

「か、花音さん？そんな大声出してどうしたんですか？」

「な、なんでもないよっ！気にしないで美咲ちゃん！」

美咲も突然大声を出されて驚いたのか、花音を案じるように質問する。

花音もそう言うが、見知った顔が目の前に現れてくれたことで安心してしまい、その場にへたり込んでしまいそうになった。

「ふええ……一時はどうなることかと思ったよお……」

迷子になってしまったことを発端に始まったこの十数分間を体験した花音の気持ちは、まさにこの言葉通りである。

ハチャメチャなバンドメンバーに巻き込まれることは日常茶飯事ではあるが、今日は深海のような、未知の世界に入ってしまったような怖さがあった。

「あはは…まあ、合流できたので再開しましょうか。あつ、花音さん。すごい量のクラゲがいますよ。きれいですね！」

近くのクラゲたちに目が入ったのか、美咲は水槽を指差しながらそう言った。

…：クラゲ料理のことは気になるが、ここは彼女の言うとおり、ここから気を取り直すことにしよう。

花音は美咲の言葉に同意するように、満面の笑みで口を開いた。

「うん、すごいよね！これ、サラダ和えとかにしたら何人分になるのかな？」

瞬間、時間が止まったような錯覚を覚えた。

「……………えっ」

「……………あつ」

突然ふって湧いた食の話題に困惑する美咲と、やってしまった、と恥ずかしさで顔を俯かせる花音。

この後、花音は美咲とともに中華料理屋に足を運んだのであった。



休日のある日、俺は水族館へと足を運んでいた。

以前、店のお得意様である黒い服の男から水族館の招待チケットを貰った。

曰く、職場の会社が新たに買収した水族館のチケットを譲ってもらったのはいいが、結局行く暇がなさそうなので譲ることにしたそう  
だ。

俺が持っていては仕方ないので、つぐみに渡そうと思っていたのだが、一枚しかない上に有効期限がギリギリであったため、仕方なく俺が行くことにした。

普段、そのような場所に行かない身としては新鮮ではあったが、突然電話で呼び出されたために、半分も回れずに戻ってきてしまったわけだが。

で、その呼び出した張本人は――

「全く、わざわざ電話で聞いた意味があったのか？」

「いやあ、悪い悪い。やっぱり電話越しじゃわからなくてさ」

悪い、と言いながらも一切反省の色を見せていない巴である。

俺自身、迷惑とは思っていないので別に構わないが、それならば初めから『来てほしい』と言って欲しかったものだ。

巴の相談事とは至って単純だ。

いつも通り、巴が商店街を歩いていたら、魚屋の店主に声をかけられ、話の流れで店の魚を何匹か譲ってもらえることになった。

冗談のつもりでカニや金目鯛を頼んだら、すんなり了承を貰ってしまった。

……巴としては『何か裏があるんじゃないか』と思ってもいないことを考えてしまったらしい。

そして、目利き役として俺に相談してきたが、言葉足らずの俺が電  
話で伝えきれぬはずもなく、こうして駆けつけてきたわけだ。

「おっ、羽沢さんとこの倅じゃねえか！相変わらず細っけえな！」

「数日前に会った人間に言う言葉ではないぞ、大将。さて、俺が来た以  
上は誤魔化そうなんて考えないことだ」

「んなことするか馬鹿野郎！そら、巴ちゃんのおこぼれだ！お前も  
好きなもん選びな！」

「この店主とも長い付き合いだ。」

この男が変に誤魔化すなんて器用な真似はできないことなぞ、巴も  
わかつてはいるはず。なのに、あえて俺を呼んだということは目利きの  
他に理由があるに違いない。

「廃棄処分にご苦労なことだ。ならば遠慮なく、その金目鯛をひと  
つ。そして、そのサーモンとイカとタコ：あとは棚にあるマグロの  
赤身を頼む」

「あつ、この野郎！少しは遠慮しろつての！」

「この点に関して俺は容赦しないことは百も承知のはずだ。男に二言  
はないのではないのか？」

「それは巴ちゃんだけの話だ馬鹿！キンメとマグロの料金は払いやが  
れ！」

「それが落とし所だろうな。よし、それで行こう」

交渉なんて大したものではないが、他にもいくつかおこぼれを貰う  
ことができた。

会計の際に店主が『巴ちゃんに感謝しろよ』と言っているあたり、向  
こうも俺の意図をわかっていて乗ったようだ。

こうして得られた戦利品を手に帰路につく。

隣を歩く巴が戦利品が詰め込まれた袋の中身を開いてのぞき込ん  
でいた。

「カニに車海老にカンパチ、そして金目鯛とその他諸々……気前よく貰ったのはいいけど、これ、今日中に食べなさそうだな……」

「残ったものは冷凍庫行きだな」

「あと、クラゲはどうするかなあ。てか、そもそもあそこクラゲなんて売ってたのかよ」

「おそらくは業者に卸すためのものだろう。そう言えば、街の外れにある中華料理店では、クラゲを使った料理を取り扱っていた」  
「マジか」

そんなやり取りをしながらも、巴の表情はどこか晴れない。

クラゲはともかく、他にも米や茶葉など色んなものを貰っていた。巴としては、ここまで良くしてもらっていることに悪いことをした気になっているのだろう。

……慕われている、と言うのも考え物か。

「大将も言っていただろう。数日遅れとは言え、年に一度の記念日なのだから遠慮することはない。後日、礼の言葉でもかけてやれば満足するだろう」

「……さらつと人の心読むなよ、全く」

「すまん。いつものこととして流してくれ」

こうして遠慮なしに言えるのも巴との関係の良いところだ。

この気安さと気負わないところはいつも助けられている。

だからこそ、せめて年に一度の記念日くらいは……む、そう言えば。

「俺からはまだ何もしてやれていなかったな」

「あれ？この間、みんなと一緒にラーメン作ってくれたんじゃないのか？..」

「食材の仕入れだけ、な。俺自身は調理には一切口出ししていない」

これはまずい。

今現在、こうして荷物持ちをしているが、実質、俺は何もしてやれていないではないか。

巴にはこれからも俺とつぐみの両方とも世話になることは多いだろう。

どうしたものか、と唸っていると、巴が何か名案を思いついたようだ。

「あつ、ならこいつらで何か作ってくれよ！」

「それは構わんが：お前の家ですか？」

「当たり前だろ？父さんと母さんにはアタシから話を通してお返し、あこも喜ぶからな」

悪くない提案だ。

事実、俺とて巴にしてやれることなど料理くらいしか思い当たらない。ならば、その限られた手段に甘んじるしかないだろう。

「ならば、精一杯腕を振るうとしよう。……とは言え、こんな新鮮なものに何か手を加えるのも無粋だな。人数的にも、いつそ手巻き寿司にした方がいいな」

「最高。やっぱアタシの目に狂いはなかったな！」

どうやらお気にめした様子だ。

話は決まった。では、他にも用意するものはある。米はこれだけあれば充分すぎるし、寿司酢もわざわざ用意する必要もないだろう。

であれば、あとは海苔か。貫い物の米を全て使うわけでもないが、米に対して海苔の数は圧倒的に足りなくなるのは目に見えている。

仕方ない。手間ではあるが、ここはスーパーで適当なものを購入し、あとは俺が手巻き寿司に最適な状態になるように炙って――

「ああ、そうだ。大事なことを忘れるところだった」  
「おつ、どうした？」

思考に没頭しかけた時に重要なことを思い出し、立ち止まる。

……世の中にはタイムミングと言うものはある。だが、たとえ既に最適な瞬間を過ぎてしまっても、最後までやるべきことはあるはずだ。

その考えのもと、俺は巴を真っ直ぐと見据えてこう言った。

「誕生日おめでとう、巴。お前がこの世に生まれてきてくれたことを、心から祝福させてもらう」

普段の生活で忘れがちになってしまふことが多いが、こうして場が整った以上は口にするべきなのは俺でもわかる。それこそ、巴だけでなく、つぐみやひまりたちは当たり前前に行っているに違いない。

巴としては、てっきり俺が何か忘れたものだと思っていたようだが、まあ似たようなものだろう。

「……………な、なんだよ、急に改まって」

……そのはずなのだが、巴にとってはそうではなかったようだ。

具体的に言うと、以前つぐみたちが企画した誕生日パーティーの嬉しさよりも気恥ずかしさの方が勝っているように見える。

……なぜだ。俺はただ当たり前のことを口にしただけだというのに。

「む、こういう言葉はしつかり口にした方がいいと再三言われているから、こうして口にしたただけだ。余計だったか？」

「余計じゃ…ねえけど…くそっ、不意打ちくらった……………」

「どうした、巴。顔が赤いぞ？」

「夕焼けのせいだ、バカ。なんでそういうところは察しが悪いんだよ、

全く」

そう言った巴の足取りは、徐々に徐々に速くなっていった。

それを俺が歩くような速さで追いかける。

微妙な空気になってしまったが、こればかりは何も勘違いでも間違いでないはず。

そう思った俺は、謝らずに巴の隣に並んで歩いていくのであった。

「あ、そう言えばアタシが電話したとき、カズはどこにいたんだ？」

「水族館だ。カニやら海老やら泳いでいる姿を見ながら、電話でお前に目利きのアドバイスしていた。あそこのカンパチはいいものだ。さぞ脂がのっついていて美味なものだろう」

「……カズ。お前、水族館を生け簀か何かと勘違いしてないか？大丈夫だよな？」

『5年後には、あの水槽の魚たちを全て使用できるように料理のレパートリーを増やす』という俺の目標は、どうやらかなりの不謹慎だったことらしい。

………場違い、ではあったようだ。



## 6話 ブレない芯

昼下がりの喫茶店。午後三時頃に押し寄せてくるプチピーク前の時間帯。

嵐の前の静けさ、とでも言うのか、客の出入りがほとんどないこの時間帯は従業員の休み時だ。

昼のピークのために取り損ねた昼食を取ったり、束の間の一服を取ったり、午前中に遅れた分の仕事をしたりするのが日常的な光景である。

当然、俺たちの店もそれは当てはまる。このスキマ時間をどう過ごすのかはその時によって違うのだが――

「突然すまない、ひまり。つかぬことを聞きたいのだが、<sup>〃</sup>えすえぬえすばえ<sup>〃</sup>とは何だ？」

「えっ？」

今日の俺は下校中にふらっと立ち寄ってきたひまりに教えを乞っていた。

そんな突然の質問に対して、ひまりは懇切丁寧に教えてくれた。簡単に言えば、SNS上にて評価が得られそうな云々という意味らしい。

……途中から聞きなれない単語が出てきたせいか、俺が理解できたことはそれだけではあつたが。

「なるほど、大理解した。感謝する」

「いえいえ！でも、突然どうしたんですか？」

ひまりが首を傾げてそう尋ねてきた。

俺が投げかけた問いかけにひまりが戸惑うのも当然だ。何の脈絡もなく、このようなことを俺から問われるなんて思いもなかっただろうに。

とにかく、感謝の意も込めてひまりの質問に答えなければならぬ。

「何、ひまりのようにSNSを使えたら集客にも役立つのではないかなと思っただけ」

ポケットから取り出したスマホを差し出した。

SNS、と言うのは個人だけでなく企業も活用していると聞く。

確かに、情報の発信、受信が手軽にできるツールとしては最適なのだろう。

………もつとも、その手の扱い方に俺が詳しいはずもない。

「続けて悪いが、できれば俺にやり方を教示してくれないだろうか。ひまりが頼りなんだ」

「わ、わかりましたっ！私がカズさんをプロデュースしてみせます！」

やる気の表れなのか、ひまりは勢い良く立ち上がった。まさか、こうしてひまりに教えてもらう日が来るとは思わなんだ。

そして、ひまりの説明は実に丁寧だった。何せ、序の口の序の口、アプリのインストール方法まで教えてくれたのだから。

……口にはしなかったが、さすがにそれは俺でもわかる。さすがに俺も老人扱いされるのは文句を言いたくなる。

ともかくアプリをインストールし、起動した。  
本番はここからだ。

「では、アカウント作成からですね！プロフィールは第一印象ですから、バシッと決めましょう！」

「なるほど、接客と同じだな」

接客業において第一印象は重要なのは言うまでもないことだ。

挨拶、話し方、表情、目線、どれもひとつひとつ気を遣わなければならないところが辛いところではあるが、客が気持ちよく店に来てもらうには欠かせない点だ。

当然、俺は家族及びバイトの中でも最低レベルではあるが、それは今は置いておこう。

「では、写真を撮りましょう！まずはシンプルに自撮りから！」  
「わかった」

ひまりからの指示通り、スマホのカメラを自分に向けた。  
パシヤリ、とシャッター音を確認し、再び画面に視線を戻す。

「ブレてるな」  
「ブレてますね」

画面に写った写真はもはや原型を留めていないほどに揺れていた。  
……………自分を写すというのも難しいものだな。

「あ、なら私に取りますよ。そっちの方が何か好きなポーズとか取りやすいでしょうし」  
「助かる」

気の利いた申し出に甘えることとした。  
……………しかし、ポーズが必要なのか。

ひまりとしては普通の立ち姿だけでは不十分という意味なのだろう。

とりあえず、清掃用の箒を持つ。  
足を肩幅まで開く。

片手の掌で顔を半分隠す。

指の隙間から射抜くような鋭い目つきを作る。

「な、なんですか？そのポーズ……」

「あこから教わった。曰く、ネットゲームで俺にそっくりなキャラクタの必殺技を出す前の構えらしい。一連の動作は真似できるが………必要か？」

「いえ全然」

結果、このポーズは没となった。

あこネットゲーム仲間が用意してくれた例の台詞も無駄になったが。これはこれで良かった。

正直、アレをやるのは俺も恥ずかしい。

「もー！こうなったら私が指示します！」

「よろしく頼む」

初めからこうしてればよかった、と思いながらも大人しくひまりに身を委ねることとした。

「カズさんのベストアングルは、ちょうど前髪の分け目から斜め35度下から見上げる視点が最高なんです！」

「む、ではカメラにこう見せるのか」

「あつ、さらにこの皿をいつもお客さんに出す感じで差し出してくださいー」

「つまり、こういうことか」

そのような流れで、顎を引いたり、首を傾けたりと注文に答えていく。

「あーっ！いい！サイコーです！そのままシャッターを——はいい、チーズー！」

本日二度目のシャッター音が響く。

ポーズというよりは、いつも俺が客に料理を出す際の姿勢と何ら変わりはないのだが……まあ、ひまりにとっては満足な仕上がりなのだろう。

「はあ……今日はいい夢見られそう……」

「俺の写真とお前の寝付きに何の因果関係があるのかは触れないでおくとして、とにかく助かった。では、さっそく……」

「あ、念のためもつと別のアングルで何枚か撮りましょう！念のためです！念のため！さあ！」

断る暇もなく、撮影会が始まった。

まだ営業時間内なのにこんなことをやっつけていいのだろうか。

椅子に座り、窓を見ながら物思いに耽るポーズをしながらもそう考えてしまう。

「余計かもしれないが、ひとつ忠告しておくぞ」

「えー？なんですかー？あつ、そこで左足を組んで、踵は少し前にしてくださーいー！」

「ふむ、こうか……で、話の続きだが」

一応、こちらに耳を傾ける余裕はあるようだ。

正直、すっかり頬が緩みきった顔で、気合の入ったローアングルでスマホを構えるのは控えてほしい。あと、スマホがひまりのものにすり替わっているのは気のせいだろうか。

何にせよ、最後まで付き合わなければならぬ。

俺が言い出した以上、俺の都合は中断する理由としては些か弱い。

「お前の後ろに立っている者は、お前の知己ではないのか？」

「……………えっ？」

ただ、待ち人がいるならば制止する声をかけなければならぬ。

ひまりがぎこちなく俺の目線を辿ると、そこには、ピンク色のウェーブがかかった女の子が気まずそうに笑っていた。

「あ、あはははは………」

年齢としてはひまりと同じくらいか。

どこかで見たことのある容貌だが、あちら側は俺のことを見ていない点から察するに初対面であることは間違いなさそうだ。

「あ、彩先輩……っ？」

ひまりの顔がみるみる赤——いや、青ざめて行く。  
どのような関係かは把握できないが、この場面において俺がわかることはひとつだけしかない。

「じゃあ、お構い無く〜」

「ま、待ってくださーい!! お願いですから、話を聞いてくださーい!!」

ひまりが醜態を晒していたこと、それにつきる。

彩先輩、と呼ばれた娘が店を出ていったのを必死に追いかけるひまり。

扉のドアベルが激しく店内に響き渡る。

「今日もひまりは元気だな」

ただ、扉は静かに閉めてほしいがな。



「なんというか、すごかったね、さっきのひまりちゃん」

「うう…見なかったことにしてください…」

ひまりは耳を真つ赤に染めながらテーブルに突っ伏している。暴走していた己に自己嫌悪している真つ最中だろう。

普段なら巴やつぐみが止めに入るが、今回ばかりは仕方ない。誰もストップ役がいなかったのが運のつきであった。

とりあえず元気を出してほしいので、あらかじめ用意していたクリームブリュレをテーブルの上に置くことにした。

「気分が乗ってくると、周りが見えなくなって形振り構わなくなるのはお前の悪癖だぞ。少しは振り回される側の気持ちを考えたらどうだ？」

「むう、周りを振り回しているのはカズさんも同じじゃないですか！」  
不服を訴えながらも、パクパクとブリュレを平らげようとするひまり。

この立ち直りの早さは蘭も見習うべきだろう。

で、俺が周りを振り回しているという点は…反論できる余地がない。

「……………それもそうか。つまり俺とお前は似たもの同士というわけか」

「似たもの同士…似た者同士…うーん。ちよつとポイント低いですね」

む、どうやらひまり好みの回答ではなかったようだ。何か別の言い回しがあるのか、思考を巡らせる。

「では、お揃いだな」

「お揃い…えへへ…カズさんとお揃い…」

適切な使い方ではないかもしれないが、ひまりにとっては〃似た者同士〃よりはこちらの方が好ましいそうだ。

と、そんなやり取りを見ているだけしかできないピンク髪がいた。そう言えばまだ挨拶をしていなかったか。

「名乗るのが遅れたな。羽沢和那だ。よろしく頼む」

「ま、丸山彩です！ひまりちゃんとはバイト先で仲良くしてもらっています！こちらこそよろしくお願いします！」

……………。

「……………あつ、羽沢ってこの……………」

「そうです！すぐのお兄ちゃんです！」

「従兄弟だ」

……………。

「ちよつとちよつと、カズさん!?なんでそれで終わりなんですか!?!」

この一連のやり取りにしびれを切らしたひまりが突っ込みが入った。

「これ以上何か言う必要があるのか?」

「あ、相変わらず自己紹介が下手ですね…いいですか? SNSでも相手に興味を持ってもらうためにはそういうスキルも重要なんですよ?」

「ほう」

それは初耳だ。

イメージとしては写真で魅せるものだと思っていたが、どうやら映像や文章も必要になるとは。SNSとは歴史は浅いが奥は深いよう



だ。

「彩先輩もアカウント作ってますよね？」

「うん、まあ半分お仕事用だけどね。はい、どうぞ」

参考までに、彩から差し出されたスマホを覗き見させてもらった。………見てみたが、俺には何が起きているのか理解できない画面だった。

だが、ひまりにはクリーンヒットしたらしく、一瞬だけ頭をぐらつかせた。

「うつ、さすが現役アイドル……いいねの数が桁違い……」

「………なるほど。この“いいね”が注目されている証なのか」

ひまりの視線を辿ると、そこにはハートマークの数。これが俗に言う“ふぁぼ”と呼ばれるものなのだろう。

「彩先輩！ズバリ、何か秘訣とかあるんですか!？」

「えっ、と、特にそんなのないよ?」

「………ひとつ言っておきます。ここにいるカズさんは、この商店街でも“歩く嘘発見器”として名を馳せる御方です。だから変に見栄を張るのはやめておいた方がいいですよ?」

「み、見栄なんて張ってないよ!?!」

いつの間に俺は商店街でそんな風と呼ばれていたのだろうか。そして、なぜひまりがドヤ顔をしてこちらを見ているのだろうか。

疑問は尽きないが、その一方で彩がこちらの出方を伺っていた。伝わってくるのは半信半疑の視線……これは『やれるものならやってみろ』と解釈して良いのだろうか。

ならば遠慮なく俺はひまりからスマホを受け取り、画面をスクロールしていった。

「俺にはまだよくわからんが………例えば、りぷらい？に対する返答の速さなど目を見張るものがあるぞ。番組の収録中などで時間が取れないときは代役を立てて返答しているのだろうか、現場にいない者にとつては文章こそが全てだ。さして問題あるまい。しかし、ところどころ文章に拙さが見受けられることから、可能な限り自分で返そうとしていることがわかる。ファンサービス精神旺盛だな。他にも、この写真は一見ただの自撮りに見えるが——」

「わ、わ——わ——！」

取り上げようとしてきたが、その拍子に落としてしまったらしいけなので、すかさず腕を上げる。

彼女の身長では俺の腕まで届かないので、必死にぴよんぴよんと跳ねるアイドルの姿が出来る。

『こんにちはー☆まんまるお山に彩りを！Pastel\*Paletteのゆるふわピンク担当の丸山彩です！今日はなんと——』

む、間違えて動画を再生してしまったようだ。

「ほらカズさん。これが理想の自己紹介ですよ」

「なるほど。自分の名前を覚えてもらうために必死に考えたキャッチコピーなのだろう。名前の特徴と外見の特徴が濃縮されたこの短い一言に、一体どれだけの労力を費やしたのか計り知れないな」

「う、うううう！ごめんなさい、私嘘ついてましたー！だから返してくださいー！！」

そう言われたならば返す他ない。

大人しくスマホを手渡すと、彩はまるで、恐ろしいものを見たかのように涙目になる。

しかし、これがアイドルのSNSか。

「ここまで顔の見えない相手に尽くすというのも、ある種の異様さを覚える。アイドルとは難しい存在なのだろう」

その一言で、いきなり場が沈黙した。

「あ、彩先輩！今は『その姿勢こそ俺が学ばないといけないな』って言葉が隠れているんで、むしろカズさんは褒めてるんですよ！だから気を落とさないでください！」

「えっ、そ、そんなわけ……」

「少しニュアンスが違うが……まあ、また一言抜けていたのは事実か。申し訳ない」

「あつた!？」

……危ないな。

ひまりがフォローを入れてくれたおかげで回避できたが、もうすぐで「カズって」しまいそうだった。まさかひまりに助けてもらおう時がくるとは思わなかった。

少し見ないうちに立派になったようだ。

「意外だな。ひまりも段々つぐみのようになってきているな」

「えへへー！私だって、いつまでも振り回されっぱなしじゃないんですよ？目指すはカズ語検定準1級ですっ！」

——と素直に感心したのも、つかの間だった。

「……待て、待ってくれ。なんだそれは？」

「あれ？モカが作った資格制度ですよ？つぐから聞いたことなかったですか？」

「初耳だ」

先程の“歩く嘘発見器”といい、知らないところで俺の印象が明後日の方向に加速していく一方のようだ。俺のような一般的な成人男性に何を求めているのだろうか。

一度、モカとはしつかりと向き合う必要があるか。

「とにかく！カズさんの前では下手に飾らず気取らずがベストですよ、彩先輩！」

「それ、アイドルって職業が不利すぎない？」

「俺が言うのも変だが、あまり心配しなくていい。ここでも楽しそうに働くアイドルがいるからな」

敢えて誰とは言わない。

この間、キツチンに現れた害虫を、俺がたまたま手に持っていた爪楊枝で貫いた瞬間を見た時は『カズナさんは……武士？……いえ、むしろニンジャ？……どちらなんでしょう？』と言っていた。本人が楽しそうだったためそっとしておくことにした。本人は楽しそうに仕事しているのは確かだろう。

閑話休題。

「さて、このやり取りでわかったことがひとつある」

「え、何ですか？」

再び、ひまりが首を傾げてこちらを見る。

今までひまりたちに教示してもらっていたが、ここまで教わったことを頭の中で整理してみte思ったことだ。

「SNSをやるうとしてるのは、あくまで店の集客が目的だ。ならば、わざわざ俺の写真を撮る必要性はどこにもないのではないか？」

「あっ」

それもそうだ、と二人も頷く。

つまり、俺たちはこの話の根本的な動機を忘れかけていたと言うことだ。

こうして、アカウント名は普通に羽沢珈琲店、画像は店の外観にすることにした。



「不思議な人だね」

彩から溢れた感想はまさにその一言に尽きた。

「カズさんですか？」

目の前のテーブルを挟んで座るひまりがそう尋ねる。彩は当然とばかりに頷いて返す。

「怖そうな人だな、って思っていたら、無愛想なだけでそんなことはない。ポーツとしているように見えて、実は怖いくらい鋭い。甘いものとか無縁そうなのに、得意な料理はお菓子とか。色々ギャップがすごくて何がなんだかわからなくなってきちゃったもん」

彩自身、アイドルという職業柄か、個性的な人間とは縁がある。彼女の所属しているバンド自体、個性の塊たちがさらに塊を作っているようなものだ。

だが、仕事がないオフの時に立ち寄った喫茶店で出会った男の人は、研究生時代から見ても出会ったことのないタイプの人間だった。

彩なりの分析結果を口に出したところ、ひまりは曖昧な表情で苦笑いを浮かべる。概ね的中、といったところか。

なお、件の彼は、話の途中で来店していた黒スーツに黒サングラスの風貌をした男性の接客をしていた。傍から見たら明らかに怪しいはずだが、彼は普通に接客していた。

「まあ、私がかれこれもう10年以上の仲ですし、むしろあれこそカズさん、って感じですから」

すると、ひまりの口からつらつらと彼にまつわるエピソードが次々に出てきた。

やれ、商店街の夏祭りでは毎年別の屋台を出しているとか。やれ、以前風邪を引いたときはつきつきりで看病してくれたなど、そんな他愛のない話ばかり。

「この間なんて——な、なんですか、彩先輩？」

そこで、自身の口元が自然と笑っていたことに気づく彩。しかし、隠そうとはせず、率直な感想を述べることにした。

「なんでもないよ。ひまりちゃん、あの人のこと話するときすごい楽しそうだなー、って思っただけ」

「も、もう彩先輩！そんなことないですってば！」

火照る頬を手で押さえながらそう反論するひまりの言葉には説得力はない。そんなひまりと和那の関係に、彩の心境はさらに微笑ましいものになっていた。

「すごい勢いだったよ。それはもう、何でも知ってます！」ってくらいなの！」

これも、率直な感想であった。途中、『食事のときは必ず味噌汁みたいな汁物から口にするんです！』と言っていたほどだ。

そんな細かい仕草まで把握していると、これは彼に対するひまりの心情について期待してしまうではないか。

さあ、ここからは恋話コイバナの時間だ。

——そう思った矢先だった。

「……………」

「あ、あれ？」

見ると、ひまりの表情に陰りが出ていた。

先程の照れ顔とはうってかわり、普段の彼女からは考えられないような、どこか物悲しそうな曖昧な顔。

ともかく、彩が想定していた反応とは全く違っていた。

「カズさん、自分のこと話さない人ですから」

ポロツ、とひまりからそんな言葉が溢れる。

その真意について理解しかねていると、突然、テーブルのスマホが鳴り始めた。

その音にひまりがハツ、とした後に、彩の様子に気づいたのか、申し訳なさそうな表情に変わる。

「す、すみません！なんか気分悪い感じにしちゃって！ちよつと失礼します！」

「う、うん……」

そのようなやり取りの後。ひまりが席を外した。

微妙な空気になってしまったが、今回はどうやら顔の知らない電話主によって助けられたようだ。

……しかし、先程のひまりの様子は何かあったのだろうか。  
今の一連の会話の中に、触れてはいけないところに触れてしまった  
のか。

「待たせたな」

堂々巡りな罪悪感に苛まれそうになる前、話題の中心人物がやって  
来た。

コト、とテーブルに置かれる皿。その上には先程ひまりが食べてい  
たクリームブリュレが乗っていた。

「あれ、私頼んでいないんですけど……」

「知っている。これは俺の勝手な都合だ」

……彩は首を傾げるしかなかった。

相手からしたら、今の言葉だけで伝わると思ったようだが、まるで  
何がなんだかわからない。

「……む、つまりアレだ。日頃からひまりたちが世話になっている礼、  
というやつだ。押し付けがましいのは承知の上だが、食べてくれると  
助かる」

「あ、はい。ありがとうございます……」

素直な厚意はありがたく頂戴することにした彩はスプーンを手に  
した。

なら初めからそう言えばいいのに、とも思いながら口に入れると、  
そんな思考はブリュレの口当たりの良い甘さによって上書きされて  
しまった。

「ほわぁ……おいひい……」

「当然だ」



このしつこ過ぎない甘さはまずい。いや、すごく美味しいのだが、いくらでも食べられてしまう甘さで、病みつきになってしまう、と言う意味でまずい。

つい最近までライブ衣装のサイズ変更を頼んだ彩としては、この甘さはまさに毒そのもの——

「……………ひまりが何か、俺のことを話したらしいな」

「えっ、いや、その……………」

慌てて顔をあげると、和那の顔が写る。相変わらぬ無表情だが、身に纏う鋭い雰囲気、ほんの少し弱くなったような感覚も覚えた。

「心なしか、気分が落ち込んでいるように見える。ああいう時は大抵過ちを自責しているときか、もしくは俺の身の上話が話題になった時だ」

ひまりの異変は彼も察していた。

おそらくは、長年の付き合いからわかるものなのだろう。

だが、それはあくまで普通の人であればの話。

初対面で色々と見抜かれ暴露された彩としては、どうにもそれだけには思えなかった。

……………ひまり曰く、彼の前では大抵の嘘は看破される。きっと、ひまりから向けられるストレートな好意など、彼にとって察知するのは造作もないことだろう。

しかし、それだけならば可愛いものだ。

裏を返せば、知らない方がいい嘘すら、彼の意志に関係なく筒抜けになる、と言う意味にもなる。

もし、芸能界にいる自分がそんな風になれば、人付き合いにおいて

疲れて果ててしまうかもしれない。

いや、芸能界に限った話ではない。

普段の生活でさえ、腹の黒い人間と関わることは山ほどある。そんな中で、そこまで人の心がわかってしまうのは、実に不自由ではないだろうか。

「あの、話さないんですか？」

では、なぜそんな風に育ってしまったのだろう。

「不要だ。つまらんからな」

そんな興味本位の質問は、呆気なく切り捨てられた。

「俺自身、特別な出自ではない。変わっていると言えばそうかもしれないが、結果的にあいつを困らせるだけで終わるだけだ」

変わっているが特別ではない。

例によって、今の言葉に足りない部分があるのかもしれないが、確かに和那はそう言い切った。

「問題はそれをひまりは……いや、ひまりたちは『信頼されていない』などと解釈してしまっている点だろう。俺としてはそんなつもりは毛頭ないのだが、困ったものだ」

僅かに和那は目を伏せる。

表面上からは読み取りづらいが、言葉からして嘆息しているのだろうことは彩にもわかった。

……おかしな話だ。

特別ではないなら、素直に打ち明ければいいだけの話だ。話しても困らせるだけ、と言っても、むしろ話さないことによって困っている

人が近くにいるのは確かなのに。

そう感じた彩だが、口にすることはできない。

聞けば、彼と彼女たちの仲は十数年の積み重ねだ。

それこそ、ひまりたちが小学生低学年より前から彼と一緒にいると  
言うことになる。その関係について、今日偶然会った人間が口を挟む  
権利など有りはしない。

「今日、初めて会った人にこんなこと言うのは変かもしれませんが」

だが、彩としては、これだけは言わなければならない気がした。

「いつか、話せるときに来たら自分から話してあげてくださいね？事  
情はどうあれ、ひまりちゃんがあなたの力になりたいって気持ちは、  
本当ですから」

芸能界の世界は厳しいことは、アイドル研究生のときから痛感して  
いた。

今、こうしてアイドルを続けられているのは、彩自身のタフさも要  
因としてあるが、Pastel\*Palettesの面々に支え合っ  
ているからこそでもある。

もし、メンバーの中にそういった事情があるならば、力になりたい  
と思うことは、おかしいことではないはずなのだから。

「そうか……………そうだな」

和那も思うところがあつたのか、二度目の返事には納得したような  
声色を感じ取れた。

顔を見ると、彼の口元がほんの少しだけつり上がっていた。

「ああ、話が変わって申し訳ないが、記念に写真を取ってもいいか？ア  
イドルが来店した、と告知すれば集客に役立つかもしれない」

彼の中では今の話は終わったようで、次はそんな頼みが飛んできた。

「……………どうやら、アイドルであることはわかっていたらしい。」

まだ変装をしなければならぬほど有名なない彩としては、どこか嬉しい上に、さらに言えば安心してしまいう事実であった。

「無論、肖像権？などの権利関係のやり取りが必要なら控えるが……………」

「……………多分、大丈夫です！おそらく！ええ！」

「事務所からの説明はよく聞いておけ。後々後悔する羽目になるかもしれないぞ」

「……………うっ、はい」

見事に理解していないことを見抜かれ、正論を突きつけられた。

そのブレないスタンスには、ある種の尊敬すら抱きそうになる彩であった。

「ま、まあそれはさておき、写真撮りましょー☆」

「ありがた……………待て、俺も写るのか？」

「まあまあ、記念に、っていうことで！あつ、身長差があるのでスマホ持ってもらっても良いですか？」

「俺のスマホだから当然か」

どさくさに紛れて和那を巻き込んだ彩は、そのまま和那にシャツターを押させた。

撮れた写真を見れば、一緒に写っている和那が表情すらわからないほど酷い有様になっていた。

「ブレてるな」

「ブレてますね。こんなのダメです！撮り直しましょう！」

「……………すまん。どうやら既に投稿してしまったようだ」

「ほぼノータイムで投稿ですか!?!はやく削除してくださいってば!」

このまま世の中に出すのは、アイドルとして——否、女子高生としての矜持が許さない。

些か強引だが、スマホを取り上げようとした彩だが、先程のように彩が届かない高さに掲げられる始末。

再び彩がびよんぴよんと跳ねる構図になる一方、ふと和那の表情を見ると、どこか穏やかな表情をしていた。

どうしたんですか、と跳ねるのを止めて聞こうとしたが、その前に和那の方からスマホの画面を見せに来た。

「気にかけてくれる人がいるというのも、存外嬉しいものだな」

画面を除くと、その画面にはブレた写真に対するの四つの「いいね」があった。

そのアカウント名を見て、こちらもつられて笑顔になってしまった。

仕方あるまい。画面に映るのは、彼の幼馴染たちなのだから。

A f t e r g l o w の 面々

「……………そうですね!」

お互いがお互いを気にかける関係。

その関係が揺るがないように、芯のような役割の存在がいる。

その役割は、実は彼なのかもしれない。

出来ることなら、自分たちもそんな関係でありたい。そんな風に、素直に憧れた彩であった。

「まあそれはそれとして、さあ撮り直しです!ここはアイドルとして、キツチリやらないと気が済みません!」

「お待たせしました〜……って、お二人とも何に盛り上がってるんですか？」

「見てくれ、ひまり。俺の眩きにもいいねがついたぞ」

「えっ、嘘っ！あつ、カズさんの記念すべき初投稿の初いいねが蘭になってる!? 普段見ないくせに！しかも、彩先輩とのツーショットじゃないですか！ずるいです！私も混ぜてくださいよ〜！」

「ふっ！ほら、ひまりちゃんも混ぜって混ぜって！はいっ！」

余談だが、彼らにとっても新発見があつたようだ。

「ブレてるな」

「ブレてますね」

「カズさんだけですけどね」

彼は、こと自撮りに関してはかなり手癖が悪いらしい。

## 7話 角砂糖をひとつ

「つぐみ、蘭を追い出したいのだがどうすればいい?」

朝の団欒の中、唐突に俺は従妹つぐみに相談事を打ち明けることにした。

「ちよ、ちよつと待って、お兄ちゃん。全然話が見えないよ?」

当たり前のように、従妹いもつとからはそのような反応が返ってくる。結論だけ先走りすぎたようなので、しっかりと順を追って説明しよう。

相談事というのも、我らが幼馴染——蘭の営業時間外来店の件についてだ。

「へえ、蘭ちゃんそんなことしてたんだ」

「ああ、特に最近、毎週のように来ている。その時に俺がいればいいんだが……」

「そっか。偶々お父さんとかお母さんがいる時だと驚いちやうよね」

つぐみがテーブルの隣に視線を落とす。

今日は定休日なので、叔父叔母夫婦は朝から外出している。つぐみもこれから生徒会で学校に行かねばならないため、相談するタイミングはこの朝食しか無かったわけだ。

「それに、あいつ自身、本来悪いことをしている意識が無くなってきている」

「うんうん。で、口止めされているから誰にも相談できなくて、ギリギリ相談できるのが私だったってことだよ?」

「そういうことだ」

さすががつぐみだ。話が早くて助かる。

口止めされている、とは言え、さすがにここ最近の蘭は目に余る。

かと言って、俺の知恵だけでは効果的に蘭を注意することはできない。

であれば、従妹に白羽の矢が立つのは当然の帰結——であってほしくはないが、まあ順当だろう。

「あ、蘭ちゃんのお父さんに言ってもらうのはどうかな？ 確か仲良かったよね？」

「逆効果だ。蘭が反発してかえってここに入り浸ることになる。あの人は使えん」

「お、お兄ちゃん！ その言い方だと体良く利用しているみたいに聞こえちゃうから！」

「む」

長年亀裂の入っていた親子関係がようやく修復しかけている中、こちらから再び火元を近づけるのは憚られる、と言うニュアンスだったのだが……今後は気をつけるとしよう。

それはさておき  
閑話休題。

「蘭ちゃん対策かあ……蘭ちゃんだったら、お兄ちゃんが言えば普通にやめてくれると思うんだけどなあ」

「それでも一向にやめる気がないから聞いている。すまないが、他に何かないか？」

再び、うーんと唸る羽沢家の食卓。

なかなか名案は浮かばない。

「——あつ、そうだ」

ちよつと待ってて、と言いつ残すと、つぐみがリビングからそそくさと出ていく。



しばらくしないうちに、つぐみが再びこちらに戻ってきた。

「良かった！あった！」

「何だそれは」

つぐみが手にしていたのは一枚のCDケース。

当然、中にはCDが入っているわけだが、これがどうしたと言うのだろうか。

「私たちが初めて収録したCD！前にひまりちゃんからデータ貰ってたんだ！」

「ほう」

それはまた記念すべき一品が出てきたものだ。

つぐみの提案した策とは、蘭が来た際にAfterglowの嬉し懐かしの記録であるこのCDを流す、という至極単純なものであった。

そうすることにより、蘭は羞恥により迂闊に営業時間外に店に入れないような警戒心を持ってもらうことが狙いらしい。

「あ、あくまで流すのは営業時間外で、お兄ちゃんと蘭ちゃんがいる時だけだからね！間違っても営業中とか、お父さんとお母さんがいる時に流さないですよ！」

「わかった」

つぐみもかなり恥ずかしいらしい。

楽器の演奏経験もなかった時のものなのだから、下手で当然に決まっている。いまさら恥ずかしがる必要があるのだろうか。

「……果たしてこれは効果があるのか？」

「多分、大丈夫じゃないかな。この間、練習で聴いた時とか、蘭ちゃん

すごい恥ずかしがってたから」

「そうなのか」

前例があるならば信じてみよう。

礼を兼ねて、つぐみを学校まで送り届けた後、すぐに店内で作業を進める。

部屋から持ち出したCDプレイヤーにスピーカーを取り付け、コンセントを入れる。

改めてCDを見る。

何の飾り気の無い、真っ白なCD。これがAfterglowの出发点と考えると、バンド活動にあまり関わっていない俺としては奇妙な重さを感じる。

「まあ、何もしないよりはいいか」

そんな軽い気持ちで、俺はCDを挿入した。

その軽い気持ちで命取りだった。

「すまん、つぐみ。効きすぎたようだ」

『あ、あははは………やっぱり?』

やっぱり、と言うことは、つぐみも想定していたのだろう。一先ず、電話でつぐみにこの状況に至るまでの経緯をかいつまんで説明する。今日も定休日で俺しかいない店に、蘭が我が物顔で入ってきた。タイミングを見計らう………こともなく、普通に例の音楽を垂れ流していたのを発見し、蘭はまるで全身の毛が粟立ったように反応した。

そして……

「蘭がドアの隙間から睨むばかりで動いてくれない。ずっとこの状態でいられないのだが、どうすればいい?」

『う、うーん……』

脱兎の如く、と言うのはまさにあの蘭を指すのだろう。

その隙間からは俺を涙目で睨む目と、腫れたように真っ赤になった耳くらいしか伺うことができない。

『が、頑張って話しかけてみて!こうなったら根気比べだよ!』

「指示が急に雑になったぞ。大丈夫か」

どうやら俺に丸投げするつもりらしい。

つぐみも生徒会の雑務で、こちらに構う余裕はないのだろう。

それに、自分で蒔いた種だ。

仕方ない。できるだけ現場で対応するでしょう。

通話を切り、ずっとこちらの様子を伺っている蘭に声をかける。

「蘭」

「………うっさい、話しかけるな鬼畜」

案の定、取り付く島もない。

鬼畜、と言うのも酷い言い草だ。ただ誰もいない店の中で音楽を流していただけだと言うのに。

「……蘭。いくら昔の自分の拙さ、至らなさを嘆いても、過去は過去だ。今をどうしたところで何も変わらんぞ」

「うっさい。そういう問題じゃないから」

「お前が恥じるのは勝手だが、今日は休みとはいえ、いつまでもそのままでいられるのは俺も困る」

「勝手に困ってれば？」

今日の蘭は一段と当たりが強い。

こうなった蘭は謝り倒したところで、象のように動かないのは過去の経験則からわかる。

こういつた時は時間を置くべきなのだろうが、今日に限ってはそれも行かない。

どうしたものか………む。

「………そう言えば、店内のBGMには何も着手していなかったな」

「嘘っ!?店でアレ流す気なの!?!しんじらんない!?!」

「落ち着け、俺はこのCD流すなんて一言も言っていないぞ」

バタン、ドアが壊れるかもしれないほど大きな音と、ドアベルの激しい音が店内に響く。

その勢いでこちらにずんずんと距離を詰め寄ってくる蘭。

つぐみあたりであれば後退ってしまうほどの形相をしているが、こちらは特に何も後ろめたいことはしていないので、直立不動で向き合う。

蘭は俺が距離を取るとでも思っていたのだろう。

ところが、俺は動くつもりはない。

距離感を測り間違えた結果としては――

「……………あつ」

蘭はその勢いのまま衝突する…………寸前に立ち止まる。俺と蘭の距離は、自然と息が触れ合うくらい距離になる。

ちなみに、俺はただ立っているだけだ。

「ち、近いって」

ずい、と顔を背けながら俺を押しつける蘭。

繰り返すが、俺はただ立っているだけだ。

間違いない。

蘭は、これ以上ないほど乱心している——。

「……………とりあえず、何か淹れてくる。お互い、頭を冷やなければならぬ」

「……………ブレンド」

「承知した」

どうやら俺も、冷静とは言い難い状態のようだ。

ここは一息つこうと、蘭とともにカウンターへと足を運ぶ。

ゴリゴリ、と焙煎された豆がミルの中で碎かれる音が響く。この音は不思議と心を落ち着かせてくれる。

蘭の方に視線を向けると、頭を抱えて項垂れていた。つい最近、見たような光景な気がしてデジャヴを覚える。

「はあ……………もう最悪……………せつかく作詞しようかと思ったのに、何でこんな目に……………」

「なんだ。その、すまなかったな。まさかあそこまで取り乱すとは思ってなかった」

「……………反省してよ、バカズナ」

「わかった」

キツ、とこちらを睨む蘭。

俺も軽い気持ちでやってしまった節もある。今回においては、非は確かにこちらにある。

だが。それとこれとは話が別だ。

「お前も同じだ。何度も言っているが、せめて来るときは連絡を入れろ。俺だけならともかく、叔父叔母にも迷惑をかけるわけにはいかん」

「……………はい。反省します」

「よし」

そもそも、蘭の営業時間外来店が常習化じょううれんしていなければこんなことにはならなかったわけでもある。

なので、ここは互いに手打ちとすることにして場を収めた。

「しかし、三年前か——」

それは、俺の青春の最後であり、蘭たちの青春の始まりである契機の年。あれから既に三年も経過していることには素直に驚きだった。傍目で蘭を見る。赤いメッシュを入れていなかった頃の蘭に比べれば、遥かに成長しているのが見て取れる。

「……………何？」

「いや、大きくなったな、と思ってな」

「その言い方、おっさんみたい」

「……………なるほど」

一方、俺はおっさんに近づいたらしい。

年は無意味に取りたくないものだ。



「何をしている、蘭」

三年前の春のこと。

学校を飛び出し、辿り着いた場所の外で縮こまり俯いていたあたしの上から、聞きなれた平坦な声が降り掛かった。

首を上げて見上げると、学生服を着た年上の幼馴染が無表情で見下ろしていた。

「別に、コーヒー飲みに来ただけ」

「そんなことを聞いていると思うているのか?」

苦し紛れの言い訳も即座に切り捨てられる。

せめてもの抵抗としてそっぽを向いて誤魔化していると、今度もあちらから声が降りかかる。

「……………つぐみから連絡が入った。『学校のどこを探してもいない』らしい」

「……………連絡、返しておいて」

「わかった」

幼馴染達には事情は筒抜けのようだ。

衝動に任せて飛び出してしまったせいか、結果的につぐみたちに心配をかけることになってしまった。

勿論、本意ではない。いや、だからこそ授業に出ていないこととは別の後ろめたさがあたしを襲う。

「入るがいい。今日は特別だ」

「……………うん」

そんなみつともない姿を見かねたのか、和那はため息をつきながら店の鍵を開けた。

思えば、これが初めての営業時間外来店だったかもしれない。

「……………」

「……………」

カウンターを挟んで和那と向き合う。

元々、お互い口数が多い方ではない。いつもなら、そんなことで一々居心地の悪さなんて感じることはないはずだが、今日ばかりは口を開かずにはいられなかった。

「……………続き、聞かないの?」

「何をだ?」

「ここにいる理由とか、そんなの」

「そんなもの、〃ここに居たいから〃以外に理由があるのか?」

「そうじゃなくて……………」

相変わらず感性がズレている。

この時の心境も荒んでいたもので、聞いていることが伝わっていないことに少しばかり腹が立ってしまふ。

「お前が話したくなければ、俺からは何も聞くつもりはない。学校に居場所がなければ、ここに居ればいい。それはお前が決めることであつて、俺が決めることではない」

だが、和那は続けてそう言い放った。

ここでようやくあたしは理解した。和那の中では既に事情の大枠は把握している。勿論、あたしからは何も言っていないので、あくま



で情報源は他人の伝聞でしかない。

そのため、和那に必要なのは本人からの「事実確認」の段階なのだと。

「……学校に行きたくない」

ポツリ、ポツリと、少しずつ言葉にする。

自分の心情……とは言っても全く整理ができていなかったため、あくまで実際にあつたことをそのまま口にする。

クラス替えをしてからは屋上で時間を潰してしまっていること。

つぐみたちに心配をかけさせてしまっていること。

……先生から授業に出ていないと聞いた父さんから注意されて、逆に当たってしまったこと。

それを、和那は黙って聞く。

その視線は真っ直ぐにあたしに向けられていた。

やがて、全てを話し終える。

それを見計らっていたのか、間を置かずに和那は口を開いた。

「なるほど。つまり、お前は一人だけつぐみたちと別のクラスになってしまい、これを機に疎遠になることを恐れているわけだな」

簡潔に言えば、今回の騒動についてはそれに尽きる。

——そう、あたしは怖かった。

居場所を見つけられていないあたしに向けられる、クラスメイトからの視線が怖かった。

いつも一緒にいたみんなが、教室のどこを向いてもいないことが怖かった。

何より、あたしがいないことが、みんなにとっての「いつも通り」になることが怖かった。

想像するだけでも胸が張り裂けそうになる。

そんな重荷に押しつぶされそうになって、耐えられなくなって、逃げ場を求めた。

屋上に逃げて、家に逃げて、最終的に羽沢珈琲店に辿り着いた。

そして、和那がいてくれた。

なぜここにいるかとはともかく、こうして溜まっていた悩みを全て吐き出すことができた。

こんな時、和那ならどうするんだろう、と縋るような気持ちでここまで話すことができた。

「ならば、俺は何もすることはない」

「なっ……っ！」

——だが、そんな期待はすぐに見当違いだと思い知らされた。

「驚くことでもないだろう。クラス替えの話は既に終わった話だ。これに関しては何もできん。無論、今後どうするかについても、俺は何もしてやるつもりはない」

「……………っ！」

この瞬間においては、間違いなくあたしは目の前の和那に激しい怒りを覚えた。

父さんにすら向けたことのない感情がふつつつと湧き上がるあの感覚は今でも忘れることはない。

「悔るな、美竹蘭」

それでも、和那は一切臆する様子もなく、あたしを短い言葉で制する。

「その苦悩はお前だけが抱えるものではない。自分だけが理不尽な思いをしているなんてくだらない妄想は捨てておけ」  
「なにそれっ!？」

耐えきれなくなったあたしは、誰もいない店の中で大声をあげてしまった。

「わかんない！和那の言ってること全部わかんないよっ！」

昔からいつもそうだ。

和那の立っている視点は、いつもあたしたちと違う場所に立っている。

あたしたちが周りを見据えれば、和那はその先を見ている。

あたしたちが先を見据えれば、和那はその遙か先を見ている。

誰にも同じ視点に立たせようとしない。

それは、幼馴染のあたしたちだけでなく、和那が大切にしている従妹つぐみですら例外ではなかった。

当時はそんなこと自覚できなかったが、高校生になって、家の問題にも一段落ついた今だからこそわかる。

この激情の根源は、そんなスタンスを取り続ける和那に対する、あたしなりの反発であったのだと。

「俺が言いたいことはひとつだけだ。『悔るな』」

あたしがどれだけ感情をぶつけようと、和那の主張は揺らがなかった。

この時、さすがの和那も一言で伝えきれないと判断したのか、続けて言葉を口にした。

「たかが教室一つの隔たりで、お前たちの関係が壊れると考えるなんて大袈裟にも程がある。現に、学校も年齢も性別も違うのに、こうし

「ても友人関係が続いている人間が目の前にいるはずだろう」

「……言われてみればそうだった。」

あたしたちが小学生のころは、和那は中学生で、あたしたちが中学生になれば、和那は高校生。そして、あたしたちが高校生になれば、和那は大学生、あるいは社会人になるわけだ。

いつも一緒にいたせいで、年齢差というものをすっかりと失念していた。

しかし、それをものともせず、こうしてあたしたちと関係が続いていると言うのも、それはそれで問題な気がする。

「でも、和那は和那だし……」

「……お前は俺を何だと思ってるんだ」

そんなものは決まっている。

ド天然。ナチュラル鬼畜。コミュ障……エトセトラエトセトラ……言い出せばキリがないくらいに出てくるが、本題はそこではなかった。

「今後についても、俺が出る幕はない。もうあいつら……いや、つぐみがいい話を持つてくるはずだからな」  
「つぐみが？」

悔るな、と言ったのは幼馴染のことだったのか。

しかし、突然出てきたつぐみの名前には疑問符が出てくる。

巴でも、ひまりでも、モカでもなく、なぜつぐみが出てくるのか。

「自慢ではないが、こうなった時のつぐみの行動力は計り知れないぞ。おそらくは今日にも『お前たちが一緒にいられるための何か』を持つてくるだろう」

と、自慢げに語る和那の顔は今でも思い出せる。

「……根拠は？」

「ただの予感だ」

この時は、ただの従妹バカが発動したのかと呆れていたが、まさに的中していたことは後々になってわかることだった。

すると、和那はおもむろに携帯電話を取り出した。画面を見て、普段の仏頂面がほんの少しだけ崩れた瞬間は見逃さなかった。

「さて、連絡が入ってきたぞ。『放課後、学園近くのファミレスに来て』だそうさ。その時まで震えて待つがいい」

「……それ、絶対使い方違うでしょ」

中学生に国語を指摘される高校生はどうかと思うが、和那は特に何も気にした様子もなく、キッチンに置いてあった戸棚から取り出したハンカチを渡してきた。

「そうだな。だが、今、お前がすべきことは、その情けない顔を一刻も早く元に戻すことだな。そんな顔をモカや巴にでも見せてみる。一生笑いものにされるぞ」

「う、うっさいっー」

そんな顔にした主犯格を睨みながら、受け取ったハンカチで顔を隠した。

——ふと、気づいた。

あれだけ重かったものが気にならないくらいに無くなっていたことに。あれだけぐるぐると行き場をなくしていた鬱憤が、嘘のように無くなっていた。

「……………その前に何か飲むか？」

「…………ブレンド」

「承知した」

和那はいつも通り豆を挽く。

その音が、どこか穏やかな気持ちにさせてくれた気がした。

そして、この日の夕方、新し居場所A f t e r g l o w が誕生した。



「最悪、また和那に辱められたこと思い出した」

「突然何を言うんだお前は」

そんなことを言いながら、和那が目の前にコーヒーを置く。あの時と変わらないコーヒーの香りが鼻をくすぐる。

「だが、今日の取り乱す姿は、あの時の蘭ほどではなかったな」

……………コーヒーに口をつけないで本当に良かった。

もし何か口に含んでいたら、間違いなくむせていたに違いない。

「あ、アレは一度きりだから!」

「お前の中ではそうなのだろう。だが、事実としてガルジヤムの時もあの時のように——」

「お願い、もうやめて……………」

やはり勝てない。

このナチュラルボーン鬼畜に一泡吹かせられるようには、まだ時間が必要なようだ。

……………本当に、例のノートを見られていなくて良かった。あのノートを見られたら、一生和那を打ち負かすことができなくなってしまう。

「今だから白状するが、アレ、実は俺も学校をサボっていたんだぞ。あの時は自分のことを棚に上げて話していたわけだ」

「人のこと言えないじゃん」

そう言えば、あの時の和那は『学校サボってはいけない』という注意は一言も言っていないかったことを思い出す。

少し鬱憤が発散された気になったが、やはりあのようなみつともない姿は見られてしまったわけで。

「はあ……あんなの、二度と誰かに見せないし……」

「ここはひとつ宣言しておこう。」

「そうか、俺だけには見せてもいいと思うがな」

「は、はあっ!?!」

返ってきたのはそんなキザったらしい台詞だった。

和那の方を見てみると、洗い物の片手間に放った言葉だったことが見て取れた。

「……………何か変なこと言ったか?」

「はあ、もういい、何かもう疲れた」

「そうか」

今度、ひまりの前で和那を「タラシ」と呼ぶことを決めたところで一息つく。

今日は一段と和那に振り回されている気がする。例のカズ語も今日は鳴りを潜めているようなのに、おかしな話だ。

「あ、そうだ。和那」

「何だ？」

肝心なことを聞き忘れていた。  
和那を呼び止め、あたしは今後のことについて尋ねる。

「これからもしここにきて良い、かな？」

……実のところ、誰もいない羽沢珈琲店は、屋上に並ぶあたしたちの場所だと思っている。

今まで宿題や作詞もここでやっている。普段の落ち着いている雰囲気はさらに静かになるため、作業をするにはうってつけな場所なのだ。

それに行けば和那が……関係ない。それは関係ない。

おじさんおばさんたちに迷惑はかけたくはないが、出来ればこの場所を使いたいのは本心だ。

「……………事前に連絡すればな」

「……………ありがとう」

言質を取ったことで一安心することができた。

さて、作詞作業をしようと、鞆からノートを取り出す。ついでに、テーブルに置かれた角砂糖をひとつ、コーヒーに入れた。

よし、これで準備完了だ。

「む、ブラックの方が好みではなかったか？」

「……………今日は砂糖入りたい気分なだけ」

和那の言葉を流して、あたしは今度こそコーヒーを口に入れた。  
当然ながら、いつもより甘い味がした。



## 8話 経験者は語る

「どうとうこの季節がやって来たのか」

テレビの映像を覗いていると、そんな言葉が溢れる。今日のスケジュールを調整し直す必要があると考えながら、テーブルに朝食を並べていく。

「おはよう〜……………どうしたの、お兄ちゃん？そんな深刻な顔して……………」

まだ寝ぼけているのか、ゆつくりとした足取りで席につく。む、ネクタイが曲がっているな。後で注意しておこう。

それに、俺がそんな顔になるのも無理もないだろう。これは今日一日の過ごし方に関わる重要な問題なのだから。

「つぐみ。今日、迎えは必要か？」

「えっ、急にどうしたの？」

ゆつくりと箸を使ってスクランブルエッグを食べる姿には、この事態の深刻さを理解しているようには見えない。

顔を向けることで、テレビのほうを見ると催促する。

画面にはニュースの天気予報。

『本日の天気は全国的に生憎の雨模様ですね。北からやってきた低気圧がさらに勢力を強くなっていて、ところによっては雷雨の可能性があるでしょう』

……………無慈悲な予報に、つぐみは持っていた箸をテーブルに落とし、てしまう。

これを見た上で、改めて聞こう。

「必要か？」

すっかり目が醒めたようだが、まだ状況が飲み込めていない様子だ。

予報士は続けて、俺達のいる地域の予報を始める。

『この地域は午前午後は曇りの予報で、夕方から夜にかけて激しい雷雨になりそうですね。折りたたみ傘では心許ないので、ちゃんと傘を持っていった方が無難でしょう』

「だっ、だだだ大丈夫だよっ!? 今日らせせ、生徒会もないし、授業終わったらすぐ帰ってくるから平気平気!」

「声が震えているぞ」

朝からこんな調子で大丈夫かと心配になる。

何を隠そう、つぐみは雷が大の苦手だ。

小さい頃から雷の音には非常に敏感で、普段の姿からは考えられないほど身を縮こめてしまう。

その姿はまるで小動物のようである。

「一応、いつでも出れるようにはしておく。何かあったら呼ぶといい」

「でも、お兄ちゃん店番あるのに悪いよ!」

「小学生のときからずっとやってきていることだ。今更そんな気持ちにはならないから安心しろ」

雷に怯えるつぐみは、たとえ巴が隣に居ても亀のように動かなくなる。

雨が落ち着くのを待つにしても、時間に限りはある。俺が側にいれば多少はマシになるようなので、そんな日には大抵俺が迎えに行くことにしている。

「ううん、やっぱりいい！」

しかし、つぐみは奮起する。

「私だってもう高校生なんだから！もう雷で動けなくなるようなことなんてないよ！」

「しかし」

「大丈夫だから！お兄ちゃんはうちでどっしり構えていて！」

「言葉だけは頼もしいな。ネクタイが曲がっていないければなおのこと良かったのだが」

「も、もう！指摘するタイミングおかしいよ！」

俺が何か意見をする暇もなく、つぐみはそう言い残して学校へと向かった。

………苦手を克服しようとする意志は見事なものだ。それに、本人がそう言うなら尊重するべきではある。

だが。

「……………巴。今日の天気予報を見てくれ」

電話をしながら、窓越しから曇天を仰ぐ。

つぐみには悪いが、その頑張り屋のところ裏目に出る可能性は捨てきれない。

願わくば、この予想が外れてほしいものだ。

「予報は外れか」

結論から言えば、朝の天気予報は外れた。

空を見上げてみれば、そこには雲間から陽の光が――

「車で来て正解だったな」

差し込む隙間すらないほど、黒雲に覆われていた。

それだけでなく、叔父から借りた車のボンネットを激しく叩きつけるような豪雨と、雷が地上に落ちるのを今か今かと待っているようにゴロゴロと音を立てている。

俺の「天気予報よりもはやく雷雨が来る」という予想は当たってしまったわけだ。

ふと、助手席に置いてあるスマホの通知が鳴る。画面を見ると、巴からの連絡が入っていた。

内容としては、『ドアを開けてくれ』とのこと。

雨に濡れた窓からは、三人分の傘が見える。雨音にかき消されそうになりそうながらも、二人の声を聞き取ることができた。

「つぐーあと少しだ！頑張れ！」

「おーえす。おーえす。ツグれー」

タイミングを見計らい、運転席側から手を伸ばして後部座席のドアを開ける。

「よし！カズ、ナイス！」

「ほんとに車だ〜。やった〜」

ボタン、とドアが閉まる。

バックミラーを通じて、つぐみ、モカ、巴の順で、車に転がり込んできたのを確認し、エンジンをかけ直す。

「よくやった、二人とも。座席にタオルを置いてあるから使——  
——ぐふっ」

サイドブレーキを外し、ウインカーを出したところで、俺の言葉が遮られることになる。

「お兄ちゃああああああん!!」

従妹が、涙を流しながら物理的に襲い掛かってきたからだ。

「ちよ、つぐー!その体勢はまずいぞー!」

「おお、これは確実に獲りに来てますな」

二人がそういうのも無理はない。

つぐみは後ろから俺に抱き着こうとしている。

しかし、車内なので当然、シートが間に挟まることになり、つぐみの腕は不幸にも首の高さに収まる。

結果として、俺の首を絞める形になってしまう。

——これを、スリーパーホールドと呼ばれるプロレス技と同じ形をしていたと知るのは、後になってのことだった。

「問題ない。慣れている」

しかし、この程度では運転の邪魔にもならない。

つぐみの非力な力では、俺の氣道を遮ることはできるはずもない。

と、車窓越しから見る空が光った。

「きゃあああああああああああああ!!」

「……………」

遅れて雷鳴が轟く空と、つぐみの悲鳴と俺の断末魔が車内に響き渡る。

正直に白状しよう。

俺はつぐみを甘く見ていた。

雷が鳴るたびにこうして抱き着かれていたが、あくまで小学生、中学生の話。

しかし、つぐみは既に高校生。こうして首に体重を乗せられると、さすがに俺も苦しいのは当然なのだ。現に、ほんの一瞬、意識が刈り取られそうになったのだから。

だが、車は止まらない。止められない。

俺は雨に濡れた車路を、水溜りに気をつけながら走り抜ける。

「おいカズ！一旦止まれ！このままじゃ……………」

「……………安心しろ、巴」

巴が何やら心配しているようだが、その必要はない。バックミラーを通して巴たちに視線を向ける。

「先に家に着くか。その前に俺が息絶えるか。どちらが先かの話だ。仮に後者になったとしても、お前たちに最期を看取ってくれるなら本望だ。やはり、俺は度重なる幸運に恵まれている」

「か、カズ……………お前ってやつは……………!」

巴が感極まっている間にも、羽沢珈琲店への距離は近づいていく。普段、つぐみが歩きで通っている以上、そこまで遠方にあるわけでも

ないので、後数分で着く。

「…………でも、運転手のカズくんがダメになったら、ここにいる皆も道連れだよね」

「止まれ！マジで止まれ、カズ！アタシが全力でつぐを引っぺがすから、お願いだから止まってくれ！」

「それは次の信号までできそうにない相談だ。運が悪かったな」

大袈裟なりアクションをする巴を無視しながら、アクセルを強く踏み込む。

雷が鳴るたびに響くつぐみと巴の絶叫をBGMに、雨の降る街を駆け抜けていく。

…………ひとつ経験者として語らせてもらうが、良いだろうか。

悪いことは言わない。

首元を圧迫させながら車の運転をするのは絶対にやめておいた方がいい。



たとえ外が台風であっても、営業日である以上は店を営業しなければならぬ。自営業であれば尚更だ。

今日は台風とまではいかないにしても、生憎の雷雨。そして、雷には滅法弱い従妹いもづこがひとり。

「…………で、こうなったわけだ」

「いや、何がどうしてそうなるんだよ」

学園から戻ってきた俺達は普段通りの勝負服になる。

普段と違うところを挙げるとするなら、それは俺の背中につぐみが抱き着いている点くらいだろう。

「これを『羽沢式二人羽織』と名付けよう」

「お前のセンスは相変わらずだな、モカ。その無駄に豊かなバリエーションは、一体どれほどの時間を棒に振れば身につくのか気になるものだな」

「ふっふっふ、もつと褒めるが良い」

「…………褒めてるのか？」

「あ、あはは…………一応、褒めてるよ」

モカが言うのであれば仕方ない。

これからは、この姿勢を『羽沢式二人羽織』と呼称することにしよう。

「うう、恥ずかしいよ…………」

「そもそもこの形を提案したのはお前だろう、つぐみ。そのお前が恥ずかしかってどうする」

「だ、だってえ…………」

こちらからはつぐみの顔を見ることはできない。

察するに、つぐみも恥ずかしかっているようだ。

それでいて腕の力は一切緩めることはない。未だ外で音を轟かせている雷に警戒している証拠だ。

「おい、そんなんで仕事できるのか？」

「やれる以上はやらなければならぬのが仕事だ。幸い、両手は自由だ。調理に支障はない」

両手を掲げて動かすことができる様子を表す。

うちのキッチンもそこまで広い構造ではない。器具などはあらかじめ出しておけば、あとは手元だけで解決することが、手狭なキッチンいいところなのだ。

この『羽沢式二人羽織』の欠点は十分に補うことはできる。



強いて問題を挙げるとするなら――

「おく、まだ外は鳴ってるね〜」

「――っ」

「支障は、ない」

ギリギリ、と背後にいるつぐみの腕が強くなり、目の前にいる巴とモカの姿が見えなくなる。

身長差によってつぐみの腕が、ちょうど俺の鳩尾にあたっている。こうして俺が側にいることで、つぐみは悲鳴をあげずに済んでいる。しかし、雷が鳴るたびに視界が点滅してしまう点――これが、この従兄妹の共同作業における唯一の弱点であった。

「でも、それじゃ皿とか運べないだろ。何なら手伝ってやろうか？」  
「よーし、モカちゃんもやるよ〜」

む。確かにこの状態ではキッチンを動くことはできなくなってしまう。巴や、珍しくモカも手伝おうとしてくれている。

俺とつぐみは本当に友達想いの幼馴染に恵まれているようだ。

「申し出は助かる。だが、一応ヘルプに先約があつてな。そのヘルプと一緒にやってもらおうが、構わないか？」

「ヘルプ？」

この事態を想定していたわけではないが、今日は以前からヘルプをやるという旨の連絡を受けていた。今日はこんな空模様だが、先ほど連絡した際には来ると返事があつたので、そろそろ来ると思うのだが……。

ちようど、そんな話をしていた時であった。

ボタン、とドアが開けられると同時に、ドアベルが激しく揺れる。

当然、一同の視線はそちらに集中する。

「ふっふっふ……」

明らかに無理して低い声を作っているような笑い声とともに、その特徴的なツインテールのシルエットに、店内の照明の光が差し込んだ。

「ようやく相見えることができたな、赤き翼レットウイングを背負いし漆黒シユバルツの太陽！  
悠久の時を超え、我らがしゆく……しゆく……」

「シユークリームならあるぞ」

「ほんとおつ!?カズ兄にいさすがー!」

「その前に、そこに置いてあるタオルを使え。ここまで来るのも大変だっただろう。ホットミルクを飲むがいい」

はい、と元気な返事とともに、とてとてとこちらに近づいてくる。あらかじめ用意しておいたシユークリームをカウンターの上に置くと、目を輝かせながら食べ始めた。

紫髪のツインテール。身に纏うのは、羽丘女子学園中等部の制服。その姿を見て、巴は予想通り戦慄した。

「おい、まさか……」

「ヘルプだ」

「あこがかよ!?!」

そう。ヘルプとは宇田川あこ。

——他ならぬ宇田川巴の実の妹である。

「な、なんだったってー」

モカもわざとらしく驚く。

それに合わせて、再び外で雷鳴が轟いた。

「——っ！」

「おふっ」

視界が再び点滅する。

先程よりも強い力で締め付けられ、思わず変な声が出てしまった。

「……タイミングバツチりだったな」

「正直、モカちゃんも驚きを隠せないのであった」

場の空気を読める空、というのもおかしな話だ。

その能力を俺やひまりに分けてほしいものだ。

今のやり取りが終わるのを待っていたのか、シュークリームをぺろりと平らげたあこが近くの巴に向き合う。

「おねーちゃんもカズ兄のヘルプに立候補したの？」

「まあ、やった方が良かったのかって、ちょうど今カズに聞いているところだけど……」

「やったー！おねーちゃんと一緒だー！」

「ちよ、おい……」

あこが心の底から嬉しそうに巴に抱きついた。巴も、少し困った顔をしながらも特に咎めることなく受け入れる。

望んでいた形は違えど、憧れの姉と同じ場所に立つことができるのだ。あこがやる気を出す要素としては充分に成り立つだろう。

「姉妹仲が睦まじいですなー」

「そうだな」

「こ、こっちも負けてないからね！」

「ん、構図としては、仲睦まじい？」

「疑問形か」

現在進行形で、俺の意識が無くなりかけている点を除けば仲睦まじい従兄妹同士だろう。

つぐみがなぜか対抗意識を向けていたので、そういう事にしておく。

閑話休題。

「さて、役割分担だが」

当然、これから働くわけだ。

宇田川姉妹、モカ、俺 with つぐみの計五人（実質四人）の役割を決めなければならぬ。とりあえず立候補制にしてみたが、一番最初に手が上がったのは、意外にもモカであった。

「モカちゃん調理場ー」

「つまみ食いは厳禁だぞ」

「ちえ〜」

その魂胆は初めからわかっていたので釘を刺しておく。結局、モカは会計をすることになった。

「はい、あこも調理場行きたいー！」

「待て！包丁は危ないぞ!?!」

「トモちゃん大袈裟〜」

大袈裟なものか、と言わんばかりの巴だが、その気持ちはよくわかる。俺とて、小学生だったつぐみが包丁を手を取ったときは、まるで自分の死を覚悟したような気持ちになってしまった経験があるからだ。

……あこはもう既に中学生だが、兄や姉としては、いつになっても心配になるものなのだ。

「安心しろ。包丁は俺が使う」

「あ、でも、おねーちゃんがフロア行くならフロアもやりたい！」

「ならば遊撃を頼む。状況に応じてどちらをやるか判断してくれ」

「はい！」

あこは自由にやってもらったこととした。

手が足りなくなった方から声を掛ければいい話だ。

「なし崩しな形で悪いが……」

「わかった。アタシもフロア行くよ」

「助かる」

巴にはフロアを担当してもらったことにした。

よし、これで役割分担は完了だ。

「お、お兄ちゃん。私は」

「優しめで頼む」

「もう！そうじゃないよ！」

そう言いながらも緩める気配どころか、さらに強くなるつぐみの腕。

こうしている間にも、空の雷は鳴りを潜めることはない。俺の体力のカウントダウンも近づいてきている。

ともかく、こうして仕事に取り掛かる一同。

今日も落ち着いた午後を求めて大勢の客が来ると思いきや――

「まあ、こんな雨の日に客なんて来ないよね」

「だよな」

モカの言うとおり、店の中は閑古鳥が鳴いている。来ているとしても、常連の黒サングラスの男のみだ。彼にはいつも通りブレンドを出している。

……まあ、そもそもこんな日は外出しないのが普通なのだ。この店に来るとしても、雨宿りのために寄ってくる人がいるかもしれないくらいか。

「あれ、あこは？」

「調理場かなー？」

フロアにあこの姿が見えないようで、二人の視線がキッチンに向く。

一方、俺達は何をしているかというところ――

「あこ、何してんだ？」

「味見！」

カウンターを挟み、あこの口に試作のブラウニーを放り込んでいた。

実のところ、あこはこれが目当てでヘルプを立候補したようだ。ひまりには及ばないが、あこも貴重なアドバイザーの一人だ。意見が擬音ばかりでわかりづらいのが難点だが、ちゃんとよく聞いてみると理にかなっているので、俺としても重宝している。

ふと、視線を巴の隣に向ける。

案の定、モカはおよよと目を伏せていた。

「カズくん、モカちゃんは悲しんでいます」

「食べるか？」

「食べる〜」

この変わりようは蘭が見習うべきところだな。

そんなことを考えながら、こちらにやってきたモカの口にもブラウニーを放り込む。

「お兄ちゃん！ここに味見役として適任の妹がいると思うんだけど！」

「そう思うなら離れてくれ。物理的に届かん」

「それは嫌！」

「……………そうか」

つぐみは相変わらず離れる気配はない。

あれから雷は鳴っていないが、腕の力が段々と強まっている。雷への恐怖とあこへの対抗意識は別口で考えてほしいものだ。

「……………なんだこれ」

この状況を見て、巴から出た感想である。

客は来ず、従妹は従兄いもつとの腹あにを締め付け、ヘルプ二人はカウンターで雛鳥のように試作が来るのを待っている。

少なくとも、第三者から見て働いているようにはみえないことは確かだ。

……………頃合い、か。

「巴、見てほしいものがある」

「ん？なんだ？」

巴を手招きすると、すぐこちらに来てくれた。

俺は動けないので、指で指し示すことで巴の視線を誘導させる。

「ブレーカーだ」

「ブレーカーだな」

まずは、部屋の隅に設置された電気ブレーカー。

「冷蔵庫だ」

「冷蔵庫だな」

冷蔵庫の中身。

ケーキや菓子類が作り置きされている。

「ここにコーヒーが入っている。紅茶はこのポットの中だ。メニューはこれを使ってくれ。もし何か言われても、このメニューに書かれているものしか出せないと言ってくれ」

「お、おう」

キッチンの構造や今日限定のメニュー表について説明する。

「で、これが懐中電灯と、今日のバイト代だ。臨時だから多少色はついている。モカとあこのはこの袋二つだ。後でお前の方から渡してくれ」

「いや待て、アタシたち何もしてないぞ？さすがに受け取れないだろ」

「これからしてもらおう予定だ。安心しろ」

一通り言うべきことは言った。

さすがに巴は全てを飲み込めていないようだが、これ以上説明する暇はない。

「時間がないから先に言っておく。あとは任せた」

「は？それってどういう——」

その瞬間、羽沢珈琲店の全ての光が奪われた。

「な、なんだ!？」





一応、生きています。意識も今は辛うじて残っている。

何があつたかと言うと、停電した際にとうとうつぐみの手加減なしの拳が、俺の鳩尾にクリーンヒットしたただけだ。

おかげで、今にも膝を折って倒れそうだ。

だが、それはできない。従妹に「自分のせいで倒れた」なんて罪悪感を持たせるわけにはいかない。

——ならば、立ち続けなければならぬ理由としては充分すぎる。

「カズ兄……立ったまま気絶って、カッコいい……」

その一言を聞き取った後、俺は足を踏ん張ったまま意識を手放した。

………ひとつ経験者として語らせてもらうが、良いだろうか。

悪いことは言わない。

胴を圧迫させながらの仕事は、絶対にやめておいた方がいい。

9話 お客様の中にパン屋様はいらっしゃいませんか？

「またね、さーやー！」

「うん、またね。みんな！」

学校が終わり、私——山吹沙綾はみんなと別れて帰路につく。

ここ最近は何かに通い詰めていたせいか、こうして独りで帰るのも久しい気がする。

今日はこの後、家のパン屋の手伝いをする事になっている。

バンド活動が活発になってきたためご無沙汰ではあるが、今日は練習はない日だ。

なので、今日は普段頑張っている両親のために時間を使おうと決めていた。

心中で意気込みをいれながら、見慣れた商店街を歩く。

時折、偶々外にいる顔馴染みに挨拶を交わしながら家に帰る、いつも通りの帰り道。

——そのはずの道中であつた。

「え？」

ふと、人だかりができているのを見つけ、立ち止まってしまふ。

普段は平和な商店街であるが、このざわつき方は穏やかではないように感じてしまったからだ。

見たところ十数人ほどの人間が何かを囲んでいた。私が今いる場所からは、その輪の中の様子を伺うことができない。

「おいおい、大丈夫か？」

「女の子が倒れてたってよ」

通りかかった人たちからの会話が耳に入り、本当に穏やかではないことを自覚する。

その後の私の行動は早かった。

「ちよっと、すみません」

人混みをくぐり抜け、中心部へと向かっていく。

つい、反射的に渦中に飛び込んでしまったが、掻き分けながら進むことをやめない。

この状況で私が行くことで何ができるかなんてわからない。

それでも他人事として済ませることもできず、野次馬に徹することなんてできなかった。

そして、人混みを抜けた先には――

「もう駄目。きゅ」

「すまない。この中にパン屋の者はいないか？この状況で名乗り出るには相当の勇気があるかもしれないが、急患がいる。いたら返事をしてくれ」

見慣れた常連たちが、何やら寸劇を繰り広げていた。

結論から言うと、今日も商店街は平和だった。



飲食店を営んでいるとはいえ、自分たちの食事は自分たちで調達しなければならぬ。

当然、羽沢家も同じだ。店で作る料理とは別に、叔父と叔母とつぐみ、ついでに自分の夕飯を作らなければならない。

そのため、今日はスーパーなり商店街なりに買い物へと出ていた。

「ぶはく、死ぬかと思つたよ」

「もう、モカつたら大袈裟だなあ」

ところが、今、俺がいるのはやまぶきベーカリー。

羽沢珈琲店と同じく、この商店街に根を下ろして商いをしているパン屋である。

俺の視界には、パンをかき込むようにほお張っているモカと、そのパン屋の長女である山吹沙綾がいた。

「大袈裟じゃないよ。本当にお腹と背中がくっつきそうだったよ」

「安心しろ。人体の構造上、空腹でそうなることは決してあり得ない」

口を挟むと、モカは悲しそうに俺の方に視線を向ける。これは若干ではあるが、俺を責めているようだ。

……………事の経緯を頭の中で整理する。

買い物の道中で、下校中のモカがフラフラと歩いているのを発見した。俺が声をかけると、モカは例によって俺に縋りついてきた。

曰く、今日は弁当と財布の両方を忘れてしまい、お金を借りるのも忍びなく、とりあえず皆から食べ物を買ってもらいながらここまで食いつないできたが、6時限目の終わりを迎えたころに空腹が限界に達

してしまったそうさ。

さらに、今日はスタジオでバンドの練習があるが、そんな体調のまま練習などできるはずもなく。仕方なく、モカだけは一旦帰宅してからスタジオに向かうことにしたわけだ。

「うう、カズくんには会えばこの渴きを潤してくれると信じてここまで来たのに、まさか何も持ってないなんて……モカちゃんの心はそこで折れたのです」

「俺の前で倒れたらお菓子が必ず出てくるなどと、そんな期待は筋違いにもほどがあるな」

「おおよ、ひーちゃんなら出てくるのに、カズくんが出てこないなんて」

「そうか。俺の力不足か。なら、すまないことをした」

ひまりができるのであれば、俺にも改善の余地はある。これから外出する際は、何か携帯できるものを用意することを心に決めた。

そう言えばひまりの作る菓子を久しく食べていないな、と場違いなことを考えたが、今回の一件においての功労者には礼を言わねばならないことを思い出す。

「ともあれ助かった、沙綾。情けない話だが、今の俺ではモカの空腹を埋めることはできなかった」

「あ、いえいえ。こちらこそ」

あの窮地に救いの手を差し伸べてくれた沙綾に改めて礼を言うと、沙綾もお辞儀を返してくれる。

モカと同じように下校中であつただらうに、あんな人だかりの中で一歩踏み出してくれた沙綾には頭が上がらない。

「モカ。代金は俺が持つ。好きなだけ食べるがいい」

「わーい、カズくんの奢りだ」

「ささやかではあるが、お前を傷つけた俺からの詫びだ」

そして、非礼には詫びを。

俺は財布の紐を緩めることに躊躇いはなかった。

「え？ 和那さん、他に何かしたんですか？」

「聞いてよさーやー。モカちゃんはカズくんは傷物にされちゃったのです……」

「あははは、大袈裟じゃない？」

今のやり取りを理解できないのか、首を傾げる沙綾。モカはこのざつくりとした経緯を口にする。

沙綾は冗談として受け取っている。

しかし、その認識は誤りだ。

「紛れもない事実だな。責任は俺が取る」

「えっ、ええええっ!？」

沙綾の驚く声が耳元に突き刺さる。

厨房から見える山吹夫妻がこちらに視線を向けるが、構わずモカとの会話を続ける。

「それなりに痛くしてしまっただよう。打ち明けるのは恥ずかしいが、俺自身、どうすればいいかわからなかった節もある。後学として、やられる側はどうして欲しかったのか教えて貰ってもいいだろうか」「ん〜。難しいけどー、やっぱり正面からかな〜？後ろからだと思えちゃうかもだし〜」

「む、それは正面からでも同じ話ではないのか？」

……おかしい。

俺達は至極真面目な話をしているはずだ。

はずなのに、沙綾が口を開けて顔を真っ赤にしているのはなぜだろう。

「そこはほら、上着とかで隠すとかさ」

「なるほど。それは盲点だった。だが、臭いは気にならないのか？」

「そこはほら、きんきゅー事態だから致し方なし、ってことで。日頃からそういうケアを心がけていたら、モカちゃんポイントは増えるけど、実際カズくんは無味無臭だから全然へーきー」

「無味……無味？味わったことがあるのか？」

「ないよ」

……不思議な話だ。

顔を赤らめていた沙綾が、今度は頭に疑問符を浮かべている。

俺達の会話に変なところがあるのかもしれないが、優先順位としてはモカの相手が上だ。

「一応、患部を見せてみる」

「ほい」

「ちよ、ちよつと二人とも！店の中でやめてっばー！ー！」

沙綾が何か言っているが、構うことはない。

俺は屈んで、モカの膝に顔を近づけた。

「……………擦りむいてしまっただけか。いつも通り引きずってしまったのが仇になったか。血は既に止まっているようだが、何かあるとけない。すまない、沙綾。度々で恐縮だが、救急箱を貸してくれないか……………沙綾？」

目を向けたら沙綾がなぜか崩れ落ちていた。

一方、顔を見上げるとモカは口を膨らませていた。



「むゝ。わたしだって女の子なんだから、もつと丁重に扱うべきだと思おう」

「それはもつともだ。しかし、それはお前自身もするべきだ。今回の例で言えば、昼食のほかに軽食を持ち歩くなど対策は取れるのではないか？」

「それはお昼ご飯の前に無くなつちやうからだめ」

「……………お前はひまりとは別の意味で、まずは節制を覚えるべきだな。それと、何をしている、沙綾。さつきから何を百面相をしている？」

声をかけると、沙綾もまた顔を上げる。

互いの姿勢からか目線の高さは同じになつた沙綾酷く疲れたような顔をしていた。

「……………あの、すみません。そもそも二人は何の話をしていたんですか？」

「ここまで来る際の、モカの運び方に決まっているだろう？さすがに高校生になれば、今までと同じ形でいいのか、と悩んでいてな。結局、おぶるのか抱きかかえるのかどちらが適切なのか、俺にはわからなかつたから、こうしてモカに聞いているだけだが？」

「で、モカちゃん的には抱っこがいいかなくつて思ったただけだが？さーやはどう思う？」

以前——今回とは程度が違えど——蘭が足を怪我をしたときに抱きかかえて運んだとき、三日間ほど口を利いてもらえなかつたことがある。

蘭の羞恥心を刺激してしまったことを猛省し、今回のモカは引きずってしまったが、これは怪我の原因になるので今後はしないことにした。

結局どうすればいいかわからず、こうしてモカに正解を尋ねているわけだ。

……俺の口調を真似るモカは置いておくとして、沙綾からは一層疲れたような表情へと変わる。

「ま、紛らわしいですよ、もう！モカもそんな誤解されそうな風に言わないの！」

「誤解……何をだ？モカ、わかるか？」

「えー、モカちゃんわかんなくない」

「……もう良いです。私の勘違いでした」

……ああ、そういうことか。

沙綾は、今の俺とモカの会話に何かいかがわしい会話として感じ取ってしまったわけか。

実に心外だ。

ランドセルを背負っていたときから知っているモカたちにそんな感情を抱くわけが——いや、さすがに絶対、とは断言できないか。

しかし、今回においてはそんなことは微塵も考えていない。怪我人相手にそんなこと考える余地などないだろう。

ならば、その部分は訂正する必要がある——

「カズくん。さすがにそれはしーっ、だよ」

だが、それはモカに制されたことで留められた。口にしてしまうと、またカズってしまうようだ。どうやら、ここはそっとしておくべきことらしい。

……やはり、コミュニケーションとは難しいものだ。

ところで、モカが沙綾の項垂れている理由について察しがついてい

るといふことは、モカの方は確信犯だったのだろうか。

ふと、そんなことを思ってしまったが、これも沙綾と同じく心の中に留めておくことにした。



「ふむ。純も紗南も元気そうだな」

「むしろ元気すぎて困っているくらいですよ。そっちはどうですか？」

「昔からだが、よく無理をする。あいつの頑張り屋なところは美点ではあるが……」

「あははは、そっちもお変わりないようで」

話が横道どころか、明後日の方向に逸れかけたのもつかの間、モカの手当を終えた後、私と和那さんは各々の兄妹の話をしていった。

それぞれの家の長男長女なのだから、顔を合わせたら、どうしても下の弟妹の話をしてしまう。羽沢家は従兄妹同士だったけど、まあ二人にとっては些細なことなんだろう。

そう言えば、こうして彼と面と向かってゆっくり話をしたのは何時以来だろうか。

あの喫茶店に行ったときは大抵皆と一緒にだったため、目を合わせても会釈くらいしかできなかつたためか、随分と久しぶりな感覚だった。

「——ふむ」

「? どうしたんですか?」

「大したことではない。単に、この店は相変わらず変化がないなと思っただけだ」

そう口にする和那さんの視線は明後日の方向に向いていた。その後、わざとらしい咳払いをしながら「すまん」と呟く。

どうやら彼なりに失言だったと悟ったようだ。

「決して悪い意味で言ったわけではない。気分を害してしまったのならすまなかった」

「ふふっ、わかっていますよ。まあ、こうして店を続けられているのも、懇意にしてくれる常連さんのおかげですよ。ね、モカ？」

「ね〜」

彼の言葉には悪意がないことを汲んだ上で、常連さんに視線を移すと、何やら和那さんから次々に突き出されるパンをひたすらに食べていた。

公園で鳩にパンをあげているような構図に似ていたが、こうしてほくほく顔のモカを見ているとこっちも穏やかな気分になれる。

「そっちは大分変わりましたよね」

「ああ、うちはメニューを一新させた。もう昔の羽沢珈琲店とは思わないことだ」

「いえ、そうじゃなくて。和那さんがですよ」

一瞬、和那さんが面食らったような気がした。

表情からは読み取りにくいのが、本人はおそらく自覚がなかったことだけはわかった。

「だって、昔は何言っても『ああ』とか『そうだな』とか『それは今話す必要があるのか?』とかしか返してくれなかったじゃないですか」「……………そうだったか?」

「そうでしたよ。正直、巴と一緒に居てくれないと会話すらできなかつたですし」

誇張ではない。

今も口数が少ないが、彼が学生時代ときは、二言以上会話が続けることは稀なほど本当に重症だった。

巴が通訳になってくれたおかげで意思疎通は辛うじてできていた。ここでは口にはしないが、正直あの時は二人きりにはなりたくなかったのが本音である。

勿論、今はそんな心配はなさそうだ。

「トモちゃんはカズ検準1級だからね」

と、横から聞きなれない単語を耳にした。

「……………ああ、モカが俺の許可なく独断で作った資格だ。どうやら、俺の言葉は日本語から逸脱してしまっているらしいぞ」

珍しくフォローを入れる彼の顔は酷く疲れたような、不満が見え隠れしている。

いや、表情は相変わらず無表情なのだが、纏う空気とその感情を主張していた。

「いいんですか？」

「甚だ不本意だが、コミュニケーションが不得手なのは事実だからな。これも試練の一環として受け取っている。それに、枠組みを作ったモカ自身、細かいことを考えているわけでもないようだ」

「むく、偏見はんたうい」

「どういう基準で級を分けてるの？」

「ふつつつぶ。もちろん、フィーリング」

やはり細かいことは考えていなかったようだ。

それがモカの良いところではあるが、巻き込まれる側は大変そうだと、つい他人事のように思ってしまう。

「…………俺が変わったというのは、このように日頃から『言葉が足りない』と口酸っぱく指摘してくれる人間が周りにいるおかげだな。これでも、相手を勘違いさせるようなことも少なくなっていると自負している」

「あ、すみません。残念ですけどそこまでは言っていないです」  
「……………なるほど」

その長い間には彼なりの自信があった証なのだろう。さつきも思ったが、感情の起伏がわかりやすくなっていることには素直に驚きだ。

「あつ、折角だから、和那さんもひとつどうです？ さすがに午後過ぎなのでもう焼き立てはないんですけど…」

モカにパンを与える作業をしているが、和那さん自身は何も食べていないことに気づき、そんな提案を試してみる。

「…………では、チョコココロネをひとつ頂こう」  
「わかりましたっ」

トングで手早く目当ての物を取り、ビニールに包む。

一瞬、友達の顔が思い浮かんだが、気のせいということにしておく。受け取ったチョコココロネを淡々と口に入れる姿を見ると、なぜだか緊張してしまう。

「以前食べたときよりも生地が柔らかいな。小麦粉の種類を変えたか、もしくは発酵の時間を変えたようだな」  
「りよ、両親に伝えておきますね」

再び友達の顔を思い浮かんだが、気のせいだと片付ける。

一応、彼も料理人だ。細かな違いに気づいたとしても何もおかしくはないだろうに。

そんなことを考えていると、和那さんは腕時計を見ていた。

私もつられて時計を見ると、随分と話し込んでしまったことに気づく。

「では、そろそろ行くぞ、モカ」

「え〜。まだ足りないよ〜」

「俺は買い物途中だ。お前もこれから練習があるはずだろう。懲りずにまた遅れる気か？」

「ぶ〜。でも、そのメロンパンがあたしに食べられたいって言うてる〜」

「……差し入れとして何個か買っておく。巴かひまりも小腹を空かせているだろう」

「なら行く〜。じゃーねー、さーやー」

「ではな、沙綾。また近いうちに来る」

「はい！また来てくださいね！」

こうして、二人は店を出ていった。

嵐、とまでは言わないが、突風のように来て、あっさりと去っていった後の店の中がかなり寂しいように感じる。

珍しい顔が見られたためか、こんな日があってもいいかな、なんて思えてしまう。

「久しぶりに見たなあ、和那さん」

思い浮かべるのは、あの年上のお兄さん。

最近、年上だと思いこんでいた巴の、さらに年上の彼は本当に個性的だ。

第一印象からして怖くて厳しそうな雰囲気は幼い頃から変わらな  
いが、私は——いや、商店街の人たちは皆、知っている。

彼はただ、どうしようもないくらい不器用なだけだと。

「沙綾、和那くんはもう行っちゃった？」

「うん。ついさつき行っちゃったよ」

裏から出てきたのは私の母さん。

つい最近まで病気がちだったが、今ではこうして父さんと一緒に店を切り盛りできるくらい回復していた。

「あら、残念。そう言えば、随分前にお見舞いに来てくれたお礼をした  
いと思つてたのに……」

「あははは。なら今度、和那さんの店に行けばいいんじゃない？」

「うーん……定休日がうちと別の日だったら良かったんだけど………沙綾？」

ああ、そうか。

……でようやく、和那さんのあの言葉の意味を理解できた。

『単に、この店は相変わらず変化がないなと思っただけだ』

——あれは、店の裏にいた母さんを見ながら言っていたんだ、と。

「やっぱり、わかりにくいなあ」

「……………急にどうしたの？」

「なんでもない。ほら、あとは私がやっておくから、母さんは晩ご飯の用意でもしてて」

「ちよ、ちよっと!？」

表に出てきた母さんの背中を押す。

晩ご飯だけではない。これから沙南と純も帰ってくる。母さんに



はやってもらわなければならないことは山積みにあるのだ。父さんも、明日の仕込みで手が離せなくなるだろう。

「よっしー！頑張ろうー！」

改めて気合を入れ直す。

今日も商店街は平和なようだ。

10話 神様、仏様、——様（前編）

世の中には行楽シーズンと呼ばれるものがある。

春休み、夏休み、年末年始……普段の学業や仕事から解き放たれる期間を誰もが常日頃から待ち望んでいる。

……サービスマン業にとっては、節目節目の繁忙期。いわゆる地獄の街道の幕開けになるだろうが、そこは強く生きてほしいものだ。

時はまさにゴールデンウィーク。

四月から溜め込んでいた新生活の疲れを癒すにはまさに絶好の行楽日和だ。

俺とて飲食店従事者だ。

たとえ周りが休みであろうとも、通常通りの営業となる。

そう見越して、今年も予定は入れていなかった。

ところが、実際は——

「はしーりだせっ♪はしーりだせっ♪そらーたかくっ、はたーかぎしっ♪」

いつの間にか後部座席にいるひまりの歌をBGMに、高速道路で車を走らせている俺がいた。

勿論、いつも通りの四人も同乗している。皆、ご機嫌なひまりを温かな視線で見守っている。

「ひまり、浮かれすぎ」

ひまりの隣に座る蘭が呆れているようだ。

一見、宥めているようだが、心の内では自分も浮かれているのは声だけでもわかってしまう。

「もー蘭ったら！せつかくの皆で旅行なんだから、水ささないですよー！」

ひまりから反論の声が出る。

その言葉にはひとつも誤りや偽りはない。

そう。この晴天の下——俺達はいつもの街から出て、遙か高くそびえ立つ山々へと身を投じようとしていた。



「山に行こう！」

一週間前のこと。

いつも通り練習を終えた五人が羽沢珈琲店に集まった際に、突然ひまりから発せられたこの一言から全ては始まった。

当然、他の四人は脈絡のない発言に黙ってしまった。

………考えてみれば、俺もこんな話の切り出し方をしている。今後は気をつけることにしよう。

「……急にどうしたの？」

「どうしたの、じゃないでしょ！大型連休だよ!?絶好のお出かけのチャンスだよ!？」

テーブルを叩きながら捲し立てるひまり。

加えて声も大きい。夕暮れ時とはいえ、一応他の客はいる。後でそれとなく注意をしておこう。

「当然、夏は海に行くからー、ゴールデンウィークは山でキャンプだよね！釣りとか！バーベキューとか！みんなでテント作ってお泊りと

かしようよ〜！」

……………。

……………。

「え、なんでみんな反応薄いの!？」

「いや、いきなりだからどう反応すればいいかわからないだけ」

もつともな発言だ。

夏休みには海に行くことは既に決定事項となっていることも含め、誰もひまりのテンションにはついていけないのだから。

「まあ、キャンプが悪いって言うわけじゃないけどさ、ひまり。ちゃんとプラン考えているのか？行き先とか、交通手段とか、皆の都合とか」  
「……………ノープラン、です」

……………よくまあ、そんな状態でこの話を持ち出したものだ。つまり、これから計画を立てなければならぬわけだ。

「で、でも!せっかくのゴールデンウィークだし、皆で何かしたいよね!私がいいと思うよ!」

「っ、つぐ〜!」

ふむ、つぐみはひまりの味方をするようだ。ならば、俺としても応援はしてやるとしよう。

「えー、あたし虫とかいやだからパス〜」

「右に同じ。練習とか家の行事とかあるし」

「うっ、蘭は日程次第として……………モカって別に虫が苦手なわけじゃないでしょー!」

「でもまあ、この流れだと行かない感じだなー。モカはともかく、蘭は仕方ないからな」

「う、うう……巴までええ……」

反対意見が二票入ったところでひまりは意気消沈する。

……まあ、実際は反対票は入っていない。

蘭は日程が合えば行くだろう。みんなで旅行と聞いた時に表情が緩くなった瞬間を見逃さなかった。心中では魅力的な提案と思っているに違いない。

巴は反対ではないようだが決定打が欠けているためか、保留するつもりのようなのだ。

モカは単純にひまりをからかっているだけだろう。最終的にはひまり側に傾くはずだ。

一見、ひまりのアウエーな状況に見えるかもしれないが、計画さえしっかりと決まっていればすぐに決まる話だ。問題は、その計画が一向に定まっていない点だが。

「こらーここで『自分は無関係だぞ』アピールしているカズさん！そんな離れたところにいないで、こっち来てください！」

「む」

ここでひまりが俺を巻き込んできた。

賛成意見が半数あれば押し切れる可能性はあると判断したのだから……問題はそこではないだろうに。

「くだらんな。俺の意見など聞いても無意味だろう」

「あ、今のは『自分が賛成してもひまりちゃんが望む結果にはなりそうにないから、力になれなくてごめんね』って意味だよ！」

「そ、そんなあ……」

つぐみの冴えたフォローの通りだ。

そもそも計画の具体案がなければ趨勢が覆るわけがない。俺がしやしやり出たところで不意に終わるだけだ。

「なあカズ。何かいい案ないか？」

今にも泣き出しそうなひまりを見かねたのか、巴がそう尋ねてくる。

「……………いい案、と言われても困る。」

「残念だが、俺にはひまりのオーダーを全て応えられるような選択肢はない」

「だよね〜……………あれ？つまり、他に選択肢があるってことなの？」

「……………この間、常連が会社の福利厚生でコテージを借りたらしいが、仕事で行けなくなったとかで、他に使う人がいれば譲るという話があったな」

そもそもコテージであるならわざわざテントに泊まる必要がなくなる。つまり、ひまりの願望を全て叶えることはできない。

テントを張らなければならないようなキャンプ地を知らないのも、悪いが俺に力になれそうにない。この場においては潔く諦めてもらうとしよう。

「…………………………」

「なんだ、なぜ俺を見る？」

話はこれで終わると思っていたが、気がつけば五人の視線が集中していた。

また何か「カズって」しまったのだろうか。頭の中で先ほどまでの発言を整理しようとしたが、そんな暇は与えてもらえなかった。

「カズさん。それ、今すぐその人に連絡とかとれますか？」

「おかしなことを言う。連絡も何もここにいるぞ」

奥のテーブルを指差す。

そこに座っているのは常連の黒ずくめの男。サングラス越しで視線をたどることはできないが、顔はこちらの方を向いていた。

そして、俺に対してサムズアップをする。

なるほど、話は全て聞かせてもらっていたか。

「……………大丈夫そうだな」

「交通手段は……………あ、カズの本があるな」

「じゃあじゃあ！日程は!？」

常連は壁掛けカレンダーを指差す。

ここまで頑なに言葉を発そうとしないのは何か意図があるのか気になるが、その疑問は置いておく。

「あのカレンダーの二日間らしい。一泊二日になるが、仕方ないだろう」

「みんな、どう?」

最後に、ひまりが辺りを見回す。

……………呆れている者、喜んでいる者、多々いれど、皆が反対意見を吐かず頷いていることは共通していた。

———こうして、旅先が決まった。

「か、カズ神様〜！一生、崇め奉ります〜！」

———そして、俺は神様になったようだ。



「いや待て、俺はまだ人間だ」

「お、お兄ちゃん？急にどうしたの？」

そんな自然と溢れた言葉に、助手席に座るつぐみが反応を示した。  
……………いかな。いくら高速道路が単調だからといって物思いに  
耽らずに運転に集中しなければ。

「む、すまない。先週くらいにひまりが俺のことを神様呼ばわりして  
いたことを思い出してな」

「あはは……ひまりちゃんのアレだよ。今でも私達が頼みごと引き  
受けたらあんな感じなんだよ」

「何だと……つまり、この車の中にはひまり以外は全員神様なのか  
……………」

「え？別にそんな深い意味は——」

「ふっふっふー、とうとうそこに気がついてしまったか。カズ神様  
よー」

「……………その声はモカ神様か」

つぐみの言葉を遮るように背後からモカ神の声が聞こえた。

バックミラー越しから、蘭とひまりが座っている席の、さらに後ろ  
からドヤ顔が見える。

「そう。トントントン拍子でここまで来てしまったのは、皆が神様だった  
からなのだー」

「ふむ、もしや俺が都合よく休みを貰えたのは……」

「つぐみ神様のおかげー。ちなみに、蘭神様の家の行事が重ならなかつ



たのは、カズ神様のおかげー」

なんとということだ。まさか八百万信仰は本当だったのか。いや、意味合いが全く違うのはわかっているが。

……ちなみに、蘭については俺が先んじて蘭の父に連絡しただけだ。スピリチュアルな力なぞ使っていない。

「お、お兄ちゃん！一応言っておくけど、ひまりちゃんの冗談だからね！モカちゃんもデタラメ言っちゃダメだよ！」

「おおー。さすが我らが主神、つぐ神様ー」

「トモ神も信仰しているからな。つぐ神様」

「やはり信仰の数が段違いだな、つぐ神様」

「な、なんて反応すればわからないって三人とも！」

「何この会話」

この蘭神様の一声により、車内で神話大戦に発展しないことを確認した。

一方、唯一の人間の方に視線を移す。

「キャンぷ〜♪キャンぷ〜♪」

完全に浮かれていて話が耳に入っていなかったようだ。そこまで楽しみにしてもらえているのは俺も引率冥利につきると言うものだ。ここはそつとしておくとしよう。

「カズー。あとどれくらいで到着しそうだー？」

「幸い、渋滞も少ない。途中、休憩を含めれば一時間程度で着くだろう」

「………はっ！なら大貧民しよう！それとも定番のババ抜き？あつ、インディアンポーカーとかにする？」

「むむー、人間ふぜーがー。身の程を知れー」

「え、ええええええ!?いきなりなに!?みんな何の話してたの!?!」

モカ神様の傲慢な振る舞いは置いておくとして、到着まではまだ時間には山程ある。

旅行は移動時間を楽しめてこそだ。

ここはひまりの申し出通り、ゲームなどをするのもいいものだ。

「あたし寝ようかな……」

「むう、蘭がつれな〜い」

「今寝たらバックミラーでカズくん寝顔が丸見えになるよ〜」

「やっぱやる」

モカの一言に、カツと目を見開く蘭。

大方、俺の前で無様な姿を見せたくないだけだろう。

まあ、蘭の顔はつぐみが座っているシート影になっているので見ようと思っても見えないわけだが。

「はい、つぐみ。トランプとモカからのお菓子」

「ありがとう、蘭ちゃん、モカちゃん。はい、お兄ちゃんも。あーん」  
「ん、助かる」

視線は動かさず、つぐみから差し出された棒状の菓子をくわえた。ただそれだけの動作のはずが、なぜか背後から二人分の視線が突き刺さる。

「な、なんて自然な流れ……つぐ、恐ろしい子!」

「えっ、な、なにが?」

「よし、決めたー!この大貧民で勝った人が次の休憩で助手席を交代する権利が貰えるってことで、みんなどう!?!」

バックミラーには身を乗り出しているひまりの姿が映る。今のつ

ぐみの一連の動作を見て、闘志に火がついたようだ。

「……………まあ、既に菓子類は全てモカの腹の中に収まっていることにも気づいていないようだが。」

「それって、やる気出るのがとびちやんと蘭だけじゃない？」

「……………な、なんであたしが入ってるの？」

「なら、ついでに最下位の人はトップの人に次のサービスエリアで何か奢るのも追加でどうだ？」

「つまり、トップの人は『座席を自由にできる権利』と『最下位の人から奢られる権利』が与えられるわけだね！」

いかにも学生らしい賭け事だ。普段もそうだが、この五人の等身大の姿はいつ見ても安心する。

俺にはあまり縁がなかったが、こうして席替えに必死になる姿は――

――む、待てよ。

「……………運転席もか？」

「それはないから！」

ああ、良かった。

さすがに無免許運転での高速道路の疾走は前衛的すぎたようだ。

道中での出来事はここまで。

最後に結果だけを述べると、俺の隣は誰とも入れ替わることにはなかった。



車から降りて山道を数分。

春らしく咲き誇る花々とモダンな造りをした数々の別荘が並ぶ美

しい里山を歩いて進む。有数のリゾート地なためか、俺達以外にもそれなりに多くの人間を見かけた。道中の高速道路では渋滞に巻き込まれなかったため忘れかけていたが、こうした賑わいの中にとくと、今が行楽シーズンなのだ」と改めて確認できる。

「ここだな」

そんな賑わうキャンプ地を、更に奥に行った先に俺達の目的地があった。

「でかつ!？」

それを見た巴の記念すべき第一声がこれである。

無理もない。俺も同じ感想を抱いてしまったのだから。

もっと簡素なログハウスを想定していたのだが、開放感のある壁一面のガラス窓と、窓ガラス越しに見えるモダンな内装は明らかにその範疇を超えている。俺の貧弱な語彙力では表現しきれない。だが、少なくとも一般的な学生が泊まるような規模ではないことは誰もが理解できるに違いない。

「みんな来て！デッキからの見晴らしがすごいよ！」

「おおっマジだ！学校の屋上みたいだな！」

「巴、リゾートでその例えどうなの？」

各々が思い思いに散らばる。

それなりの長旅であったが、元気が有り余っているようで何よりだ。

とりあえず俺は荷解きをしようと背負っていた荷物をラウンジの隅にまとめておく。

「随分贅沢だけど、本当にお金とかいいの？」

「曰く、福利厚生で自己負担ゼロで借りることができるらしい。気前だけはいいい企業なのだろう」

「気前だけって……褒めるなら『社員に還元してくれるいい企業』なんて表現使ったら？」

「言葉通りの意味だが？何も間違っていないだろう」

同じく荷物を置きに来た蘭とつぐみの気持ちも理解できる。いくら六人とはいえ、さすがにこの規模のコテージを無料で使うのはいささか忍びない。

これを福利厚生で利用できるとは……ほぼ毎日のように店に顔を出すあの常連も、つぐみの言う通りの有数な企業に属する人間のなのかもしれない。

「おーい！誰か散策行かないかー！」

「はいはいはい！今行くー！モカも早くー！」

「ほーい。しよーがないなー、ひーちゃんほー」

他の三人は早速外に繰り出すようだ。

基本的にアグレッシブな性格であることが五人の良いところだ。このような、普段では味わえない体験をするチャンスを逃すはずもない。

「行ってくるよ。ここにいてもお前たちにできることはない」

さて、では俺は夜の準備をしよう。

やることとしては機材と食事の準備だ。前者は後で裏手の倉庫に取りに行くとして、後者は前日から冷蔵庫に保管してもらっている。では、まずは食材の下拵えから取り掛かることにする。

「よし、やるか」

「うん、やっちゃおうか。蘭ちゃん、包丁ってどこにあるかわかる？」

「下の戸棚にあったよ。どれ使えばいい?」

ふむ、それは魚用の出刃包丁————待て。

「……………なぜ残っている?」

「えっ?」

「何が?」

俺の質問に、つぐみと蘭は揃って首を傾げる。

首を傾げたいのは俺の方だ。ひまりたちと外に出ていったと思いきや、いつの間にか俺を挟む形でキッチンに立っていたのだから。

……………ああ、俺に気を遣って手伝おうとしているのか。申し出はありがたいが、人手がいる作業をするわけでもない。

「手伝いはいらんぞ。お前たちは肉と野菜を切るためにわざわざここに来たわけではないだろうに」

「もう、またそんなこと言って。私達が行っちゃったらお兄ちゃんがひとりになっちゃやうでしょ。そういうの良くないって前から言ってるよね?」

「む」

つぐみの諫言に口を閉ざすしかない。

……………それはあれか。以前言っていた、何もしないことが別に云々というやつか。

まあ、それは置いておこう。

「お前たちこそ、長旅で疲れているだろう。巴たちについていけないにせよ、ここは休息を取るべきだ」

「和那こそ、ずっと運転して疲れているでしょ。お互い様だし、二人でやればすぐ終わるじゃん」

「しかし」

「いいから。つぐみ、やっちゃおう」  
「うん！」

結局押し切られてしまい、三人でやることになった。

こうなってしまうては仕方ない。手際よく終わらせて早く二人を送り出そう。

所詮は食材を一口大に切っていくだけだ。

ほんのりと冷えた食材に手を添えて、次々と包丁を入れながら、傍目で二人の様子を伺う。

つぐみは包丁の入れ方に迷いはあれど、段々とスピードを上げている。大きさにバラつきもなく、動きに慣れが垣間見える。

一方、蘭も俺の切り方を参考にしているようだ。見様見真似にしては迷いのない動きをしているが……………。

「不恰好だな」

「い、今のは『それこそがバーベキューの醍醐味だから気にしないで』って意味だからね！私もそう思うよ！」

「……………つぐみ。それ、あたしのフォローになってない」

「えっ、あつ!?、ごめんね、蘭ちゃん！」

蘭には悪いが、つぐみのフォローは俺の方に傾いただけだ。悪気はないことは蘭も理解しているに違いないので、俺からは何も言わないことにした。

さて、用意するものは粗方用意した。

後は、使ったものを片付けるだけで食材の準備は終わりだ。

「……………やっぱり料理できたほうがいいのかな」

流し台で洗い物をしている中、蘭は手を緩めずにこんな悩みを吐露した。

どうやら、俺の一言に思うところがあつたようだ。

「できておいて損はないと言っておこう。使う場面があるかは別としてだが」

「私もそこまで気にする必要はないと思うよ？ 実際、レシピ通りに回数を重ねれば誰でもできるし」

その点では楽器と共通することかもしれない。

基本をおさえ、細かいテクニックはあれど楽譜通りに練習を重ねればできることだ。

誰もが素人の状態から始まるのは当然だ。蘭もすぐにできるようになるに違いない。

他人事のように、そう思っていた矢先であった。

「その……和那としては、できる人の方がいいの？」

——唐突に、そんな不自然な問いかけが飛び込んできた。

「……………ふむ、それを聞くことに意味はあるのか？」

「ただの世間話じゃん。本気にならないでよ」

「なるほど。その真剣そうな表情で言われても説得力に欠けるな」

「真剣じゃないし。いや、真剣じゃないし」

手を止めて俺の顔を真っ直ぐ見つめている自身に気づいていなかったのか、蘭はすぐに流し台へと視線を戻した。

平静を保っている、と思っているようだ。実際は、同じ言葉を二回繰り返している上に、ほんのりと赤みがかかった耳は隠れていないわけだが。

ここまで動揺されては、こちらにも反応に困るというものだが…………俺個人の回答としては、これに尽きるだろう。

「特段、拘りはない。作りたいならば作ればいいし、作らないのであれば俺が作る」



「え、それだけ？」

「それだけだ」

それ以上の考え方をするには、俺にはいささか荷が重い。

「俺には、特定の誰かを “こうあつてほしい” なんて考えを抱く真似はできない。ありたい姿を決めるのは、その者自身だけだ。俺が決める事でも、ましてや期待などする事でもない」

象に針の穴に糸を通すことを期待するのか。

魚に陸地で肺呼吸をすることを期待するのか。

極端な例だが、同じことだ。

物事において、誰しも向き不向きはある。わざわざ不向きなことを強要する真似など、誰ができようか。

仮に俺の立場が友であつても、親であつても——それこそ、神であつたとしても、それを侵すことはできない。俺はそう考えている。

言い終えると、隣の蘭が皿を強く握りしめている姿が見えた。

……今の発言に何か憤ることがあつたのだろうか。

「お兄ちゃん。多分、蘭ちゃんが聞きたいことつて、そんな難しい話じゃないと思うけど……」

「そうなのか」

つぐみがそう言うのであれば、その通りなのだろう。

では、俺はなんて答えるべきだったのだろうか。

「逆に尋ねるが、蘭は家庭的な能力を求めるのか？」

「……………え、は？ 待つて？ その流れで聞いてくるのか？」

「むしろ聞かれないとでも思っていたのか？」

「やだ、言わない。公平フェアじゃないし」

ただ、模範的な回答を知りたいだけなのだが……蘭はなぜ回答を渋るのだろうか。

しかも、公平フェアではないとは何だ。

「俺は答えた。この上なく公平フェアだろう」

「質問に対して正確な回答じゃなかったし、ノーカンでしょ、あんなの。ね、つぐみ?」

「へっ?わ、私?」

「む、つぐみが教えてくれるのか?」

「お、お兄ちゃん!わざとでしょ!もう!」

「いいんじゃない?やっぱり兄としては気になるんでしょ」

珍しく蘭がつぐみに強気に出ている中、少々ばかりの思考に没頭する。

……つまり、蘭とつぐみの異性の好みを、俺が気になっていると勘違いされているわけだ。

単純に“あの問いに対してはどんな答え方が正解だったのか”を知りたかっただけなのだが、また伝わりきれていなかったようだ。

「……まあいい。俺が聞いたところで意味のない話だったな」

「む」

「むっ」

「待て、二人とも。なぜそこで不服そうな顔をする」

「うっさい。とーへんぼく」

訂正したが、今度は蘭の機嫌を損ねてしまった。

これはつまり、根掘り葉掘り聞いてほしかったということなのだろうか。

……年頃の女子の心情はいささか複雑すぎる。巴に助けを請いたい気持ちになるが、無いものねだりをして不毛なので、ぐっと呑み込むことにした。

話をもどそう  
閑話休題。

「お兄ちゃん、これで全部？」

「ああ。食材はこれで全てだ。礼を言う。この恩は必ず返す」  
「言ったね？じゃあ今返して」

——のはずが、話が戻ってしまった。

蘭にしては随分と強引な軌道修正だ。

もう取り繕うつもりはないのか、真剣な表情のまま俺を見つめる。  
ここで聞かないと気がすまない。  
そのような強い意志を感じ取ってしまった。

「……………さっきの質問に答えればいいんだな？」

「当たり前じゃん」

「わ、わたしも、妹として知っておきたいかなー…なんて」

さり気なくつぐみも耳を傾けているが……………さて、どうしたものか。

『異性に家庭的な要素を求めるのか否か』だったか。

……………残念ながら、蘭たちが満足する回答なぞ持ち合わせていない。俺の考え方は変わることはない。

ならば、見方を変えてみるか。

「烏漕がましいことは承知の上だが……………こうして誰かと台所に立つのは、楽しいものだな」

今日の台所作業を通して思った感想をそのまま述べただけだ。

店で働いているときも、叔父や叔母、つぐみとキッチンに立っているときは、一人で立つよりも心が満たされるような気がする。

もし、それが家族や友人ではない、別の誰かであつても——  
「いや、これ以上考えるのは不毛か。」

ひまりには悪いが、カズ神様の名前は返上させてもらうことにしよう。こんな我欲まみれな人間が、神様など務まるわけがない。

「満足か」

「うんっ！ね、蘭ちゃん？」

「……………よし」

満面の笑みを浮かべるつぐみと、なぜか勝ち誇った表情をする蘭。どちらも楽しそうで何よりだが……………蘭の方は一体誰と戦つていたのか疑問が残る。

目を向けてみれば、勝ち誇った表情から一変して、真剣な表情へと変わっていた。まるで、ライブでマイクとギターを手に壇上に立ったときと同じように。

「……………よし」

この出来事をきっかけに、蘭は新たな一步を踏み出すことになる。

——  
夜は、まだやって来ない。

11話 神様、仏様、——様（後編）

夕暮れ時とはいえ、随分と陽が明るい。

山間部は都心部より暗いと想像していたが、俺達がいるところにおいては例外のようだ。

繰り返し確認するが、俺達はキャンプに来ている。

つまり、この時間帯にやることとしたらひとつしかない。

「BーBーQー」

「イエーイー！ひゅーひゅー！」

モカの気の抜けた音頭にひまりが便乗する。

この二人が一番楽しみにしていた時間がやってきたわけだ。

俺の近くには、夕焼けのように燃えるコンロが二つ。網の下で、ほんのり赤い火が灯っている。奥底に沈む炭が燃えている証であった。

温度調節よし、食材よし、飲み物よし、油受け皿よし、代えの網と皿の用意も万端だ。

「いやあ……ここに来る前はデッキの上でやれるなんて想像できなかったよな」

「しかも炭火だよ炭火！カズさん、これも備え付けなんですか？」

「備蓄庫はあったが、炭が切れていてな。仕方ないから、俺がさつき作った」

「そうかー。カズが作ったならあんし——」

巴、ひまり、モカの視線がこちらに向く。特段、驚くことでもないだろうに。

「学生の頃、理科とかで習わなかったのか？簡易的なものであれば、木の枝から一時間程度で作れるぞ」

「その言い方だと、時間があればマジなものが作れるって意味になる

よね〜」

「あたし、和那の作業に立ち会ってたけど、はじめはマジなもの作ろうとしてたよ。一斗缶とか探してたし」

「昔、ある男から教わった。炭は大事な資源だからな」

「炭を作るカフェ店員って一体……」

炭は燃やすだけでなく、消臭にも使用できる。作り方を覚えておいて損はない。

ただ、蘭の言うとおり、備長炭は一日でできるものではない。残念ながら、ここでの作成は断念した。

「と、とにかく、蘭たちには準備任せつきりにしちゃって悪かったな。片付けはアタシたちがやるよ」

「気にしなくていいって。それより、巴たちは何してたの？随分帰りが遅かったけど」

それは俺も疑問だった。

おかげで暇を持って余してしまった俺達は、備長炭作成用の一斗缶を探すことになったわけだ。この時間まで何をしていたのだろう。

「……………えっと、その、実はハロハピの人たちもここにきて……………」

「ひまり。もういいよ。色々と察しがつくから」

「え〜。全モカちゃんが度肝を抜かれた名場面があつたのに〜」

「モカと和那はハロハピ寄りだからそう思うんじゃない？」

ハロハピ。

そんな聞きなれない単語を耳にした。

「つぐみ。ハロハピとはなんだ？」

「えーっと、私達と同じような五人組バンドで……………その……………ごめん。私もなんて言ったらいいかわかんないや」

「つぐみにそこまで言わせるのか。さぞ強敵なのだろう」

「あー、まあ、それは間違っていないな」

話を聞く限り詳細まではわからないが、つぐみたちと同業であることは察した。まあ、俺には直接関わりのないことか。

「さて、ひまり念願のバーベキューだ。お前たちは肉たちが焼き上がるまで、そこで楽しく談笑しながら指をくわえて待つがいい」

「いや、だからなんでそんなボスみたいな言い回しするんだよ」

「あこから教わったからな」

「……あいつはカズをどうしたいんだよ」

姉妹間での意思疎通の行き違いについては当人たちに任せるとして、俺は俺の役目を果たそう。

熱された網の上に次々と食材を乗せていく。

脂が落ちるたびに鉢の中の音が大きくなる。

火が燃え上がることはなく、静かに煙だけが立ち上る。バーベキューも料理だ。食材を“焼く”のであって“燃やす”わけではないのだ。

炭火での火加減調節は慣れていない。

だが、今日は二つのコンロがある。五人の箸を乾かせるようなことはなと思うがいい。

「はいはい！カズさん！私に何かください！」

「ではこの玉ねぎをやろう」

「やさいつ!?!」

さて、巴にはタンを与えよう。

せつかくのバーベキューだ。薄切りでは味気ないので、部位としては中央部分の厚さのあるものを用意した。味付けはシンプルに塩のみ。素材本来の味を堪能してもらおうとしよう。

ひまりにはネギだな。

蘭には肩ロースだ。

黒胡椒とオリーブオイルで下拵えしたものをホイル焼きにし、筋の部分は避けて薄く切り分ける。

ひまりにナスだな。

モカはリクエストに応えてスペアリブだ。

んにくを利かせた特性のソースに漬け込んだものを豪快に齧り付いてもらうとしよう。

ひまりにアスパラだな。

「……………ヤバい。誰かご飯をくれ。いや、この際パンでもお好み焼きでも何でもいいから、とにかく炭水化物をくれ」

「と、巴ちゃん。焼きおにぎり用のおにぎりならあるけど……………」

「つぐ、アタシはこの純白な姿を黒くするなんてできそうにない。ありのままの姿でいいんだ。だから、そいつを渡してくれ」

「なんか巴が急に悟った顔になってるんだけど」

「もー！さつきからなんでわたしの皿に野菜ばっか乗せるんですか！？」

「他意はないぞ」

タイミングの問題だ。

ひまりの皿が空いたときに、ちょうど野菜が食べごろになってしまっただけの話だ。野菜から愛されている証拠だ。俺としては少し羨ましい。

さて、つぐみにはサーロインだ。

先日、はぐみの店で手に入った上物だ。これも巴にあげたタンと同様に、素材本来の味を引き立たせるのがベストだ。シンブルな塩コショウのみで下味をつけ、一口大に切り分けて、皿に置いておく。

ひまりには――

「お兄ちゃん」



「なん——」

返事をする間もなく、口の中にナニカを放り込まれた。

……………ふむ、この柔らかさはれっきとしたサーロインだな。

「もう！すぐそうやって自分が食べるの忘れるんだから」

むっ、とした表情のつぐみが俺を咎める。

確かに、焼くことに集中しすぎて食べる暇がなくなるのはキャンプではよくあることだ。

気を遣ってくれるのはありがたいが……………

「……………あふい」

「あーご、ごめんね！はい水！」

つぐみから受け取ったコップの水を一気に飲み干す。猫舌、と言うほどでもないが、俺の口の中は熱さに強いわけではない。

つぐみには注意……………いや、善意からの行動を咎める必要はない。俺の口が熱さに強くなればいい話か。

従兄として、精進することにしよう。まずは沸騰したおでんを口に入れても動じないようになることを目標か。

「カズさん！なにか食べたいものありませんか！私が何でも食べさせてあげますよっ！」

「むっ、ひーちゃんあぶな〜い」

つぐみの影響を受けたのか、コンロの前を陣取っていたモカを押しつけて、一步前に踏み出したのはひまりだった。

……………気遣いはありがたいが、その前に忠告するべきだろう。

「そうか。だが、モカから押し付けられた椎茸を俺に渡そうとしても



「はいよ。なんか、こんなの前もあつた気がするな」

その通りだ。

たとえば場所が変わつたとしても、人は変わるわけではない。どこにいても、俺は俺で、五人は五人だ。

……さて、〃いつも通り〃ひまりが機嫌を直してくれるように努力するでしょう。

「やつぱり鬼畜じゃん」

「らーんー？何が〃やつぱり〃なのー？」

「な、なんでもないし」

余談だが、俺が困っている間に、何やらモカが蘭に詰め寄っていた。俺はひまりの相手で手一杯だったので最後まで聞けなかったが。



火や煙の近くにいれば、汗や煙の臭いが気になるもの。なら、バーベキューが終わつた後にお風呂に入ろうとするのはおかしいことではないはず。

そんなわけで、後片付けを終えた私たちはそのままお風呂に入ることにした。

学生が使うには破格のコテージだけど、さすがにお風呂は交代で使わないといけない——そんなことを考えていた。

「でかかったな……」

「キャンプ先で温泉に入れるなんて思わなかったよね……」

寝室に戻ってきた私達の会話がこれだ。

まさか、五人一緒に入っても問題ないくらいの温泉があるなんて誰

が想定できるだろうか。

この寝室もそうだ。大部屋にベッドが五つ並んでいる。これではまるでホテルだ。

……………目の当たりにしたときはみんなテンションが上がっていたけど、改めて考えると、こんな設備まで無償で使えるとなると、さすがに裏を感じてしまう。

「さすがこころんのところのコテージですな〜」

「え、そうだったの？」

「マジみたいだな。さつき会った時にそんなこと言ってたし」

意外なことに、この……………ここ一帯のコテージは全てこころちゃんの家が所有しているとのことらしい。昼間、私と蘭ちゃんがお兄ちゃんのお手伝いをしている間に、ハロハピの皆と会った、と言う話を思い出した。

つまり、この使用权を譲ってくれたあの黒ずくめの常連さんは、こころちゃんのところの人と言うこと。そう言えば、ハロハピの皆がよく話している『黒い服の人』と風貌が似ていたことを思い出した。

「納得、といえば納得だけど……………」

「コレ、あたしの知っているキャンプじゃない気がするんだけど」

「あ、あははは……………まあ、楽しいからいいんじゃないか？ いい気分転換になったし」

確かに、ここまで来たら楽しんだもの勝ちだと思う。むしろ、ここまですでにたれりつくせりにされては、楽しまない方が失礼だとも思ってしまう。

黒服さんたちには今度コーヒーをサービスすることを決めたところで、いち早くベッドに飛び込んだ巴ちゃんから話が切り出された。

「よし。明日はどうする？ 瀬田先輩が言ってたけど、ここらにも新し

いスタジオがあるみたいだぞ。楽器も完備しているみたいだし、そこで練習するのもいいかもな」

「合宿かあ……悪くないけど、つぐたちってまだこちら辺の散策できていないでしょ？わざわざ遠くにきて、練習だけってのはどうなんだろう？」

「あたしは別に構わないけど……それならギター持ってくれば良かったかな。なら——」

皆が話を進めている中、私は部屋から顔を出して周りを伺う。お風呂からここまで向かう時も同じように探しているけど、見つからない。

「つぐ。どうしたの？」

モカちゃんがベッドに項垂れながら不審な動きをしている私に聞いてくる。明日の予定について話していた三人もこつちに視線が集中する。

せつかくなので、みんなにも協力してもらおうことにした。

「ねえ、みんな、お兄ちゃん見なかった？」

「え、カズさん？」

そう、私が探しているのは和那<sup>お兄ちゃん</sup>。

ここが私達の家より広いせいとか、現在地がわからないとどこか不安になってしまおう。お風呂に出てきてから気配すらしなのはどういうことなのだろう。

「あれ？アタシたちと入れ違いで風呂に入っているんじゃないのか？」

「ううん、私達がお風呂に入る前にシャワー浴びてたよ」

「ならトイレとか？」

「私もそう思ったんだけど、どこも鍵はかかってなかったんだ」

「……………冷蔵庫とか？」

「も、モカちゃん！いくらお兄ちゃんでも、さすがに冷蔵庫には入り切らないよー！」

「待って、つぐみ。そのフォローはおかしいと思う」

蘭ちゃんから指摘があったけど、今はそれどころではない。とりあえず、お兄ちゃんが行きそうな場所はここに来るまでに確認してきた。他にあるとしたら――

「そこまで探していないんじゃないか？、もう自分の部屋に戻っているんじゃないのか？」

そう、私もそう思っていた。

「それがね……………巴ちゃん。実はここ、寝室ってこの一部屋しかないんだ」

――一瞬、場に緊張が走った。

「……………こんなに広いのに？」

「私も冗談だと思ったんだけど……………」

事実として寝室は私達のいるこの一室しか存在しない。これだけ充実した設備があるコテージは、その実、五人で使用されることしか想定していなかったとは思わなかった。

「ラウンジにもいないねー」

「デツキにもいなかったよ」

全員総出で搜索をする。

大きい施設とはいえ、隠れる場所は限られている。つまり、ここまで来ると――

「まさか、カズさん。私達に気を遣って、自分だけ車の中で寝ようとしているんじゃない！」

「……………それ、和那だったらあり得るね」

「あのバカ……………」

誰もそんな気遣いは求めていないと言うのに、確かにお兄ちゃんなら自発的にそんな行動を取ってもおかしくはない。

私達はコテージを飛び出した。

皆で手分けしてお兄ちゃんを探しに行こう。

そう口にしようとした矢先。

「お前たち、何を急いでいる」

「え」

――件の探し人が、既に玄関前にいた。

「え、ちよ、えええええええ！」

偶々、先頭にいたひまりちゃんが、勢い余って転びそうになる。その肩を受け止めたのはお兄ちゃんだった。

「慌ただしいぞ、ひまり。頭を打ったらどうする」

「す、すみません……………えへへ……………」

お兄ちゃんは呆れながら上体を優しく起こしてあげる。

ぐるぐると目を回しているひまりちゃんの頬が緩んでいたことは気になるけど、それよりも優先して聞かないといけないことがあった。

「で、和那はこんな夜中に何してんの？」

蘭ちゃんが、皆の疑問を代弁してくれた。

暗くてよく見えないけど、お兄ちゃんの手には汚れた軍手をつけている。大方、さつきまで倉庫の整理をしていたんだとは思った。玄関前にいるのは、ちょうど作業を終えたころなんだろう。

せっかくシャワー浴びた後にそんなことをするのだろうと思っていたところ、お兄ちゃんは腕を掲げて淡々と告げた。

「空を眺めていた」

「空？なん——」

空を見上げると、言葉を途切れてしまった。

その光景に、一瞬で引き込まれてしまったからだ。

「——きれいな——」

それは誰から出た言葉なのかわからない。

けれど、そんなことは気にしていられないほどに、私はこの満天の星に心を奪われてしまっていた。

「そうだ！デッキの方がもつと見やすいかも！」

「あそこの階段から直接いけるぞ。足元には気をつけるがいい」「はい——」

暗くて、足元は見えづらいけど、一段ずつしっかり踏みしめて木造の階段を駆けのぼっていく。



門扉を開けてさつきまでバーベキューをしたデッキにたどり着く。

「……………お〜」

「……………これは」

視界の一面に、数え切れないほどの星が瞬いていた。

降るような星、とはまさにこの夜空を指すのか。自分たちのライブで眺める観客席とは比べ物にならないほどに星々は強い輝きを放っている。

それだけではない。空から少しだけ視線を落とすと、暗闇にもかかわらず、山々の隙間から蠟燭の火のような灯りがぼんやりと見える。おそらくは街の明かりだろうが、とても人工的な光とは思えないほどに儂く、それでいて確かに輝いていた。

まだ夜になったばかりのはずが、既に夜明けの時間になってしまったような、そんな錯覚を覚えてしまうほどに、幻想的な光景を目の当たりにしていた。

「ははは！…これすごいな！…なんでこんなの気づかなかったんだ、アタシたち！」

「もう、バー！…雰囲気か台無し！」

「あ、悪い……………って、そもそもそんなムードできてなかっただろ！」

「あはは……………でも、私も巴ちゃんの気持ちわかるよ」

ここまでの絶景を、なぜ私達は誰も気が付かなかったのか。その疑問に答えようと口を開いたのは、意外にもお兄ちゃんだった。

「空を見上げる習慣がなくなっただからかもしれないな」

毎日が忙しいと、こうして立ち止まって空を見ることすらできなくなる。それが続くと、いつしか空に星が輝いていることすら忘れてしまうのだろうか。

……そう言いたいんだろうけど、また伝えたいことを途中で区切っていた。みんな『そうかもしれない』って納得している顔をしているけど、多分伝わっていない。

「あ、そういうえば……」

いつも通りフォローしようかと迷ったとき、ふと思い出した。

私の特技………と言うほどでもないけど、習慣的にやっていた一番星探し。皆との帰り道になんとなくやっていたそれを、最近は無沙汰だったことを。意識的にやっているわけではないけど、こうしてやらなかった理由について考えてみると疑問が残る。

「日々の忙しさがそうさせてしまう。たまには意識的に立ち止まって、空を見上げてみるといい。大袈裟かもしれないが、自分を見つめ直すいい機会になるかもしれないぞ。その繰り返しこそが、些細なすれ違いを無くすことに繋がるはずだ」

「んー？よくわかんないけど、カズくんに言われたくないかな」

「うん。多分、この中で一番説得力ないから」  
「む」

日頃からすれ違いを起こしている張本人からの言葉でも、今の私には腑に落ちるものだった。

忙しかった——確かにその言葉で片が付く。

けれど、こうして空を見上げなければ、そんなことすら気づかずに辞めてしまっていたのかもしれない。

自覚のないまま、自分の中の何かが変わってしまいそうになったことに、ほんの少しだけ不安になった。

「ひまりはこれをわかった上で、今回の旅行を持ち出したのだろう。さすがはリーダーだな」

「うえっ!?ま、まあ、まとめ役としては、こういうことを率先してで

きないと務まらないですよねっ！無意識ですけど」

「確かになー……って、無意識かよー！」

「そういう気負わないところも、リーダーに必要な資質だな。あとは抱え込まないようになれば充分に立派と言えるのだがな」

「は、はい。頑張ります……」

……ああ、また最後まで伝えていない。

今のは、『お前は充分やってくれているが、悩みなどは俺を含めた周りの人間に打ち明けてくれ。その時は全力で力になろう』って言葉が後に続くはずなのに。

「……いや、別にひまりが力不足とは誰も思っていない。そこだけは勘違いしないでほしい」

「へ？あ、ありがとうございますー！」

……続いた。

……………続いてしまった。

褒められたと思つて喜ぶひまりちゃんと、褒めたつもりと思つているお兄ちゃん。

皆は噛み合っているようで噛み合っていないような印象を受けているみたいだけど、二人の伝え方と受け取り方は合致していた。

そして、今のやり取りでお兄ちゃんも変わつていつていることを再確認した。

さつきの一番星の件と同じような——いや、それ以上の不安が押し寄せていった。

「——っ」

成長を喜ぶべきはずなのに、どうしてお兄ちゃんに置いて行かれた、なんて考えてしまうのだろう。

こんなの、お兄ちゃんにとっては理不尽極まりない感情なのに——

「……………さて、名残惜しいかもしれないが、そろそろ中に戻ることを進言する。春とはいえ、夜は冷えるからな」

そんな堂々巡りの思考に陥る前に、ほのかな温もりを頭の上を感じる。

お兄ちゃんに頭を撫でられていることには一瞬で気がついた。

皆の前では恥ずかしいことこの上ないけど、皆はお構いなしにコテージの中に戻っていく。気づかれていないようでほっとした。

……………それにしても、こんな風に撫でられるのは何時ぶりだろう。

確か、中学の卒業式以来だったか。それとも、ガルジヤムの一件で入院してしまった時以来だったか。そう考えると、最近はご無沙汰だった気がする。無理にとは言わないけど、妹としては、兄はもう少し妹へのスキンシップを増やすべきなのではないか。

ぼーっ、とそんなことを考えていた時だった。

「あっ」

空に一瞬の輝きが目に入った。

全くの偶然——でも、それを見た瞬間の私の行動は早かった。

普段、生徒会で慌ただしく動いているせいか、瞬発力が身についたようだ。

「……………む。どうした、つぐみ」

「えへへっ、なんでもないー!」

頭の上に置いてあった手を取り、両手で握りながら皆が向かった方

向に歩き出す。

——ああ、そうだった。

変わることを怖がっていたら何も始まらないことは、ガルジヤムの時に十分に学んだじゃないか。

正直、あの気持ちの向き合い方は、まだわからない。またいつか、ふとした時に感じてしまうかもしれない。

けれど、心配はない。今は受け入れる勇気を分けてもらえている。

——この手に感じる、日の光のような変わらない温もりがあるかぎり、私はもつともつと頑張ることができるのだから。

ふと、突然ひまりちゃんがこちらを振り向いた。

「あれ？　そういえば、カズさんは外で何をしてたんですか？」

「今日の寢床を探していた」

「……………あつ！」

寢床——それを聞いて、当初の目的を思い出した。

倉庫の整理ではなく、寢床を探していた。つまり、お兄ちゃんも寢室が一部屋しかないことに気づいていたと言うことだ。

「……………おい、カズ。まさか、車の中で寝るなんて言わないよな？」

「何を言っている。そんなわけがないだろう」

「だ、だよなー！焦って損したな、全く！」

巴ちゃんの安堵に、皆もつられて安心する。

お兄ちゃんも、全くだ、と言いながら安心した様子で言葉を続けた。

「それにしても、すぐにダンボールが見つかって良かった。ここまで大きいものに巡り会えるとは、やはり俺は幸運だな。これさえあれば、ここで寝ても風邪を引かずに済みそうだ」

——瞬間、場が凍りついた。

……………何かの聞き間違いかな、と再確認を兼ねて質問する。

「お、お兄ちゃん。今、どこで寝るって？」

「む、ここだが？」

本当に聞き間違いであって欲しかった。

……ああ、確かに車では寝ないことに偽りは無い。だけど、実際はデッキでダンボールに包まって一夜を過ごそうとしていたのだ。

私を含め、皆はお兄ちゃんの斜め上すぎる発想を加味するべきだった。

誰も何も言わず、皆が散り散りになってお兄ちゃんを囲む。

以心伝心とはこのことなのか、言葉にしなくても、皆の意志は統一されていた。

「……………みんな、全力で行くよ」

「蘭ちゃん！もう片手は塞いでいるからね！」

「何を言っている——む、つぐみ。痛くないが、強く握りすぎではないか？」

私の握力の無さは関係ないとして、これで逃げ場はない。

まさに、年貢の納め時——そんな時、ふと、お兄ちゃんの口角が少しだけ釣り上がった。

どうやら、私達がこんなことをしている理由について合点がいったらしい。

なら、ここからは単純なことだ。

ここで『すまん。聞かなかったことにしてくれ』と言えば丸く収まるだけの話——

「ああ、安心しろ。自慢ではないが、俺は野宿が得意だ」  
「有罪」  
ギルティ

——ああ、お星様。

不躰ですが、お願いがあります。

我が兄の天然思考を、少しでも改善させてください。



一日目は夜通し慌ただしかったが、二日目は緩やかな時間を過ごした。

どうやらスタジオで練習する案もあったらしいが、新曲のインスピレーションを得る、と言う建前で遊び倒した。

旅の終わりは、いつも一抹の寂しさが残るものだ。

「呑気なものだな」

茜色の空の下、車の中は至って静かだった。

遊び疲れた五人はすっかりと寝息を立てていた。

五人中四人が寝不足の状態だったのだから、帰り道はこうなってしまふことは想定していた。

理由は、一日目の夜の寝室に俺がいたためだ。

天体観測の後、五人がかりで抑え込まれてしまった俺は寝室へと引きずり込まれてしまった。俺もソファや床、そして徹夜と交渉をしたが受け入れてもらえず、つぐみと同じベッドで寝ることになった。

結果、落ち着いて寝られなくなった四人は寝不足になったわけだ。

……………全く、自分たちが寝られなくなれば本末転倒だろうに。一名、寝不足になっていない者もいるが、それは置いておこう。

「ハロハピ、か」

偶々、車のラジオから聞こえる音楽に耳を傾ける。メジャーデビューしていないガールズバンドを取り上げたその番組で、件のバンドの曲が流れていた。確か、「えがおのオーケストラっ」だったか。

Afterglowとは別の方向性だが、芯のようなものを感じる音楽——そんな所感を抱いた。

彼女たちはどのような信念で音楽に青春を捧げているのだろうか。

「なるほど、確かに俺と近いのかもしれない」

「……………ふえ？おにいちゃん？なーに？」

「気にするな。起こして悪かった」

「そんなこと……………な……………すう」

つぐみが微睡みにいる中、俺達の車はトンネルに入る。

ラジオのノイズで寝ている者を起こしてしまわないためにも、ハンドルを片手にボリュームをゼロにして、改めて運転に集中することにした。



## 幕間 成長に乾杯

「ふいー、やっと一息つけたぜ……」

「今日もみっちりやったよねー。ゴールデンウィークのキャンプが遠い昔のよう……」

ドン、と羽沢珈琲店の床に重々しい物が置かれる音が響く。

ギター、ベース、キーボード……バンド活動を続け、この重さは慣れたとは言え、練習で疲れた後の楽器の持ち運びは中々に堪える。

「だいぶ遊んだからね。遅れた分、取り戻さない」と

「それ、先月からずっと言ってるよねー。まあ、楽しいからいいけどっ」

「みんな、ちよつと待っててね。今コーヒー淹れてくるから」

「おう、練習後もツグってるね」

モカちゃんがそう思うんなら、きっとそうなんだろうな……あ、今のお兄ちゃんみたいだったかな。

そんなことを考えながら、五人分のコーヒーを淹れる準備を続ける。

「あれ、和那は？」

「お兄ちゃんなら今日はお出かけしているよ？夜遅くまで戻ってこないみたい」

「そっかー、カズさんいないんだ……」

「まあ、そういう時もあるよな」

いつもなら『今日も精が出るな』なんて言いながら労ってくれるはずだけど、生憎なことに今日は不在にしていた。

巴ちゃんの言うとおり、いくらお兄ちゃんでもない時だってある。偶々、それが今日だっただけの話だ。

「こんな時間まで出かけるとな、むむむ」

「モカ？」

ただ、モカちゃんが腕を組んで思案していた。

確かにお兄ちゃんにしては珍しいかもしれない。けれど、そんなに違和感を感じるものなのかとも思う。

ドリツパーにお湯を淹れる最中——ふと、モカちゃんの方からこんな呟きが聞こえた。

「女の臭いがしますなー」

……………フィルターからコーヒーの雫が落ちる音が、やけに大きく聞こえた。

全員の視線がモカちゃんに突き刺さる。その後の皆の反応はそれぞれだった。

「うっ……………ぐすっ……………」

「いや、待て待て待て!? 突然泣くなよ、ひまり!?いつものモカジョークだつて!」

「何それ。意味わかんない。つまんない。笑えないから」

「蘭も怖えよ!なんで矛先をアタシに向けるんだよ!こっちが意味わかんねえよ!」

「……………あつ、ご、ごめん、巴」

モカちゃんが投じた言葉はまさに起爆剤だったようで、場が一層混沌とする。

巴ちゃんが一身にとぼちりを受けている。あらかじめ、どこの誰に会いに行くのか聞いている身としては、私も言葉が足りなかったかな、と反省する。

「まあ、それはそれとしてー……つぐー、カズくんが会いにいったのつて、あの人でしよー?」

「そうだよー」

モカちゃんも見当はついていたようだ。

敢えて名前は伏せているけど、認識の違いはないと思うので、私もそれに肯定する。

「……………あー、アタシもわかったわ。ひまりも大体想像つくだろ?」

「————あつ!あーあーあー!なるほどー!なら大丈夫だね!良かったー……………」

「え?誰?」

巴ちゃんもひまりちゃんも察したようだった。意外なことに、蘭ちゃんは気づいていないようで、私達の顔を交互に見ていた。

「しつかし、カズもよく付き合うよなー……………いや、いつも世話になっている身として失礼なのはわかってるけど、アタシだったらちよつとキツイぞ」

「うっそー!?!巴がそこまで言うなんて意外!」

「あ、いや、苦手とかじゃないぞ!ただ、二人で対面するつてなると尻込みしちゃうよなー、つてただだからなー……………そう言えば、あの二人つて何で仲良いんだろうな?」

「うーん……………似た者同士だからなんじゃないかな?」

「あつ、それわかるかも!」

「ねえ、ちよつと……………」

似た者同士、似た者同士……………心中で繰り返してみるけど、いまいちピンとこない。

ひまりちゃんやモカちゃんにはそう見えているらしいけど、妹としては普段の雰囲気くらいしか似ていないと思う。

言葉で上手く表現できそうにないので、この場では黙っておくことにした。

そんなことを思っていたら、既に目の前には五人分のコーヒーが出来上がっていた。ここに帰る前にファミレスで夕飯は済ませてきたけど、少し口の寂しさを埋めるようなものはないか、冷蔵庫の中を確認する。

——と、ちょうど目に入りやすい位置に、ぽつんと銀色のトレイが置いてあった。

「あ、みんな、プリン食べる？お兄ちゃんが作り置きしてくれたみたいだよー！」

「おつ、ラッキー！食べる食べる！」

「やたっ！さっすがカズさん！」

「……………このプリンを食べてしまったことをあんなに後悔することになるなんて、この時のひーちゃんは思いもしなかったのであった」

「モカ！そんなこと言って、私からカズプリンを取ろうとしたって無駄だからね！」

「えー、ケチー」

相変わらず好評なお兄ちゃん手製スイーツ。

「カズプリン」って呼称はさておき……………こうして喜ばれると私も誇らしい気持ちになる。『食べるといい』なんて簡単すぎる書き置きを傍目にプリンを取り出し、コーヒーとともにみんなのもとへと運びに行くことにした。

「なんであたし蚊帳の外になってるの？」

「甘いもの苦手な蘭の代わりに、あたしが代わりに食べてあげるー」

「……………いい、あたしも食べる」

「……………ほーん」

「何、その顔。てか、結局和那が会いに行った人って誰なの？」

「なーんでもなーい。お口チャックー」

蘭ちゃんとモカちゃんがそんなやり取りをしていた。意外にも、まだお兄ちゃんが会いに行つた人に気づいていないみたいだった。

——これぞまさに“灯台下暗し”です！

イヴちゃんだったならそう言いそうだな、なんて考えながら、運んでいたトレイをテーブルに置く。

カチン、と、カップ同士が当たってしまった音が心地良かった。



「お疲れ様、でいいのか」

「あ、ああ」

カチン、と、グラス同士が当たる音が心地良かった。一口分、口に含んだビールから細やかな刺激が全体に広がっていく。

「こんなぎこちない乾杯は初めてだな」

「安心しろ、俺も初めてだ。そもそも、何に乾杯すればいいんだ？」

「……………成長、か？主に君の」

「それはお互い様だろう」

対面に座る男——蘭の父からはそんな戸惑いが見える。眉間の皺が見えないためか、普段よりもどこか柔らかいような印象を覚える。

「まあ何にせよ、久しぶりに一息つけそうだな。来てくれて助かったよ」「恐縮だ。そこまですごい無沙汰だったのか？食事会などいくらでも機会はあるだろうに」

「そうだな。だが、結局は家同士、得意先同士の繋がりにすぎん。気心

の知れた者とのものは別だ」

「そういうものなのか。俺には難しい話だな」

「君はそういうものとは無縁だろうな」

そう言う手に持つグラスの中は既に半分が無くなっていた。なるほど、彼も気苦労が多いことは確かなようだ。

「——しかし、よくもまあこれほどの店を選んだものだ」

溜息を吐きながら、周りを見回す。

俺達のいる空間を切り取るように障子が設けられ、宴会の笑い声は聞こえず、遙か遠くに人の気配が少しばかり感じるばかり。

背後には腰の高さまで格子状の背もたれが位置する座椅子が、目の前には存在感のある漆塗りの座卓が鎮座していた。この部屋に案内される最中にも、何やら水音と竹筒が固いものに当たったような、風情のある音色はまだ耳に残っている。

「随分と金を持って余す生活を送っているように見える。わざわざこんな場所を確保する必要がどこにあった？」

「言い方に悪意を感じるが……まあ、この際だから白状すると、この店は君の勉強にもなるだろうと思って選んだ。大人の見苦しい背伸びとでも思ってくれ」

「なるほど。その見栄に心より感謝しよう」

「……………自分で言っておいておかしなことだが、せめて気遣いと言ってほしかったな」

彼は彼なりに、俺のことを考えた上でのチョイスだったようだ。これも一つの経験としてありがたく受け取るでしょう。

いただきます  
閑話休題。

「食事は食事として素直に楽しむとして——まだ他にも目的はあ

るだろう。大方予想はつくが」

「……………まあ、君の予想どおりだ」

そもそもの話、一週間ほど前に彼から連絡があつたのがきつかけであつた。例外はあれど、わざわざ俺を呼び出す時など、総じて目的は決まっている。

……………まさかこれほどの格式の料亭に連れて行かれるとは想定外であつたが。

「期待してもらつている手前悪いが、俺はあまり適任とは言えないぞ。それこそ、ひまりや巴の方が正確な情報を得られると思うが」

そう言いながら、中心に位置しているホタテの刺身を口に運ぶ。ちようど旬の時期のためか、心地よい歯ごたえとまろやかな風味が、さらにビールを誘惑させる。

一方、それを聞いた彼は呆れながら目を伏せた。

「逆に聞くと、中年男性が女子高生を呼び出す構図は傍からはどう見える？」

「犯罪だな。通報されても文句は言えまい」

「よし、あとはわかるな？」

完全に理解した。

いくら娘の友人とはいえ、娘を抜きにして同じ空間に呼び出して食事をする構図は警察を呼ばれてもおかしくはない。

性別の違いとは、実に難儀なもの——む。

「ま、待て。実は俺もアウトなのか？」

背筋が凍るような感覚を覚えた。

従妹の友人、幼馴染とは言え、傍からは成人男性と女子高生。年齢

的には大学生にはあたるが、事実関係で言えば、目の前にいる男とそう大差ないのである——？

「……………なんかというか、もし君が聴取でもされてしまったら、冤罪でも認めてしまいそうで怖いぞ。周りが理解のある人たちで助かっているようだが、遠出したときは気をつけることだ」

「……………否定、できそうにない。忠告はありがたく受け取ろう」

……………ここまで動揺したのはいつ以来だったか。

別に俺がどんなレッテルを貼られようが、言わせたい者には言わせればいい。しかし、従妹や叔父叔母、そして幼馴染をはじめとした周りの人間が害を被る可能性があるなら話は別だ。

今後、距離感については見直すべき時なのかもしれないが、優先順位としては彼の相談が上だ。今はそれを解決させるとしよう。

「さて、本題に戻るか。とは言っても、学校内のことは俺にはわからないところではあるが」

「構わない。君から見聞きしたことをありのまま教えてくれ」

「承知した。さて、どこから話したものか」

人一倍口下手な俺としては正確なことを伝えられているかどうか不安だが、精一杯努めさせてもらうとしよう。

さて、どこから話したものか……………とりあえず、ひとつの転換点であったガルジヤムの時から話すとしてしよう。彼も当事者のひとりであったが、あの一件は他の要因も複雑に絡んでいた。それを含めて、俺の方から振り返ってみよう。

また、苦しいこともあったが、それ以上に楽しかったことがある。この間のキャンプの一件もあるが、最近は別のバンドで活動している先輩たちと校内清掃をやった、なんて話も聞いた。

学園でも、幼馴染以外の居場所もできつつあることを言うと、目の前の彼は「そうか」と軽い返事をした。



……………緩みそうになる頬を酒で抑えようと、いつの間にか手にあつたグラスの中身を一気に呷つたのは注意するべきかもしれない。他にも、日常の中であつた些細な出来事を話していくと、もう充分なのか、今度は彼の方から口を開いた。

「大体わかつた。やはりバンド活動はプラスに働いているようだな」  
「ああ、俺も全てを把握しているわけではないが、バンド活動を中心に人間関係も広がっていつているようだ」

「そうか……………」

彼にとってはそれが何より嬉しいようだ。

……………そう言えば、昔——Afterglowの結成直前、中学生だつた蘭が授業を休みがちになつた時期、彼にも相談が行っていたことを思い出した。父親として、そういった集団の中で居場所がないことはかなり心配していたのかもしれない。

やがて、いよいよ酒と肴しか残りが無くなつた——そんな時、目の前からわざとらしい咳払いが聞こえた。

「さて、単刀直入に聞こう。君にとって、蘭はどんな存在だ？」  
「む」

蘭の父が、先ほどよりも真剣な顔つきでそんな質問が飛び出てきた。

「どうもなにも、従妹いもうとの古くからの親友だ」

「……………それだけか？」

「それ以外に何がある？」

「わかつた。質問を変えよう。君は蘭のことを異性としてどう思っている？」

……………ああ、なるほど。

今日、彼が最も聞きたかったことはこれだったのか。

「おかしなことを聞く。俺は男で、あいつは女。それだけだろう」  
「……………もつとこう、ないのか？意識してしまうとか、そんなものは」  
「貴方はさつき自分が口にした言葉すら覚えていないのか？」

普段の彼からは考えられないような失態だ。

顔を見ると、一杯目のビールを飲んだときよりも目が据わっている。いつの間にか脇に置かれた空の徳利の数々を見るかぎり、俺が必死に口を動かしている間にも、随分と進んでいたことはわかる。

俺の返答を受け、今度は頭を抱える蘭の父。

頭を抱えたいのはこちらも同じなのだが、彼は構わず口を開く。

「蘭より君のほうが心配になってきた。さすがに無欲すぎではないか？」  
「そうなのか……………」

無欲……………無欲か。

彼がそう思うならそうなのかもしれないが、一応、俺から弁明させてもらおうとしよう。

「まあ、俺とて一応男だ。人並みには欲求はある方だろう」

「どの口が言う。君が人並みなら、君以外の同年代はチンパンジーか何かになってしまっぞ」

「待て、チンパンジーは相当頭が良いぞ。蔑称として使うならば他を当たれ」

「そんなことはどうでもいい」

性欲の象徴として扱われるチンパンジーの立場を思うとどうでも良くはないが……………今は俺の話をしている以上、確かに後回しにするべきか。

一先ず、おそらく足りなかったであろう言葉を付け足すことを先決とした。

「欲求はある——が、俺はあの五人が小学生の時から知っている。そんな俺が、今更そんな目で見ることができると思うか？」

「……………君の気持ちが変わった気がする」

「それは何よりだ」

当然だろう。

俺はランドセルを背負っている時から、あの四人との友人関係を続けている。今、高校生になったからとは言え、気を遣うことはあれど、根本的なものが変わるわけでもないだろう。

「まあ、あちらにとってはそんなもの関係ないだろう」

だが、そんな俺に忠告が投げかけられる。

「むしろ、そう言った障害が大きければ大きいほど燃え上がるものだ。気を抜いていると、いつの間にか逃げ場がない状態になってしまうぞ？」

「そうか、現時点で困ってきている本人の言葉は重みが違うな。忠告、ありがたく受け取るとしよう」

「——ほッ!?!」

礼を言葉にした途端、蘭の父は口に含んだ日本酒が溢れる。

……………彼には申し訳ないが、魂胆は既に見抜いてしまっていた。

「理解した上で、付き合いを続けている俺が口にするのもおかしいが……………人生に大きな影響を与える事柄に関わる以上、相応のリスクが伴うことは決して忘れない方がいい。たとえ、他人の家であっても

——いや、他人の家が関わる以上、より一層慎重になるべきだ」

せつかくの酒の席だ。

口にするまでもないかもしれないが、全て吐き出すとしよう。

「別に、貴方の行為が悪いとは言わん。親としては子の将来を心配なのは納得できる。やりたければ好きにするがいい。もともと、娘に知られた結果、あの関係に逆戻りしたのであれば、の話ではあるが」  
「……………本当に、そういうところだぞ」

「すまない。こればかりは生来のものだ。悪く思ってくれて構わない」

「全くだ。本当に末恐ろしい」

どうやら俺の言葉で頭が冷えたようで、表情に再び落ち着きが見られるようになった。

しかし、彼としてはまだ腑に落ちない点があるようだ。

「では、君の意思はどうなんだ？蘭たちにかぎらず、そう言った浮いた話はなかったのか？」

「その期待には応えられそうにない。さつきも言ったが、それなりに興味はあるが、それよりも優先されるべきことがあるだけだ」

「優先されるべきこと、か」

「ああ」

これこそ、今更口にするまでもないことだろう。

「従妹が立派になるまで、俺は従妹と、その周りの人間を支え続ける。それだけだ」

もし、従妹の行く道が暗闇に包まれているのであれば、俺はその先を照らす明かりになる。

いつか、従妹がその明かりを必要しなくなるその瞬間まで、そんな

“いつも通り”を貫き通す。それが。あの家に引き取られた俺にとって、何よりも優先するべき使命であり、果たして当然の義務なのだから。

……現状、支えるべきはずの者たちに支えられている事実は棚に上げさせてもらおう。徐々にはあるが、これでも成長の兆しは実感しているので、そこは大目に見てほしい。

改めて、蘭の父に目を向ける。

先ほどの腑に落ちないような顔とはうって変わり、納得したように頷いていた。

……しかし、気のせいだろうか。俺にはどこか、決して俺に向けるべきではない感情が含まれているように感じた。

「どうした？また何か一言足りなかったか？」

「君も筋金入りだと思っただけだ。もはや兄と言うよりは父親だな」

「ほう。つまり、この食事は『パパ会』になるわけだな」

「……………君から『パパ』なんて言葉が出るとはな」

似合わない自覚はある……………が、良い響きだ。

気持ち程度に団結力が強まったような感覚がある。ひまりがよく「女子会」と言う単語を使う理由がわかる気がした。

それはそれとして――

「父親、か」

「何だ？気に障ったのか？」

「いや、もし俺の父が貴方だったなら、なんて考えただけだ。父親のいない人間の、くだらない妄想と思って忘れてくれ」

「君にまだ『お父さん』なんて呼ばれる筋合いはない。あと二年と少し待ってから言いなさい」

「そうか、酒が進んでいて何よりだ」

腕時計に目を向ける。思ったより話し込んでしまったようだ。

彼も多忙な身だ。明日も用事があるだろう。ここで開きにした  
ほうがお互いに利点があると思いい、先ほど貫禄のある女将らしき女性  
が置いていった黒塗りのバインダーを開く。

「……………そうか」

「ああ、会計のことなら気にするな。カードを切る」

「すまない。本当に、すまない」

この日、最も勉強になったことを語らせてもらおう。

父親とは責任が纏わり付くが、一方で相応の力が伴うもの。その偉  
大さと、己の未熟さを実感した。

————— これからの成長にも、乾杯しておこう。

誓いと景気づけを兼ねて、いつの間にか手元にあつたお猪口の中身  
を一気に呷った。

## 12話 余計な一言

同じバンドであれ、メンバーには各々予定と言うものがある。たとえ、五人揃わない場合でも自主的な練習は欠かすことはできない。

特に、アイドルとして仕事をしているPastel\*Paletteではそれが顕著かもしれない。活躍して有名になっていくごとに個人の仕事が増え、さらに学生として勉強にも励まないといけないことを考慮すると、必然的に練習時間は削られていく。かと言って、パフォーマンスのレベルは有名になっていくにつれて、より高いものが求められる。ままならないかもしれないが、それだけ期待されている証拠と考えると、割り切るしかないところである。

だからこそ、忙しいスケジュールの中で捻出できた、今の自主練の時間は貴重なものだけだ——

「彩ちゃん、また話を勝手に省略しているわよ。それじゃあお客さんに伝わらないわ」

「ご、ごめん」

例によって、私——白鷺千聖は彩ちゃんのMCの練習に付き合っていた。既存曲は何度も演奏しているため完成度は十分に高いレベルに仕上がっている。なので、普段は簡単な音合わせか、こうして彩ちゃんのMCの練習に力を入れている。

演奏する曲は同じでも、MCで原則話す内容は繰り返さないもの。アドリブの弱い彩ちゃんは、こういった練習を積まないといけない。

「その話の展開だと、せっかく遊園地で面白いことがあったって話をしているのに、『行ったことないのに面白いって言っている』ように伝わっちゃうわ」

「そ、そうだよ。本当に行ったとしても、行ってないかのようには聞こえちゃうと意味ないもんね」

「ええ、薄っぺらい感想に聞こえちゃうのよ。じゃあ、もう一度話の構

成から見直しでしょうか」

同じ話を何度も聞かされるのは苦痛だけど、これもパスパレと彩ちゃんのため。回数をこなす毎に改善されていくけれど、普段の会話でできることが何でMCだとできなくなるのか疑問に思う。

……私の前だと身構えてしまうから、かしら？

……少し複雑だけど、それで本番前にいい練習ができると考えれば良いかもしれないわね。

そして、ようやく形になつてきた時に、こんな能天気な声が降りかかってきた。

「千聖ちゃん。今日って、この後オフだよね？」

こんな切り出し方をする彩ちゃんは大抵妙なクセが出ている時なので、返事をするのがほんの少しだけ気が重い。

「ええ、今日はこれで終わりだけど……」

「そっか！で、千聖ちゃんって、よくあそこ行くんだよね。あの商店街の喫茶店」

「そうね。それがどうかしたの？」

思い浮かぶのはつくみちゃんのお店。

最近仕事が増えてきているせいであまり通えてないが、そろそろ今度のオフに花音と行こうかな、とは思っていた。

「じゃじゃーんー！」

そんなファンファーレとともに私の目の前に突き出されるスマホの画面。

彩ちゃん御用達のSNSのページに写ったものを見て、思わず目を見開いてしまった。



「羽沢珈琲店、和菓子道？」

「なんか、この期間だけスイーツのメニューが全て和菓子になるみたいだよ！期間限定のものもあるって！」

「……多分、イヴちゃんの発案ね」

敢えて「道」と言う言葉を使っている点や、最近現場に手作りの和菓子を持つてくるようになった点から考えるに間違いない。けれど、メニュー全てを和菓子に変えるなんて、大胆な改革をするとは予想外だった。

「じー……………」

ここまで言われた上に、この物欲しそうな視線が組み合わされたなら、誰でも彩ちゃんの主張はわかるはず。

繰り返すけど、最近のPastel\*Palettesは個人の活動も増えてきた。つまり、五人全員で集まるのが減ってきていることを意味している。現に、今いる練習スタジオには私と彩ちゃんしかない。

加えて、私も新しい舞台の出演が決まっている。まだ稽古は始まっていないけど、これからさらに忙しくなるのは確実だ。  
ふう、と一息ついてから返事をする。

「ちょうどキリもいいし、今から行きましようか」  
「うんっ！」

ぱあつ、と彩ちゃんの笑顔が花開いた。

本来なら、限られた貴重な練習時間だからこそ、ギリギリまで有効に使うべきはず。

けれど、Pastel\*Palettesといる時間を大切にして  
おきたい——ふと、そんな気がしたから頷いた。

……なんて、彩ちゃんと二人きりの場で口にするのは柄じやないから、あの店の限定和菓子メニューに惹かれた、つてことにしましょう。

後片付けをしながら、そう誤魔化すことを決めた。



「こんにちはー!」

扉を開けると、見慣れたはずの喫茶店が一変していた。

並べられていたはずのテーブルと椅子は初めからなかったかのよう<sup>う</sup>に姿を消していた。代わりに畳と座卓、そして衝立が空間を彩り、擬似的な個室の座敷が出来上がっていた。

さらに周りを見てみれば生花や和傘、提灯、エトセトラエトセトラ……それらが和の雰囲気を引き立たすように配置されていた。

「あつ、アヤさん・チサトさんー!らっしやーい!」

変わり果てた内装に度肝を抜かれる中、小走りで近づいてきたのはイヴちゃん。今日、このアルバイトがあったのは前もって聞いていたため驚きはしなかった、けど……

「自主練、お疲れ様ですつ!今、座布団用意しますね!」

「イヴちゃんも、バイトお疲れ様。今日は袴なのね。似合っているわよ」

「ふふつ、ありがとうございます!」

イヴちゃんは自慢するように身に纏っている紺色の袴を翻す。着物の柄に注目すると、どこか西洋風な絵柄が目立つ。さらにはブーツの組み合わせからはどこか大正ロマン的な出立ちに見える。戦国や

江戸の後の時代になり、武士がいなくなつてしばらく後の時代のものであるはずだけど、本人の表情は非常に嬉しそうだ。

「では、こちらにお座りくださいー!」

案内された席の座布団に正座する。

普段よりも低い目線で店内を眺めるのは思ったよりも新鮮だった。

彩ちゃんも私と似たような気持ちなのか、キョロキョロとあたりを見回しながら、はえー、と感嘆していた。

「随分と模様替えしたねー。この畳とか全部用意したの?」

「はい! 大変でしたけど、カズナさんが手伝ってくれました! 感謝感激、雨、嵐です!」

「いやいや! それ、私達の大先輩の曲だよ!」

………本当に、こんな返しが本番でできれば文句はないのに、と、残念に思っていた。そんな時であった。

「あ、和那さーん! こっちこっち!」

彩ちゃんが席の横を通りかかった、長身の人物を呼び止めた。

銀色の前髪の間隙から私達を見下ろす彼の容貌も、普段のエプロン姿とは異なっていた。

「呼んだか」

「あれ、和那さんは和服じゃないんですか?」

「和服だろう。この法被が見えないわけでもあるまい」

腕を広げ、着ている法被を見せる彼。

法被を着ること自体はいいとして……問題はそのデザインだった。柄の派手さは別にいいとして、よりにもよつてなぜ「ハッピー」と

いう文字が刻まれているのか。本人はそんなくだらしない洒落をきかせた自覚はないとは思うけど……大真面目にそんなものを着られたら、あまり思い出したくない顔を連想してしまいそうではないか。

「もー、それじゃあお祭りじゃないですか。ここはイヴちゃんを見習って、もっとおしやれた方がいいですよ、絶対!」

「似合わないのは自覚している。年中お祭り騒ぎをしているお前の方が上手く着こなせるのだろうか」

「ね、年中お祭り騒ぎ!?それってどういう意味ですか!もー!」  
「言葉通りの意味だ」

ふんすこと怒る彩ちゃんと、対称的に無表情な彼。

……私としては、かなり驚いている。まさか、彩ちゃんがこの人と自ら会話するほど知り合っているとは思っていなかったから。

ふと、こちらにも目があった。  
すかさず姿勢を正し、彼に体を向ける。

「ご無沙汰しています」

「ああ、世話になっている」

「あ、やっぱり千聖ちゃんのことわかります?」

「顔は覚えているが、こうして面と向かうのは初めてか。これからもよろしく頼む」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

膝を折り、会釈してきたので、無心のままお辞儀をする。その一連の動作があった後、彼が手に持っていた冊子を私達に差し出した。

「では、これがメニューだ。イヴ、あとは任せる」

「御意、です!」

そう言い残し、彼は足早に去っていく。

その背中からすぐに目を逸し、受け取ったメニュー表を開く。

「あ、見て見て！千聖ちゃん！メニューまで和風だよ！」

「ええ、しかも手書きね。筆跡からしてイヴちゃんのものかしら？」

「えへへ！頑張りました！」

「じゃあ……私は、黒糖ロールケーキとグリーンティーのアイスのひとつ」

「ええと、宇治金時パフェとアイス抹茶ラテをお願いします！」

「押忍！カズナさん、注文入りました！」

紺色の和服を翻して席を離れるイヴちゃんの背中を見送る。

彩ちゃんはパフェを頼んだようね。

確かに彩ちゃんのイメージ通りだけど……正直、ここでそれを頼むのはナンセンスと言わざるを得ない。

「イヴちゃん、すごいやる気になってるね」

「そうね」

いや、せっかくの憩いの場でダメ出しするほど私も酔狂ではない。

彩ちゃんもここに通ってから日が浅いのだから仕方ないでしょう。

けれど、声を大にしていいたい自分がいるのも事実だ。ここで頼むべきなのはパフェではない。ケーキ————なかでもロール

ケーキが絶品なのだ。

「あ、そう言えば、なんでイヴちゃんってここで働いているのかな？今日

はまさに日本文化って感じだけど、普段はイヴちゃんとあまり関わりがないような気がするよね」

「そう言えばそうね」

喫茶店では普通のケーキやパンケーキが主流かもしれないけど、この店はロールケーキに強いこだわりがある。生地は食べ応えのある

厚いものから、スプーンで掬って食べなければ簡単に崩れてしまうくらいふわふわで繊細な生地まで、その時勢ごとの流行を的確に抑えてくる。生クリームの儂……こほん、あっさりとしながら余韻に浸れる甘さは、老若男女あらゆる年齢層を容赦なく唸らせる。一度口にすれば、裏で何度も試行錯誤し、血の滲むような努力の結果に得た製法であることを、比喩なしに追体験させられる……そんな熱意が伝わる一品だった。初めて食べた時の衝撃は今でも鮮明に思い出せる。

「あれ、千聖ちゃん？どうしたの？」

時には、期間限定として新しいロールケーキが出ることもある。ポピュラーなものと言えば、去年のクリスマススのブッシュ・ド・ノエルかしら。店頭で売り出されたものを仕事帰りに持ち帰って、家族で食べたことがある。

あれは甘さが控えめな紅茶やコーヒーとの相乗効果を生み出すために、敢えて甘さが口に残るように意図して作られたのだと瞬時に理解できた。あの発想には私も脱帽してしまった。悔いがあるとしたら、それを花音と分かち合うことができなかつたことくらいかしら……

さて、新作の黒糖はどのようなものなのか。おそらく、緑茶との組み合わせを狙ったものだと推察され――

「千聖ちゃん！ちーさーとーちゃん！」

「えっ」

「あつ、やっと反応してくれた！もー！私の話聞いてた!？」

ふと、口をへの字にした彩ちゃんが視界に飛び込んできた。

いけないいけない。特段優先順位の<sup>比較的</sup>高くない話だったので、つい思考に没頭しすぎたみたい。

「もしかして疲れてた？大丈夫？」

「あ、ごめんなさい、彩ちゃん。体調が悪いとかじゃないから」  
「ほんと？無理してない？」

……………思っているほど心配をかけさせてしまったようで、恐る恐ると言ったように尋ねてくる彩ちゃんに、少しばかり罪悪感に襲われた。

誘われた側として、この態度は悪手だったと反省する。

「ええ、それは本当よ。無理なんかしてないわ」

「……………それは？」

……………あら？

私、何か変なこと言ったかしら？

首を傾げながら彩ちゃんの方をみると、何やらわかりやすいくらいにあくどい表情を浮かべていた。

「千聖ちゃん。あんまりここで隠し事はやめておいた方がいいよー？  
ほら、あの人に見つかって暴露されるより、自分から話した方が楽になれるよー？」

「ふむ、珍しく自分が優位に立てる場と理解した途端に攻勢に出るとはな。ここまでのわかりやすい身の振り方、見ている側としてはいっそ清々しい気持ちになるな」

「ど、どえええええ!!」

「!」

どたどたと崩れ落ちる彩ちゃんと、反対に背筋が伸びる私。

声が聞こえた方向を見上げると、満面の笑みを浮かべるイヴちゃんと奇怪な法被を着たあの人。

「さて、注文の黒糖ロールとグリーンティーだ」

「宇治金時パフェにアイス抹茶ラテ、一丁あがりです！」

「あ、ありがとうございます」

単に注文したものを持ってきただけのようだ。

まるで見計らったかのようなタイミング。これには私もつい大袈裟に身構えてしまう。

で、奇声をあげながら腰を抜かした彩ちゃんはどうと――

「み、見てたんですか?」

「生憎、ここは広いわけでもないのな。しかし、自分が大衆の視線を集める存在であるという自覚はないのか? お前が自分の評判を気にしていると同時に、周りもお前の行動を見ているぞ」

「え、エゴサなんてしてませんよっ!」

「……………エゴサ? なんだそれは。新曲か?」

「うっ、そ、それは……………千聖ちゃん」

助けを求める視線に合わすことなく、逸らす形で返答する。

これに関しては私が再三注意していることだ。まだ駆け出しの彩ちゃんには難しいかもしれないけど、改めない方にも非はあるのだから。

視線を逸した先で、少しばかり違和感を覚える。

私が注文したものと彩ちゃんが注文したもの、それに加えてお椀がひとつ、座卓に置かれていた。

器の中を覗き込むと、餡子の海に餅が浮かんでいる。間違いなくこれはぜんざいだった。

「あの、これ」

「知っている。頼んではないものだ」

頼んでいないのは理解した上で、ここに置いた。彼はそう言い切った。



………気は進まないけど、さらに尋ねようと口を開いた時。

「イヴ、俺は外出する。しばらく任せるが、何かあったら叔父に言うといいい」

「あ、ちよつと………」

呼び止める声にも構うことなく立ち去る彼。

もう話すことはない、その背中はそのような空気を纏っていた。

そして、取り残されるぜんざいのお椀。

結局、これはどうすればいいのかしら？

「……………彩ちゃん？」

「……………うう、私、嫌われてるのかな？」

一方、彩ちゃんは打ちのめされていた。

……………まあ、私だけじゃなくて一般の人、よりにもよってあの人に注意されるなんて、落ち込んでしまうのも無理もない。

流星に可哀想なので軽いフォローを入れようとした、その時であった。

「あ、ありがとうございます！お言葉に甘えさせていただきます！」  
「え」

突然、彼の背中に向けてお辞儀をするイヴちゃんがいた。

「アヤさん、羨ましいです。私も、カズナさんに褒められるようにもつと精進します！」

「え」

おもむろに私の隣に座り、そんなことを口にするイヴちゃんがあった。

「……………この状況は何なのかしら？  
目の前のロールケーキどころではなかった。何が、どんな脈絡でこ  
うなったのか、誰か説明して欲しい。」

「……………千聖ちゃん」

「待って、彩ちゃん。私も混乱しているの。ひとつずつ、整理していき  
ましょう」

「お二人とも、頭を抱えてどうしたんですか？」

首を傾げるイヴちゃん。

「さすがモデル。同性から見ても可愛らしい仕草だけど、それはそれ  
として質問することとした。」

「……………イヴちゃん？あの人と事前に打ち合わせでもしたの？」

「打ち合わせ？何の事ですか？」

「……………この冷やしゼンザイは？」

「これは私のです！せっかくお二人が来てくれているので、私も休憩  
していいと用意してくれました！」

……………おかしいわね。

あの人、そんなこと一言も言っていないような気がするのは私だけ  
かしら？ああ、このロールケーキやパフェを用意している間にそんな  
話をしたのなら辻褄が合う——

「わ、私のことを褒めてたって、ほんと？」

「はい！巷ではアヤさんも有名になってきたからこそ、これからは有  
名人だって自覚した方がいいって、褒めてました！」

「ええ？もしかして、さっきの『生憎ここは』の時？」

「勿論です！」

——はずなのに、どうしてこんなに頭が痛くなるのかし  
ら。

私としてもあの台詞からは注意にしか聞こえない。何をどう解釈すれば褒めていることになるのか、誰か教えてほしい。

「そ、そうかな？ てつきり、珍しく千聖ちゃんをいじれるかなー、なんて思ったのがばれちゃったかと思っただけ、そんなことなかったんだ。えへへ」

「それも多分、カズナさんはわかってましたよ？」

「……………あれ？」

そして、目の前の彩ちゃんが勝手に墓穴を掘っていた。

「……………彩ちゃん？ まだ時間はたつたつぷりあるから、あとでゆっくりお話ししましょう？」

「ご、ごめんなさ〜いっー！」

立ち直りがはやいのは長所だけど、今の発言は聞き流せない。すっかり調子を取り戻したのはいいけど、それはそれとして彩ちゃんには後でお灸をすえることとしましょう。

「あれ、千聖ちゃん？ いつもの千聖ちゃんに戻った？」

『話を逸らそうとしても無駄よ？』

……………そう言うはずだったのに、彩ちゃんの言葉が無視できなかった。

「……………いつもの、ってどう言う意味かしら？」

「えっと、さっきの千聖ちゃん、返事が最小限だったって言うか、できるだけ目立たないようにしてたような気がしたから」

……………なるほど。

正直、彩ちゃんがそこまで私を見ていたとは思わなかったので、沈

黙するしかなかった。

「チサトさん？」

心配そうに顔を覗き込んでくるイヴちゃんには申し訳ない気持ちになる。自覚はないけど、今の私はそこまで怖い表情をしているのかもしれない。

「……………ええ、気にしないで。さつきはちよつと肩の力が入ってただけだから」

「チサトさん、もしかしてカズナさんのこと、嫌いですか？」

「えっ」

二人の視線が戸惑いの色を見せ始める。

……………今までの脈絡からして、そんな結論になるのも無理もないわね。

「そんなことないわよ？あんなに真剣に仕事に向き合う人を嫌いになんかなれないわ」

これは正直な気持ち。

彼の仕事に対するストイックさは、むしろ周りから心配されるほどと聞く。その仕事振りについては実際に何度も目の当たりになっている。真似するかは別として、あの姿勢は私も見習わなければならない部分はある。

……………まあ、色々なことを見透かしてくるのは勘弁してほしいから、積極的に関わりたいとは思えない。苦手意識があるのは確かだけど、ここでは内緒にしておきましょう。

「じー……………」

「じー……………」

「二人とも、はやく食べましよう?」

「うう、駄目かー……………」

「チサトさん、いじわるです……………」

じとつ、とした視線に構わない態度を見せると、諦めてくれたようだ。ふふふ、そう簡単に悟らせるものですか。

さて、すっかり放置していた新作のロールケーキを堪能する……………前に、念のため話題も変えておきましょうか。

「そう言えば、イヴちゃんはどのようにしてここで働いているの?」

「あつ、それ私も気になってた!」

「んー、理由は色々ありますが、まずは立派な武士になるための修行として働いています!」

「ぶ、武士?」

思わずフォークが止まる。

喫茶店に武士道な要素なんてあるかしら……………?

「はい!カズナさんのような立派な武士になるべく、日々勉強の毎日です!アイドルやモデル、部活で忙しくても、最後まで貫いてみせます!」

「……………あー、なるほど」

「ええ、なんとなくだけでも理解できるわ」

イヴちゃんがよく口にする「武士道の教え」を思い出す。

言われてみればそうだ。確かにあの六つの教えを体現したような人物だ。そんな彼から、武士道を貫く秘訣を学ぶためにここで働いている、と。

……………ここまで「武士」と言われて違和感のない人、そうそういないわよね。

「だから、チサトさんにはカズナさんと仲良くなってほしいです。チサトさんにも、カズナさんから得られるものがきつとあるはずです！」

「イヴちゃん……………」

そんな、少しだけ物悲しそうな表情にたじろいでしまう。

……………そこまで言われると、いつまでも逃げ腰のままではいられない。そもそも、お互いに悪いことをしているわけでもないのに、一方的に私が避けるのは失礼だと思い始めてきてしまった。

「戻ったぞ」

と、件の人物が戻ってきてしまった。

本当にタイミングを見計らっているのではないかと思ってしまうほど間が悪い……………って、そんな愚痴も無駄ね。

「チサトさん！」

「千聖ちゃん！」

「わ、わかったわ」

少し会話すれば、二人も満足するでしょう。そんな気持ちで返事をした。

いつもフアンの人達に言うような一言を言えばいいだけ……………とは言っても、何を話せばいいのかしら？

———そうだ、ロールケーキ。

これなら彼との共通の話題として機能する。

コホン、と咳払いをして、彼にまっすぐ向き合う。

人前に出たときのように笑顔を作る。

「あ、あの?」

「? どうした?」

そして、目の前の作り手に敬意を払い、素直な気持ちを口にした。

「あの、いつも美味しいロールケーキ、ありがとうございます! 新作も美味しかったです!」

「そうか、一口も食べていないのに味がわかるのか。流石だな」

.....。

.....。

.....えっ。

恐る恐る、目の前のロールケーキに視線を落とす。当然、フオークすら入れられていないケーキがある。

で、私は何を言った?

『新作も美味しかったです!』なんて、食べてもいないのに言ってしまった?

「あ、ああああああああああ!!」

恥ずかしい! 恥ずかしい!

十秒前の私! なんてそんな余計なことを言ってしまったの! ありがとうございます、で終わらせれば良かったでしょう!

どうしよう、今の私、絶対顔が真っ赤になってる!

「チサトさん、可愛いです! みんなにも見てもらいたいです!」

「やめてイヴちゃん! こんな彩ちゃんみたいなミス、日菜ちゃんに見

られたら一生からかわれるから！」

「酷いよ、千聖ちゃん！私だってそんなミスしないよ！」

「そうなのか？この間のライブのMCでも先にオチを話してしまつたとSNSでも話題になつていたぞ。アイドルの伝統芸というものはないのか？」

「お願いですから、一緒にしないでください！反省しますから忘れてください！」

「そ、そうか。努力しよう」

そう言つて彼はカウンターの方に去つていった。相変わらず表情の変化は乏しいけど、私の気迫に戸惑つていたのは目に見えてわかつてしまつた。

……………原因は二つ考えられた。

ひとつは、自主練で彩ちゃんのMCを何度も聞かされてたこと。結果的に彩ちゃんに注意していたことをそっくりそのまま体現してしまつた。

もうひとつは、らしくないことに緊張していたこと。いくら苦手意識がある人が相手でも、緊張くらいコントロールできないなんて役者失格じゃない……………！

「確かに、武士道を学ぶ必要があるわね……………」

「えっ、千聖ちゃんも次のライブでブシドー！するの？」

「チサトさん！一緒にやりましょう！」

「……………それは遠慮するわ。それより、パフェのアイス溶けているわよ？」

「……………あ————っ！」

彩ちゃんに教えを説く前に、あの人のように動じない心を身につけなければ。

そんな悔しさを胸に、今度こそロールケーキを口にする。黒糖と黒蜜、生クリームの調和が取れた甘さは間違いなく私好みの味だったけ



ど、なぜかそれが余計に後悔を深めていった。

### 13話 きっかけの “きっかけ” (前編)

「なぜここにいる、つぐみ」

「ま、待って、お兄ちゃん！さすがにいきなりそんな質問されてもわからないよ!?!」

ある日の夕方、店番をしている中で戻ってきた兄から発せられた一声がこれだった。

『ただいま』とか『おかえり』とか、家族らしいやり取りの前にこんな言葉をぶつけるあたり、やっぱりお兄ちゃんだな、と逆に安心してしまいうくらいだ。

「今日は練習のはずではなかったのか？」

「あつ、そういうこと……………実はスタジオの予約が入れられなくて中止になっちゃったんだ。連絡してなかったっけ？」

「ああ、てつきり練習するものだと思って、既にスタッフに差し入れを渡してしまった」

「そっかー、それなら……………ええっ!？」

それはまずい。

私達がいらない以上、スタッフさんたちはずっと差し入れを抱えていなければならなくなる。本来、スタッフに預ける事自体が利用上グレード活動にも支障があるかもしれない。

「大変！すぐに連絡しないと！」

「ゲーキのように冷蔵の必要がなかったことが幸いか。とにかく俺が責任を……………むっ…」

踵を翻してスタジオに戻ろうとしたお兄ちゃんだけど、何か違和感を感じたようで足を止める。おもむろにスマホを取り出して確認す

ると、どこか安心したような表情になった。

「……………いや、その必要はなくなったようだ」  
「えっ?」

お兄ちゃんがスマホの画面をこちらに差し出したところ、そこにはやたら特殊な文字で彩られたメッセージ。送信主は一目で理解できなかった。

「あこちゃんからだね」  
「ああ」

メッセージの内容としては、スタッフさんが間違ってお兄ちゃんの差し入れを Roselia の人たちに渡してしまったという旨だった。

「今日はあこ達に譲るとしよう——だが、次があるとは思わないことだ」

「つまり、二度も繰り返さないように気をつけるってことだよね」

漫画とかでよくある捨て台詞はさておき、Roselia ならあこちゃんやあの人もいる。今回の件については、結果的に無駄にならずに済んだのなら良いや、と、そう思うことにした。

これがある一件のきっかけ——そのさらにきっかけとなる出来事だった。



「……………やってきてしまったわ」

休日の昼前、徐々に人通りが増える商店街に、私——氷川

紗夜はあるところで立ち尽くしていた。

事の始まりは昨日。

苦しい争奪戦の果てに借りられたスタジオの一室で練習をした際に、突如宇田川さんから差し入れが投じられた。

出されたものは何の変哲もないバタークッキー。

普段、今井さんや私が持ち込むようなものと同様の手軽な菓子類だった。

問題は、その質にあった。

『えっ、ちよっ、やばっ！何これっ!?意味わかんないんだけど!?どうやったらこんな作れんの!?』

『……………これは確かにすごいわね。今までリサのクッキーにはないような感覚ね』

『すごいなんてものじゃないって、友希那！完全にプロの仕事だよ！うっわ〜……………こんなの食べさせられたら、アタシもちよつと慢心してたって思い知らされちゃうな〜……………』

『い、今井さんにそこまで言わせるなんて……………』

湊さん、今井さん、私を含めた三者が揃いも揃って唸ってしまった。

経験が浅いとはいえ、曲がりなりにも料理——お菓子作り  
に触れた者なら一口で理解できてしまうような、ある種の理不尽さすら感じてしまう代物だった。

それだけなら、奮起するだけで済んだ。

問題はその後の会話だった。

『そうね、リサ。音楽と同じように、私達には慢心する暇はないわ』

『ええ、勿論です……………ところで宇田川さん？これは誰が作ったんですか？』

『え？カズ兄にいですよー』

『あこちゃん、それって……………』

『うん！つぐちんのお兄ちゃんだよー！』

……………お兄ちゃん。

……………お兄さん。

……………兄。

「まさか羽沢さんに兄弟がいたなんて……………」

お菓子教室で親密になった羽沢つぐみさん。

不器用な性格をしている私にも、ペースを合わせて接してくれる彼女には何度癒やされたことか。

そして、かく言う私も妹がいる。

またひとつ共通点が増えたことには嬉しく思うけど、まずは真偽を確かめなければならぬ。

そつと静かに扉を引く。

ドアベルの音も些細な大きさになったけど、羽沢さんはこちらを振り向いてくれた。

「いらっしやいま……………あ、紗夜さん！」

「おはようございます、羽沢さん。早速ですが、いつものお願いします」

「はい！ふふつ、何か常連さんみたいですネ！」

ああ、心が落ち着いていく……………。

このやり取りだけでも私にとっては多大なリラクゼーション効果が表れている。意外と私は単純な人間ではないのかとも思うが、それはそれとして当初の目的を忘れるつもりはない。

辺りを見渡す。

……………羽沢さんの他に従業員はいない。変わった点とすれば、やたらと店に入り浸っていたはずの黒ずくめのスーツの男性が、今日は不在にしていることくらいかしら。

「今日は羽沢さんだけですか?」

「え?裏にお父さんとお母さんがいますよ?午後からイヴちゃんが入ってくれますし、お兄ちゃんは今日は一日休みですけど」

——「お兄ちゃん」。

羽沢さんがそう口にした瞬間を見逃さなかった。

「羽沢さん、やはりご兄弟がいらっしやっただんですね」

「あ、正確には従兄なんですけど………やっぱり?」

………いけない、失言をしてしまったかもしれない。

これではまるで、私が羽沢さんのお兄さん目当てに来ているように誤解されてしまう。あくまで、それは会話のきっかけとなれば良いと考えているだけで他意などないのに。

「い、いえ、こちらの話です。それで、そのお兄さんは——」

「おーい、やってるかー?」

「あれ、巴ちゃん?」

気を取り直したところで、やってきたのは巴さんだった。普段通りに見えるけど、どこか息を切らしている。

「おつ、つぐ。悪いけど、カズのやつ見なかつ——あ、紗夜さん、おはようございます」

「ええ、おはようございます。巴さん」

「で、お兄ちゃんなら外に出ちやっただけど………何かあったの?」

「いや、今年も夏祭りの出店関係で運営の

おっちゃんが『わからないことがある』ってな………」

「ああ、またかあ………」

巴さんが用があるのは、「カズ」と呼ばれている羽沢さんのお兄さんらしい。夏祭り関係の要件で、しかも、羽沢さんは「また」と言っている。

「何の話ですか？」

「あ、大したことじゃないんですけど、ここの商店街の近くの神社でやる夏祭りで、店を出す側はあらかじめ申請が必要なんですよ」

「ええ、まあ当然ですね」

「そこまではいいんですけど、実際にカズ——ああ、つぐの兄ちゃんなんですけど、そいつが出した書類がですね……………」

スツ、と鞆の中から一枚の紙を取り出す。

クリアファイル越しから見える文字をざっと流し見する。こういった作業は普段から慣れているので、すぐに全体像を把握することができた。

「……………別に記入漏れがあるわけではないようですが」

「違うんですよ、問題はここです」

巴さんが指し示したのは出店の内容に関する記載欄。枠の中には簡単に『串焼き』とだけ記されていた。

「これは……………また難しいね」

「ああ、さっぱりわからん」

「……………普通に串焼きじゃないんですか？」

書類の中身より、首を傾げる二人の方に違和感を覚えた。

実に簡潔かつわかりやすい内容だと私は感じたけど、どうやらそうではないらしい。

「いや、紗夜さん。アイツの言葉をそのまま解釈するのは危険なんで

すよ。去年なんか「たこ焼き」って申請して、いざ当日に「タコの丸焼き」を出してきたりしますから」

「え」

……………タコの、丸焼き？

タコって、あの八本足の海産物のはず。たこ焼きはタコの身を使うけど、丸焼きとは一体？

「ちなみに、一昨年は？」

「……………「タイ焼き」でした。皆、普通のたい焼きか、奇をてらつても鯛の丸焼きが出てくると思ってたら、ムーハンとか言う子豚の丸焼きを出しやがったんですよ」

ムーハン……………ムーハン？

この間、あるテレビ番組に出演した日菜が食べたと聞いたことがあるような覚えがある。確か、バンコクやタイの料理だった……………ああ、なるほど、「タイ」でメジャーな豚の丸「焼き」、と言うことね……………冗談のセンスについては私はわからないけど、実現させる行動力は目を見張ってしまう。

「吊るされている子豚が結構グロテスクで、遊びに来た子どもが泣いちちゃったりしたよね……………」

「そのくせ、美味しい上に繁盛するから質悪いよな……………」

名称や出自はともかく、昨今は食べ物とされる動物の姿を想像できない子どもも少なからずいるとのことだ。冗談みたいな話だけど、魚が切り身の状態で海を泳いでいると思っっている子どもも少なからずいるらしい。

そんな子供にとって、いきなり動物の丸焼きが視界に入ってくるのは、確かに刺激が強すぎる。トラウマにならないければと願うばかりだ。



「今年は串焼き、ですか」

「問題は『何を焼くのか』だね！」

「おつ、さすがカズ検1級！足りない言葉がどの品詞なのかはすぐにわかるんだな！」

「ううん……言葉はわかっても、思考まではわからないことがあるから、私もまだまだだよ！」

「は、羽沢さん？」

「…………カズ検？1級？」

聞きなれない単語ばかりで若干置いてけぼりにされている気がする。

羽沢さんも、この奮起する表情は応援したくなるけど……………それは目指すべき方向としていいのかしら？

「串焼きって言ってるんだから、やっぱり肉か？」

「うーん。それははぐみちゃんのお店と競合しちゃうから、お兄ちゃんが選ぶとは思えないなあ」

「なら、海産物系か？まさか、これでスイーツ系はないだろう？」

「言い切れないよね。極論だけど、串のまま焼けば、何でも『串焼き』になっちゃおうし」

「だなー」

さすがに常識的な範囲内でやると思うけど……………随分とその、飛躍的な思考をお持ちの方なのね。

そのタイプの人間は、前もっていくら対策をとったところで、さらに上のことをやらかすのが常。普段からの教訓を伝えようか、まごついていたら、巴さんはため息を吐きながら立ち上がった。

「本人に聞くしかないか。しゃーない。後でアタシが適当に電話で聞くわ」

「ごめんね、巴ちゃん。お兄ちゃんが迷惑かけちゃって」

「気にすんなよ。正直、みんな面白半分でカズが何の屋台出すのか楽しんでる節あるからな。じゃ、紗夜さんも失礼します。あ、よかったら夏祭りも来てください！」

「え、ええ」

こういった祭事の運営は骨が折れるものだど痛感させられながら、巴さんの背中を見送る。

あそこまで奮闘している姿を見せられると、足を運んだ方がいいよ  
うな気がしてきた。

「紗夜さんもごめんなさい。せつかく来てくれたのにこんな話聞かせてしまつて」

「気にしないでください………何とか、随分変わったお兄さんなのですね。この間のお菓子教室にはいらっしやらなかったの、正直驚きました」

「うう、それも否定できないです………あ、今度またお菓子教室をやることになったんですけど——」

——と、他にも色々話をした。

けれど、ちようど客の出入りが激しくなる昼時よりも前に店を出る。いくら顔見知りとはいえ、混み合う時間帯にまで長居をするのは羽沢さんにも迷惑をかけてしまうからだ。

帰路につきながら、今日話したことを振り返る。次のお菓子教室の話、お互いのバンドの近況、エトセトラエトセトラ………丸山さんたちのような、女の子らしい会話。よりも固いかもしれないけど、それでも羽沢さんは嫌な顔ひとつせず付き合ってくれた。

特に盛り上がったのはお互いの兄妹の話。

羽沢さんのお兄さんはどうやら振り回す側のようで、話し始める前にこんなことを口にしていた。

『あ、あらかじめフォローしますけど、お兄ちゃんってかなりストリートでデリカシーがない言動をしちゃうことありますけど、悪気は一切ないので……その……色々と容赦してください!』

本人に改善させる、と言わないあたり、羽沢さんもかなり手を焼いていることがわかる。そんな前置きの後に語られる突飛なエピソードの数々は、我が妹をうつすらとイメージしてしまった。

「変に気になっちゃったわね……」

ほんの少しの同情と、より一層親近感が湧いた——そんな時だった。

「ちよつとー何してるの!?!」

のどかな商店街の外れ、比較的人通りが少ない道で、そんな悲鳴にも似た声が響き渡った。

思わずその方向を振り向くと、やたら大仰な帽子と大型犬であるアフガンを引き連れた年配の女性が声を荒げていた。

「そこのあなたよ、あなた!そんなの私に近づけないでよ!」

女性の指が示す先には、ユリの花が象徴的な花束と、それを抱える長身白皙の男性。

男性はゆっくりとそちらを振り向くと、特に悪びれたようすもなく平坦に口を動かした。

「そうか、それはすまなかったな」

「なんなの、その態度!謝罪のつもり一切ないでしょ、貴方!?!見なさいこれ!花粉が付いたでしょ!?!何とか言いなさいよ!」

年配の女性が見せつけるように帽子を突きつける。花粉なんて粒以下のものなぞ見えるはずもない。特徴的な赤い色をしたユリの花粉すら、遠目からでは見ることはできない。私だけでなく、周辺にいる者が皆、このいざこざに注目していた。

今の一連の会話からして、一方的に男性が迫られていることは明らかだった。この街の住人は気性が穏やかな人たちが多いけど、中にはあのような難癖をつける人もいる。

………せつかく羽沢さんのところで癒されたのに、こんな現場に出会すなんて。

こんな心情的に悪影響を及ぼす場面は見たくないので、野次馬をすり抜けて去ろうとした——その時。

「確かに、それは一大事だな」

ぱさつ、と、物が落ちる音が耳に残った。

男性が手に持っていた立派な花束を落としたからだ。花束は真つ逆さまに落下し、幾枚かの花びらが地面に散乱してしまうが、それに構わず足早に女性に近づいていった。

彼は気に止めずに女性の前でしゃがみ込み、年配の女性——が引き連れていたアフガンの毛並みを確認する。

「………外觀からは花粉の付着は確認できないな。家に戻ったらブラッシングと、念には念を入れるなら獣医に診てもらおうといい」

「はあ!? この子は関係ないでしょう! ちゃんと私の話聞きなさいってば! いい? 私の夫は——」

「その話は今聞く必要はあるのか? この場で優先するべきなのはこの犬の命だろうに」

「なんでアンタなんか指図されなきゃならないのよ! 話しているのは、私なの! 口答えるんじゃないわよ!」

………もはやヒステリックとも言えるほどに支離滅裂で、完全に周

りのことが頭に入っていなかった。

あんな人に絡まれた彼の不運を嘆くばかりだ。

それでも、彼は微塵も狼狽えることない。

「そもいくまい。ユリの花粉がペットの犬に直接、あるいは衣服から間接的に付着することを懸念する気持ちはわかるが、まずは確認が第一だからな」

「は？」

ようやく、女性の方が口を噤んだ。

……………ああ、なるほど。

あの男性が心配していたことを理解できた。

花の茎や花粉は誤って人体が摂取してしまったも、そこまで大きな変調を与えるものではない。

ところが、犬猫にとってはそうではない。

特に、ユリの花粉は選りすぐり。少量の花粉ですら摂取すれば死に至ることがある猛毒だ……………と、白金さんが言っていたことを思い出した。

男性は優しく毛並みや皮膚を確認している。

心地よさそうに撫でられているアフガンは置いて、今度は男性の方から口を開いた。

「……………その反応から見ると、自分の衣類にしか気をつけていなかったようだ。なるほど、貴女にとってこのペットも、その夫とやらも、己が着ている衣服と同じように存在価値を誇示するための手段に過ぎないというわけか」

飼い主なのに、お前はペットの危険すら察知できないのか。

違うだろう。お前が案じるべきなのは愛犬だったはずだ。自己顕示の精神と衣類を気にするよりもまず、それを考えもしなかったのか？

口にはしないにしても、彼の鋭い眼光は訴る。

「特段、その在り方に口を挟むわけではないが、このような場で声を大にするのはやめておくといい。周りが口にはしないにしても、その価値とやらは間違いなく下方に向いていることに気づいた方がよいのではないか？」

「あ、あ、あなた……ねえ……っ！もう頭に來た！こうなったら出るところに——」

「ふむ、法律は弱者の味方だ。きっと、そのペットも、貴女の矜恃も守ってくれるだろう。そうしたいのであれば好きにするといい。俺は逃げも隠れもするつもりはない」

畳み掛けるように発せられる煽る言葉は、確実に相手の冷静さを乱していく。今にも暴力を振るわれようとしているほどの劍幕にも一切飲まれることなく、毅然とした姿勢で正面から向き合う彼。

この場の趨勢は決した。

遠目から伺っている者の誰もがそう感じたことだろう。

「……………ふんっ！」

もう顔すら見たくない、と言わんばかりの嫌悪の表情を隠そうともせず、踵を返す年配女性。

連れて帰ろうとしたアフガンは、主人を害した相手に特に吠えることもなく、一瞬立ち止まって男性の方を振り向いた後にリードに引かれて去っていく。

その背中を呼び止めようとしたのか、男性は手を伸ばして声をかけようとして——やめた。

背後から彼とは別の中年の男性が肩に手を置いたからだ。

「良いって兄ちゃん。あんな贅沢な服持てるやつはそんな端した金なんか求めてねえし、むしろ兄ちゃんの方が弁償される立場だろ」

「そうなのか。だが……………」

「いやー、それにしても清々したぜ！　まったく、あの婆さんって他の店にも粉かけて頭下げさせるクレーマーだったからな……………」

中年の男性の言葉に一部の野次馬が頷く。

……………なるほど、この一件は今回が初めてというわけでもなく、商店街の人たちにとっては悩みの種だったようだ。彼らにとって、あの白皙の男性はそんな鼻つまみ者を払い除けた功労者というわけね。

しかし——大袈裟かもしれないけど——そんな英雄視された彼の表情は、未だ無表情のまま。むしろ、一層陰りが増したかのようにも伺える。

「……………失礼する」

「おう！　今度来たらサービスしてやつから、また来な！　あつ、今年の夏祭りは何出すんだ？」

「申請中だ。受理されるまでは口にできん」

「律儀だねえ、まったく。まあ楽しみにしてるわ！　じゃあな！」

男性はこの場を離れようとする。

そんな彼に私は途中で屈みながら足早に近づいていった。

「あの、落としものです」

渡したのは、先ほど彼が落とした花束。

……………落ちる角度が悪かったのか、既に茎が折れてしまっているものが何本か見受けられた。

「ああ、感謝する」

「あの、どこに行くつもりですか？」

「あの犬のところだ」

……………歩き出した方向を見て、もしやと思ったけど、まさか本当にそうだとは思わなかった。

「理由はどうあれ、俺があのだを危険に晒させたことは弁明の余地がない。せめて、医者に診てもらい、命に別状がないかだけでも――」

「――やめておいたほうがいいと思います。今行っても、あのお婆さんの機嫌を更に損ねるだけです」

かと言って、この人がそこまで責任を負う必要はないはずだ。いちやもんのように飼い主からあれだけ当たり散らされ、花は折れてしまい、本人も酷い目にあつたはずなのに。

「きつと、あの犬もその気持ちだけで充分だと思っていると、私は思います」

「……………そうか……………そうか」

己に言い聞かせるように呟いたその言葉からは、無理矢理自分を納得させているようにも見えた。

……………確かにあの犬については心底無事であつてほしい気持ちは痛いほど共感できるけど、その心配を第一にするのは飼い主であるべきはず。

形はどうあれ、こうして指摘された以上は、まずは自分で病院に連れて行くことが飼い主としての当然の義務だろう。

ようやく、手に持っていた花束を渡す。

全てが全て駄目になつていゝるわけでもないけど、こんな無惨な姿になつてしまったのが実に口惜しかった。

「……………(´；ω；)愁傷様です」

「気にすることもあるまい。元を辿れば、俺の不手際が招いたことだ。素直に買い直すことにしよう」



「まだ無事な花もありますが……買い直すのですか？」

「人に渡すものだからな。是非もない」

……………それは確かに買い直す必要があるわね。

ただでさえ花のプレゼントは嬉しいにしても扱いに困る部分はあるのに、ましてや折れた花なんて渡されても喜ぶ者なぞいないだろう。

「ただ、困ったな」

「何がですか？」

「今日は木曜日だ」

言われて私もはっと気がついた。

今日は祝日とは言え、本来であれば平日の木曜日であったはずの日だ。そして、花屋は木曜日を定休日とする店が多い。

これでは、代わりを用意することができない。

「——少し待ってください」

「その必要はない。こちらにも伝手はある」

近隣で営業している花屋を確認しようとしたところで、彼の手で制される。その手に持っていたスマホを流れるように操作する。

「よし」

「何が『よし』なんですか……あの、ちょっとー！」

時間がない、と言わんばかりに彼は足早にこの場を去ってしまい、私は遠くなる背中を見送ることしかできなかつた。

勝手に納得して、勝手にどこか行ってしまった。有無を言わさないあの態度、確かにあれでは相手をヒートアップさせてしまうのも無理はないわね。あのアフガンの身を第一に心配していたところは好感

を持てるけど、これは日菜にも気をつけるように言ったほうが――

「……………あら？」

ついさつきも似たような感想を抱いたような気がした。あの時は羽沢さんのお兄さんの話をしていたような。

……………偶然でしょう。さっきの男性は寡黙なだけだ。あんな人が、打ち上がる花火の音をかき消すほどの『ソイヤ』を出すほどの無茶苦茶な人間とは思えないもの。とにかく、この場ではそのように断定した。

思わぬハプニングはあったけど、最終的にはスッキリとした心情になれた。

途中、この季節には似合わないような、どこかで見たことのある黒ずくめのスーツの男性とすれ違ったけど、どこか夢見心地のまま気にせず帰路に戻ることにした。

## 14話 きっかけの “きっかけ” (後編)

「さて、蘭。例の物を頼む」

「突然来て何言ってるの？」

ある日の昼下がり、玄関先で出迎えてくれた蘭から発せられた一声がこれだった。

見慣れた呆れ顔から放たれる率直な言葉。察するに、蘭には俺の事情は行き届いていないようだ。

「入用だな。急遽、花が何本か必要になった。ここに来る前に既に連絡したはずだが……………」

「えっ、あたし何も聞いてないんだけど」

「当然だろう。連絡したのはお前の父だからな」

昼前に起きたあの一件。

親切な女性が台無しになった花束を拾ってくれた際に、俺は蘭の父にメールを送った。

代わりを用意しようにも、木曜日の祝日。花屋が一般的に休業になることが多い今日、頼れる人間として思い浮かべたのが、華道の家元である蘭だった。

どうしても本日必要だったので、日を改めて用意するわけにもいかず。業腹だが、こうして蘭の家立ち寄っているわけだ。

で、目の前にいる蘭はと言うと、なぜか眉を釣り上げている。

「……………なんかムカつく」

「譲る譲らないの判断をするのはお前の父になる。お前が家にいる保証もなかった。ならば、直接彼に連絡した方が話が早いと思ったただだ」

「まあ、そうかもしれないけど……………」

随分と煮え切らない返事だ。

俺の行動自体が間違っているわけでもないことは蘭も認めている。では、その過程において、他にすべき行為があったというわけか。……………反省するにしても分析は必要だな。

「……………どうやら俺の配慮が足りなかったようだ。どうせなら、お前と彼が話すきっかけを設けることを考えるべきだったか」

「いや、普通に『余計なお世話』だから。勝手に納得しないでよ」

「そうなのか。では、俺が真つ先に父の方を頼ったことに立腹しているのか。承知した。頼る順番のどこに喜びを感じる要素があるのか理解し難いが、これからは第一にお前に頼るとしよう」

「……………ほ、ほら。花が必要なんですよ。倉庫まで案内するからさっさと付いてきて」

家にかかることを急かすが、蘭は一切俺と目を合わそうとしない。つまり、凶星か。可能なかぎり善処すると心に決めながら、蘭の家の廊下を並んで歩いていく。

「花、って言っても、練習用で使うような余り物しかないけどいいの？」

「ああ、充分すぎるくらいだ」

「そう。で、また店の装飾でも変えるの？」

「いや、俺が個人的に、人へと渡すものだ」

装飾のためならば、先程道路に落とした花束をドライフラワーにして再利用することはできる。

しかし、元々は他人へ渡すもの、かつ仕事しごととしてではなく私事わたくしごととして必要なものだ。

「ふ、ふーん」

と、そんな返事をしながらチラチラとこちらを見上げてくる蘭。興味がないフリをしているつもりのようなのだが……間違いない、確実に何かを気にしている。

「……………ちなみに、誰に渡そうとしてんの？」

「それは言わなければならぬことなのか？」

「当たり前じゃん。もしかして言えないようなやましいことでもあるわけ？」

「どうだろうな。親に花をあげることがやましいことに該当するなら、そうなってしまうが……………」

「……………はあ、そう言うの早く言っつてば」

「すまない」

そう答えると、今度は隣で溜息が聞こえた。その溜息は呆れよりも安堵の気持ちが多分に含まれていた。

……………全く、俺に色恋のことを危惧する必要なぞないだろうに。とにかく、今日の蘭は一段と忙しそうだ。

それはそれとして  
閑話休題。

そんな談笑をしていたら、目の前に俺の身長ほどの木の襖が現れた。

少しばかり立て付けの悪いそれを引くと、ぼんやりと薄暗い部屋に辿りつく。

部屋の中心を仕切るように立つ横長の机。その上には、数種類の色とりどりの花々がそつと寝かされていた。ざつと見ただけでも、茎が太い物や葉が萎びたものがちらほらとある。蘭の言っていた通り、練習用として使用するために用意されたものと断定できる。

長さは後で調節すればいい。あらかじめ用意していた花束と、出来るだけ色合いが同じになるように見繕い、まとめて新聞紙で覆う。

「こんなものか。改めて礼を言おう。彼にも伝えてもらえると助かる」

「彼………って、ああ、父さんね。何かあたしから言うの嫌だから、直接言って」

「………まあ、いいだろう」

まだ隔たりがあることを実感しながらも、再び玄関へと踵を返す。

トラブルに見舞われたものの、こうして代替となるものをすぐに手に入れることができた。ひよつとして、俺は今年の福男だったのかと錯覚してしまいそうなほどに運が良い。

「あの、き。和那って、このまま店に戻るの？」

………ところが、背後を歩く蘭の足取りが重い。

たとえ道が狭かろうと、俺の歩幅が大きかろうと、意地でも隣にしようとするのがいつもの蘭のはず。振り向くとほんの少しだけ目を伏せながら、手持ち無沙汰かのように、右手は左腕の肘を握っている。

このまま別れるのが名残惜しい——昔からそんな心情の時に見せる癖だ。

「いや、これを渡してから戻る予定だ」

「………そっか、じゃあやっぱ帰るんだ」

「？ まだ家には帰らんぞ？」

互い首を傾げる。

………これは会話が噛み合っていないか。

「………なるほど。俺が叔父や叔母にあげるものだと思っていたのか」

「えっ？ さっきそう言ってたじゃん」

「いや、そういう意味で言ったわけではないのだが………」

この花束は叔父叔母夫婦に渡すわけではない。それは断言したが……さて、どう説明したものか。

先程のように蘭に誤解されるわけにはいかない。俺の目標である『カズっていいのは一日一度まで』を違えることになるし、蘭自身もハッキリとするまで帰してくれないだろう。

——仕方ない。

「蘭、すぐに出発できるか？」

蘭には、もう少し付き合ってもらおうことにしよう。



ガコン、と、揺れた衝撃が微睡みから連れ出した。

落ちかけていた瞼を開ける。

視界から見える風景から、あたしはバスの中に乗っていたことを思い出す。

あの後、あたしは和那に連れられるままバスに乗り、そのまま……。

「起きたか」

隣——窓際の席に視線を移すと、隣に座っている和那がこちらに視線を向けた。車窓から差し込む夕陽に照らされて、やたらと白い肌がその光に溶け込んでいた。しかし、不思議と「様になっていく」とも思ってしまうくらいに。

いや、そんなことはどうでもいい。

「……………見た？」

「ああ、眩しいな」

「なっ——」

この男、いきなりそんな歯の浮くセリフを口に——いや、あたしもいい加減学習した。和那は本当に夕陽を見ていただけで、あたしの寝顔は見えていないし、仮に見ていたとしても『寝てるな』くらいの感想しか抱いていないはず。

……………それはそれで、なんかムカつくけど。まあ、そんなこと言ったところで、和那には目をパチクリさせながら自意識過剰だなど切り捨てられるだけだろう。

「随分バスの中、人少ないけど……………」

後部座席に座っているからか、ふと、そんな違和感を抱いた。方向からして街の外れだけど、それでも住宅地区の方面だったはず。この時間帯なら、夕飯前に帰宅する者がもう少し多くてもおかしくないはず。

けれど、あたしの視界には四、五人しか同乗者がいないように見える。

「仕方ない。シーズンより大分前だからな。八月頃になればそれなりに混み合うのだがな」

「シーズン？」

耳を疑う。

あたしたちはそんな季節性で左右されるところに向かっていているのか。

八月頃に混み合うところと言えば……………海、プール、キャンプ場、遊園地があるけど、こんな夕暮れ時に出発するとは思えない。



「……………ねえ。あたし達、どこに向かつてんの？まさか心霊スポットとか言わないでよ」

「見方によってはそうかもしれないな」

——瞬間、座席から崩れ落ちそうになる。

寸でのところで和那があたしの腕を掴んで支えてくれる。本来ならここで色々反応してしまうけど、今のあたしにはそんな余裕があるわけない。

「もうやだ。無理。帰る。次で降ろして」

「途中下車か。だが、次の停留所が目的地だ。残念だったな」

「ほんとふざけないでってば、この鬼畜！もう今降ろして、お願いだから！」

せつかく二人で出かけられたのに、連れて来られたのが曰く付きのところとか本当にあり得ない。この男は妹と巴、モカにはダダ甘な癖して、あたしやひまりには天然サディストになるのは一体なぜなんだ。

そんなやり取りをしていると、バスは足を止め、天井からスピーカー越しに次の停留場が告げられる。つまり、これが意味することは……………。

「着いたぞ。夜ではないから、お前も問題ないだろう」

「よ、夜が問題あるみたいな言い方やめ——」

ズルズルと引きずられる形で降ろされる。

目を瞑ろうかとも思ったが、できなかつたし、する必要もなかつた。視界には入ったのは、眠るように静かな——石の森だったからだ。

「……………霊園？」

「見ればわかるだろう。着いてきてくれ」

都会の喧騒とは正反対の、風が木々を揺らす音が静かに響きわたる。

掃除されたもの、そうでないもの、散りばめられた墓石の前を通り過ぎながら、和那の隣を歩いていく。

数分も経たない内に、あたしたちは足を止めた。

目の前に立ったのは、一つの墓石。他の墓石と比較して苔が少なく、手入れが行き届いてることがわかるそれを目の当たりにし、あたりは静かに口を開いた。

「これ——」

「ああ、俺の母だ」

——ああ、やっぱりか。

バス停からここまで歩く中で薄々感づいていたけど、本人から告げられると現実味を帯びてくる。

和那の母さん——つまり、和那の生みの母で、つぐみの叔母にあたる人物、が眠る場所だ。

「二ヶ月に一回程度、ここに通っている。昨日、花は用意していたんだが、俺の不注意で台無しにしてしまつてな」

「だから、あたしの家に来たんだ……」

親にあげる、というのは墓参りのことを指していたのだった。

相変わらず言葉が足りてないとか、それなら初めなら「墓参りのため」って言えばいいとか、いつもならそんな言葉が出てくるはずなのに……この時のあたしには言葉にする気が起きなかった。

そうこう考えている間にも、和那は手際よく掃除と花の用意を終わらせていた。左右対称に切りそろえられた菊、リンドウ、そしてユリが無骨な墓石を彩っている。

「いつも一人で来てるの？」

「ああ、叔父や叔母は行ききたがらない。つぐみも存在だけ知っているが、一度も来たことがないな」

行ききたがらない。

どこか含蓄のある表現に聞こえたけど、続いて和那は「だが」と口を開いた。

「俺にとつては大恩ある母だ。良かったら線香の一本でもあげてやってくれ。母は喜んでくれるかはわからないが、少なくとも俺は嬉しい」  
「……………まあ、それくらいなら」

受け取った火の灯った線香を線香皿に置き、手を重ね。しばらく経った後に目を開ける。線香の煙が夕焼け空に昇る様子が、不思議と哀愁をかきたたせた。

……………それにしても、和那の母さん、か。

「……………何やら質問しづらそうにしているが、遠慮は無用だ。巻き込んでしまった礼としては不充分かもしれないが、可能なかぎり答えよう」

「じゃあ、遠慮なく……………和那の母さんって、どんな人だったの？」  
「……………情けないことに、もう顔すら覚えていない。だが、赤子だった俺を四つになるまでは育ててくれたと聞く。それだけでも充分に立派な母だと、俺は思う」

そう言葉にする和那の口元は、儂げな笑みを浮かべていた。

……………顔を覚えていないことへの無念か、それとも別の感情があるのか。

あたしは和那じゃないから、全てわからない。けれど、和那の言葉には一切の虚飾はないこと、それだけはわかる。

同時に、なぜ和那があたしや父さんを気にかけるのか——  
その理由が、ようやく腑に落ちた気がした。

「さて、そろそろ帰るか。付き合わせてしまつて悪かつた」

「そんなこと気にしないでもいいつて。今日は一日オフだったし」

加えて、ここまで自分の過去を赤裸々に話すレアな和那を見ることもできた。偶々、タイミングが良かったのか、それとも和那自身も思うことがあつたのかは定かではない。

………今日は、これ以上問いただす気にならないけど、これがいきつかけになつてくれればと思う。

腕時計を取り出し、時間を確認する和那。

そろそろ辺りも暗くなつてくる時間帯かもしれない。日中ならともかく、夜中にここに行くなんて無理だ。

………でも、このまま家に帰るだけつて言うのも違う気がする。せつかくのお互い終日オフなんだから、もう少し一緒にいても許されると思う。

「………せつかくだ。この後どこか寄つて——」

そんなことを考えながら片腕を組んでいると、和那は少しばかり嘆息した後に、そう言つて——途中で言葉を切つた。

胸ポケットに仕舞われたスマートフォンが振動をしたからだ。和那は「失礼する」と言いながら、スマートフォンを己の耳に当てる。

「どうした、イヴ」

相手先はパスパレのイヴのようだ。和那に連絡が入るということは仕事関係の可能性が高い。

………いや、待て。別の可能性もあるかもしれない。この和那のこ

とだから、「困ったときはいつでも連絡するがいい」なんてことを言っているもおかしくはない。この唐変木とへんぼくがモテる要素なんてないと思うけど、万が一個人的なお誘いだっただけの場合――

――すぐ戻る」

けれど、その考えは一瞬で違うと理解できた。

和那の纏う空気が、一変して張り詰めたものになったことを感じ取れたからだ。

「……………何かあったの？」

「すまない。説明している暇はなさそうだ。戻るぞ」

「あつ、ちよつと和那！」

制止の声も聞かず、一目散に立ち去る和那。

普段の静水のような足取りとは対照的な、不自然なほどに忙しない早歩きで来た道に戻っていく。

――嫌な予感がする。

一抹の不安とともに、あたしもそんな和那の隣へと駆け出した。



戻った頃にはすっかり夜になっていた。

昼間は賑わいを見せていた商店街も、店じまいを終えるところからほらと見受けられる。これから家族との団欒の時間を経て、やがて寝静まるのだろう。

あたしたちが戻ってきた羽沢珈琲店も、当然に店じまいの準備を始めていた。

窓から店内の灯りはついているが、出入口の扉には“CLOSE”と書かれた掛け看板がゆらゆらと揺れている。

勿論、和那は迷わず開く。

店内ではイヴが後片付けをしている最中だった。

「すまない。遅くなった」

「か、カズナさん！ランさんも……って、ランさん！どうしたんですか!？」

「か、和那、歩くの速いってば……はあ、はあ」

一方、あたしは扉を開けた瞬間に、近くの椅子に倒れ込む。

……なんて情けない。学校の授業で長距離走をやった後以上の倦怠感だ。身長差による歩幅の違いは、残酷なほどにあたしを苦しめていた。物理的、精神的にも。

「イヴ。悪いが、蘭を頼む」

「は、はいっ！」

……うん。別にイヴに任せるのはいいんだけど、なんというか、こう、もつと何かないのか。

一言足りなくてもいいから『良くやったな』とか、そんなのが欲しいなんて、思ったり思わなかったり、しないでもない。置いていかれてたまるものか、なんて思って勝手に意地になったのはあただけ……優先順位が下の方になっているのはどういう見なんだろうか。

モヤモヤしていると、店内の騒がしさを聞きつけたのか、バックヤードの扉からつぐみが出てきた。

「あ、お兄ちゃんおかえり。蘭ちゃんも一緒だったんだ……って、どうしたの蘭ちゃん!?!汗びっしりだよ!?!」

「お水と手拭いです！使ってくださいー！」

「あ、ありがと……………ふう」

氷の入った水を一気に呷る。

熱された状態で一気に冷水をかけられた石や鉄はこんな気持ちなのだろうか。体中から蒸気が出るかのように汗が出てくる。

……………この後、二オイとか確認しておこう。

「……………すまない。全て俺の落ち度だ」

「も、もう、お兄ちゃん。今日の晩御飯はお母さんが作ってくれるから、ゆっくり帰ってきててもよかったのに……………」

一方、和那は妹に注意されていた。

……………あたしたちにとってはよく見る光景だけど、おかしいことに「いつも通り」な感じがしない。

言葉に元気がないというか、どこか疲れたような印象を受けた。

和那ではなく、つぐみの方に。

和那は初めからそれを感じ取っていたのか、口を噤んだままつぐみの真正面に近づいていき――

「へ？」

「は？」

「あっ」

――そのまま、そつと抱きしめた。

……………さすがにこれは状況がわからない。

何をやっているんだ。この兄妹は。

「お、お兄ちゃん？いきなりどうしたの？」

「……………どんな言葉をかけたらいいいのか、俺には咄嗟に出てこない。だから、こうするしかない。悪いが、これで甘んじてくれないだろう

か

「ほ、ほら。蘭ちゃんとイヴちゃんいるから。は、恥ずかしいから、やめ」

「——無理はするな、つぐみ。俺はここにいる」

それは、今日半日で聞いた言葉の中で最も強い声だった。

大きいわけでもないし、口調がきついわけでもない。ただ、その言葉に込められた想いが強いと感じてしまった。

その力強さは、つぐみが自身で作ったはずの防柵を容易く決壊させた。

「……………ぐすつ……………ううつ……………」

ああ、なるほど。

和那が焦っていた理由、つぐみが「いつも通り」な印象が感じられなかった理由。それぞれの点同士が線で繋がった。

和那が意図的にそこで抱きしめたからか、つぐみの顔は和那の背中に隠れている。けれど、きつと小学生のころみたいに泣いているだろうな、とは感じ取れた。

「……………ねえ、何があったの?」

ただ、なぜこんなことになったのか、それだけがあたしには何もわからない。

なので、当事者に聞くことにした。

「実は——」

それからイヴが語りだした出来事は、語り部としてはイヴには似合



われないような陰気なものだった。

今日の夕方ごろ……あたしたちが墓参りの最中にそれは起きた出来事だった。

とある大きな犬を連れとお婆さんをつぐみが応対した。

そのお婆さんは、いきなりつぐみに『注文を聞きに来るのが遅い』とか『テーブルがちゃんと拭いていない』とか言ったそうさ。つまり、世の中には一定数いるそういう客だったわけだ。

初めはひとつひとつ謝罪して接客をしていた。良くも悪くも優しくつぐみらしい。けれど、今日のおすすめだった和那作のチョコロールを出した時が分水嶺だった。

『こんな甘すぎるもの食べれたものじゃない』

『この店には犬用のメニューすら無いのか』

『あんな礼儀も弁えないウドみたいなお木偶の坊がやってる店なんてこんなものだと思った』

今度はお店や和那の批判を言い出したそうさ。つぐみは優しいが、優しいからこそ、身内やその周りを貶されるのは看過できなかった。

『お言葉ですが——』と始まった口論は実にアンタツチャブルな状況だったそうさ。

すぐさまイヴが止めに入ろうとしたが、それより先につぐみの父さんが仲裁に入ったことで、他のお客さんも巻き込んだ騒動に発展することにはならなかった………と云うのが事の経緯だった。

「……………何それ、胸糞悪い」

つぐみの気持ちは痛いほどわかる。

あたしだってみんなや母さん………ついでに父さんも、赤の他人からコケにされて黙っていられる自信はない。

それが和那だったら尚更だ。

本人がいない場で、本人よりも弱い存在を痛めつけ、自分の方が上

の存在だと主張する。そんな陰湿な行為には心底腹が立つ。

「お兄ちゃん、何もしてないのに……ここに来る人、みんなお兄ちゃんのケーキ美味しいって言うのに、どうしてあんな嫌がらせするの、って思ったら、私、私………」

「いや、その者は昼前に俺が会った人物と同一だ。その際にどうやら恨みをもっても仕方ないほどに貶してしまったそうだ」

………本当にそうなんだろうか。

和那ははつきりと言い過ぎたり、一言少ないために厳しい言い方になったりすることはあれど、他人を馬鹿にしたり辱めたりするようなことは絶対にしない。そいつに対してでも善意で注意したに違いない。仮に故意に貶したとしても、だ。

——その仕返しを、つぐみに向けていい理由にはならないだろうに。

「全ては俺への私怨によるものだ。全ての責任は俺にある。だから、別にお前は俺のために泣く必要はない。むしろ、お前は俺に怒りをぶつける権利がある」

「………やだ。やだもん。お兄ちゃん、絶対悪いことしてないもん」  
「そんなことはない。俺とて間違ったことは——」

間違ったことはするし、結果的に悪いと言われることもしてしまうかもしれない。

きつと、そう言葉にするつもりだったんだろう。  
けれど、つぐみはそれ以上を求めなかった。

和那の腰に当たる部分にそつと手を回して、その胸に顔を埋めながら願う。

「ごめん、ごめんね。お願いだから、今はこのままにさせて。お兄ちゃん………」

「つぐみ……………」

「ツグミさん……………」

消え入りそうな声で、すすり泣く声だけが店内に残る。

あたしもイヴも……………そして和那も、ただただ目を伏せることしかできなかった。

……………ああ、和那の母さん。

もし貴女がここにいたら、貴女だったらどうしますか。涙を流すつぐみに、口を閉ざす和那に何をしてあげられますか。

「……………俺は、無力だな」

今は亡き人物を思い浮かべながら、そんな呟きが聞こえた。

この時の和那の呟きが、これからずっとあたしの耳に残り続けることになるのであった。



「……………さすがに叔父たちも寝たか」

日付が変わる前、寝静まった家のリビングの灯りをつける。

あの後、つぐみは叔母に連れられて寝たそうだ。泣き疲れてしまったようだが、あれで少しでも負担を肩代わりできればいいのだが、まだ心配なのが正直なところだ。

時間も時間だったので、蘭とイヴの二人には賄いでも作ろうかと提案したが、蘭は食べる気にならないとのことで辞退し、イヴも少し前に叔母の作ったものを食べてしまったとのことだった。

他に俺が二人にできることと言えば、叔父の車で家まで送ることくらいしかできなかった。

夜分遅くまで残らせてしまった身として当然に発生する義務として、責任持つて家まで運ぶことにした。

……車の中での会話を想起する。

昼前に俺が起こした不手際の内容を含め、今後のについての話をした。

『……とりあえず一安心、なのででしょうか』

『つぐみに関しては問題ないだろう。あいつは強い。明日になればいつも通りになる』

『でも、和那はどうすんの？その老害、多分またいちゃもんつけに来るよ？』

『ろ、ろろろが……？』

『蘭、その蔑称はやめておけ……まあ、気持ちはわかるかな』

『か、カズナさん？もしかして、怒ってますか？』

『俺とて人並みに憤りは覚える。俺の侮辱ならいくらでも構わないが、その矛先が家族やお前たちに向けられたのなら話は別だ。だが、今日一日俺が店にいれば防げた問題でもある』

『違うでしょ。和那だって大事な用事があったから——』

蘭は完全に頭に血が上っていたようだ。

俺やイヴが冷静でいられるのは、蘭が俺達の分まで憤っているからに違いない。不謹慎かもしれないが、こうして自分や従妹のために怒ってもらえる人間がいるのはありがたいものだ。

……蘭はあの老人が一方的に悪いと決めつけているが、本質的にはそうではない。

一日中、俺が店番をしていれば。

あの昼前に俺があのだを通っていないければ。

夕方、つぐみではなく、叔父や叔母がフロアに出ていれば。

そんな「たら」「れば」の話はいくらでもできるし、考えても不毛なのは理解できる。だが、少しでもピースが噛み合わなければ起こらなかったのも事実である。

結局は、タイミングが悪かった。  
それだけの話だ。

『俺の中では、間が悪かった』とすることにした。お前たちも気に病むことはない』

「何それ、悪いのは完全にあの——」

『それだけだ。さて、これからどうするか、だったな。つぐみには一週間ほど手伝いをさせないつもりだ。イヴはそのままのシフトで、来週から入ってもらおう』

『……………それだけ?』

『ああ、充分だ。俺から何かする必要はない』

あの老人がまた来るなんて推定での話に過ぎないし、何より俺達が行動することでエスカレートさせては本末転倒になる。

二人は納得していないようだが、時間を置くことが一番効果的なのだ。

……………問題は、商店街の皆だな。

もし、あの現場に立ち会っていた者がいれば、明日には広まるだろう。日頃から鬱憤が溜まっていることは昼前に俺を制止した彼の言動からわかる。

この一件が、起爆剤にならないことを祈るばかりだ。

『カズナさん。未熟なばかりにお力になれず、すみませんでした。私も修行不足を実感しました。でも、何かあったら何でもご相談ください! すぐにかかけつけます! ツグミさんにもそう伝えてください!』

『あたしはそんな理由で片付けるつもりないし、今日のことはみんなにも伝えるから。つぐみが学校にいるときはあたしたちに任せて。その代わり、和那は次そいつが来たときは一言減らしていいから。』

……………和那もさ、お願いだから、偶にはあたしたちを頼ってよ。和那は巴やつぐみに頼りっぱなしになつてると思っているみたいだけ

ど、あたしたちの方が和那に頼らせてもらっていることの方が圧倒的に多いから。

だから……………やっぱりなんでもない』

「やはり、俺達は恵まれているな」

別れ際、二人が言ってくれた言葉を思い出すと、情けない話だが笑みが溢れてしまう。

まるで自分の身に起きたことのように、ここまで親身になってくれる者が周りにいる。

これほど類稀なる幸運に恵まれている従兄妹きょうだいは、おそらく日本中を探してもそうそういないだろう。

この幸せを噛みしめて、そろそろ俺も就寝しようと思ち上がった――その時、背後から扉が開く音がした。

「……………何だ、起きたのか」

「あ、うん。さつきはごめんね、お兄ちゃん」

つぐみが視線を落としながら謝る。

……………謝るべきなのはこちらだというのに。

どうやら中途半端な時間に起きてしまったようだが、従兄あにとしては「安静にしている」と言うべきなのだろう。普段頑張りすぎていることを考慮すれば丁度いいはずだ。

「謝罪は求めている。それより、体を休めておいた方がいい。寝れなくても、はやく部屋に――」

ぐうううう……………。

……………俺が言い切る前に、そんな間抜けで可愛らしい音が介入する。

音のした方向には、照れくさそうにしながら笑みを浮かべる我が

従妹いもづとの姿。

「……………えへへ」

……………ああ、なるほど。

こんな時間に起きてしまったのは、夕飯を食べる暇もなく寝てしまったからか。

「……………冷やし茶漬けでも作るか。さて、出汁の作り置きは残っていたか」

「あ、あのさっ！」

「わかっている。俺も一緒に食べる」

「うんっ！」

元気のいい返事とともに、俺が座っていた椅子の前にそそくさと座るつぐみ。せっかくの夜食だ。俺も同伴させてもらおうとしよう。

……………今日一日、様々なことがあった。

アクシデントもあったが、学ぶことも多々あった。それらが、明日以降の良い出来事のきっかけになるのか、はたまた悪い出来事のきっかけになるかはわからない。

だが、締めくくりがこの形ならば、悪くない一日だったと断言できる。

そんな取り留めのないことを考えながら、冷蔵庫を開ける。冷風が心地よく感じていると、そろそろ夏が本格的になっていく実感がした。

「……………つぐみ、冷蔵庫にちょうど二人分の豚骨ラーメンがあるのだが」

「お、お兄ちゃん。食べなくなっちゃうから、それは奥の方に入れておいて」

「承知した」

ひまり 悪魔の囁きにも従わないくらいには立ち直っているようで何よりだ。



## 15話 祭囃子の前振り

文句なしの快晴、とは今日の空模様を指すのだろう。

この季節、多少の入道雲があってもおかしくないはずだけど、生憎、空は視界一面の群青色だ。

台風よりは断然良いに決まっているが、強烈な日差しを隠してくれる雲はひとつもない。

木陰を探しながら歩くのは骨が折れる。こんな日は外出なんてするべきじゃない日だと思う。

「かーくん！あーちゃん！はやくー！」

「待ってよ、はぐー！」

「おーい、二人ともあんまり走んじゃねーぞー」

—— そんなのをお構いなしに日向の中を駆ける二人を、あたし——

—— 市ヶ谷有咲はひーひー言いながら追いかける。

前を走るのは戸山香澄と北沢はぐみ。

花咲川屈指ハナヅクのアウトドア連中の相手はインドア派一人で相對するのは間違いなく自殺行為だ。賢明なあたしは、ゆっくりとその後ろを歩いてついていく。

「お祭りって本番も楽しいけど、準備している風景って、見ているとワクワクするよね！」

「わかる！文化祭の準備みたいだよね！有咲もそう思うよね！」

「あー、まあ、確かにわからなくはないな………実際にやりたいかって言うと話は別だけど」

この通り、あたしたちは夏祭り……の開催予定地に来ている。

一ヶ月ほど前に香澄は神社の祭りに参加したらしいけど、今日は別の神社で開催されるものだ。

この前も Poppin<sup>ポピ</sup>, Party<sup>パ</sup>で花火大会に行ったばかりだ

と言うのに、香澄が「今度ははぐも一緒だから行こう！」なんて性懲りもなく家に押しかけに来たため、こうしてなし崩しについてきてしまっているわけだ。

ちなみに、真昼間から向かっている理由は聞かされていない。香澄と北沢さん、この二人から懇切丁寧に経緯を教えてもらおうとすること自体、余計な体力を使うだけだから深くは追及することはしなかった。

……とは言え、さすがに何か理由がないと踵を返したくなるほどの熱気だ。

「で、北沢さん。あたしたちってどこに向かっているの？」

「かーちゃんのところ！」

かーちゃん……母ちゃん、か？

そう言えば、今日の夏祭りは商店街の組合が主導となっている、なんて話をばあちゃんから聞いたような、そうでないような。

「ふーん、北沢さんのところも店出してるのな。やっぱりステーキ串とか？」

「え？うん。はぐみのところも出してるよ？それがどうかしたの？」

「ん？いや、まあ、そうなんだなーって思っただけ」

どこか違和感がある会話だったけど、北沢さんは家が露店を出しているから、その手伝いがあるから早めに現地に来た、ってところか。以前、商店街の人達には世話になった恩がある。なら、この炎天下でも手伝いをするのも吝かじゃないな。

「かーくん、見つかった？」

「うーん……見当たらないな……結構目立つと思うんだけど、有咲はどう？」

「いや、あたしわかんねーし」



「というわけで、かーちゃんだよ！」

「紹介された。よろしく頼む」

「え、その………よ、よろしくお願いします………」

北沢さんの母ちゃん………ではなく、北沢さん称「かーちゃん」の紹介を受けたあたしはぎこちなく返答する。残念なことに、猫を被る暇すらなかった。

仕方ないだろう。「かーちゃん」と聞いて、それが男性なんて思い浮かべるわけがない。

………加えて、この人、雰囲気怖い。

二頭身くらい身長差あるし、キツとした目であたしの目を見て、一切逸らそうとしないし、しかも、ずっと無表情だし………。

大袈裟、なんて言うやつはこの状況でこの人相手に「うふふ、ごきげんよう」とか言ってみろ。あたしには絶対に無理だ。

「お久しぶりです！あたしのこと覚えてますか？」

「？ すまない。どこかで会ったか？」

一方、香澄はというと、件の男性に話しかけていた。こいつ、かなり顔が広いから顔見知りでも驚かないけど、相手はどうやら会った覚えがないみたいだ。

「………えーと、じゃあ、よっこいしょ」

ほんの一瞬、困った表情を見せた香澄だけど、何を思ったのか、頭にある「耳みたいなやつ」を両手で隠した。

………まさか相手が気づいていない理由がそれだと思ってるのかこいつ？

「おい、待て香澄。北沢さんじゃないんだから、そんなことしても――

「ああ、香澄か」

「ピンポーン！正解です！やった！覚えててくれたんですね！」

——それでわかんのかよ!!?

と、喉まで出かかっていた言葉を必死に飲み込んだ。初対面の人に対してツツコミを入れるほど、あたしはアホ……こほん、大胆にはなれない。

「いや、気づかなかった俺に落ち度がある。責められても仕方あるまじい」

「そんなことしないでですよ！はぐも初めは気づかなかったもんねー！」  
「ねー！」

……ああ、このやり取りだけではまだ判断するのは早計かもしれない。けれど、多分、この人もしかしたらあの香澄と北沢さんと同類じゃないか？

香澄と北沢さんはあっはっは、と笑い合っていて、彼……ああ面倒くさい、かーちゃんは鉄面皮だけど、とにかくこっちは苦笑いしか出てこない。

第一、なんで香澄が「かーくん」で、この人が「かーちゃん」なんだよ。前例からして名前から文字って「なんとなく」決めているんだらうけど、普通逆じゃないのかよ。

「で、俺に何の用だ。まだ開店前だぞ」

「えっとね、かーちゃんが今年はどうな屋台出すのか気になっちゃって、つい早めに来ちゃった」

「向こう見ずさは相変わらずか……串焼きだ。紆余曲折あったが、今年はこれに落ち着いた」

「あ、ほんとだ！屋台の看板にも書いてありますね！」

つられて見上げると、——準備中だったため、全体像は把握できなかったけど——、屋台の骨組みに掲げられた看板には『串焼き』と言う文字が確かに綴られている。

北沢さんの聞き方からして、この人は毎年屋台出しているみたいだ。

「うー、あたし去年、夏期講習で行けなかったんだよねー……去年は何だったんですか？」

「たこ焼きだ」

「すつごく美味しかったよ！かーくん、一昨年は行けたの？」

「勿論！タイ焼きは食べたよ！」

あれ、毎年同じ屋台やっているわけじゃないのか。過去のラインナップを聞く限り、意外とまともなチョイスだ。もしかしたら、同類と思ったのは早合点だったかもしれない。

最近、奇人変人に囲まれる機会が多いせいかな、もしかしたら感覚が麻痺している気がする……やば、目頭が痛くなってきた。

………つーか、あたし、蚊帳の外になってないか？

初対面の人がいるからツツコミ遠慮してたけど、さつきから一言しか話してないぞ？

「苦労しているようだな」

「あ、いえ………」

身の振り方を完全に見失ったあたしに気づき、声をかけてたのは、意外にもかーちゃんだった。

「なにになに？有咲どうしたの？そう言えば、さつきから静かだよね？お腹減ったの？」

「いや、お前じゃねーから、そんなことで黙るかっつーの」

「違うぞ、香澄。単純に話について行けていないだけだ。昔話に花を

咲かすのもいいが、話について行けない人間がいることを失念していたようだ」

「なっー！」

……………いや、待て。

そう言うのって、知った上でさり気なく話を振ってくれるものじゃないのか？わざわざ『こいつ仲間外れだぞ』って言うのか？

「うう、寂しくさせてごめんね、有咲あ…………」

「ごめんね、あーちゃん。はぐみ、これから気をつけるね！」

「だあああっ！だからっていちいちくっつくな！暑苦しいだろ！」

「それにしても、ここに来るのが随分と早いな。俺以外にも他に用があるのではないか？」

いや、あんたは謝らないのかよ。

と、そんなツツコミも喉元でせき止めた。何度も明言するけど、あたしは初対面の人にツツコミを入れるほど非常識なつもりはない。

でも、確かになんでこんな時間に連れて行かれた理由は気になる。なんだかんだで聞きそびれていたけど、本当に商店街の人達の手伝いのために来たのか？

「はっー！そうだ、はぐみはとーちゃんの手伝いにきたんだっ！」

「はっー！あたしも太鼓の準備に行かないと！」

「当初の目的見失いかけてんじゃねーか」

本当にこんなところで油を売っている暇なんてなかった。そもそも、あたしが着いてくる意味なんてなかったじゃねーか……………まあ、勝手な思い込みをしたのもあたしだから、全面的に責められないけどな。

一方、〃かーちゃん〃は不意に参道と平行になるように腕を掲げる。指し示す先には、この神社のシンボルたる鳥居があった。

「はぐみの父なら神社側よりの屋台にいたな。香澄の向かう先と同じ方向だな」

「そうなんだ！ありがと！かーちゃん！」

「礼には及ばん。それより、香澄は太鼓の方に行く用事があるのか？」

「ふっふっふー、実はあたしも今年は叩くんですよー！」

「ほう、そうか」

かーちゃんは感心している……ようだ。

香澄の話によると、別の神社でお祭りをやった時に宇田川さん(姉)たちと太鼓の演奏をしたそう。その時の演奏が意外にも好評だったそうで、こうしてこのお祭りにもお呼ばれされたらしい。

……さらに余談だけど、演奏も素晴らしかったけど、香澄たちが太鼓を叩きはじめると雨が止んだらしい。

とうとう起きたまま夢を見られるようになってしまったか、とも思った。

けれど、一緒に演奏したとされる奥沢さんが、やたらと疲れた表情していたのを見かけたこととなるあたしとしては、これ以上は詮索するべきじゃないと断定させた。

「神社には巴と沙綾がいたな。お前らもそちらに向かうといい」

「ありがとうございます！」

「でもでも、こころんとも合流しないとだよね」

「げ、つ、弦巻さんも来るのか？」

弦巻さんがこつちに向かっているという情報だけでもつい身構えてしまう。

香澄と北沢さんと弦巻さん。この三大巨頭をひとりですり取り合えないといけないのか？

「もう一人友人がくるのか」



「うん、そろそろこっちにつくと思うんだけど……」

急激に帰りたくなってきた。

弦巻さんのリズムジンの中に奥沢さんが一緒にいることを祈る。そうじゃなかったら帰る。香澄たちが悲しそうな顔をしようが……しようが……ああもう！

「ちつくしよー！どうすりやいいんだよ!!」

と、あたしじゃないどこかで、そんな悲鳴が同調した。

……待て、あたしは何も言っていないぞ？

声のした方向を振り向く。そこには参道の外れで屈強な中年男性たちが頭を乱雑に掻いている後姿があった。

「なんでまとめて置いておいたガスボンベが全部寝かされてるんだよ!?!」

「知らねーよ!?!ちよつと目え離れた隙にこうなってたんだよ!?!ったく、誰がやりやがった、こんな地味な嫌がらせ!」

「よつ、つつ、結構腰に来るな、これ……おい!誰か起き上がらせるの手伝ってくれー!」

多分、屋台の店主たち専用を利用するプロパンガスのボンベをひとまとめにしておいたのだろう。

ただ、それがひとつずつ丁寧に、寝かされていて一列に並べられていた、つてところだろう。

……いやいや、待て。

どうやったらそんな状況になるんだよ?ドミノ倒しになってガス漏れとかしてたら大惨事になるから、良かれと思って寝かせておいたのか?親切なのかいたずらなのかわかりにくいな……

「……………すまない。席を外す」  
「うん、行つてらっしゃーい！」

それを見かねたのか、かーちゃんはあたしたちを置いて現場に向かった。その後ろ姿を見送るけど、あたしとしては少し心配だ。

「おい、大丈夫なのか？」

「かーちゃん、ああ見えて力持ちだからね。すぐ戻ってくると思うよ？」

あの服越しからでもわかるくらいの細腕でか？

まあ、見かけによらないといえば、そうなのか？

「みんな、ここにいたのね！」

「あつ、こころん！やつほー！」

かーちゃんと入れ違う形で現れたのは、件の問題児。

すかさず辺りを見渡す。

奥沢さんは……………いない。例の黒服の人たちが遠くで見守っているだけだ。マジか。この場はあたしだけで乗り切るしかないのかよ……………。

「それにしても、お祭りつてすごいわね！どこもカンカン音がなつて、こつちも楽しい気分になつてくるわ！お祭りの前には演奏会もするのね！」

「いやいや、演奏会じゃねーつて！まだ準備してるだけだからな！本番は夕方からだから！」

「あら、そうなの？だったら、これからこれ以上楽しいことが待ってるのね！ワクワクしてきたわ！」

そもそも現状すら理解してなかった。

前に香澄たちと屋台巡ったはずだよな？だとしても、準備中だつてことは一目見ればわかるよな？毎度、こっちの常識が通用しないな……。

そんな時、北沢さんのアホ毛が動いた……ような気がした。

「あつ、とーちゃんの声が聞こえた気がする！ごめん！はぐみ、ちよつと行ってくるね！」

「あたしも行くわ！はぐみのところのコロツケが食べたいの！」

「あつ、あたしもー！有咲！行ってくるねー！」

「いや、さすがにこんな時に用意してないだろ……つて、おーい！」

一目散に鳥居の方へと駆けていく問題児たち。

自由奔放さに呆れながらも、難を逃れられたことに安堵するような、そんな溜息が溢れた。

……あれ、おかしいな。

なんかこの状況にデジャヴを感じると思ったら、この前の花火大会と同じだ。香澄とりみがどっか行つて、おたえと沙綾とはぐれて、結局ひとりでとつておきの場所に行つた時だ。

……なんだよ。また、香澄はあたしを置いて――

「あたし、ひとりぼっちじゃん」

「寂しいのか」

「まあ、ちよつと……つて、はへ!？」

背後からの完全な不意打ちに変な声が出る。

勢い良く振り向くけど、不幸にも足がもつれてしまった。

ちよ、ま、ま、と、後ろに倒れてしまいそうな時、あたしの腕を救いの手が掴んだ。それはかーちゃんではなく、ポニーテールが揺らめく見慣れた顔だった。

「……………つて、沙綾？」

「やつほー。有咲たちが来たって聞いたからこつち来ちやつたんだけど……そんなに動揺して大丈夫？」

「うっ、うるせー！」

あ、やべ。せつかく助けてもらったのに礼言えなかった。あ、あとでタイミング見計らって言おう。うう、絶対からかってくるよな、沙綾のやつ。

コホン、とわざとらしい咳払いで話を切り替える。今はそれどころじゃない。

「あー、いや、その、ほんと来てくれて助かる。あたしだけじゃ、あのお転婆三人衆の手綱を握るの無理だって」

「加えて、初対面の人間と二人きりになる場は避けられたな。良かったな」

「うっ、いや、あの、その……」

あれ、あたしは皮肉を言われているのか？

この人、さつきからあたしに対してさらっと毒吐いてくるし……もしかして、何か失礼なことしちゃったか？

そんな罪悪感を胸に自らの行動を振り返るも、思考はぐるぐると空回りするばかり。

別に嫌悪しているわけじゃない。

ただ、香澄たちの知り合い、みたいな微妙な距離感にいる年上の男性との接し方なんてわからないから、ここまでまごついているだけなのに……。

「……有咲。猫かぶるのはさすがに相手が悪すぎるよっ」

「ち、ちがつ！そんなんじゃないって……」

「いや、それ以前の問題だ、沙綾。俺は所詮『友達の知人』に過ぎん。こういった紹介の仕方をされた経験が少ないためか、単純に距離感を測りかねているだけだ」

「だあー！さつきからなんで人の心の中読んでくるんだよ！……  
あつ、す、すみません」

思ってるそばからやってしまった。

ちくしよう……今日は本当にペース崩されてばつかだ……沙  
綾のやつ、なんか腹抱えながら必死に笑いこらえているし、なんなん  
だよお……助けろよお……。

「……何を気にしているのか理解できないが、敬う気もない相手に敬語など、果たして使う意味があるのか？俺としては随分と奇怪に思えてしまう」

「え、えつと、有咲？たぶん、『変に気を使って敬語とか使わないで、有咲が話しやすい方法で話していいよ』って言いたいんだと思う………んですけど、どうですか？」

「む、妙だな。俺としてはそう言ったつもりなのだが………伝わってないのか？」

「わかるか！……いや、わからねーですよ！ああもう、どうすりゃいいんだよー!!」

真夏の昼下がりに、今日一番の声が出た気がした。

なんかもう疲れた  
閑話休題。

気を落ち着かせるため、と、かーちゃんから手渡されたラムネを口に流し込む。

喉元で弾けるようなキンキンに冷えた刺激が、熱暴走を起こしかけていた頭を急速に冷却していく。

………ちなみに、沙綾が「夏はこれに限るよね〜」なんて言いながら一緒にラムネを飲んでるけど、あたしはそっぽを向いている。根に持ってやるぞ、こんにゃろー。

とにかく、ラムネのお礼に加えて、今後の接し方についても確認を取ることにした。

「ま、まあ、年上なんで、さすがに敬語は使わせてもらいます。すみません」

「謝罪は求めているが、まあ、好きにするがいい。ああ、それと、これからも沙綾たちや俺の従妹いもつととも仲良くしてもらえると助かる」

「妹？それって、誰の——」

「あつ、香澄たち戻ってきたみたいだよ。おーい！」

ようやく会話が成立しかけてきたところで、沙綾からあのお転婆たちが戻ってきたと報告が来た。

この居た堪れないような空気から開放されることに嬉しくなる一方、今度は天然ボケ三人、いや、四人衆を相手にしないといけないと思うと一層ゲンナリする。こっちは今すぐこの場を離れてエアコンの効いた部屋に入りたいうつてのに……………。

「あーもう、またかよ、ちくしょう!!」

と、またまたそんな悲鳴が同調した。ちなみに、あたしは何も言っていない。

声のした方向は、先ほどのガスボンベの場所とは反対だった。今度はなんだと振り向いてみると、思わずぎよつとしてしまった。

「おい、誰だ！こんなの建てたやつは！お前ら、ちゃんと見張ってたのか!?!」

「だから知らねーよ!?!ああ、くそつ、妙に完成度高えから、どこから崩していけばいいかわかんねえぞ!?!」

「待てバカー！下から取るのはやめろよ！軽いとはいっても、落下で怪我なんかしたら洒落になんねーからな！おーい、誰かー！背の高えやつ寄こしてくれー!」

助けを求める声があった方向は、参道の途中の広場。

比較的スペースのある敷地に、工事現場とかで頻繁に使われる赤い

カラーコーン——のみで作られたピラミッドが建設されていた。

高さにしておよそ3メートル以上はある。こういうのは、本来であれば積み重ねられないような設計をされているはずだけど、どういふことか絶妙なバランスで奇跡的に形を保っていた。

「……………行ってくる」

「な、なんか変なイタズラばっか起こってるな。ガスボンベの件といい、毎年こんな慌ただしいものなのか？」

「い、いや？あたしも毎年参加してるけど、こんなイタズラ初めてだよ？」

「よくわからんが、誰かの意図を感じるな。お前たちもはやく場所を移すといい」

そう言い残し、彼はピラミッドの方へと走っていった。あの人もあの人なりに苦労してるんだな、なんて思いながらその背中を見送るところとした。

……………さて、と、あたしも自分の仕事に戻るとするか。

反対側からやって来る二つの人影に目を向ける……………あれ、二つ？

「ありしやー！さーやー！はいっ！コロッケあげる！」

「うわっ！マジであったのかよ!？」

「すごかったわ！何もないとこころからコロッケが出てきたのよ！きつと、はぐみのお父様は魔法使いなのね！」

「もうあたしツツコまねーからな……………って、あれ？北沢さんは？」

「はぐみなら、そのままお父さんのお手伝いに行っちゃったよ？有咲たち、コロッケいらないの？」

「いや、そんな気分じゃねーわ。沙綾、食べていいぞ」

「うーん、あたしもちよつと遠慮しようかな……………」

そっかー、なんて少し残念そうな表情をしながら余ったコロッケを

弦巻さんとはんぶんこする香澄。こいつらは後で演奏するからいいとして、あたしたちはこんな猛暑の中で食べられねーよ。北沢さんには悪いけど。

まあ、あとでお礼を言いに行くついでに様子見に行くとするか。

「そっちはどうしたの？なんか慌ただしいけど……」

「えーと……ああ、なんか説明するのもめんどくせー。とにかく、あの人はあっちのピラミッドを壊しに行った。あたしたちは放っておいていいみたいだし、先に行こうぜ」

「び、ピラミッド!?すごーい!壊すなんてもつたないよー!」

「す、すごいわ!!文化遺産を破壊するなんて、これがロックっていうのかしら!?みんなも行きましよう!!」

いや、本物じゃねーし、こんなロックがあつてたまるか……なんて考えていたら香澄と弦巻さんは子どもみたいにあたしの腕を引つ張ってくる。

「……ころ様」

制止をかけたのは沙綾ではなく、いつの間にかあたしの背後にいた例の黒服だった。

「ごちらにも同様のピラミッドをご用意いたしました。目的地である本殿道のりまで続いておりますので、そちらをご覧になられてはいかがでしょうか?」

「あら?あつちもすごいわ!みんな!こつちに行きましよう!」

弦巻さんが指差す方向には確かに同じピラミッドが神社の鳥居まで続く形で数棟ずつ直線上に並んでいた……というより、現在進行形で並べていた。もしかして、さっきのガスボンベもこの人達の仕業か?



普通に迷惑だろ、なんて考えていたら、いつのまにかアホ二人は走っていつてるし……なんかもう疲れてツツコミが追いつかねーわ、どうすんだこれ。

「とりあえず、私達も行こっか?」

「お、おう」

まあ、方向としては目的地に向かう形になるので、あたしたちも付いていくことにした。あたしとしてはさつさと待合室か何かで休みたい。

その後、屋台が営業する頃にまた、北沢さんやかーちゃんのところに挨拶にいけば……ん?

「あれ?」

「どうしたの?」

沙綾があたしの顔を覗き込んでくる。

……そう言えばというか、肝心なことを聞き逃していた。

「結局、あの人ってどこの誰なんだ?」

あたしとかーちゃん、北沢さんの紹介があっただけで、お互いに自己紹介していない。

つまり、お互いの本名すら把握していないじゃないか。

「……………和那さんもだけど、有咲も大概だったね」

「待て、沙綾。そのトーンはマジで傷つくからやめろ」

勝手に沙綾に呆れられている理由はわからないのに、理不尽さを感じないのは何でだ。

つーか、あの人、カズナって言うのか……………やっぱり、かーちゃん

呼びはしつくりこないし………い、いきなり名前呼びはハードル高いよな。名字聞こう、名字。

——そして、沙綾から名字を聞いたとき、あたしは二度目の叫び声をあげることになるのであった。

16話 響け、届け、この——（前編）

カラン、コロン、カラン、コロン。

鈴虫の鳴き声が遠くで響く。

植え込みの草木から発せられる、ジメツとした土のおい。

カラン、コロン、カラン、コロン。

街灯の光が足元を照らす。

夜に溶け込んでいた黒塗りの下駄からは、歩みを進めるごとに、そんな軽快な音を立てながら——

「もお〜！走りにくいよ〜！」

訂正。駆け抜けようとしていた。

夏の風情を感じながら、ゆるりと散歩できれば良かったけど、残念ながらそんな余裕はなかった。

朝は部活の練習試合。

昼は臨時で入ってしまったアルバイト。

二つの試練を乗り越えて、夕方になった。

育ち盛りの若い体に鞭を打って、わぎわぎ家に戻ってお色直しをしてきたけど……正直、シャワーを浴びた後なんて、ベッドに倒れ込みたいたい誘惑を振り切るのに苦労した。

「が、頑張れ、私……ここが正念場なんだからー！」

えい、えい、おー！

……と、心の中で奮起しながら小走りで駆ける。

当然、同調してくれる人は誰もいない。

全ては今日のために仕立てたこの装いを見てもらうため。たとえハプニングはあっても、ここで折れては女の恥だ。

今日で一キロくらいは痩せたと考えれば、弱音は充分に飲み込める。

前を向く。

既に夕陽は沈んだはずだけど、まるで地平線に沈もうとする太陽のように淡い光を放っている。

あれこそが私の目指す目的地。

灯りに近づくとつれて、鈴虫の音色から重々しい打楽器の音色に上書きされていく。

——ああ、今年も祭りが始まったんだなあ。

心も体も浮かれているのか、慣れない下駄でもどこか足が軽くなってきた気がした。



笛の音、太鼓の音、それにつられるように溢れる人々の喧騒。

陽は落ちてても、参道は提灯の中の白熱灯が足元を照らす。空は月の光さえ差し込まない暗闇でも、この場は白昼と何ら変わらない賑わいを見せていた。

かくいう俺も、その一角で店を構える者のひとりだ。アルミ製の簡素な骨組みで形作られたテントから眺める雑踏。

あれに揉まれるのは苦勞しそうだ、この場にいるはずの誰かに同情した。

……もつとも、こちらが良い環境とは言い難いが。

黒く焼き焦げた鉄から伝わる熱気。

行き場を失い、空へ立ち昇る湯気。

それらが体中に纏わり、発汗を強制される。

少々不快だが、作業に支障は無い。

裏返す。

裏返す。

裏返す。

時間さえ正確でさえあれば、後は単純作業の連続だ。

判断能力にも衰えはない……が、念には念を。水分の補給は必至だ。

そして、出来上がったものはガラスケースに入れる。

積み上げたせいで、串同士が付いてしまうのは避けたいので、この日のために作った簡易的な台に差し込む。素材は勿論、万能素材と名高い段ボールだ。

……よし、出迎えの準備はできた。

今年も、この狂騒を思い出として刻む一助をしよう。

「すみません、ワツフル一本ください」  
「承知した」

——さて、祭りの始まりだ。

「待って、ねえ、ちょっと待って」

まあ、すぐに水を差されたわけだが。





なものを選べ」

「やった！ありがとう！お兄ちゃん！」

「まあ、貰うけど……それ、売れてるの？」

「順調だ」

まだ始めたばかりではあるが、滑り出しとしてはかなりハイペースだ。例年、物珍しさ故に足を運んでくれる固定客が真っ先に訪れてくれたこともあり、驚くことに既に在庫の三割は捌けているのだ。

「物足りないようなら、隣で売っているアイスを買おうといい。さすがに上に乗せられないが、少し溶けたものをつけて食べるのも一興だぞ」

「あ、いつもの黒服さんだ」

俺が指差す隣の屋台には、いつも鼻屑にしてもらっている黒服の男。つぐみが会釈すると、いっぞやの時のように、黒光りするサングラスを輝かせながらサムズアップを返す。

売れ行きが良くなっている要因としては、やはり隣の屋台との相乗効果によるものが大きい。今回はタッグで屋台を出しているようなものだ。

「……………つぐみ、何があったの？和那がなんか思ったより真っ当に商売してるんだけど」

「えつとね、それは——」

「お————っす！二人とも楽しんでるか——!?」

「あ、巴ちゃん！」

と、ここで乱入者が現れる。

普段は流している長髪を縛り、青い法被に身を包んだ戦闘態勢の巴だった。

「巴、声大きい」

「あ!? 蘭、何か言ったか!?!」

「声が大きいって言うてんの! 耳元で大声出さないでってば!」

何やら蘭と言いつ合っているが、いつものことか、と意識を外す。

俺もいつまでも手を休めているわけにもいかないの、用件を片付けてしまおう。

腰を落とし、用意していた紙袋をいくつか取り出す。中身は店頭に並んでいるものと同じものだ。

「ご苦労だな、巴。差し入れを用意した。演奏の待機組にも分けるといい」

「おっ! サンキュー、カズ! あれ、これって……」

「串焼きだ」

「って、ワツフルかよ!?! いやー、一本取られたぜ! はははは!!」

「と、巴ちゃん、すごい浮かれてるね……」

「つぐみ。もう放っておこう。それより和那でしょ。これなら、初めからワツフルで申請すれば良かったじゃん」

蘭が食べながら独りごちているが……ふむ、確かにその通りだな。

「目聡いな、蘭。さっきの言葉を訂正しよう。白状すると、俺も強引なこじつけだったと思っっている」

「えっ?」

きよとん、とする一同。

そこまで意外そうな顔をされると反応に困るのだが……ひとまず気にしないように事の経緯を話すことにした。

「当初やろうとしてたことが、開催直前に駄目と言われてしまったな………用意していた材料を使うとなると、ワツフルれしかなかったの



だ」

昨日の朝のことだった。

当日に向けて注文した材料を確認している最中に、組合長から問い合わせがあった。

内容を要約すると『やることはわかっているけど、結局どんな食べ物使うの?』とのことだった。

曰く、今年からアレルギーに対する配慮の一環として、屋台の見やすい場所に使っている食材を表示することになったが、俺の申請書だけではどのステッカーを用意すればいいかわからないため、連絡したそうだ。

で、俺が当初計画したことを伝えると、『さすがにそれは許可を出せない』と言われてしまったのだ。

当然、強行なぞするわけもなく、しかし食材の用意は終わってしまったわけで……色々と模索した結果、ワッフルに方向転換することにしたわけだ。言わば、苦肉の策だ。

「じゃあ、お兄ちゃんは何をやるうとしてたの?」

「それは変わらない。串焼きだ」

その軸は変わっていない。

俺としては、もっと手間をかけたものを出したかったただけだ。

串に刺すのではなく巻き付け、何層にも織り重ねていく――

「……………何を焼くつもりだったの?」

「――バウムクーヘンだが?」

「それ串じゃなくて筒じゃん」

予想通り、組合長と同じ指摘が蘭から飛んできた。

組合長からは、『使い捨ての筒がポイ捨てされたりしたら、踏んで転ぶ人がでるだろう』という至極当然な意見があった。完全に盲点だった。己のチャレンジ精神に邁進し過ぎてしまい、事後処理への配慮をすっかりと失念していたわけだ。

「あちやー、そつちだったかー！アタシ的にはそつちの方が良かったのになー！やっぱ何事も大きいのはいいことだよな、うん！」

「つぐみ、助けて。巴がツツコミしてくれない」

「わ、私？ええと……ば、バウムクーヘンをするなら屋台じゃ火力が足りないと思うよ、お兄ちゃん！」

「え、嘘でしょう？これ、全部あたしがツツコまないといけないの？」

蘭が何やら怖気づいているが、祭りで浮かれきった巴にツツコミ役を任せるのは荷が重いだらうに。

さんねんだったな  
閑話休題。

「さて、なぜ俺が商売熱心なのか、だったな」

「あ、そんな話だったな」

他に来た客を捌きながら話を続ける。

俺個人としては商売熱心のつもりはないのだが……まあ、一昨年や昨年よりも気合いを入れているのは確かだな。

「ねえ、蘭ちゃん。そもそも、なんでお兄ちゃんが屋台出してるか知ってる？」

「え？それは商店街が主導だからじゃ……」

「うん。出し始めたのは一昨年からで、その一年前に何が起こったか、覚えている？」

「……………あっ」

蘭は察しがついたようだ。念の為、つぐみが一連の出来事の経緯を

説明する。

一度、巴の誘いで太鼓の演奏に参加させてもらったことがある。忘れもしない。俺が高校最後の夏休みのことだった。

青春の最後のページ。華を持たせてやろう、と与えられた機会。せつかなので一枚噛ませてもらった。

巴の見様見真似で、舞台に立ち、撥を持ち、渾身の一撃を和太鼓に見舞う——それで終わるはずだった。

——突然だが、皆は夏祭りに足を運んだ時、敷地の端にいても和楽器の音が聞こえた経験はないだろうか。あれは、演奏を万遍なく届けるために各地にスピーカーを忍ばせているからなのだ。当然、マイクは演者の近くに設置される。これが問題だった。

「俺のソイヤがこの音響機器を全て破壊してしまった」

「え、あの事件、あたし今までずっと夢だと思ってたんだけど……」  
「現実だよ。信じられないかもしれないけど、現実なんだよ。蘭ちゃん……」

当日、同日に開催された花火大会の花火の音に紛れて、俺のソイヤが街中に響きわたったらしい……音響設備の爆発音とともに。

こと、音楽に関する才能はないに等しいはずなのに、声量だけは常軌を逸していたらしい。

「そろそろ完済できそうなのでな。今年で全て精算しようと言う魂胆だ」

「完済って……和那って借金あったの!？」

頷いて肯定する。

とはいえ、保証付きで貸与されたものも混ぜていたので、組合が所有していた割合のみの負担であるが。

「皆『弁償しなくていい』って言うてるのに、こいつが払うって言うて

聞かなくてなー」

「俺のソイヤが原因となって出た犠牲だ。ならば俺が債務を負うのが道理のはずだ」

組合側も未成年に借金させるつもりはないと意志が固かったため、最終的には〃何年か祭りで出店を出して、売上の一部を組合に寄付する〃という形で落ち着いたわけだ。今の巴のように皆呆れていたが……まあ、その経緯まではどうでもいいか。

「とにかく、今年はそれに向けてかなりの在庫を用意している。おそろく、今日はずっと居座ることになりそうだ」

「なら私が手伝うよ！お兄ちゃんひとりじゃ、休憩も取れないでしょ！」

「申し出はありがたいが、無駄なことはするな。ここにいたところでお前にできることは何もない」

「……………むう」

提案を跳ね除けられたつぐみは、わかりやすく頬を膨らませた。

「巴。あれって単純に『二人分入るスペースがないから、居たところで邪魔になる』って意味でいいの？」

「ああ。つぐみに気を遣っているつもりだぞ」

「……………じゃあ、つぐみが不満そうなのは？」

「事情はわかるけど、単純に頼ってくれないことにむくれているだけだな」

「うっ…………二人とも、どんどん鋭くなってきたくない？」

「和那はともかく、つぐみは結構わかりやすい方だし」

「だな」

それには俺も同意する。

俺としてはその二人も充分わかりやすい方だと思っているのだ

が、それも言う必要はないか。

「じゃあ、せめて写真で宣伝してあげたら？ SNSのアカウント共有してるんでしょ？」

「あ、そうだね！さすが蘭ちゃん！」

「俺は羽沢珈琲店として出店しているつもりではないのだが」

「細かいこと気にすんなよ！つぐの気持ちも汲んでやれって！な！」

「……………そうか、好きにしろ」

それでつぐみが満足するのであれば仕方ない。

作業をする手を止め、つぐみが掲げるスマホのカメラに体を向ける。

「じゃあ、撮るよー」

「よっしー！バシツと決めろよー！」

撮影……………撮影、しかも、バシツと、か。

ふと、以前ひまりに写真を撮ってもらった時のことを思い出した。ありのまま自然体を写すのも一興だが、せっかく被写体としての心構えを学んだばかりなのだ。ここはひとつ実践してみることしよう。

あの時、様々なポーズを試したが、中でも妙にしつくりと来たもの二つあった。

一つ。両腕を天に掲げ、片足を折り曲げてへその高さまで上げる。手首は直角に曲げ、しかし背筋を伸ばす、このポーズ。

縁も縁もないはずなのに親近感を覚えるこの構えだが、なぜだかひとりではやってはいけない気がしたので除外した。

ならば、もう一つのをやろう。

足を内股のまま片足を膝から直角に折り曲げる。

脇を閉め、手は親指と人差し指以外は握りしめ、指先をカメラに向ける。

仕上げにウイנקを添え————完成だ。

パシヤリ、と無機質なシャッター音が落ちる。

それに伴い、形容しがたい達成感に包まれる。

自分を普段より良く魅せる……という習慣がなかったためか、実に新鮮な心持ちだ。

それでこそ、丸山彩<sup>ッ</sup>に教わった甲斐があったというものだ。

「また変な影響受けてる……」

「彩さん、和那に何したんだろう……」

これこそ、本人直伝——他称「彩ポーズ」である。

……こうしてあげられた写真は、数分も立たないうちに、本人より拡散されることになるのであった。



未だ鉄板は熱を帯びる。

つぐみたちは『他の屋台とか見に行く』と言い残して去っていったが、俺の戦いはまだ折り返し地点だ。

『そう言えば、モカとひまりはどうした？一緒じゃないのか？』

『二人ともバイトだつて。終わつたら合流する予定だから、もし会つたら本殿のところで合流しようつて言つておいて』

去り際にそんな質問を投げかけると、ついでと言わんばかりに伝言を依頼された。あの食いしん坊の二人なら、間違いなく俺の店に立ち寄る、と想定した上での頼みごとなのだろう。

当然、断る理由もなかった……のだが、先程の宣伝効果のおかげか、客足は一層増えていく一方だ。

時折、見知つた顔を見かけることもあつた。

「あ、カズ兄！三本ちよーだい！」

「あこか。巴たちにはもう渡したぞ？」

「ううん、今日はりんり……じゃなくて、Roseliaの人と来てるんだ！本当なら食べ歩きできれば良かったんだけど……」

「そう言えば、人混みが苦手な者がいると聞いたな。心得た。ではこれを持っていくといい」

「わーい、ありが……こほん、これは貸した。此度は妾も矛を納めるが、次に貴様が顔を見せたときこそ、それが貴様の最期に——」

「もう一本追加しておこう。代金はいらん」

「やったー!!」

「あ、カズナさん！助太刀します！」

「必要ない。助けを求めた覚えはないぞ、イヴ。

……いや、せつかく友人を連れてきているのに、それを放つておくわけにもいかないだろう。俺としては、お前には祭りを楽しんでもらえると嬉しい」

「は、はい！出過ぎた真似でした！ありがとうございます！」

「い、いや。すみません、イヴさん。何か気を遣つていただいて……」

あ、ジブン、大和麻弥です。よろしくッス」

「ふむ、そうか。忠告だが、自堕落な生活は改めておいた方がいいぞ。

今は問題ないようだが、気の緩みが積み重なるとその身が贅肉に包まれると思え」

「初対面なのにすごい失礼ですね!？」

友のために奮闘するあこや、ゲストとして訪れたイヴ、そして、不思議と親近感を覚えてしまう大和麻弥。

客足が多かったために、長い間話することはできなかったが、それでも見慣れた顔を見るのは嬉しいものだ。

そして、もう一人――

「あら、貴方は……………」

いつの日だったか、墓参りの日に俺が落とした花を拾ってくれた女性がいた。

……………あの短いやり取りでも、お互い顔は覚えていたようだ。

「屋台、出してたんですね」

「ああ、こちらも事情があつてな」

「……………あの後、どうになりましたか?」

「問題ない。無事に渡すことができた」

ぽつぽつ、そんな受け答えばかり。

一つの話題で二言目以上のやり取りがない。互いの言葉は辺りの喧騒が塗り替えられそうになるほどに希薄な意思疎通が続く。

「気まずく感じてしまったのなら謝罪しよう。元より口数が少ない方でな」

「い、いえ、私も同じようなものなので」「そうか」

確かにひまりや巴、あこ、イヴのような活発さよりも、蘭のような



落ち着いた雰囲気をしているようにも見える。

……ただ淡々と焼くのも少々手持ち無沙汰か。

苦手なのだが、いつかは克服しなければならぬことだ。

しつかりと会話を試みてみることにしよう。

「今日はひとりか？」

「今はそうですね。あとで家族と合流する予定なのですが」

「家族、か。兄弟か？」

「……ええ、まあ」

ほんの一瞬、視線が泳いだ。

……これは早速、触れてほしくないところに触れてしまったか。

「なるほど、少しばかり複雑なようだな」

「どうなのでしょう。個人的には、昔よりは良い方向に向いている……と思いたいのですが」

「事情はわからんが、そう口にすることができれば間違いなく良い傾向にあるのだろう」

もつとも、俺もあまり他人のことを言えるわけでもないがな、と付け加える。

すると、相手は僅かに目を丸くさせた。

「貴方にもご兄弟がいらつしやるのですか？」

「従妹が、な。時間が空いては店を手伝ってくれる、俺よりも遥かに出来た従妹だ」

「妹さんが……なるほど。それに、普段もお店も開かれているんですね」

「これでも商店街で店を構えてもらっている者だ。気が向いたときにも立ち寄るといい。歓迎しよう」

今日は元より個人で開くつもりだったので、チラシのような羽沢珈琲店の場所を明記できるものが用意できていない。

だが、この話題にはそれなりに関心があるようだ。あちらは先ほどよりも歩み寄ってきているのが目に見えてわかる。

そして、今度も向こうから質問が投げかけられる。

「どんな店をやっているんですか？」

「喫茶店だ。光栄なことに、厨房を任されている」

「喫茶店？」

商店街にある喫茶店など羽沢珈琲店くらいだ。知っているかどうかはわからないが、仮に知らなかったとしても、これを機に立ち寄ってみて欲しいと思う。

………反応を見るかぎり、あちらにも心当たりがあるようだ。ならば、わざわざ言葉にする必要もあるまい。

「すみません、その店って——」

珍しく、順調に会話が続いていた。

そんな時だった、横槍を刺されたのは。

「おね——ちゃん——ん!!」

………槍というよりは車に近い勢いだった。

突如として左側から現れた人影は、傍目を気にせず目の前の女性に飛びついた。

「……………日菜、どうしてここに」

「うん！なんとなく、ここら辺におねちゃんがいるような気がしたから！」

「待ち合わせ場所はちゃんと決めていたはずでしょう。はやく着いたのなら、そこで待っていていけばいいでしょうに……」

「えへへ。またおねーちゃんと一緒にお祭りにいけるって思ったら、いても立つてもいられなくて……あ、おにーさん、それ二つちよーだいい！」

なるほど、これが先ほどさわりだけ触れた兄弟とは彼女のことなのか。

妹の方はこのガラスケースに入っている串焼きが目当てのようだ。

「受け取れ。代金は必要ない」

「タダなの？ やった！ おにーさん、太っ腹ー！」

「？ 別に太っているつもりはないのだが……」

「あははっ！ なにそれー！」

よくわからんが、向こうが楽しそうならそれで構わない。

一方、姉の方から心配そうな顔がこちらに向けられる。

「いいんですか？」

「あの時の礼だ。気にするな」

「いえ、私は何も――」

「え、ええええええ!？」

姉がさらに口を開こうとした時、妹の方から驚声が聞こえてくる。瞳に星を宿しながら、子どものようにはしやぎながら姉に駆け寄った。

「すごいよ、おねーちゃん！ これ、食べるとモチモチってして、砂糖だけなのに口の中で甘いのがフワッってなる!!」

「よくもまあ、そこまで喜べるものだな。傍から見たら無駄とも捉えられる挙動、とてもじゃないが俺には真似できそうもない」

「うんうん、そーでしょー？ おにーさん、わかってるねー！」  
「……まさか、皮肉言われているの、気づいていないのかしら」

皮肉………皮肉？

いつ、一体誰がそんなことを言ったのか、こちらとしては甚だ疑問のばかりだ。

「あ、でもちよつと喉乾いたかも」

「生憎ラムネしか持ち合わせがないが、必要か？」

「のむー♪」

「日菜、あなた少しは遠慮しなさい」

ポン、と蓋を開ける音とともに、炭酸の泡が吹き出そうになるのを無理やり押し込む。徐々に中部の空気を抜くことで、吹きこぼれを防止することができる。

二人分の瓶を渡したとき、せつかくなのでおすすめの食べ方を伝えることとした。

「ああ、そうだ。どうせなら隣のアイスとも併せて食べるといいぞ」

「ほんとう？ よーし、おねーちゃん！ 行こう！ ね！ ね！」

「あ、ちよつと、日菜！」

やがて、二人の姉妹は人混みに消えていく。

まるで嵐のように去っていったあの妹。そよ風のようなつぐみとはまさに対照的だ。

とてもじゃないが、俺では手綱を握ることはできないだろう。姉としては、気苦労ばかりたまるはずだ。

「………いい姉妹だな」

だが、姉はそれを撥ね退けたりせず、全て受け止めようとしていた。

たとえ、足を震わせていようとも向き合おうとする覚悟には賞賛を送ろう。

頭に巻いたタオルを取り、顔についた汗を拭いとる。ようやく一息つくことができそうだ。

しかし、俺としたことが、見通しが甘かった。

あの写真をネットに流してからというもの、客足が全く途切れることがない。羽沢珈琲店のお得意様から初めて見る顔まで客層は様々だった。

アイドルの力というものは実に恐ろしいものだ。

今度、御礼参りにいかなければならないか？

………致命的に間違えている気がするが、まあ良いだろう。

「む」

そんなことを考えながら時間を確認しようとするスマホを取り出す。

すると、通知が何件か来ていた。

メッセージを開く。

この送信主はいつも文字を読ませる気がないくらい絵文字を使ってくるはずだが、随分と淡々とした文章が綴られている。

余程、余裕がないのだろう。

送り主の名前を見ながら、こちらの位置情報を送る。送信日時が数分前だったので、おそらくすぐに反応してくるはずだ。

「よっ！ほっ！」

予想通り、喧騒の中からひよっこりと、小さな手が見えた。

聞き覚えのある声とともに、その手の主は徐々にこちらへと近づいてくる。

「よっ！よっ、と……あ、いたっ！」

すぐに姿も見えるようになる。

表で編み込んだピンク色の髪には、淡い翡翠の花飾り。身に纏うのは、紺地の生地に着た菊の花々で彩られた浴衣。

いつもの快活な若者らしいファツションとは異なる、大人らしい装いの――上原ひまりが俺の目の前に辿り着いた。

「お、遅くなりましたけど……カズさん！お疲れ様ですっ！」  
「ふむ」

ふんす、と胸を張りながら労いの言葉がかけられるが………素直に返していいものなのか。

いや、返事はするべきなのだろうが、ひまりの視線は『褒めて！褒めて！』と露骨にこの浴衣の感想を求めていた。

生地の色落ちが見えないし、皺のつき方がどこか新しい。

足元を見ると、親指と人差し指の間が少々赤みがかっている。慣れない下駄による靴擦れが起こり始めていた。

自惚れているのかもしれないが、ひまりは真っ先に俺に見せたかったのだろう。

つぐみたちに合流する前に立ち寄ったのは、そんな意図があるように思えた。

ならば、それには応えなければならぬまい。

………しかし、紺地に菊、か。

菊の花言葉には「高潔」や「高貴」と言う意味が込められる。さらに紺という色を選ぶということは、大人びた印象を与えたいのだろう。

当然ながら、似合っている。

ならば、この様態を形容する言葉は――

「馬子にも衣装」

「ち、ちがーーーーーう!!」

太鼓の音にも引けをとらない声が、夜の祭りに響き渡る。

……しまった。間違えた。

俺の口下手には、やはり語彙力に問題があるのかもしれない。

17話 響け、届け、この——（後編）

参道に並ぶように吊るされる提灯の光が、大気に舞う塵を幻想的に照らす。

提灯と同じように並ぶ屋台からは、威勢のいい呼び声と美味しそうな香りが五感を刺激する。

そのためか、道を歩くだけでもキョロキョロと周りを見てしまう。特段気にしたことはなかったけど、やっぱり祭りと聞くとはしゃいでしまう質らしい。

ならば、屋台の出し物についてつい手を出してしまうのも不可抗力のはずだ。

「屋台の食べ物って、不思議と美味しく感じますよね〜」

「だからって、モカはちよつと食べ過ぎじゃない？」

……でも、両手一杯に綿あめやら、焼きとうもろこしやら、あんず飴やらを抱えながら歩く後輩<sup>モカ</sup>には、さすがに一言物申したい気持ちのアタシ——今井リサなのであった。

バイト中に『夏祭りに行くんですよ〜』って言ってたから何となく着いてきたけど、参道を歩いてからわずか三分でここまでになるなんて誰が予想できるのか。

「やだなぁーリサさん。まだ本命は控えてるんですから、そこまで飛ばしたりしないでですよ〜」

「本命？」

「カズくんのところですよ〜」

ふっふっふー、と不敵に笑いながらチョコバナナを頬張るモカ。

これでも本気を出していない……ことは置いておいて、カズくん

——はて、どこかで聞いたような。



「あー、あこが絶対行かないとソソって言ってたっけ？」

「おう。あたしたち以外でカズくんのお話が出るなんて、結構新鮮ですわね」

「いや、まあアタシも直接会ったことないんだけどね。あこと燐子がその人の話題で盛り上がっているからかな？」

「あこちゃん、小さい頃から餌付けされてますからね」

随分な物言いだった。

そんなこと言ったら、小さい頃からアタシも友希那に………ついでいやいや、何考えてんの。

「あ、いたく………つて、がくん！」

一方、モカは抱えている物を落としそうなくらいにショックを受けていた。

視線を辿ると、人混みから垣間見える屋台がひとつ。『串焼き』と書かれた看板には、実に簡潔な内容の張り紙が貼られていた。

『完 売 御 礼』

「え、何あれ。祭りの屋台であんなの掲げてるの初めて見た」

「………せっかく三時のパンを我慢して、バイトも頑張っここまで来たのに」

………どうしよう、モカがかつてないほど落ち込んでいる。まさか、そこまで楽しみにしていたとは思わなかった。

モカには悪いけど、アタシもあのクッキーを作った人がどんな人なのかは興味がある。

残念ながら、あこから聞く話はどれも突飛すぎてイマイチ想像できないからだ。

だからこそ、一度顔を拝んでおきたいと思っていた。

「あれ、あそこにいるのって、ひまりじゃない？」  
「あ、ほんとですわね」

見えたのは件の男の人じゃなくて、見慣れた薄いピンク髪——ひまりだった……けれど、いつもと雰囲気が違う。

髪型が前にアタシが教えた編み方してるし、浴衣とかも遠目から見ても新品なのがわかる。あれは……千聖の仕立てかな？

なぜか打ちひしがれているけど、それも含めて根掘り葉掘り聞きたくてウズウズしてしまう。

これからAfterglowの皆とも合流するので、ひまりの下へ駆け寄ろうとした。

「まあまあ、リサさくん。ここはそつとしてあげましょうよ」  
「え？」

と、意外にもここで待ったをかけてきたのがモカだった。

まだショックを引き摺っているのか、背景が若干白い気がするけど、アタシの肩を掴む手は確かな力が込められていた。

……その意図について、考えを巡らせる。

夏祭り、ひとり、勝負コーデ、男の人——

「……………そういうこと？」

「そゆこと。というわけで、行きましょつか」

「りょーかーい♪」

完全に理解できた。

馬に蹴られてはなんとやら。ここは出菌亀なんてしないで、潔く立ち去ろう。

……………勿論、今は、ね？

頭の中のスケジュール帳を開いて、直近の空き時間を割り出す。

今度、彩も誘って女子会としゃれこみますか！アタシたちの周りではあまり聞かないから、これは盛大に――

「いや、たまにはひーちゃんにも花持たせてあげよつかな。まあ、あたし的には蘭の方がいいと思うんだけどな」

「モカ？」

「なんでもないので」

途中、モカから何か聞こえたような気がするけど……気のせいかな？

それより、ひまりの相手がどんな人なのか。あこからは変な武勇伝ばかり聞くけど……つぐみの兄妹だし一層気になって仕方ない。

決めた。女子会の会場は羽沢珈琲店にしよう。



羽沢珈琲店に行きたい。

つぐに愚痴を言いたくなるほどの仕打ちを受けていたからだ。

「こ、こんなのあんまりですよおお！」

参道を逸れた砂利の上に崩れ落ちる。

疲れた体にムチを打ち、慣れない浴衣でここまで走ってきた挙句、一番初めに見た人から『馬子にも衣装』なんて言われた。

それは良い。本人としては多分褒めるつもりで出てきた言葉がそれだっただけだから。

……いや、良くないけど、理解も納得もできる。問題はその後だった。

「無いものはない。俺とて、無から有を作ることばできん」

「こ、こんな時まで容赦ない……ぐすつ」

私の目の前に無慈悲に書かれた四文字。

祭りの屋台としては似合わない現実には押しつぶされそうになる。

こども連続して不幸な目に遭っていると、さすがに打ちのめされそうになる。

「さて、では行くか」

そんなことは知らない、と言わんばかりに、凹んでいる私に何の反応も示さないカズさん。

相変わらずのマイペースさには、ちよつとばかりムツと来てしまふ。

「行くかって、どこに——」

けれど、そんな鬱屈とした気持ちは呆気なく霧散させられた。

下から見上げるあの人、屋台にいた時のTシャツとジーンズの姿から変身していたからだ。

「……………か、カズさん？そそ、それって？」

「装いを正してみた。昼間のイタズラ対応に手を貸していたら、そのお礼にと押し付けられたものだ」

透き通る白い肌とは対照的な、夜空のような黒を基調としながらも、アクセントとして右袖が本人が好む赤色に染められている。

私の浴衣のような柄がない、シンプルな無地布なのが実に『らしい』と思ってしまう。

両腕を広げ、その浴衣の全容を見せようとする慣れない動作に微笑ましさを感じながらも——つい、見惚れてしまった。

「お前がそうして来たのだ。であれば、こちらもそれに応えねばなるまい。」

「こういう装いは不慣れだが……似合っているか？」

「そ、それはもう！バッチリ！最高です！」

控え目に言っても、この不意打ちは反則だ。

気を抜くと薫先輩がいる時みたいに歓声をあげてしまいそうなのに。

………当然、この人の前でそんなみつともない姿は見せられない。

湧き上がる感情を抑え込みながらでは、こんな頭の悪い感想しか出てこない自分が恨めしかった。

そんな葛藤もこの人の前では筒抜けなんだろう。カズさんはその口元をほんの少しだけ緩めたのを、私は見逃さなかった。

「そうか。そうか。ならば “お互い様” だな」

「お、お互い様？」

お互い様、お互い様……かけられた言葉を反芻する。

私はカズさんに『浴衣が似合っている』と言った。で、カズさんは私に『お互い様』と言った。

「………えへ、えへへへ。そうですか？」

まずい。これはまずい。

ニヤケ顔が止まらない。蘭が居たら絶対に『ヤバイ人になってる』って言われる。

でも、このわかりにくさがクセになっちゃうし、頬は勝手に緩んでしまうのだから、多目に見てほしい。

「さて、屋台を見て回りながらつぐみたちのところに行くでしょう。」

はぐれるな」

「はーいー！」

歩き出したカズさんの、その半歩後ろを歩く。突然始まった浴衣デートによつて、最低ラインにまで落ち込んだテンションは再び最高潮に達した。

喧騒の中においても、二人分の下駄と草履の音は明確に判別できる。この調子であれば、はぐれる心配なんてない。

「いやー、それにしても今年も盛況ですよねー」

「ああ」

「カズさんの店もすぐに売り切れちゃいましたし、もしかしたら去年より人増えているのかもですよねー」

「そうかもしれんな」

辺りを見回しながら会話……できてるのかな。

いや、多分これは生返事だ。普段口数が少ないにしても、あともう一言くらいは追加で出てくるはず。

「どうした？ 話は聞いてるぞ」

そんな私の気持ちを察したのか、カズさんは振り向いてくれた。

………けれど、これは一体どういうことなのだろう。

「いや、その……いつの間にそんな一杯に荷物を抱えているんですか？」

「祭りだからな」

カズさんの姿はまさに異様だった。

両手には焼きそば、お好み焼き、たこ焼きのパックが入った袋をぶら下げ、右手にはかき氷、左手にはイカ焼き。

極めつけには口にフランクフルトを啜えている。

数回だけ目を離れた隙に、どうしてこんな惨状になるのか、こればかりは理解が追いつかない。

「ひまりは何か買わないのか？」

「えっ、じゃあ、りんご飴とか……」

「よし、それならさつき買ってある。これを食べるといい」

「あ、ありがとうございます……」

今度は後ろの帯に仕舞っていたりんご飴を取り出し、器用に片手だけでビニール袋を破り、私に差し出された。

……あ、これは全部自分用に買ったわけじゃなくて、皆の分も含めて沢山買ったのかな？

「む、ひまり。見るがいい。あんなところに金魚すくいがあるぞ」

「そ、そうですね」

「しかも『掬い』が助けるといふ意味の『救い』になっているな。これはきつと意味があるに違いない。気にならないか？」

「あ、本当ですね。もしかして字を間違えたんじゃないか——」

「もう一度言うぞ。気にならないか、ひまり」

——すみません。私にはどう見ても、カズさんが浮かれてるようにしか見えません。

年甲斐がない、なんて思わない。

圧倒はされるけど、普段とのギャップには惹き寄せられてしまう。

「……ちよ、ちよつとだけ」

「よし、では覗いてみよう」

「あつ——」

イカ焼きをかき氷を持つてる手に移し替え、私の手を引つ張る。  
……ドキドキするけど、ほんの少しだけ安心感の方が強い。浮かれているのは私だけじゃないってことがわかったから。

「失礼する。これは金魚救いか?」

「ん、羽沢さんのところの兄ちゃんか。見ればわかんだろ。金魚掬いだよ」

「そうか、救わなければならぬのか。では、必ずや俺が救ってみせよう」

「おつ、気合入ってんな。嬢ちゃんもやるかい?」

「へっ!? あ、はい! やります!」

会話が噛み合っていない気がするけど、金魚掬いは金魚掬いでやりた  
い。

おじさんから二人分のポイを受け取り、隣に並び立つ。

昔だったら、ポイに穴が空いた時に巴やカズさんに泣きついてい  
たっけ……でも、高校生になった今なら違う。

「ふっふっふ」。実は私、金魚掬いには自信があるんですよ! これ  
なら、カズさんにだって負けませんから!

「そうか、ならば競争と行こう」

「いいですよ!」

……不思議だなあ。

いつも背中ばかり見ていた人と、こうして張り合うことができるの  
がここまで嬉しいものだなんて、思ってもいなかった。

制限時間はない。

より多く掬うことができた方の勝ちとして、勝負が始まった。

「よーしよーしと。まず一匹!」



幸先のいいスタートだ。

ポイの濡れた面積からして、この調子であれば十匹以上は掬えるだろう。

……さて、カズさんの様子は？

隣に視線を移すと——目を見開いてしまった。

「な——」

その在り方はまさに静水のように。

呼吸は最小限に、手の動きは一定に、まるで生け簀の中を泳ぐ金魚と同化するようにポイを水面に入れる。

狙いを定めるは——黒い出目金。

獲物は狙われていることすら気づかない。

否、気づかせる暇すら与えられない。

「いくぞ」

ふつ、と、一呼吸でポイを振り切る。

水面に浮かべた器に、ポチャン、と何かが落ちてくる。

当然、そこには為すすべもなく掬われていた黒い出目金——

「——つ」

「あ、あれ？」

——ではなく、指の第一関節ほどの大きさの……コルクだった。

さらに、カズさんのポイには、まん丸と大きな穴がひとつ出来てしまっていた。

…………え、コルク？何で？

と、背後の屋台で、聞きなれた声が聞こえた。

「美咲！これは、ここを押せば木の塊が出てくるのね！で、これをどうすればいいのかしら？」

「ああ、いきなり一発無駄にしちゃったよ、もう……それをあのぬいぐるみとかに向けて打って、当たって倒れたら、それ貫えるから」

「わかったわ！——あつ、ミッシェルがいるわ！あれを撃ち落としましょう！」

「……………あー、はいはい。なんでこんなところにミッシェルがいることとか、もう驚かないから」

…………えーと、つまり、背後の射的屋から暴発したコルクがこっちにきて、たまたまカズさんが振りぬいた先にそれが飛んできて……………つて、どんな確率でそうなるの？

「か、カズさん。その——」

「まあ、なんだ、兄ちゃん……元氣だせ」

「……………そうか。そうだな」

——結果、一匹掬った私の勝利に終わった。

金魚掬いの屋台を後にする。隣のカズさんの顔を見上げる。

表情は変わっていないけど、さつきよりも冷静さを取り戻したようだ。

「……………俺の完敗だ。ひまり、成長したな」

「ほぼ不戦勝みたいなものなんですけど……えへへ……」

こんなことで成長を実感されても反応に困るけど、それでも自然と笑ってしまう。

勝負に勝てたことだけじゃなくて、カズさんの機微を理解できるようになったことが何より嬉しいのだ。

「あつ、私のりんご飴、一口食べます?」

冗談でそんなことを言いながら、食べかけのりんご飴を差し出してみよう。

多分、カズさんなら『それはお前のものだ。俺が食べるものではない。第一、元々食べさせるつもりもないだろうに』なんて言うんだろうな、なんて思いながら。

「なーんて——」

「———そうか、なら頂こう」

冗談ですよー、と口にした瞬間。

銀色の髪が視界を横切った。

……………へ?

目をパチクリさせる。

りんご飴。私がつけたものの隣に、大きな歯型がもうひとつ。

一方、カズさん。ボリボリと何かを頬張っている。

これが意味するところはつまり——

「ふむ、良いものだな……どうした、ひまり?」

「はっ、はわわわわわ………」

「ごめんなさい。訂正します。

私はまだまだ未熟みたいです。



祭囃子が遠のいて行く――

楽しかったお祭りもいよいよ締めになる。

はしやぎ倒した子どもたちも、名残惜しそうに振り返りながら神社を後にする。

……帰りたくない、と泣く子どもが、親におんぶされている姿も見える。

何だか微笑ましい気持ちに――なるなんてことはなかった。

「うっ、ぐすっ、ずびばぜん」

「気にするな。そういうこともある」

……なぜなら、私もその中のひとりだからだ。

今、カズさんにおぶられながら神社とは反対方向に向かっている。方角は私の家に向いていた。

「うえええ……急にアルバイトは入るし、一番食べたかった屋台は売り切れるし、新しい下駄の紐が切れるし……」

「結果的につぐみたちと合流できなかつたな」

グサリ、と事実を突き刺される。

そう、カズさんと屋台を巡っている最中……私は盛大に転びそうになった。

と言うのも、新品なのに下駄の鼻緒はなおが切れてしまったからだ。信じられないことに、両足とも。

カズさんが支えてくれたおかげで転ばずに済んだのはいいものの、完全に足を失った私は泣く泣く帰らざるを得ない羽目になったわけ

だ。

「……………重いですか？」

「重いぞ」

「そ、そこは嘘でも軽いって言うところですよ、もお〜！」

うう、気分が沈む。

つぐたちから『気にしなくていい』って連絡が来ているけど……………みんななどの思い出が作れなかったなんて……………高校一年の夏はこの一度だけなのにい……………。

「また泣くのか」

「な、泣きませんよっ！いつまでも泣き虫じやいられないんです！」

「そうか……………そうか」

ずびー、と鼻をすする音を聞かれてしまった。

恥ずかしいけど、今は涙を堪えるだけで精一杯なのだ。

「……………少し、寄り道をしてもいいか？」

「え？」

ふと、こんな眩きを耳にした。

カズさんは横目で私を見ていた。

なんとなくて頷くと、カズさんは私が来た道を逸れ始めた。

歩くにつれて、人通りは少なく、道は狭く、灯りも少なくなっていく。

……………やがて、道すらないような茂みにまで来てしまった。

電灯どころか、人の気配すらない。真っ暗で、何も見えないほどの暗がりの中にいる。確かなのは、背中から伝わるカズさんの温もりだけ。

目が慣れるまで時間がかかりそうだ。

「く、暗いですね」

「そうだな。この暗さなら丁度いいだろう」

思わず首を傾げる。

一体何が丁度良いんだろう。

暗がり。人気のない場所。そこに二人の男女。しかも片方は自由に動けない。

そこから導き出される答えについて考えた時——ボン、と頭のどこかが一気に沸騰した。

っ、つつつつつ、つまり……………？

「かつ！かかかかかじゅしゃん!?さすがにそれは、ま、まままっまだ早  
いんじゃ——」

「? 早いも遅いもあるのか?」

「そ、それはもうええと、こ、心の準備とかムードとか場所とか、あと  
下——はっ!あのっ!私、今日どれ履いてましたっけ!」

「俺に聞くのか」

何言ってるの、私!?

——いや本当に何言ってるの、私!?

ぐるぐると思考がまとまらない。

離れる気はないのに、じたばたとカズさんの背中で暴れてしまう。

「安心しろ。俺はそんな意図があつてここに連れてきたわけではな  
い」

「……………むう〜!」

「むう、と言われてもな。そもそも、お前を暗がりにつれ込んで、そんなことに及ぶような人間として扱われているのか。それにはさすがに俺も文句を言いたい」

「う、ううう〜もお……………!!」

ぐうの音も出ない正論だった。

やるせない気持ちとともに、カズさんの背中に顔を埋める。

勝手に想像して、勝手に暴れて、勝手に困らせたのは私なんだけど……ここまで興味のない素振りをされると、またまた凹んでしまう。

む、胸とかも押し付けてみても、無反応だし……私も滅茶苦茶緊張しているからか、カズさんの動悸は全く読み取れなかった。

「……私だって成長してるんですもん」

「知っている。さて、目的地に着いたぞ」

「えっ」

目的地、と言われて、ようやく辺りに視線を向ける。

「わあ——」

辿り着いた先、そこには——星が地上に在った。

ぽつり、ぽつりと小さな光が宙を舞う。

行き場もなく漂う光は糸のような線となり、やがて草木に辿り着く。

風が吹けば、辺りの草木からも一斉に光が舞い上がる。飛ぶ方向は直線上ではないけれど、私にはこれが流星群のようにも見えた。

これらは生命の灯り。

私達が立ち入らないこの場所で、蛍らは確かな営みを育んでいた。

「こんなところあったなんて……!」

「昨年、この河川敷に立ち寄ったときに偶然見つけた。昔は蛍なんていなかったのだがな」

昔……昔？

暗がりのせいかな、正確な位置はわからない。確かここは河川敷の方だったと思う。

昔、この辺りで遊んだことあったっけ。

「昔って……ここ、何かありましたっけ？」

「……………人が、住んでたな」

家が建っていたということなのかな。

目が慣れてきたので、少しばかり視野が広くなってきた。

辺りを見回しても、特に木材の残骸とかは見受けられない。れっきとした緑地だった。

「へえ〜。でも、今、こうして自然が戻ってきてるのなら、きっといいことですよね！」

「……………ああ、そうかもしれないな」

……………どうしてだろう。

表情は相変わらずの鉄面皮なのに、いつもより声が震えていたような気がした。

それにしても、まさかこんな場所に連れてきてくれるなんて思わなかった。

まさかのサプライズによって、さつきまで溜まっていたネガティブな感情が嘘のように無くなっていた。

……………これってもしかして？

「カズさん。ここに連れてきてくれたのって……」

「お前を慰めるための言葉が思いつかなかった。だが、お前がその気持ちのまま、家に帰すことに納得がいかなかった」

個人的なエゴに過ぎんがな、と自嘲しながらも、カズさんは言葉を



続ける。

「だが、だからこそ、誰も知らないこの場所、この景色をお前に見せたかった」

そして、私の方に顔を向ける。

目が合うと、ふっと微笑んだ。

「良かった。今度は喜んでくれたようで何よりだ」

その声は相変わらず平坦だけど、心の底から出ていたように聞こえた。

——ああ、この人はいつもそうだ。

他人の本質や魂胆をすぐに見抜いてしまう。にもかかわらず、足りない言葉や不器用すぎる行動が裏目に出てしまうことが多い。

それに泣かされたこともあったけど、全て善意からの行動なのは、私だってわかっている。

乞われたら迷わずに手を差し伸べる。

たとえ、表面的に求めていなくても、奥底に助けを求める声があれば、この人にとっての理由はそれで充分なのだ。

その生来の実直さと正義感、そして、それが果たされた時に初めて表に出る微笑み。

それらが、どうしようもないくらい眩しくて、焦がれてしまう——

「えいつ」

「なんだ」

耳元に顔を近づける。

その精神は万人に向けられたもの。

例外はあっても、程度に差はない。

だからこそ、私にそれを一身に向けてほしかった。

「あつ、あのー！カズさんっ」

つまらない独占欲でも構わない。

気づいてくれとも言わない。

いや、いくらこの人でも、この気持ちは口にしないと応えてくれないはずだ。

だからこそ、私は――

「ソイヤ――！！！！！！」

――不意に、夜空が切り裂かれた。

遅れて聞こえる小さな爆発音と金切るような機械音、極めつけには舞い上がる狼煙。

発生源は……さっきまで私達がいた神社だった。

傍から見たら、何が起きたのか判断できないだろう。

……不本意ながら、私達には過去の前例からわかってしまった。

「間違いないな。壊れたようだ」

「で、デジャヴ……」

あの声は間違いなくこころちゃんだ。

カズさんも大概だけど、こんな無茶苦茶をやつてのける人が他にもいるなんて、誰が予想できるだろうか。

……あと、タイミング、逃しちゃった。

「そろそろ戻るか……ひまり、なぜ泣いている？」

「だ、だつてえく……」

「……………話ならいつでも聞こう」

「そーじゃないんですよっ!もおく!」

夏の夜空に響いたのは、蛍のように行き場のない私の泣き声だった。

18話 ゆー・あー・まい・ひーろー

びゅう、と吹いた風が、チェックのスカートを靡かせる。

ここは、花咲川女子学院の屋上。

学校で最も高い場所に、さらに高い位置に設置された補給水槽の上から、ひとりの少女が校門を見下ろしていた。

「ふーん、意外な結末だなー」

彼女が見下ろす先は学生たちの人だけ、その中心。

赤毛の少女がひとりの生徒を庇った結果、ターコイズブルーの少女の拳が直撃した瞬間だった。その瞬間を目の当たりにした少女からは、台詞の割には平坦な抑揚の声が溢れる。

「ま、展開がどうあれ、計画には何も影響ないし、どーでもいいや」

なぜなら、結果は変わらないからだ。

視線を外し、空を見上げながら足をぶらつかせる。その口元は、三日月のような弧を描いていた。

「羽丘は廃校———だけど、他の高校にバラバラになるから、一部は花咲川に吸収されるはず。これに乗じて、あたしはおねーちゃんと一緒の学校になれる。これなら不可抗力だし、おねーちゃんも文句は言えないよね？」

よっ、と水槽の上から降りる。

自分の身長以上の高さから着地したにもかかわらず、少女は一切動じていない。背伸びをして凝り固まった体を解す。

「で、何の用、センサー？ここ、他校だよ？」

「それはお互い様だろう」

そこでようやく、いるはずのない客人に目を向けた。

無骨な黒スーツに、赤いネクタイ。

それに対照的な白い肌をした青年はそう返す。少女と同じように、特に感情が込められていない声で。

素っ気ない対応が気に入ったのか、少女は再度質問を投げかける。

「意外といえ、センサーもそうだよー。まさかあたしに辿りつく人がいたなんて。いつから気づいてたの？」

「花咲川と羽丘との間に、あるはずのない因縁を流すよう根回しをしているお前の姿を見たときからな」

へえー、と呟く少女の瞳が輝いた。

「じゃあ、答え合わせする？」

「必要ない。花咲川と羽丘の根も葉もない噂を流したのはお前だ。両校を険悪にするために、羽丘側の人間を花咲川に乗り込むよう指示したのもお前だ。本来、氷川紗夜と対決するはずの羽丘のトップとやらもお前だ。それだけの話だろう」

「あはははっ！中等部のときから勘付かっていたんだ！すごいすごい！もしかしてセンサーってOBだった？」

そう言いながら、少女——氷川日菜は腹を抱えながら心底愉快そうに笑う。先ほどの笑みとは異なり、年相応の笑い方だった。

ひとしきり笑った後、日菜は顔を見上げる。

纏う空気には、余裕が満ち溢れていた。

「でも、これはちよつと計算外かなー？生徒だったら放置してもいいけど、センサーだったら、取り決め自体が無かったことにされちゃうかもだよーね？」

「……………」

「あー！一応言っておくけど、センサーがあたしに手を出したら体罰になるから、それはそれで羽丘の首を締めることになるからねー？」

それが日菜の余裕の正体だった。

理由がどれほど正当なものでも、教師が手を上げれば、待っているのは理不尽な処分のみ。

つまり、ここで青年が何をしようと、日菜を止められない。青年が突き止めても全ては無意味なのだ。

「……どうやら思い違いをしてるようだな」

「思い違い？なにになに？どこが？」

「あいつはまだ負けていないつもりだぞ」

つられて、日菜は再び校門に目を向ける。

見れば、緑のジャージを着た赤毛の少女が、おぼつかない足取りで立ち上がっていた。

ひゅう、と口笛が鳴る。

なるほど、確かに思い違いだったと、日菜は認識を改めた。

「俺は運が悪くないし、そもそも俺はお前に手を上げるつもりなぞ一切ない」

青年は言葉を続けながら、ズボンのポケットに手を入れる。

その仕草に、日菜は首を傾げた。

では、ここでは何もしないのかと。

「いや、見逃すつもりもない。ただ、出過ぎた真似をした生徒を懲らしめることに手など必要ない、と言うのが正しい」

「何を言ってる……」

言葉の途中で、日菜はあることを思い出した。

羽丘と花咲川で根回しをしている最中、こんな噂話を耳にしたことがある。

以前の羽丘の頭目——日菜の前任は、生徒たち全員から支持されていたと聞いていた。

曰く、その容貌は、幽鬼のようでありながら、圧倒的な存在感を放っていた。

曰く、一度も手を汚したことはなく、全で一瞥のみで強者を下してきた。

曰く、その力をもって、生徒会長として教師の代わりに生徒の統率を取っていた。

どうでも良かったので忘れていたが……改めて、青年を見る。

白い肌、服越しに見えるやせ細った体。

極めつけには、突然に紅く光を放つ右眼。

「っ！まさか！センサーって！」

「——前方注意だ、悪く思え」

そう、彼こそ羽丘の伝説。

校門で友を庇い、地に倒れた巴を鍛え上げた終生の師匠——！

「『沈まぬ太陽』——！！」

「武器なぞ不要——真の不良は眼で殺す」

——その日、花咲川学園の屋上から、閃光が空へ昇った。



「い、一旦カット入れよう？モカちゃん？」

「え、ちやうど名場面なのにく」

つぐみの制止にモカは口を尖らせる。

一方、つぐみは頭の整理をしているのか、こめかみに指を当てている。

「えっと、私達が作っているのって、巴ちゃんの考えたお話の続きだよね?」

「そーそー。そのスピンアウトもの」

「ほ、本編が形すら出来上がってないのに、番外編書いちゃっていいの?」

「いや、そういう時もあるよ」

それでいいのかなあ、と納得していない様子をつぐみ。

まだ他にも問いただいたいことがあるのか、テーブルの上に置かれていた大学ノートを手取る。おそらく、そこに先ほどの内容が記されているのだろう。

「それと、本編の因縁は全て日菜先輩が仕組んだ……って、これスピンアウトでやっていいの?すごい重要な設定じゃない?」

「今、思いついたからねー。日菜先輩ってすごい黒幕っぽいなー、って思ったら、つい」

「まあ、日菜先輩もノリノリでやりそうだよね……」

ヒナセンパイ……ふむ、どこかで聞いたような、そうでないような。

「で、お兄ちゃんがOBって……舞台設定って女子校だよね?これ、矛盾するんじゃない?」

「ふっふっふ、では、カズくんをカズちゃんにしよう」

「お、お兄ちゃんをお姉ちゃんにするのはだめだよ!!」

つぐみの言うとおりだ。

そう簡単に性転換させられては堪らない。

最後に、つぐみはノートを広げながらモカに問いかける。これが一



番理解できないところなのだろう。

「あと、最後！なんでお兄ちゃんがいきなりビーム出してるの!？」

「え、カズくんといえればビームでしょ？」

「お兄ちゃんはそのままで無茶苦茶じゃないよ、もおく！」

「おー。つぐがひーちゃんみたいになってるく」

つぐみがなぜそこまで必死になっているのかわからないが………  
ビームか。どうやら、モカの中では俺は光線を放つらしい。随分と勝手なイメージを持たれているようだ。

「カズくん、ちよつとビーム出せるく？」

「無理だ。今はな」

「今は!？」

十中八九、そんなことはあり得ないだろう。

まあ、ゼロと断定する材料もない。少なくとも今はできないので、  
そう答えることにした。

………そろそろ、俺も会話に入るべきか。

「さつきから何をしてるんだ、二人とも」

「あ、えつとね、最近漫画作ることがブームになってて。絵は描けなくても、お話なら作れると思って、今モカちゃんと考えているんだ」

「今日のモカちゃんは、モカちゃん先生なのだく」

「そうか、モカちゃん先生なのか」

漫画、漫画か。

そういえばモカもつぐみは好んでいたな。モカは青年漫画で、つぐみは少女漫画。ジャンルは違えど、共通の趣味ではあるか。

口惜しいが、俺にはその手の話は不得手だ。

「俺はそちらの知識が疎い。悪いが、力になれそうにない」  
「えー、つぐ、まだ解禁してなかったの〜?」

俺はその手の本を読むことは禁じられている。興味がないわけではないが、買い求めるほどに熱意があるわけでもないし、つぐみにその話をして、決まって口を尖らせて貸してくれないのだ。

ちなみに、今のつぐみの表情はまさにそれだ。

「だって、お兄ちゃんすぐに影響されちゃうし……」

「でも、カズくんだよ〜? 変な影響受けても、悪いことはするわけないじゃ〜ん」

「いや、違う。つぐみが危惧しているのは、少女漫画に登場するような男のむぐむぐ……」

「そ、それ以上はだめだってば!」

びたーん、と俺の口元に勢いよくつぐみの手が当てられる。痛くはないが、珍しいことに、これは一言余計だったパターンらしい。ならば黙っておこう。

そんなやり取りを見ているモカは「なるほど〜」と、俺が言わんとしていたことを理解していた。そして、こんな提案を投げかけられた。

「よろし。じゃあ、カズくん今度うち来てよろ。カズくん好みのマンガ読ませてあげるからさ〜」

「ふむ……俺の好みを知っているのか」

「もち、友情・努力・勝利〜」

「勝利は必要ないと思うが……どれも良いものだな」

「そ、その時は私も行くから! 絶対声かけてね、モカちゃん!」

「おっけー、ならトモちゃんも呼ぼっか〜」

そうか、予定が合えば巴も来るのか。

巴は確か少年漫画を好んでいたはず。少年漫画と聞くと、内心、心が踊る。

こうして、モカ主催の『カズくんにおススメの漫画を布教しようの会』の開催が決まったところで、この話は決着がついた。

そろそろ本題に戻ろう  
閑話休題。

「話が逸れているな。このまま時間を棒に振るつもりなのか？」

「そだねー、って言っても息詰まっちゃったし、今回はこの辺にしておこう」

「うん。また思いついたらやろっか」

当初取り組んでいた漫画作成も中断することにしたようだ。俺はキッチンに戻り、つぐみたちもノートを閉じようとした。

「ちよおーと待ったー!!」

そんな時だった。

突如、ドアベルが激しい音を奏でたのは。

「話は聞かせてもらった!!」

「あ、あこちゃん!？」

「おお、話が拗れそうな予感」

新たな客人とはあこだった。

そして、その背後にもう一人。

「こ、こんにちは……」

「あ、燐子さんもいらっしやいませ。今日は二人とも一緒だったんですね」

「は、はい。あこちゃんとイベント行ってみたんですけど、酔ってし

まって……人混みをみただけなのに……すみません……」

「無理言っちゃってごめんね、りんりん……ゆっくり休んでね？」

「どうぞどうぞ。お座りくだされ〜」

「ありがとうございます……」

燐子さん、りんりん、と呼ばれた黒髪の少女は、つぐみに牽引されて椅子に案内される。

ふう、と息を落ち着かせたのも束の間、今度はあこの方がつぐみに詰め寄ってくる。

「で、つぐちん！今、面白そうなことやってたでしょ！」

「え、もしかして漫画の話？」

「うん！あこもおねーちゃんみたいにシナリオ作りたい！」

そう言えば、先ほどモカが作っていたのは巴作のシナリオの発展だったか。ならば、あこも便乗するのも無理はない。

「あこちくん、言っておくけど、漫画だよー？」

「わかってるってば！」

そんな様子を遠目から見る。

……あこにはアイスカフェオレでも淹れるとしよう。俺の予想が正しければ、間違いなく必要になるはずだ。

……。

……。

.....

「ぐう」

「ね、寝ちやった!？」

「あ、あこちゃん。起きて……」

「………はっ!りんりん、寝ちやってた?」

「そりやあもう、一瞬で、すやあく、ってしてたよ。あたしとい勝負だね」

「モカちゃん、それ、誇る事なのかな?」

この手の作業は、あこにはまだ荷が重すぎる。

……対策として用意したコーヒーもそろそろ出来上がる頃か。お茶請けに焼き菓子も持っていこう。

「うー、頭の中ではイメージできてるのに、いざ書き出そうとすると眠くなる……」

「あ、それわかる!私もつい眠くなっちゃって……えへへ」

「あこちゃんあこちゃん、そのイメージのカズくんって、ビームも出すでしよ?」

「もちろん!カズ兄って言ったたら、やっぱりビームだよね!」

「ご、ごめん。それだけはどうしてもわからないよ……」

同感だ。同感だが、意気投合している中に俺が水を差す必要もあるまい。

ソーサー、ストロー、ガムシロップにミルク……よし、持っていくとしよう。

「何を必死になっている、つぐみ。お前が否定したところで徒労に終わるだけだろうに」

「うう、お兄ちゃんも否定してよ……」

「これも特殊な好みを持っている者同士が集まった運命なのだろう。」

さて、アイスカフェオレとアイスコーヒーだ」

「ありがとう、カズ兄ー！」

「あ、ありがとうございます——」

ソーサーの上にアイスコーヒーを置き、踵を返す。この場において、この四人の世界にわざわざ入る必要もあるまい。

「へ？」

……つもりだったのだが、なぜだろう。

りんりん、とやらから不自然な視線を感じる。

「あこ、これは……？」

「カズ兄！ほら！アレ！アレやって！」

アレ……ふむ、アレか。

正直、思い当たる節はありすぎて、どれが適切かはわからないが、所望されたならやらねばなるまい。

「——『神々の王の慈悲を知れ』」

「！」

あこから教わった台詞を言葉にすると、黒い瞳の中の輝きが増した。

どうやら間違いではなかったらしい。

理由はわからないが、その視線は、俺ではない誰かへの羨望の感情が込められていた。

「り、燐子さん……？」

「すごい勢いで頷いてるね……あこちゃん、これってどゆこと？」

「えへへ、実は——」

あこが取り出したスマホの画面を覗き込む一同。  
液晶に映るのは、ひとりのキャラクター。

特徴は………いや、出来ることなら説明は割愛したい。

「おー、なんかカズくんに似てるー」

「でしょでしょ！あこも初めて見たとき『カズ兄だ！』って思っちゃった！」

なぜなら、モカとあこがそのように言っているからだ。

りんりんとやらは、このキャラクターと俺を重ねてしまった、とのことだ。曰く、ネットゲームで一時期『れいどぼす』とやらで登場し、以来、あこと共通のお気に入りキャラらしい。

わざわざ『自分と似ている』『お気に入り』と言われていているキャラクターの特徴を説明するのは、まるで自賛のような気がして少しばかり気恥ずかしい。だからこそ、この場での説明は省かさせてもらおう。

「奇妙だな。まるで鏡をみているような心持ちだ」

「………で、でも！お兄ちゃんはそんな格好しないよ！髪も少し濃いし！あと、もつと二の腕まわりの筋肉足りない気がする！」

「おおう、さすがの妹いもつとちから力。ツグってますな〜」

つぐみが俺との差異を見つけてくれた。

自覚はないが、つぐみがそう言うならばその通りなのだろう。自分のことは自分が一番わかっているつもりだったが、客観的に見るからこそ知り得ることもあるのだと学んだ。

「あ、ちなみにこのキャラ、ビーム出すよ！ね、りんりん！」

「うん……目から出すんです……ビーム………」

「り、燐子さんまで〜！お、お兄ちゃんはビームなんて出しませんか  
らっ」

「ならいつそのこと、同じ格好してみる〜?」

「はっ!りんりん!」

「すみません。ちょっと測らせてください」

「構わないが、手短にな」

どこからともなくメジャーを取り出し、俺に巻き付けるたりりん。体調の方はすっかり良くなったようで何よりだが……こんなものを測ってどうするつもりなのだろうか。

「なんで漫画作ってるだけで、こんなことに……………」

「……………はっ、す、すすすみません……………」

突然の採寸に戸惑う中、つぐみの一声で冷静になったようだ。

りんりんは顔を紅潮させながら自分の席にそそくさと戻った。初対面の相手を前に羽目を外しすぎたことを恥じているようだ。

「あっ!なら、りんりんもやってみようよ!」

「え?」

と、あこからそんな提案があつた。

「あ!燐子さん、よく読書しますよね!私もぜひ参考にしたいです!」

「わ、私、シナリオとか作ったことはいんですけど……………」

「まーまー、とりあえず一回やってみましょうよ。やってみると、途中までは形になりますから〜」

つぐみとモカも名案だ、と反応を見せた。

なるほど、この三人とは方向性は別だが、物語に触れた経験は豊富なのか。

りんりんは幾ばくか思案した後、モカからノートを受け取り、ペンを取り出した。



「わ、わかりました。やってみます！」

覚悟を決めた強い眼差しを見届け、俺は己の仕事に戻ることにした。



——ここは、太陽神カズナと月の女神ツグミが交わって生まれた世界であることは、この世に生まれ落ちた者ならば誰もが知っている。



仕事に戻れそうにないようだ。

「……………待ってくれ。待ってくれ」

「えっ？」

「おお、まさかカズくんがインターセプトするとは」

りんりんが動じてしまっているが、こればかりは、さすがにこれは看過できなかつた。

「や、やっぱりやり過ぎでしたか…………？」

「いや、否定するつもりはない。聞いているこちらとしてはいたたまれないことこの上ないが、その発想は尊重されるべきだろう」

本人は神話のような世界観のもと、壮大な構想があつたのは理解できる。神話のような書物が読めないあこに、わかりやすく読み聞かせ

ようとした意図が込められているのだろう。それを責めるつもりは毛頭ない。

「ただ、俺は耐えられるが、つぐみの方が持たなそうだ。すまないが、ここらで手打ちにしてもらえると助かる」  
「へっ?」

だが、従妹いもうとが流れ弾によつてダウンしかけている以上は庇わざるを得ない。

「——はふう」  
「つ、つぐみさん?!?!」

目は点に、顔からは火が灯りそうなほど赤みを帯び、頭から湯気が出て、今にも椅子から崩れ落ちそうな始末だ。

情報過多による知恵熱、処理しきれなくなった羞恥の気持ちによる発熱か。それらが行き場を失くした結果、壊れた電子レンジのような有様になったのだろう。

「あれま、導入だけでショートしちゃったみたいですね」

「どうやら刺激が強すぎたようだ」

「す、すみませんっ……!すみませんっ……!」

「今、必要なのは謝罪ではないだろう。冷たいものを持ってくる。二人とも、つぐみを頼んだぞ」

「は、はい!」

「おまかせあれ」

二人の返事を確かに聞いた後、駆け足で氷嚢を取りに行く。

りんりんは何度も必死に頭を下げているが、いや、俺も予想外だった。

神話などでなくても、昨今の少女漫画はこういった描写はあると聞く。ならば、俺よりつぐみの方が耐性があるとばかり考えていたが、過信しすぎたようだ。

認識を改めよう。

つぐみにはまだこの手の話は早い。

一方、りんりんはこの手の話では侮りがたい存在だ。

……これだと、まるでりんりんが専門家のように読み取られてしまいかもしれないが、まあ良いだろう。

「え？みんな、さつきから何の話してるの？つぐちん、いきなりどうしちやったの？」

だが、あこにも早すぎる認識は、改める必要はないようだ。



残暑が続く中、比較的涼しい気候の日だったかもしれない。いつも通りの五人には、通っている小学校から少し離れた茂みの中に、秘密の基地があった。

廃棄されたプレハブ小屋を、捨てられたテーブルやらダンボール、家から持ち込んだクロスなどで装飾するほど、五人は愛着を持って利用していた。

夏は暑すぎてあまり通えなかったが、こうして涼しくなった今、久方ぶりに顔を出したわけだ。

しかし、そこには新たな脅威が構えていた。

「に、逃げようよ！危ないってば〜！」

「いや、駄目だ。アタシたちの基地を捨てるなんてできないだろ」

巴はひまりを背中に棒きれを手にする。

ひまりだけじゃない。蘭、つぐみ、そしてモカも、巴の後ろに隠れていた。

なぜこんな事になっているか、と言うと、目前の外敵てきによって、この基地の存亡の危機に立たされているからだ。

それは、親指くらいの小さなモノ——されども、危険性言えば人の命すら奪えることができる存在だった。

「で、でもスズメバチだよ？刺されたら、死んじゃうかもだよ？」

「だからって、このまま逃げるのかよ？アタシは嫌だ！」

「……………あたしも、やだ」

「蘭までく！?ううう……………」

ひまりは完全に怖気づいてしまっている。当然、それは他の四人も同様だ。小学生も無知ではない。相手にしている存在の危険性は漠然とした恐怖心を煽る。

それこそ、ちよつとした羽音にも敏感に反応してしまうほどに。

「わわっ」

「いやあああ!!」

「ひっ」

黄色い影が飛び立ち、五人の目の前で滞空する。すぐに飛んでくるかと思ったひまりとつぐみは思わず腰を抜かしてしまった。

——当時は知らなかったが、こうして蜂が空中でホバリングするのは目の前の存在を敵とみなした証である。

また、蜂は習性として黒いものに引き寄せられる、と言うものがある。

さらに、問題は、この中で最も黒色の割合が大きい者が、無様に隙を晒してしまったことである。

「つぐー！危ない！」

「——えっ」

つぐみが尻餅をついてしまったのを、皆が視界に捉えたときにはすでに遅かった。歯をキチキチさせながら、一直線に飛んできた蜂に、巴たちもなすすべ無く素通りさせてしまう。

もはや手遅れ。誰も、少女を護る者はいない。恐怖のあまり目を閉じた瞬間——突如、蜂の羽音が止んだ。

……誰もがついて行けていない中、最も早く状況を飲み込んだ者が一人だけいた。

「わく、カズくんだ〜」

「無事なようだな」

モカがその名を口にすると、颯爽と現れた学生服の少年——和那が、教科書を丸めた物を地面に叩きつけている姿を目の当たりする一同。

全容は見えないが、黄色い半透明の羽が残骸として地面に転がっている。その意味を理解した少女たちは、一目散に少年のもとへ駆け寄った。

「お、お兄ちゃん……っ！」

「カズしゃあぁん！うええええん！」

「怖い思いをしたようだな」

「う、うるせー！アタシだけでも何とかなつたし！余計な真似すんなよなー」

「そうか。出しゃばりすぎたようだな。蘭も怪我はしていないようだな」

「……ん」

全員の無事を確認したものの、和那の顔は晴れない。少女たちの安全を確認し終わると、すぐに立ち上がり背を向けた。

「さて、お前たちは家に帰れ。邪魔だ」

「なつ、何言ってるんだよ！ やつつけたんだからアタシたちが帰る必要なんてないだろ！」

「やだ。帰らないし」

少年の冷たい言葉に反発する巴と蘭。

確かに、外敵は既に倒された以上、この二人の言うとおり帰る必要はない。

しかし、少年は相変わらず淡白に言い放つ。

「邪魔だ、と言っている。一匹すら対処できなかつたお前たちに何ができる？」

「と、巴ちゃん。お兄ちゃんは『他の蜂もこつちに来るから逃げてくれ』って言ってるよ？」

「うそでしょ！ もうやだあ！ 帰ろうよ、ともえー！」

つぐみとひまりは泣き出しながら避難を懇願する。

……この場を和那だけに任せることが嫌な気持ちがあるのか、巴は悔しそうな表情をしながらも決断した。

「っ！ 皆は任せろ！ 先生とか呼んでくるから、カズも無理すんなよな！」

泣きじゃくる二人を連れて引き返す巴の言葉に、少年は何も返さな

い。

鞆を地面に置き、そのまま基地の外の茂みに身を投じていく。その遠くなる背中を、モカは棒立ちで見届けていた。

「モカ、行こう」

「……うん」

蘭に腕を引かれ、モカもこの場を去る。

この数時間後には、役所の人間による駆除作業が開始され、少年が巣を見つけたことにより、作業は迅速に終わられた。

けれども、その基地は立ち入り禁止となり、今はどうなっているか、誰も知らないのであった。



「……………ん」

重たい瞼が上がる。

……どうやら寝てしまっていたみたいだ。

あの夢は……確か、小学生の頃だったかな、と考えながら背伸びをした。

壁掛けの時計に視線を向ける。

あちんたちを見送り、つぐの復帰を待つ間にも構想を練っているからしばらく経つたみたいだ。窓を見ると、もう辺りが暗くなっている。陽が高くなったと感じたのが、随分と最近のことのように思う。くう、とお腹が鳴る。

普段、バンドの練習やライブくらいでしか使用しない集中力が切れた途端にやってきた。

何かないかと辺りを見渡すと、と、タイミングを見計らったかのよう、テーブルに一枚の皿が置かれた。赤、緑に彩どりのある夏野菜を挟んだサンドウィッチが、ポツン、と皿に乗っている。いつも通り

の無表情なカズくんが寝ぼけ顔のあたしを見下ろしながら置いてくれたみたいだ。

「眠りこけるほどに暇を持って余しているように見える。それほどまでに情熱を傾ける意義があるのか？」

「そう言いながらも、ちゃんと差し入れを持ってきてくれるカズくんなのであつた〜」

せつかくの施し。ありがたく受け取ることにした。

かぶり、と豪快にかぶりつくと、野菜の水分とバーベキューソースの香りが口の中に広がる。

間違いない。この食感はやまぶきベーカリーのパンだ。今、この瞬間において、あたしほど幸せな人間はいない、と思ってしまうようなほどに美味しい。

……こうして今食べているパンも、どこかの卸屋さんからさーやパパへ小麦が渡って作られる。そして、さーやパパからつぐパパに仕入れられ、それをカズくんがサンドウィッチを作って、こうしてあたしが食べることができると。

物の流れはこんなスムーズなのに、どうしてストーリーになると、ここまで躓いてしまうのか、実に不思議な感覚を覚える。

「いや〜、やっぱり人を動かすのって難しいね〜」

「そういうものなのか。てつきり得意な方だと思っていたのだがな」

今、羽沢珈琲店にはあたしとカズくんしかいない。

そんな独り言も筒抜けになるのは仕方ないとして、何やら意外な反応が帰ってきた。

「カズくん、モカちゃん先生のことを買っててくれてたようですな〜、えへへ〜」

「お前はマイペースで興味のなさそうな素振りをしてながらも、周りの



人間ひとりひとりの機微をよく観察している。個人的には、あの五人の中で最も人の性格や変化に敏感なのはモカだと思っている」

……一瞬だけ、きよとん、としてしまう。

久しく忘れていた感覚だった。こうして、カズくんの分析を真つ向から受け止めるのは。

「だからこそ、俺にはお前の悩みが理解できない。登場人物のモデルは、ほとんど周りにいる人間たちであれば、ありのまま描けばいいだけの話ではないのか？」

なるほど、と呟きが漏れる。

カズくんの質問は一見筋は通っているように聞こえる。けれど、これはそこまで単純な話ではない。

「むしろ、周りにいる人だからこそ動かしづらいんだよね。例えばトモチンは少年漫画的なバトルが合うけど、ひーちゃんは恋愛モノが合うでしょ？ いまいち統一性、というかく、ジャンルが定まらないんだよね」

「なるほど。確かに難儀だな」

学校で最後にみんなで作った『魔法少女ひまり』を思い浮かべてほしい。あれはあれで作っているときは面白かった……けど、収集がつかなくなつて打ち切りになる典型だと思う。

カズくんも、本人が口にしたように、その手の創作に強いわけではない。あたしの言葉に納得したのか、何度か頷く仕草を見せている。

「気を遣う必要はない。お前が望むのであれば、俺は倒される側の存在でも構わない」

すると、今度はそんなカズ語が飛んできた。

これはアレだ。『モデルにした人物をわざわざ気を遣う必要はない。例えば、自分を悪役に据えても問題ないから遠慮するな』って言いたい……んだと思う。

別に気を遣っているつもりなんてないんだけどなー、と内心呟く。薫先輩とか紗夜先輩とか、かなり現実とかけ離れたキャラになっているし。

じゃあ、なんでそんなカズ語が飛んできたんだらう。そんな考えに至った経緯について考えていると、ふと自分の真下にあるノートが目に入った。

そのページは、まだつぐにも見せてないもの。冒頭に一行だけ書かれた、構想とも言えないようなメモ書き。

そこで、寝てしまう前に考えていた内容を思い出した。

それは、宇宙からやってきたモンスターの侵略を防衛する、ひとりの青年の物語。他の作品にもありがちな、けれども王道とも言えるそれについて考えていたら、いつの間にか寝てしまっていたのだ。

それを見たカズくんはさっきのカズ語を言い残したと考えると、自ずと真意も理解できた。

「……………できるわけないじゃん、も〜」

そう、幼馴染<sup>あたしたち</sup>全員は、どうしてもそれだけではできないだらう。少なくとも、青葉モカという個人においては、それをしたくない。

なぜなら――

「それよりカズくん。モカちゃんは夏の串焼きの埋め合わせを所望する〜」

「今、それを使うか……いいだろう。好きなものを言うがいい」

「ロールケーキ。モカちゃんはまるごとガブリといきたい気分なのだ〜」

「恵方巻きみたいだな……………ところで、晩御飯の用意もしているのだ

が、どうする？」

「やった〜、さすがカズくん。ヒーローは太っ腹だね〜」

「ふっ、買い被り過ぎだ。お前の方が太っ腹だろう」

「む〜、女の子にその返しは良くないよ〜」

そんなやり取りをしながら、あたしはカズくんの後に続いて羽沢家の中にお邪魔する。

たとえば、あたしが大きくなっても、あの秘密基地が使えなくなつたとしても——この認識は、きつと、これからも変わらない。

そんな予感を胸に、今日も今日とて甘えさせてもらうことにしたモカちゃんなのであった〜。

## 19話 六人目なぞいない

——あれは、夏休みが終わる直前のことだったか。

登校日、学校帰りにいつもの五人が我が店に集まり、（主にひまりが）夏休みの宿題を終わらせようと奮闘していた。

ところが、ひまりが肝心の参考書を忘れてきたために、夜の学校に繰り出し——戻ってきた後のこと。

「無理……ほんと無理……まだピアノの音が耳に……」

「十二……十三？いやいや、最初の段をどう数えるかだろ、ははは……」

「なんで？なんで私たちがあの状況で帰ってこれたの？夢なの？誰か教えてってば〜！」

何やら穏やかではなかった。

つい夕方まで正常であったはずなのに、戻ってきたら三人ほど顔面を蒼くさせながら錯乱状態となっていた。

「何があった」

「えつとー、夜の学校行ったら、怪奇現象に遭遇しちゃった〜」  
「ほう」

であれば、この惨状も納得できる。

怪奇現象の詳細はわからないが、今なら些細な物音だけでも驚いてしまいそうだ。

「つぐみ。無事か？」

「うん。私は大丈夫。ちよつと疲れちゃったけど」

と言いつつ、我が従妹もずつと俺から離れないままだ。シャツの裾を強く握りしめているせいで俺も身動きが取れない。

「仕方ない」

夜も遅い。

最悪、車で送ることはできるが、この精神状態のまま家に帰すことには不安を覚える。この際、恐怖を共有できる人間同士が共にした方が安心するはずだ。

では、俺が取れる最善の措置とは何か、と考えると、自ずと答えは導き出される。

「——お前たち、今夜は帰さんぞ」

ガチャリ、と、羽沢珈琲店の鍵を閉めた。

「もう、お兄ちゃん！初めから『もう暗いから今日は泊まるか？』って言うてよ！」

おかしい。

なぜ顔を真っ赤にしたつぐみに指摘されているのだろうか。

ともかく、つぐみのフォローによって誤解を与えることもなく、提案自体は受け入れられた。

生憎と電話中であるため言葉にはできないが、ジェスチャーで詫びと礼をすることにした。

一方、スマホの向こう側にいる人物からは『頼んだぞ』という言葉を受け取る。これで必要な根回しは完了だ。

「蘭、伝言だ。『あまり羽目を外しすぎないように』だそうだ」  
「無理、そんな元気ない……」

ほんの少しだけ落ち着いたようだが、まだ蘭から覇気を感じられない。

蘭に必要とするものは、リラックスできる環境と時間だな。しばらくそつとしておこう。

「よし。とにかく、蘭の父さんから許可が出たし、これでみんな安心して泊まれるな！」

「くうー！夏休みらしくなってきた！」

「そうだな。追い込みで宿題を終わらせようとするのは確かに夏休みならではだな」

「早速現実に取り戻された！」

嘆いたところで、宿題は終わらない。

ここには代わりにやってくれる小人など存在しない。ここは素直に没頭してもらう方がひまりのためになると判断する。

今夜の怪奇現象で抱いた恐怖を薄れさせることができるならば、宿題であれどうあれ何でも使おう。

「あたしお風呂入る〜」

「じゃあタオルと着替え出すね」

「おう、いつてらっ——あれ、モカがいなくなったら誰が手伝うんだ？」

「え？カズくんが手伝うんじゃないの〜？」

「……高一レベルであれば、なんとかなるか」

「じゃあよろしく。つぐも行こ〜」

「えっ、私も？」

つぐみから迷いの視線を向けられるが、俺は目を合わせない。それを決めることは俺ではないので、つぐみ自身に任せよう。

俺の意志を汲み取ったのか、つぐみはモカの後に付いていった。さて、ここからは宿題組の面倒をみるか。

「ほら、蘭。疲れたのはわかるけど、さっさと終わらせようぜ」

「無理……あたしも風呂入って寝る……」

………まだ、蘭は立ち直らないか。

宿題に取り組む気力もなさそうに見える。

「仕方ない。早く片付けるぞ」

「ほら、アタシも終わったら手伝ってやるから、頑張ろうな、ひまり」

「うう……二人ともありがとう！この恩は一生忘れません！」

一生、と言っても、次の日には忘れるのがひまりだ。あまりあてにしないでおこう。

さて、まずは苦手と言っていた数学からか。

参考書を手に取り、宿題となっている範囲を捲る。

パラリ。

………ふむ。

パラリ、パラリ。

………そうか。

「カズ、もういい。無理すんな」

「こゝこゝなら私と巴でやりますから！」  
「すまない」

約四年の歲月。それは想定よりも重いものだったことを痛感させられた。

……となると、この場において俺は役立たずか。では、ここにいる意味もないだろう。

宿題の邪魔にならないよう、部屋を後にしようとした時――

「いやいやいや！待て、カズ！一旦落ち着け！」

「か、カズさん！冷静になって！そのままその場に座っていてくださいー！」

「なんでいきなり部屋出しようとしてんの!?意味わかんないんだけど!!バカでしょ!?!」

三人は必死に引き留めてきた。

俺は冷静なことこの上ないはずなのだが、正気を疑われながらその場に座らされてしまった。

宿題を手伝えない以上、存在意義など皆無のはず。にもかかわらず、ここまで熱意を持って俺を置いておこうとする。

……なるほど、この三人を意図的に置いていったな、モカめ。

「俺には理解できんな。目に見えない、触れることのできないものに怯えたところで徒労に終わるだけだぞ。ここは潔く受け入れることもひとつの選択肢であるとは思うが」

「蘭、お願い。カズさんから目を離さないでね」

「責任重大だぞ。任せた、蘭」  
「任せて」

諫言は無視され、見張り役は蘭が選ばれた。まあ、いるだけでその



恐怖を和らげることができるとしたら、好きにさせるとしよう。

……とはいえ、手持ち無沙汰なのは変わらない。何かできることはないかとあちこちを見回すが、特段変化のないつぐみの部屋だ。

「蘭、俺は何をしていたらいい?」

「別に何もしなくて良くない? 偶には休んだら?」

休む……休む、か。

充分に休息はもらっているが、そこまで仕事中毒ワーカホリックに見えるのだろうか。

「……仕方ない。アレをやるか」

「アレ?」

「柔軟ヨガだ」

ピン、と、両足伸ばす。

背筋はそのまま、足を徐々に開いていく。

180度手前で止め、上体を地面につくまで倒す。

体調管理の一環としてやっていたらここまでできるようになった。継続は力なり、と言うやつだ。

「どうだ」

「ま、まあ、すごいんじゃない?」

む、蘭の反応が薄い。

地道な努力でも積み重ねれば結果を出せる、と言うことを伝えたいのだが、これだけでは足りないのか。

ならば、今度はもう少し難しい格好を試してみるか。

まず、先ほどの足を開いた状態で、体全体を両手で持ち上げる。

倒れないようにバランスを取りながら、今度は足のつま先を天井に向けるように徐々に閉じていく。

最後に膝を折り曲げ、踵を後頭部まで持って行き、完成だ。

「どうだ」

「うわっ……そこまで行くと流石にキモい」

「キモい、か。まあ、人に見せる格好ではないことはその通りだな……む、こんなところにホコリが」

「ちよっ!? その体勢で歩かないでよ! キモいって言うか無理! ほんと無理だつてば!」

蘭は身を縮めて嫌悪感を示す。

さすがに大袈裟ではないか?

「ちよつと、蘭! さすがにちよつと声大き……つてカズさあああああああん?!?!」

「うわああああああ!! カズがなんか取り憑かれたあああああああ!!」

こちらに視線を向けたひまりと巴の顔も一気に血の気が引いた。

……いや、本当に大袈裟ではないか?

今日だけ柔軟体操は禁止されることになった。曰く、『夢に出てきそう』らしい。

甚だ不本意である。  
閑話休題。

「うゝ、終わらない! もう動けない!」

「まだ一時間だぞ。散漫だな」

「さすがにこんな時間だと頭働かないだろ。まあ、夏休みはまだ残ってるし、これくらいなら後は一人でもなんとかなるって」

見れば、時計の針はもうすぐ頂点に来ようとしていた。夕方から勉強していることも考慮すれば、くたびれるのも当然か。

「さてと、あれ？」

「巴、どうしたの？」

「いや、つぐたち、さすがに遅すぎないか？」

巴の発言に、蘭とひまりもハツとする。

つぐみは風呂は長い方であるが、こうして後に入る者がいるときは早めに出ようとする。

……何かあったか、どこかで道草を食っているかだな。

「ちようどいいだろう。確かめるついでに入りにいけばいい」

「それもそうか。じゃあ、アタシ先入るけど……カズ、どうする？」

「では、俺もついていこう」

巴と共に立ち上がり、部屋を後にする。

さすがにこの二人も気も紛れただろう。今度こそ、俺のいる意味はないはずだ。

「……………は？和那と巴が一緒に入るの？」

ふと、蘭からそんな疑問が飛び出して来た。

「……………とーもーえー？」

「いや、何でそうなるんだ……って、あ、説明足りてなかったな」

「俺は自分の部屋に戻るだけだ。巴の着替えを用意する必要がある」

「巴の着替えて、レディースのたとつぐの服が……あ！」

「……………あ、なるほどね」

ひまりに続いて蘭も察し、巴が少し苦い顔をする。

俺が思うことはひとつ——体格差というものは悩ましいものだと言っただけだ。

……………と、今度はひまりが何やらそわそわとし始めた。

「どうした。急に不審な挙動をしたところで周りは戸惑うだけだぞ」  
「きよ、挙動不審じゃないですよっ！いいいやー、私もー？つぐのパ  
ジャマだと、サイズが合わないそうな気がするんですよー？ど、どう  
しようかなー？」

「…………男物の衣服を着たがるとは、相変わらず物好きだな。『さすがにそれは無理あるだろ』と、巴の顔に書いていることに気づいていないのか。」

「Yシャツならあるぞ。それでいいか？」

「や、やった！ありがとうございます！」

「気にするな。では、行…………くのか、蘭？」

「……………なんでこっち見るの？」

「一人で留守番することもできないのか？」

「うっさい」

蘭も俺の部屋までついていくことにしたらしい。こちらとしては拒む理由はないので何も言わないことにした。

俺の部屋はすぐ隣。

つぐみの部屋ほど大きくはないが、俺にとってはいささか広すぎるほどの大きさの部屋を貸してもらっている。

恵まれているはずだが、同時に申し訳無さをも覚える。なにせ、俺の部屋には――

「あ」

「あゝ」

帰ってこないと思っていた二人がそこにいた。

「……………おーい、二人とも？なにしてんだー？」

「あ、いや、その、ち、違うの、みんな！モカちゃんが、その、お兄ちゃんの部屋にも置いてあるのか気になって……私も最近、お兄ちゃんの部屋に入ったことがないな、なんて……」

あうあう、と目を回しながら弁明する我が従妹<sup>いもつと</sup>。動機は理解できたが、肝心の目的語が欠けていた。

「何を探していた？」

「うえっ!? そ、それは……」

「もち、えっちな本とか」

「も、モカちゃん!!」

……そのようなことだろうと思った。

年頃故、そういうことに興味をそえられるものなのだろう。

もつとも、俺にそれを求められても、期待には応えられないがな。

「俺には必要のないものだ。他を当たれ」

「ぶく、つまんなくい」

「当然だ。そもそも探す場所自体ないのだからな」

部屋を見渡す。

本棚や収納を設ける必要はない。仕舞うものがあるほど持ち物は多くないからだ。

机も必要はない。リビングに行けばあるので、部屋に置く意義がないからだ。

箆筒も必要はない。部屋に埋め込まれている備え付けクローゼットで充分だからだ。

それでも——ベッドがある。

毛布があれば充分であるにもかかわらず、ここまでのものを用意して貰えるとは……少しばかり贅沢しすぎないかと、度々思うほど機能性に溢れた部屋だ。

「うわっ、相変わらず何も無いな……カズ、お前、ちゃんと暮らせてるのか?」

「本当、昔から物持たないよね。この部屋も殺風景すぎない? 独房なの?」

「こういうのって何て言うんだっけ……ミニマリスト?」

ところが、周りからは散々な言われようだ。

……女子からしたら、そのような考えに至るものなのだろう。

まあそれはそれ。これはこれ、だ。

それとは別に、今回は注意しておく必要がある。

「さて、勝手に他人の部屋に入って他人の趣向を暴こうとした意図は理解できたが……こういった真似をされた側の気持ちを考えたことがあるのか? お前たちが今まで築き上げた信用を失っても構わないのならば止めはしないが」

「え、あ、ご、ごめんなさい」

「う、ごめんなさい。悪ノリし過ぎた」

俺は構わないし気にしていないが、他人はそう限らない。

こういった冗談は、匙加減を誤れば取り返しのつかないことになりかねない。俺自身、商店街の皆からそう指摘されることが多いが、今回は棚に上げさせてもらおう。

……よくよく考えれば、俺は冗談のつもりでやった記憶がないのに、よくそんな指摘を受けたのだが、なぜなのだろう。

「まあ、俺にも非はあるか。次からは気をつけて、一冊くらいは目立つところに置いておこう」

「そうだね……えっ!? 何言ってるの、お兄ちゃん!」

む、何か間違えただろうか。

この場合、むしろ逆に俺がそのようなものを持っていた方がかえって安心するのでは、と思っただが。

「つぐみはああ言っているが、何か希望はあるか？是非、今後の参考にしたい」

「あ、なら、いつそのことボーイズラ——」

「モカ！それ以上はやめとけ！カズは本気にするぞ！」

そこまで話をした後、珍しく蘭が「こほん」と態とらしい咳払いをする。

話が脱線しすぎたためか、強引に軌道修正をするようだ。

「それより二人とも。風呂出たなら早く言ってよ。あたしずっと待ってただけど」

「う、ごめんね、蘭ちゃん」

「めんごめんご。許しておくれ」

「……モカは謝る気ないでしょ。さっきの和那のトーンと違い過ぎ」

「もう、そんなカタイこと言わないの。お風呂上がりのモカちゃんの香りを堪能していいからさ」

ふっ、とモカが髪の毛を払う。

つぐみが集めている入浴剤のうちのひとつを使ったようだ。

気を取られるつもりはない。俺にはこの部屋に来た目的を果たさねばなるまい。

クローゼットを開ける。下部の収納から適当にシャツとスウェットを取り出す。

「巴。ひまり。例のモノだ。好きに使い」

「おっ、サンキュー！」

「お、お借りしますっ！やたっ！」

ひまりが小さくガッツポーズをしていた姿が丸見えだった。まあ、喜んでくれたようで何よりだ。

「そ、そうだよね……巴ちゃんもひまりちゃんも、私の服じゃ、サイズ合わないよね……」

一方、従妹いもうとの方は何やら乾いた笑みを浮かべながら自分の部屋に戻っていった。

「……あそこまで気にすることなのか？」

「トモちゃんもひーちゃんも、スタイルで言えばグンバツだからねー。お年頃になってしまったつぐには色々と悩みがあるのだよ」

「グンバツ、か。俺としては虎とジャガー程度の違いにしか見えないのだが」

「その二匹ってだいぶ違うでしょ」

「その通りだ」

俺とてその程度の区別はつく、と言う話だ。

……さて、目的は遂行した。

巴とひまりが風呂に行ったのを見送ったあと、己のベッドに座り込む。

「あれ、カズくん戻らないのー？」

「寝るだけなら、俺が戻る必要もあるまい。蘭も、あとはモカとつぐみがついていれば怖くないだろう」

「だから！別に怖がってないって言ってるじゃん！」

「よーし。じゃあ、つぐの部屋で怪談でも——」

「やっぱあたしも軽くシャワー浴びてくるから出たらすぐ寝るからおやすみ和那」

モカの背中を押しながら、そそくさと去っていった蘭。やけに早口



で上手く聞き取れなかった。とにかく怪談なんてする前に寝て朝を迎えたい意志はしかと伝わった。

二人が閉め忘れた扉を閉めて一息つく。

「幽霊、か」

ベッドに寝転び、話に聞いた七不思議のことを思い出す。心霊現象……確かにそういうこともあるのかもしれないし、ないのかもしれない。当事者ではない俺には確かめようのない話だ。

「……………塩でも盛っておくか」

寝るにはまだ早いようだ。

部屋から出て、寝静まった店の明かりをカウンターとキッチンだけ点灯させる。

塩を取り出し、数枚の小皿に盛りつける。

あとはこれをつぐみたちの部屋に……………いや、待て。

「多すぎるな」

盛りつけた量ではない。在庫の量が、だ。

発注ミスも考えられるが、どうにも恒常的なもののようにも思える。

……………確かに、今の羽沢珈琲店には、塩を多量に使うメニューはなかった。これは新たな発見だ。

ならば、活用方法はないだろうか。

そう言えば、この間イヴが食べた話していた塩アイスなるものが――



「あれ、お兄ちゃん？」

「——む」

横からの声が、現実へと引き戻す。

気がつけば、目の前のテーブルには試作のアイスやらソフトクリームやら、パンケーキやら……いかな、つい没頭しすぎたようだ。

「つぐみか、こんな時間にどうした」

「お兄ちゃんこそ、こんな夜中まで試作してたの？」

「そんなつもりはなかったのだが、つい、な」

「つい、って。お風呂は？」

「…………一応、風呂には入ったみたいだ」

呆れながらカウンター席に座るつぐみ。

……………そうか、座るのか。

「寝れないのか。怖いかな？」

「うっ……………そうです、はい」

夜の学校では、つぐみは皆を先導していたと聞く。だが、皆のために頑張つて抑えていただけで、怖くなかったわけではないことは、言動の節々を見ればわかる。

「つぐみ、お前は俺にどうして欲しい」

「えっと……………なら、少しお話、してもいいかな？」

「承知した。ハーブティーでも淹れよう」

「うんっ！」

戸棚を漁り、ティーパックを探す。

それにしても……話、か。

「しかし、改めて何か話す必要があるのか？ 充分にコミュニケーションは取れていると自負しているのだが」

「ま、まあ、会話は沢山しているけど……その、最近、お兄ちゃんと二人でいることが少なかつたし……」

「そうだな。確かに減っているな」

俺は店の運営。

つぐみはバンドに生徒会。

家族とはいえ、互いの活動環境は違う。

バンドが昔馴染みのため、何だかんだ共に過ごす時間は取れていても、こうして従兄妹水入らずきょうだいの時間は確かに珍しいかもしれない。

「特段、珍しい話でもあるまい。バンドを続け、高校生にもなれば交友関係は広がるものだ。その分、俺との時間が減るのはむしろ必然だろう。喜ばしいことだ」

「……それって良いことなのかなあ」

「俺にとっては喜ばしい変化だ」

「……………むう」

むう、と言われても困る。

正直な感想なのだから、これで甘んじて欲しいものだ。従妹いもうとは俺に何を求めているのか、たまにわからなくなってしまう。

「まあ、少しばかり寂しさはあるか」

「え？ 寂しいの？ あのお兄ちゃんが？」

「俺とて人間だ。ずっと後ろにいた従妹いもうとや、その幼馴染が等身大の成長をすることに感傷を抱くこともある」

「……そっか、私だけじゃなかつたんだ」

「そうか。お前もそんなことを思っていたのか。確かに、最近の蘭の

変化には目を見張るものがある。無理もない話か」

「……え？」

きよとん、とするつぐみ。

蘭のことではなかったのか。では、巴か。巴はあこから良い刺激を受けているようだ。この前もあこの関係がぎこちなくなった時の経緯も聞いた。以来、また一皮剥けたような印象を受ける。

「私、お兄ちゃんが変わってきていることが寂しいって言ったつもりだよ？」

………何だと？

「俺が、か？」

「うん。お兄ちゃん、すごい変わったもん」

キツパリ言い切られてしまった。

珍しい。つぐみが『思う』なんて言葉すら使わずに、ここまで断言するとは。

「そうか。お前がそう思うのなら——」

「私が思っただけじゃなくて、お兄ちゃんは変わったよ。だって、最近はお前たちや商店街の皆だけじゃなくて、色んな人達と仲良くなってるし」

「全てお前たちを経由した繋がりがな」

確かに、一年前と比較して顔は広くなったような気もする。名前を知らないような、顔見知りばかり増えているだけに過ぎないが……進歩しているのか、俺は。

柄ではないが、少しばかり嬉しい。

「で、それに何か文句……いや、それが怖いのか？」

こくり、とつぐみは頷いた。

疑問に思っていた。俺が変わった、と言葉にするつぐみの顔は晴れない。何か思うところがあることは誰が見てもわかる。

「お兄ちゃんが社交的になつてきているのは私も嬉しいけど、少しだけ怖いんだ。このまま、お兄ちゃんが私の見えないところに行っちゃうんじゃないか、って」

「いや、それは——」

「うん、わかつてる。大袈裟だよね」

ぽつり、ぽつり、と、心情を吐露しながら乾いた笑みを浮かべるつぐみ。ずっと溜め込んでいたように見える。

愚鈍な自身を恥じるとともに、大袈裟などではないも思う。

つぐみたちがバンドを始め、自分たちだけでガルジヤムで成功を収めたと聞いた時、似たような心情を抱いたこともあった。

あの一件、俺は何もしていない。

蘭の話聞いた。蘭の父と話をした。つぐみの見舞いに行った。それだけだ。

解決したのは、他ならぬ五人自身。

今も——そして、これからも——俺がAfterglowへ本格的に介入することはない。そう或ることが最善だと断じた。六人目なぞ、存在しないのだ。

「……覚えてるか。俺とお前が初めて会った時のことを」「え？」

だが、それでも「変わらないこと」がある。

「な、なんとなく覚えてる、かな。お父さんから紹介されて、家族が増

えることが嬉しかったことと……あと、お兄ちゃんの服がやけにボロボロだったような……」

「当時の俺の姿はあまり関係のない話だ。重要なのは、俺が初めてお前と交わした約束だ」

「約束？」

あの日のことは今でも鮮明に思い出せる。

十にも満たなかった俺に与えられた衝撃と、己の誓いは忘れまい。

「そうか、覚えていないか」

「ま、待って！今、思い出すから……えっと、し、『知らない人にはついていけない！』とか？」

「重要だな。その日会った知らない人に説かれるのは、やや説得力に欠けるが」

「違うの？えっと……えっと……こ、降参！」

「そうか」

わざわざ両手を挙げてまで表現するのか。忘れていることに対する申し訳無さの表れか。

「まあ、お前が覚えていようがいまいが関係ない話か。お前は今のまま、あるがままに生活していればそれでいい。無理のし過ぎは禁物だが」

「……やっぱりお兄ちゃん、意地悪になってる気がする」

「なんだと」

「コミュニケーションの基本は情報の共有だよ！お兄ちゃんが知ってて、私が知らないことを一方的に納得するなんて、意地悪だと思う！」

「む」

これは風船のように頬を膨らませるつぐみに理がある。

今のつぐみからしたら、俺は思わせぶりなことだけ言って結論を述

べない意地悪な人間に映っているのかもしれない。

であれば、俺が拒む理由はない。

あの時と同じように、従妹の目を逸らすことなく静かに告げる。

『お前が俺を必要とするかぎり、俺はお前を庇護し続ける。たとえ近くにいられない時でも、俺はお前を照らす太陽になろう』  
「え？」

「俺が初めてお前にした約束事だ」

なぜ出会い頭に、何を思い、俺がそんなことを口にしたのか。理由は全て俺個人のエゴだ。つぐみにとってはどうでもいい。

重要なことは、従兄が誓い、従妹が受け入れ、約束が交わされた。この約束を以て、俺とつぐみが従兄妹になった。それだけだ。  
改めて、つぐみに視線を集中させる。

……カウンターのテーブルに突っ伏したまま動かない。

「どうした。浮ついた台詞を言わせるだけ言わせた上に、聞いたら聞いたで欠伸でもでてきたのか」

「違うよーお……お兄ちゃんってば、よく顔色ひとつ変えないで言えるよね」

「これでも小恥ずかしさを感じているつもりだ。まあ、お前の表情筋を緩ませることは成功したようで何よりだ」

「うう……お願いだから今はこっち見ないでよ……」

耳を赤くした従妹をもう少し拝みたかったが、そう言われてしまえば仕方ない。

後ろを向き、ハーブティーの用意をする。

ここは、バーベインにしよう。それがいい気がする。

……こんな従兄でも、辛くも七不思議の恐怖を紛らわすことができたようだ。言葉だけでも、時には人を安心させることができるようになったのは、確かに変化の証なのかもしれない。

これを蘭やひまりにもできればいいのだが、ままならないものだ。

「——ありがとね」

ぼそり、と聞こえる感謝の言葉。

……今はこれで充分としよう。

気づけば、自然と口元が釣り上がっていた。

そんな夏の終わりのひととき。

季節は折り返し——夕焼けが映える秋がやってくる。

「あと、私からも良いかな?」

「どうした」

「……………な、なんで、背中だけ服がないの?」

……………唐突だな。そして今更か。

ここで作業に没頭している間もこの状態だったと言うのに。

「着ているぞ。下は履いているし、あとエプロンも着けている」

「それタンクトップだと思ってた……………なんでシャツ着ないの?」

「洗濯したものはひまりに貸したもので在庫切れだ。結果、〃裸えぷろん〃と言う格好になった」

「は、はだっ!?!」

裸なのは上半身なので厳密に言えば違うのだろう。いわば、〃ハーフ裸えぷろん〃か。

背中への防御がないが仕方あるまい。着る服がない以上、こうせざるを得ないのだから。



「せめて今日着たシャツでもいいから着てっば！今日はみんないるのに、朝までその格好でいるつもりなの!?!」

「さすがだな。俺のことは全てお見通しと言うわけか」

「お兄ちゃん!!!」

とりあえず、頭から湯気を出しているつぐみのためにも、手際よくハーブティーを用意するでしょう。

……ああ、この騒がしいやり取りも 変わらないもの なのかも しれないな。

「の、のんきにハーブティー作ってないで服取ってきてよー!」

「すまない」

## 20話 知っている／知らない表情（かお）

残暑は鳴りを潜め、過ごしやすい陽気が続く。春、夏と経て、早くも季節は折り返し地点を過ぎ、秋がやってきた。

読書の秋。スポーツの秋。食欲の秋。

本来、季節など関係ない文化的な行為に、「秋」という言葉を添えてまるで特別なものにしようとする意図はわからないが、その影響から余人が活発になるのは事実。

羽沢珈琲店も、その風潮に合わせた結果――

「ひゃ、ひゃい！では、これから羽沢珈琲店、第二回お菓子教室を開催しましゅー！」

「声量が迷子だぞ」

緊張からか、抑揚を見失ったつぐみを案じる。

第二回、と我が従妹いもうとが言ったように、羽沢珈琲店がお菓子作りの教室を開くのは二回目になる。

事の発端は例によって叔母の思いつきだ。

ふとした時に舞い降りて来る神託には、叔父も従妹いもうとも振り回されればかりだ。

それを三日前に聞かされた俺は、擁護はおろか、苦言を呈さざるを得なかった。そのせいで叔母が予想以上に落ち込んでしまったらしいが、これで少しは懲りてもらいたい。

で、こうして当日は居る者たちで対応することになってしまったわけだ。

「ぜ、前回は好評だったため、こうして二回目の教室を開講することができますっ！」

参加者たちの視線が集まる中、つぐみが開講の挨拶を続ける。たどたどしいものの、伊達に生徒会にいない、というわけか。

「これも皆様の(ぐ)愛好のおかぎえ」

ぎえ。

……………しん、と空気が固まる。

沈黙に包まれた教室に、とうとう耐えられなくなったつぐみはこちらに顔を向ける。

「お、お兄ちゃあん……………」

「……………こうなるのか」

今すぐ逃げ出したくなるような失態を晒し、半泣きのつぐみからバトンタッチする。

……………不得手だが、所望とあれば従おう。

背後にいる仲間目配せする。

こくり、と頷くのを確認し、口火を切った。

「羽沢和那だ。このイベントを発案したもののロクに企画すらせず、段取りを丸投げした計画性のない叔母の代わりを務めることになった。この店の料理人<sup>シェフ</sup>としては最大限を尽くすつもりだ。それと――

――」  
「助手の若宮イヴです！ 不束者ですが、よろしく願いします！」

俺ひとりならともかく、今回はつぐみとイヴがいる。であれば、互いがフオローし合えば滞りなく終わるはずだ。

……………それに。

「……よろしくお願ひします」

知っている顔もいるようだ。  
では、できるだけ恥のない働きを見せるとしよう。



後髪を束ね、ヘアゴムで結う。

エプロンの紐を少し強めに結びすぎたかしら、と思いつつもシャツの腕をまくる。この準備も随分と慣れたはずなのに、今日はどこか余計な力が入ってしまった。

羽沢珈琲店、二回目のお菓子作り教室は前回よりも賑わっている。羽沢さんがさつき言葉にしたように、第一回の成功が実を結んだ結果なのだろう。前回よりも会場が少しばかり手狭に感じてしまう。

当然、参加者が増えたのもある。

けれど、今日はそれ以外にも理由があるのかもしれない。

「カズナさん、今日は何を作るんですか？」

「見てわからないのか？」

「み、見てもわからないのは当然なので、今日はスイートポテトを作りますっ！」

先ほど涙目になっていた羽沢さんと、今回から参加となったアシスタントの若宮さんの間に挟まる、白い人。

カズナさん——と呼ばれた彼は、私のように後頭部に髪を束ね、参加者の視線を一身に受けていた。

薄々、気づいてはいた。彼が羽沢珈琲店のキッチンを任されていることは、羽沢さんからの伝聞や、夏祭りの屋台で偶然会ったときの身の上話から察することはできる。

ただ、こうして目の当たりにすると、どうも世間の狭さを痛感させられてしまう。

……………それにしても。

「……………ポテト」

「紗夜さん？」

「な、なんでもありません。気にしないでください」

小首を傾げる羽沢さんの視線から逃れるように、調理台の方へ体を向ける。

ポテトはポテトでも、じゃがいもではなくさつまいも。ジャンクではない、スイーツの作り方を学ぶ場と改めて己に言い聞かせる。

気を取り直して、調理台に今回使う材料たちに向き合う。

さつまいも、生クリーム、バター、卵……その他の調味料諸々。これらの分量等々を脇においたメモに手早くまとめた。

「じゃあ早速……って、お兄ちゃん！ 何勝手に剥いてるの!？」

「なぜ止める。時間は有限だぞ」

「な、慣れてない人がいるんだから、もう少しゆっくりやってってば！」

書き終えた頃には、もう既に何か始まっていた。彼の前にあるまな板の上には、既につるつるに皮が剥かれたさつまいもたち。

その間およそ一分。

目を離れた隙にボウル一杯分の皮剥きを終えていた。

仕方ない、と言葉を溢した彼はまた別のさつまいもを一つ取り出し、まな板に置く。もう一度手本を見せてくれるみたいだ。

「まずは皮を剥く」

さつまいもを転がす。

包丁を横から切り込みを入れ、そのままひと振り。紫色の薄皮が宙を舞う。

その繰り返し。一見、単調に思える動作でも、そのひとつひとつが無駄なく、洗練されている。やがて、紫色だったさつまいもは身包みを剥がされてしまう。

……：恥ずかしいことに、今の私では何が起きているのかさっぱり理解できなかった。

「あ、兄は包丁を使っていますが、慣れてない人はテーブルにあるピーラーを使って、皮を全部剥いてください！」

参加者の人たちから出た安堵する声に心底同意する。

あんな芸当、猿真似すれば確実に怪我人が出てしまうもの。

「そして切る」

「え、えっと、さつまいもをサイコロの形になるように切ってください。何かコツとかってある？」

「ない。あとで潰す以上、不格好でも問題ない」

といつつも、遠目からでは不格好の様子がわからないほどには均一の大きさに切られていた。

さつまいもの数だけ手本を目の当たりにするけれど……：速すぎて再現できそうにもない。

続いて、正方形に切られたものをボウルに戻し、計量器に入れられていた水を全て注ぐ。

「切ったものを水につけ、アクを抜く」

「ぜ、全体に水に浸かるくらいにしてください。じゃあ、ここまでやってみましょう！はい！」

ぱん、と、羽沢さんの手拍子を皮切りに各々は調理台に向き合う。

……：いよいよここから実践の時間ね。

ええと、まずは洗ったさつまいもと、このピーラーを持って……：

む、む。

「あの、すみません、羽沢さん」  
「なんだ」

すかさず視線をこちらに向けるお兄さん。

……失念していたけど、彼も「羽沢さん」なのね。

「……いえ、妹さんの方です。失礼しました」  
「そうか」

紛らわしい言い方をしてしまったことを自省しながら、こちらに駆け寄ってくれる羽沢さんに質問する準備を整える。

「はい。どうしました、紗夜さん？」

「皮はどれくらいの厚さまでを指すのですか？ ピーラーでどこまで剥いていいのかわからなくて……」

「あ、それなら紫色の皮だけなので、そこまで力を入れなくてもいいですよ」

「わかりました。ありがとうございます」

羽沢さんの教えに従って、ピーラーの持つ手を動かす。力加減、というのは苦手だけど、何度かやればコツは掴める。  
で、今度は包丁で小さく切る、と………むう。

「すみません、羽沢さん」  
「どうした」

再びお兄さんが反応してしまっていた。

いけない。気をつけようとしたばかりなのに、繰り返しになってしまった。

「……………度々失礼しました。妹さんの方です」

「……………そうか」

「はい！ 今行きますね！」

笑顔でこちらに来てくれる羽沢さんと対照的に、無表情のまま腕を組んで視線を外すお兄さん。

こうして見比べてみると、二人は全く似ていないように思えて……………いや、似てないわね。

いけない。包丁を持ちながら余計なことは考えないようにしないと。

自分を戒めながら、再度羽沢さんに向き合う。

「サイコロ状と言うのは、どれくらいの大きさで切ればいいのでしょうか？」

「そうですね、大体一センチくらいの正方形に……………ならお兄ちゃ——

—あ、兄が切ったものを持ってきますので、それを参考にしてみてくださいー！」

「はい、ありがとうございます。羽沢さ——」

ここで、ハツとした。

三度も同じ間違いをするわけにはいかない。いい加減、私も学ばないとい。

「……………」

お兄さんも、じつ、とこちらを見ている。

……………申し訳ないけど、あの眼つきで見られると、さすがに私も少しだけ身が縮こまってしまうので、控えてもらいたい。

こうならないためにも……………仕方ない、わね。



「つ、つぐみ、さん」

「——はいっ！」

「ぱあつ、と花開く羽沢さ——つぐみさんの笑顔。前々から名前で呼ぼうとしてたけど、実行に移せなかった名前呼び。」

「少しだけ恥ずかしかったけど、私達の距離が縮まった気がして、こちらもつられて口角が上がってしまう。」

「改めて、お兄さんの方を見る。」

「相変わらずの無表情だけど……不思議と、彼の口も緩んでいるように見えた。」

「……もしかして、あえて彼は苗字に反応することで、私が名前呼びをするきっかけを作ってくれたのでは、と。」

「さすが、あのつぐみさんのお兄さん。」

「どこか抜けているような様子でも、しっかりと人の事を見ている。侮れないわ。」

「認識を改めて、私は作業に戻った。」

「あの、羽沢さん。ちよつといいですか？」

「……………」

「羽沢さん？」

「む、つぐみではないのか」

「いえ、貴方です。あの……………」

「その間にも、お兄さんは他の参加者からも質問を受けていた。自分のことで精一杯なので、その受け答えの様子まで伺うことはできなかった。」

作業に集中しよう  
閑話休題。

「皮を剥く。切る。そして、火を通す。」

「湯を張って茹でる——のは機材の関係上、電子レンジで代用する。」

ことに。

「…………お兄ちゃん、どうしよう?」

レンジが仕事している間、参加者たちは手持ち無沙汰になる。すると、お兄さんが机の下から何かを取り出した。

「——で、温め終わったものがこれだ。そしてこれを……………」

「ま、待って! 何でそんなに用意周到なの!? あと、今、説明されても誰もついていけないよ!」

「なぜだ。あの料理番組を参考にした。世間一般ではこのスピードが標準なのではないのか?」

「あれはあらかじめスタッフさんが用意してくれるの! 他の人はそんなことしないよ!」

「……………そう、だったのか」

……………おかしいわね。

無表情だけど、今、お兄さんの背後に雷が落ちたような気がするわ。

「イヴ、そうなのか?」

「私が番組に出させていただいた時、スタッフの方からは『伝統芸』と説明いただきましたよ?」

「ふむ、誇張が目に見えてわかるが、テレビ関係の人間が言うなら確かなのだろう。尺の都合によって生まれた伝統的な芸能演出……やはり興味深い。では、出来上がったものが——」

「い、今はテレビ番組じゃないよ! すみませんっ! 皆さんは気にしないで、今までの作り方のメモを見直してみてくださいっ!」

あわあわと慌てふためくつぐみさん。

いきなり漫才が始まったけど、他の参加者の皆様も笑いながらメモに向き合っている。

若宮さんはともかく、お兄さんはどうして突然……まさか。

この何気ないやり取りの中でも、実はお菓子の味を向上させる秘密があるのでは——？

以前、今井さんから聞いたことがある。

『お菓子作りって、一見無駄のように見える作業も、実は食べる人のための気遣いになったりすることもあるんだよねー』

あの時、未熟な私では真意を全て汲み取ることはできなかつたけど、今ならわかる……気がする。

「ダメなのか……では、余った材料で大学芋でも作るか」

「もう！ 今日にはスイートポテトを作るんだよ！ 他の作ったら混乱するってばー！」

「カズナさんカズナさん。大学芋があるなら、高校芋はあるのですか？」

「ふむ、聞いたことがないな……試作してみるか」

「ふ、二人とも自由すぎるって……」

項垂れているつぐみさんには悪い気もするけど……念のためメモ用紙を裏返し、ペンを走らす。

いつか役に立つことを信じ、このやり取りの議事録を残すことにした。

チン、と特徴的な機械音がする。

温まったボウルを火傷しないように取りだし、竹串で芋を刺す。崩れてしまいそうになるほど簡単に刺さる。

……これが、火は芯まで通っている証、と。これも書き残しておかないと。

「熱いうちに潰す」

「熱いので気をつけてくださいいね！」

さて、今度はこれらを潰マッシュユースすのだけど――

「っ」

思ったより、力がある。

幾ばくか体重をかけながらやっつけていても、すぐに疲れてしまう。

「紗夜さん？ 大丈夫ですか？」

「結構、力が、必要です、ね。ふう、コツとかないでしょうか？」

「コツ、ですか？」

つぐみさんの視線はお兄さんの方へ向く。

……何やら若宮さんとお話されているようね。

「カズナさん、これ使ってもいいですか？」

「すり鉢か。構わないが、使い方はわかるのか？」

「はいっ！ こうして棒を中心に、擦るように回せば……」

「ほう、自然薯の要領か」

「ジネンジョ？ とろろではないのですか？」

「ああ、自然薯というのは――」

「た、楽しむことだと思います！」

「つぐみさん？」

今、思考を放棄しかけたのは気のせい――いえ、確かにそのとおりだわ。

若宮さんのように、こういった工程の中にも何か楽しみを見出して、試してみることが一番、と言う意味ね。さすがつぐみさん。

と、考えていたら、もう原形は無くなりかけていた。

……もつと、潰したほうがいいかしら？

「では、熱いうちに他の材料を加えるぞ」

「えつと……テーブルのバターと砂糖、塩、を加えて混ぜてください！」

一方、次の工程に進んでしまっていたので、マッシャーは別のところに置くことにした。

次は、調理台に置かれたバターなどの調味料を入れていくわけで……むう。

「つぐみき——」

呼びかけて、口を嚙んだ。

羽沢さんが、小学生の子どもの参加者の相手をしていたから。邪魔をしてはいけないので、他の人に助言を乞う事にする。

「……………」

じつ、と、お兄さんが静かにこちらを見ている。

目つきが、こわ……いえ、鋭くて、まるで内面まで見透かされているようで、居心地が悪い。でも、背に腹は替えられない。

「……………あの、すみません。混ぜる、とはどんな状態になるまで混ぜれば良いのですか？」

「この段階なら、あくまで材料が混ざればそれでいい」

「はい。ありがとうございます」

必要最低限のアドバイスを受け取り、言われたとおりに調味料たちを全てボウルに入れる。

「全部入れたのか」

「……………何か問題でも?」

「いや、本人がそれでいいのならそれでいい」

……………もしかして、何か間違ったことをやってしまったかしら、なんて考えながらも、お兄さんの意味深な発言は気にせずにかき混ぜていく。

「で、さらに生クリームと卵黄を加えて混ぜて、その後に生地を鍋に移し替えて、弱火で熱しながら混ぜてください!」

「あの……………」

「俺が混ぜたものを参考にしろ」

「あ、ありがとうございます」

質問する前に、彼のボウルを押し付けられる形で答えられてしまった。

確かに、このような大雑把な加減は口で説明されるより実物を見た方がわかりやすい。

木製のヘラを手に、手早く全体を混ぜていく。次第に、はじめは固形気味だったさつまいも達も、一つの生地としてまとまり始める。

「生地がまとまったら、火傷しないように注意しながら手で形を整え、卵黄と生クリームを混ぜたものを表面に塗ってください!」

「形を整える、ですか。あの、型抜きとかは——」

「別に使っても構わないが、クッキーとは違い、火は通り方にムラができやすい。こちらとしては勧めるつもりはない」

「なるほど」

その点はクッキー作りとは違うのね、と関心しながらも疑問符が浮かぶ。

では、一体どんな形がいいのかしら……………と考えていた時、妙に大仰

な動きをしていた若宮さんが視界の端に入った。

「へい、おまちっー！」

「い、イヴちゃん……だからここお寿司屋じゃないよ……」

「つぐみはああ言っているが、あれはあれでシンプルで理にかなっている。参考にするのもひとつの手だ」

「寿司、ですか」

であれば、こちらとしてもイメージしやすい。

上手くできるかはわからないものの、とりあえず若宮さんが作ったものに倣ってみようと、生地の手を伸ばした――

「待て」

「っー！」

が、手首を掴まれる。

直に伝わる体温と握力、そしてゴツゴツとした掌の感触。咄嗟のことに、ビクリと体全体が動いてしまった。

「先ほど自分が弱火で温めたことを覚えていないわけでもあるまい。率先して火傷を負おうとする酔狂な真似は止した方がいい」

「す、すみません」

……完全に迂闊だったわ。

寿司、というのはあくまで形の話であって、作り方の話ではない。危うく火傷するところだった。

怪我の危機に瀕していたためか……それとも別の理由からか、動悸が止まらない。

ふう、と深呼吸して、心を落ち着かせる。

………言い方にどこか棘を感じたけど、指摘はもつともだわ。気を抜いてしまっている証拠。集中、集中しないと。

「こ、こほん。あとは、アルミホイルのシートにのせて、オーブンで焼けば完成ですっ!」

数割ほど大きくなった声で次の工程へ誘導するつぐみさん。何かあったのかもしれないけど……後で聞いてみましょうか。

指示のとおり形を整え、ホイルを巻く。

密着しないように生地を天板の上に乗せ、オーブンに投入する。あとは焼き上がりを待つだけ。

小窓から、焼き上がりの様子を覗き込む。

徐々に、徐々にだけど、表面の水分が蒸発していることは窺える。

「思っていたよりも単純ですね」

「他にも手の施しようはあるが、お前たちに教えても充分に使いこなすことができるとは思えんからな。この程度が落とし所だと判断した」

「む」

つつけんどんな返答だけど、言っていることは間違っていない、と思う。

曲がりなりに、この人はプロ。

さつきもその腕を目の当たりにした以上、理解することはできる。

それよりも、少し気になることがある。

「あの、いいんですか?」

「何がだ?」

「いつの間にか、羽沢さ……つぐみさんが仕切っていることです」

気がつけば、この場を取り仕切っているのはつぐみさんだった。実演していたお兄さんは、なぜか途中から私に付きつきりになっている。



進行に文句をつけるつもりはない。

けれど、役目を引き請けた以上、最後まで全うしないのはいかなものか、とも思ってしまった。

「何やら思うところがあるようだが、問題ない。元より、今日の講師は俺ではなくつぐみだからな」

………つい、目を丸くしてしまう。

今、耳を疑うようなことを仰ったような。

「今回の講師を志願したのはつぐみ自身だ。求められたから俺から切り出したが、講師役を務めるにはいささか荷が重い」

「いえ、さつき『お母様の代わりを務める』と仰ったはずでは………」  
「確かに、思いつきだけでここまでの人間を集めた傍迷惑な叔母の代わりを務めると言ったが………そもそも叔母が講師をするとは言った覚えはない。俺はその尻拭いに駆り出された一人に過ぎん」

散々な言われ方をされているお母様。

家族間の仲については………こちらから触れるべきではない、として。

彼は羽沢珈琲店のコックと自称したはず。なら、講師としては彼の方が相応しいのでは、と思ってしまう。

「ようやく調子が出てきた、と言ったところか。さて、フォローはこれで充分だろう」

「何が………あの、ちよつと！」

有無も言わず、お兄さんはこの場を離れていく。引き留める隙すら与えてくれなかった。

この光景に、既視感を覚えてしまう。

初対面の時も、ああやって去っていった。どうも、あの人は勝手に

話が終わったものと判断してしまう癖があるように思ってしまう。

夏祭りのときも「口下手」と自称していた以上に、そもそも思考にズレがあるようにも思えてしまう。

「おまたせしました……あれ、紗夜さん？」

「あつ、はぎ——つぐみさん？」

没頭しかけた思考は、つぐみさんの声によって中断させられる。

つぐみさんは可愛らしいミトンとともに、オーブンの黒皿を手にしていた。

「あの、スイートポテトが焼き上がったのでいっしょに食べようと思っただんですけど……まさか、おに——兄が何か気に障ること言っちゃいました!？」

「い、いえ、そんなことないですよ。お誘いありがとうございます。若宮さんも呼んで一緒に食べましょう」

「よ、良かった……あ、今、兄がコーヒーを用意するので、ちよつと待っててくださいね!」

いつの間にか、使用済みの調理器具が無くなっているテーブルの上でエプロンを畳む。

椅子に座って待っていると、すぐにつぐみさんと若宮さんがスイートポテトとコーヒーを持ってきてくれた。

少し不格好なそれを一切れ口にする。

元来さつまいもが持つ甘さと、滑らかな食感が心地良い。自分がこれを作ったと思うと、またひとつ成長できたことを実感できる。

「紗夜さん、今日の私の進行、おかしくなかったですか？」

「そんなことはありませんでしたよ。私も、またひとつ勉強になりました。お二人とも、今日はありがとうございました」

功労者二人に労いとお礼を。これからもよろしく、と気持ちを込めたそれを、二人は微笑みながら受け取ってくれた。

その後、簡単に今回のお菓子教室について反省会が始まった。開催の宣言の際に、噛んでしまったつぐみさんが可愛かったと言う若宮さんと、林檎のように顔を赤くするつぐみさん。その様子を、温かく見守る私。

日菜の分も持って帰ろうかしら、と考えながらも、余ったスイートポテトを口にした——はずだった。

「……………これは」

違和感を覚えた。明らかに、私達が作ったものとは何もかも違う。ホイルから？がしてもベタつくことはないし、食べても溢れることがない。されども、固すぎず歯を使わずともほぐれる食感。

また、さつまいもの風味以外にも、蜜のような味が加わっているような、気がする。

歯がゆいことに、私では、このスイートポテトにどれほどの秘密が込められているのかは計り知れない。

「サヨさん、それ、カズナさんが作ったものですよ」

「え、ええ、そうですよね」

同じものを、こうして作ったばかりのせいか、以前宇田川さんからいただいたクッキーと同じ——いえ、それ以上の差の開きを感じる。

……………ちらり、と、つぐみさんを見る。

彼女も、同じようにお兄さんが作ったスイートポテトを口にしていった。

普段、食べなれているためか、表情には単純な賛美だけでなく、納得や懐古の感情が窺える。

やがて、満面の笑顔を浮かべて、惜しみない感想を口にした。

「えへへ、お兄ちゃんはずごいなあ。やっぱり、敵わないや」

——そこには、私の知らない表情カオがあった。

「……………何が違うのかしら」

無意識に漏れた、その言葉こそ、一体何に向けられている言葉なのかもわからない。

ただひとつわかることは、今の一瞬において、私はつぐみさんを通じて別の誰かを見ていたことだけだった。

「さ、紗夜さん？」

「サヨさん？大丈夫ですか？」

私の顔を覗き込む二人の声が、現実カオに引き戻す。いけない。また心配させてしまったみたいね。

「いえ、何でもありません。それより、つぐみさん。これは、本当にお兄さんは私達と同じ材料と工程で作られたのですか？」

「は、はい。材料も作り方も同じはずですよ」

……………ますます奇妙ね。

差異が生まれることには何か理由があるはず。

——何か、あのお菓子教室の中に見落としがなかったかしら？

——もしかしたら、お兄さんが付きつきりになったのは、私に何かを伝えようとしていたのではないかしら？

思考がぐるぐると回る。その度に増す衝動は、強迫観念めいた焦燥よりも純粹な——けれど、そんな綺麗なものでもない何かだった。

……とにかく、今日学んだことは一刻も早く反復が必要ね。

「あ、でも兄なら分量とか独自に調整をしても不思議じゃ……紗夜さん？」

「すみません、つぐみさん、若宮さん。これから私は議事録をまとめるので、これで失礼します。あと、お兄さんにもよろしく言っておいてくださいますと助かります」

「さ、サヨさん！ ギジロクって何でしょうか！」

「さ、紗夜さん!?!」

出口前で、お二人に礼をして店を出る。

静止する声に後ろ髪を引かれながらも、私は歩みを止めなかった。

お菓子作りは、あくまで音楽との相乗効果を狙って始めたもの。

おかげで、つぐみさんや今井さんとも交流を深めることはできたけど……やっぱり、音楽が第一なのは今でも、これからも変わらない。

……ただ、他にも大切なことが学べそうな、そんな予感がする。

Roseliaのギター氷川紗夜としてではない。

氷川日菜の姉の氷川紗夜として、大切な、そんなものが、彼から得られるかもしれない。

見当違いの可能性もある。

でも、もう心に火が灯ってしまった以上は、真偽を確かめないといけない。

……以前の私なら『バンドに支障をきたすことをわざわざやる必要はない』なんて切り捨ててると思う。

バンドの時間を疎かにするつもりはないけれど……賭ける価値はあると、今なら思える。

後髪を束ねたままだったことに気づいたのは、家に着いた後だった。



想定よりも遥かに盛況だったな、と考えていたら、激しく自己主張をするドアベルを耳にする。

後片付けと、つぐみたちのコーヒーマ用の用意、それと拗ねた叔母への差し入れのために席を外していたが、何かあったのか確かめるために店内に戻ってきた。

見れば、つぐみたちと共にいたもう一人がいなくなっていた。教室自体は既にお開きとなっており、今は参加者たちの休憩時間なので帰っても問題はない……が。

「む、もう帰ったのか」

「う、うん。議事録とか何とか言ってたけど……お兄ちゃん、また変なこと言っていないよね？ あと、何かいい感じだったし……」

「心外だ」

じとつ、とした視線を向ける従妹に反論する。

俺としては従妹いもうとが世話になっている身として、俺自身の顔馴染みとして、精一杯尽くしたつもりだ。

調味料は半分ずつ入れた方がいい、など色々とアドバイスを言いそびれたがな。

………それに、他にも何かを盛大に勘違いと買い被りをしているようにも感じた。

「実際、お前たちの目には不快に思われているように見えたのか？」

「う、ううん。そんなことなかった……と思う」

「私もそんな風には見えませんでした……ライブ前のサヨさんはあんな感じだったような気がします」

「あ、それわかる！ キリツとしてて大人っぽいよね！」

ライブ………ふむ。

やはりバンド繋がりだったか。つぐみたちのAfterglow  
といい、イヴのパスパレといい、音楽に縁がある者たちばかり集まる  
な。

「であれば、俺には関わりのないことだ——そんなことより、  
よくやったな、二人とも。片付けは粗方終わった。これで休憩を取る  
といい」

「……………えへへ、じゃあ、いただきます」

「はい、カズナさんもお疲れ様でした！一緒に休憩しましょう！」  
「ああ」

三人目のコーヒーは俺が処理することになった。休憩がてら、余つ  
たスイートポテトを口にする。

……………潰し方や火の通り方は荒削りだ。

しかし、分量は間違っていないし——何より真面目さや真摯さが  
伝わってくる。

店ですすには力不足でも、少なくとも俺にとっては好ましい味のよ  
うに感じた。

向こうがその気ならば、次に来たときは改善点を挙げるとしよう。  
はて、余計な真似でなければいいのだが。

小休止として、コーヒーを口に含める。

一度舌をリセットさせた後、最後の一口を放り込んだ。

「そういえばお兄ちゃん。このスイートポテト、私達と同じ作り方し  
たの？味とか食感とか違うけど……………」

「何を言っている。それは試作した『高校芋』だぞ」

「こ、高校芋……………え、もう試作したの!？」

「なるほど、これが高校芋……………どうりで黒蜜の味がすると思いました  
！カズナさん、作り方を教えていただけませんか？」

「完成したらな」

……………今度、この高校芋の試食にも付き合ってもらえるといいの  
だが、快諾してくれるのを祈るばかりだ。



## 21話 ランブリングメモリー（前編）

今日もどこかで、鈴の音が聞こえる。

秋も過ぎ、刺すような寒さが続く中でも、人々の足取りは軽やかだ。……一部、逆に重くなる者もいるかもしれないが、それもまた風物詩と言うものだろう。

じんぐるべる。じんぐるべる。

陽気な音楽とともに、人工的な電灯が点滅する。機械的でありながら、幻想的な色彩を生み出すイルミネーションが今年のクリスマスシーズンを彩る。

「いささか骨が折れそうだ」

つい、本心を吐露してしまった俺は、ショッピングモールのとある一角のテナントにいた。目の前には食料品……ではなく、小物類が並んでいる。

毎年恒例の、羽沢珈琲店クリスマスパーティー。

今年もひたすらジンジャークッキーを作るつもりだったが、なんと俺は飾り付け担当に任命されてしまった。

理由は単純。

叔父たちに『いい加減キッチンから離れろ』と言われてしまったからだ。

毎年、クリスマスパーティーとは別に、羽沢珈琲店でもクリスマスケーキを作っている。

受注生産なので、事前に申し込みがあった分だけ作る。

だが……何を間違えたのか、叔母が数量の制限を設けなかったのが致命的だった。

想定よりも二倍、三倍に膨れ上がる受注量に、俺は嬉しい悲鳴をあげながら着々と準備をしていた。

そして、いつの間にか二徹目になっていることに気づいた叔父とつぐみより、しばらくキッチンの立入禁止令が発令。

接客スキル皆無の人間としては、キッチンに入れない時点で役立たず以外の何物でもない。仕方ないので充分に休息を取ったものの、僅かばかり時間を持って余ってしまったので、何か手伝えることはないか、つくみたちに相談してみた。

結果、気分転換も兼ねてクリスマス会の準備……特に料理関係から離れた飾り付け担当を任せられた。

で、この飾り付け担当だが、俺以外にも助っ人がいる。本人は素直に認めたがらないが、飾り付けやアレンジメントに日々携わっている心強い味方だ。

「蘭め、なぜ店に入らない？」

……その味方が、いつまで経っても店の中に入ってこないことが問題ではあるが。

来た道に戻ってみる。

特徴的な赤メッシュが、店の前にいるのを見かける。気づいているのか、ちらちらとこちらの様子を見ながら、落ち着きのない素振りです、誰かと会話していた。

蘭が向いている方角を見ると、そこには銀髪の女性がいる。年代は蘭と近そうだが、何やら、緊張感のある空気だ。

「なるほど」

とにかく、この場において俺が介入するのは、蘭が望んでいないことは察した。

仕方ないので、助っ人を外したまま買い物をするにし、再び店内に身を投じた。



まずいまずいまずいまずい。  
何がまずいって、もうこの状況がまずい。

「美竹さん？」

「み、湊さん」

きつ、とした視線が突き刺さる。

ばったりと会ってしまった湊さんは、確実にあたしの存在を認識していた。

無意識に、声がうわずってしまふ。

よりにもよって、この瞬間、この場所で出くわすなんて、なんて不幸な日なんだろう。

「きよ、今日はリサさんは一緒じゃないんですね」

「私は四六時中リサというわけじゃないのだけれど」

それもそうだ。

前に似たようなことがあった際に、遠くからモカトリサさんが尾行していたことがあったから、つい警戒してしまった。

もちろん、他にも理由はある。

「いえ、湊さんがひとりでこういう店に立ち寄るイメージがなくて」

「……………そ、そうかしら？」

……………あれ、随分と齒切れの悪い返事だ。

これはさては、何かやましい事があるのでは——？

「そう言う美竹さんも一人？」

「……………ええ、ええ、まあ」

「なんでそんなバツの悪そうな顔をするのかしら」

「し、してないですよ」

お互い様もいいところだ。

やましい事は何一つなくても、返事に困ることはある。何と言おうと盛大に自分に返ってくるので、ここは飲み込もう。

「……………」

「……………」

飲み込んだ途端に会話が終わった。

この流れなら、『じゃあ、また』で去れるのに、なぜか湊さんも離れようとしなない。

「そ、そういうえはもうクリスマスですね」

——であれば、あたしも引くわけにはいかない。

慣れていないけど、ここは当たり障りのない会話で牽制することにした。

「……………ええ、そうね。貴女は……………クリスマスパーティーの飾り付

けを買いに来たのかしら？」

「毎年皆とやるんです。Roseliaは練習ですか？」

隙を見せないように、視界の端に映る連れに意識を向ける。無駄に目立つ身長をしているので、見つけることには苦労しなかった。

何やら持ってきたメモと向き合い、買い物に勤しんでいる。

「コーン……………ふむ、さすがに三角コーン、ではないだろうな」

ホームセンターに行け。

……………早速、先行き不安になる様子だけど、あたしからは何も言えない。言える状況じゃない。

「違うわ。その日はライブがあるの。……………パーティーをやるとしたら、その後ね」

「へえ、クリスマスライブですか」

こつちもこつちで無様は見せられないからだ。Roseliaの面々はクリスマスだろうと何だろうと、やることは変わらないみたいだ。

ほんの少しだけ感心している一方、湊さんの目つきがさらに鋭くなった気がした。

「……………意外ね」

「何がですか？」

「気にしないで。私の買いかぶりだったようだから」

「何勝手に納得してるんですか。言いたいことがあるなら、はっきり言ってくださいよ」

その言葉で、あたしの心に棘が立つ。

わけのわからない理由で落胆させられて、『はいそうですか』なんて言えるわけがない。

「……………美竹さんたちなら、私達のようにライブをすと思うっていたから。あまり興味がなさそうで、少し意外だっただけよ」

……………ああ、何だ。そんなことか。

沸点に達しようとした頭が一瞬で冷える。

「何が言いたいのかわからないですけど、あたしたちはやりませんよ。きつと、これからも」

「一応、理由を聞いてもいいかしら？」

「さすがにこの時期になって予約も準備も間に合いませんし。何よ

り、Afterglow……いえ、あたしたちにとって特別な日なので」

「そう。残念だけど、そういう事ならこれ以上は何も言わないわ」

そう言葉にする湊さんの表情は、本当に残念そうに見えた。あたしたちの存在を意識してくれていることは嬉——悪くないけど、事実として何も準備していないから、何もできない。ここは諦めてもらおう。

……全く、湊さんといい和那といい、ハッキリ物を言うくせに、肝心な部分はこっちから聞かないと言おうとしないのは本当に何なんだろう。

前のライブバトルの時はわざとだったのは知っているけど、今回は素か。二人って、ある意味似た者同士なのかな。

それはそれで何かムカつ——

「あつ」

そう言えば和那どうしてるんだろう。

完全に意識の埒外だった。慌てて視線を向ける。

店内自体、そこまで広いわけでもない。無駄に目立つ容貌は嫌でも目立っていた。

「こんなものか」

透明の買い物かごには、メモに書いてあったものばかり。変な物はなさそうだ。

ホツとする反面、なんで自分よりも年上の人間がちやんと買い物できているのか一喜一憂しないといけないのか甚だ疑問に思う。

「失礼、会計を頼む」

「はい、承りまし……あらっ」

何にせよ、これであたしもこの場を離れられそうだ。買い物をして一人で任せてしまったことは後で謝ろう――

「お客様、もしかしてパーティーの準備ですか？」

「もしかしなくてもそうだが？」

――と思ったけど、雲行きが怪しくなってきた。

「いえ、よろしければ他にパーティーグッズを取り扱っているのですが、是非そちらもご検討いただければな……なんて思ったりして♪」

「ほう。具体的にどのようなものがある？」

「例えば……仮装とかいかがでしょうか？ お客様、背は高くてなかなか細身でございますし、色々とお似合いのものがありますよ！」

心中で、溜め息を漏らす。

なんだ、あのグイグイと迫る店員は。この前つぐみに連れられて行った時は、そんな媚びた態度じゃなかったのに。

金ズルにでも見えたのか知らないけど、こと嘘や誤魔化しは一切通用しないのが、この和那だ。

もう勝ったも同然だ。相手が悪かったね。

「ふむ……歯の浮くような見え透いた営業トークだな。付き合う暇はない。連れを待たせている」

「連れ……ああ、あの赤色のメッシュの――」

「ん、ん、ん、っ！」

ちよつと待ってそこの店員。

さすがにそれは反則でしょ。

我ながらわざとらしい咳ばらいに、和那からも溜め息が漏れる。こっちの意図は伝わっているはず。

ごめん、和那。あとで謝るから。

「取り込み中のようだな。すまないが、見させてもらう」

「あら、でもさつきは『全然興味ないぞ』みたいなご返事だったような……？」

「……………なぜそうなる？ 個人的には興味があると言ったつもりなのだが」

「やった！ありがとうございます♪」

あああもう……………なんか和那も乗り気みたいだし……………あたし、いつになつたらこの場を離れられるんだろう……………。

「……………今、随分とわざとらしい咳払いしなかったかしら」

「そ、そうでしたか？ここ、少し乾燥してますから」

やばいやばいやばい。

湊さんの視線がきつい。すっごい怪しんでる。咄嗟に出てきた苦し紛れの言い訳は、我ながらさすがに無理があると思った。

それを知ってか知らないでか、湊さんはやや呆れたように腕を組む。

「体調管理は基本でしょう？ 喉はボーカルの命。今更こんなこと言わせないで頂戴」

「余計なお世話です。体調には気をつけてます」

「そう。ならさつきの咳はわざとなのね」

「っ」

あ、墓穴掘った。

……………駄目だ、あたし。こんなに気を遣わなきゃいけないことなんてなかったから、もう何がなんだかわからなくなってきた。

はやく……………はやく切り上げてってば和那……………。



「これは……馬のキグルミ？ いや、被り物か？」

「いえ、トナカイですよ？」

「精巧ではあるが……しかし、角がないぞ」

「トナカイですよ？」

「いや、待て。トナカイは鹿とは違って、雄雌を角の有無で区別は――

――」

「トナカイですよ？」

「……………そういうのであれば、そうなのだろうな」

「美竹さん？急に頭を抱えて」

「聞かないでください……………何でもないですから……………」

体調は悪くないのに、頭が痛い。

このままじゃだめだ。和那に期待するより、あたしがこの場をどうにかするしかない。

折れそうな心を奮い立たせて、攻めに転じることにした。

「で、湊さんこそ、こんなところで道草食ってて良いんですか？」

「……………」

「湊さん？」

「み、美竹さんが離れたら、私も離れるつもりよ」

露骨に目を逸らす湊さん。

よし、この調子だ。このまま湊さんが自発的に離れてくれればいい。

「それより美竹さん。あなた、何か隠していない？」

「別に、何もやましいことなんてないですけど」

だけど、湊さんも引くつもりはないみたいだ。核心をつく質問に後

ずさりそうになるけど、本当にやましいことはしていない。  
なら、こつちが引く理由なんてない。

「じゃあ、なんでさつきからあの店の様子を伺っているのかしら？」  
「……………」

まずい、バレてる。

冬なのに、汗が吹き出そうになる。

あんなに揺さぶりをかけられた以上、アドバンテージは明らかに湊さん側にある。

しくじった。攻めに転じるのが遅かった。

「怪しいわね…………ちよつと行ってくるわ」  
「湊さん！」

それだけは駄目だ。湊さんと和那を会わせるわけにはいかない。  
こうなったら実力行使だ。

あたしの横を通ろうとする湊さんの腕を掴もうと手を伸ば——

「あつ」  
「む」

——す前に、ドン、と鈍い音がする。

湊さんが誰かとぶつかっただみたく、あたしの手が届く頃には、既にその誰かに支えられていた。

……………いや、誰か、と言うより。その、何というか。

「ごめんなさ………う、馬？」

なんか、馬がいた。

………何、これ？

「ハッ」

一瞬、正気を失いそうになったけど、どうにか理性が勝った。

朝、起きた時みたいに働かなくなってしまった頭を回転させて、状況を整理する。

湊さんが馬………いや、馬の被り物をした変質者にぶつかって、倒れそうになった湊さんを変質者が支えている。

よし、通報しよう。

「トナカイだ。いや、トナカイらしい………すまない、俺も自信がない」

——聞き慣れた声が、冷や汗を加速させた。

この現実から目を背けたくなるけど、不本意なことに、変態<sup>コレ</sup>、和那<sup>連れ</sup>だった。

何があったの。あたしが目を離している隙に、何がどうしてそうなったの。

で、その馬の和那こと馬和那<sup>バカズナ</sup>が固まっている湊さんから手を離すと、今度はあたしに顔を向ける。

「出るぞ。こつちも買物物は終わった」

「えっ、あつ、えっ？」

「はやくしろ。この店は危険だ。走る準備をしておけ」

「ちよっ、いや、話を」

危険、って、本当に何があつた。

なぜか数少ない私服が乱れているし、普段これでもかと動揺しない和那が珍しく焦っているし、本当にわけがわからない。

「ああ、そうだ」

これ以上場を混沌にする気なのか、馬和那バカズナは、まだ状況が飲み込めていない湊さんに向き合う。

ビニール袋から何かを取り出すと、あろうことか、それを湊さんの頭に被せた。

「向かいに開店した猫カフェに行くつもりのようなが、コレをつけていくと二割引きになるそうだぞ。俺より使い道があるはずだ。好きに使え」

「え」

素っ頓狂な言葉が出てしまう。

「……………ああ、猫カフェとか、二割引きとか、もう色々ツッコみたいけど、最も指摘したいのはコレしかない。」

「――」

固まる湊さんの頭部。

そこには、グレーの猫耳カチューシャがつけられていた。

この馬、曲がりなりにもあたしの先輩に何てことをしているんだろ

う。

「……………それにしても、互いが相手に知られたくないと察しているながら、切り上げるタイミングを見失うとはな。そもそも、隠し通したい理由すら明確に理解していないのに意地を張り合う姿、俺からしたら幼稚に見えてしまう」

極めつけにはこの言葉。

ほんと、もう、そこまでにしておけよ和那。

「あーん、お客様ー！今なら『これでアナタもケンタウロス！』キットをお買い求めいただければ、人馬一体の立派なトナカイですよ！盛り上がること間違い無しですよー！」

「ではな。蘭、逃げるぞ。掴まっている」

「……………」

ズルズルと、引きずられるようにその場を退散させられるあたし。傍から見たら、暴れ馬に引きずられる騎手みたいなものか。

目下の問題はこの馬鹿の説教だけど、問題は山積みだ。

放心状態で、いつそ哀れに思えてきた湊さんに見送られる。

……………心底同情しながら、今度会った時は謝ろうと心に決めた。



「……………で、何か言うことは？」

「白状すると、俺はコレを馬だと思っている」

「そういうこと聞いてないから」

先ほど居た場所とは反対側のモールの一角。  
俺はなぜかベンチで正座をさせられていた。

目の前には仁王立ちしながら睨む蘭。

「どうやら、先ほど睨み合っていた学校の先輩に失礼な真似をしたことに立腹しているようだ。」

「……………失礼さで言えば蘭にも刺さる言葉だろうに。何やら難しい距離感にいることは察することができる。」

「はあ……………ほんとわけわかんない。次、湊さんと会った時、どんな顔すればいいの……………」

「顔を見せたくないのか。では、これを使うか？ 悔しいが、着心地は悪くないぞ」

「怒るよ？」

「気を遣ったつもりだが、逆効果だったようだ。であれば、今の蘭の機嫌を取ることではできなさそうだな。業腹だが、ここは時間を置きましょう。」

「最悪……………もう楽器店寄って帰ろ……………」

「わかった。俺も配慮が足りなかったことを反省しよう」

「せつかく蘭が、あの先輩と俺が接触しないように気を遣ってくれたのだ。」

「察するに、俺との相性は悪いのかもしれないけど……………さつきは俺が一方的に話したただけだ。現時点では何とも言えない。」

「……………呆れたものだな」

「なんかバカにされた気がするんだけど」

「違う。お前は皆から頼まれた買い物をしないで、自分の買い物だけをして帰ろうとする顔の厚さに感心したただけだ」

「……………今回のことはノーカンにしてあげる」

「行幸だな。さて、行くか」

どうやら不問にしてくれるようだ。

何と言うんだったか………棚からぼた餅、と言うやつか。たまには褒め言葉を口にするものだな、と考えながら、蘭に連れられて楽器店に入る。

所狭しと飾られる楽器たちを眺める。

先ほどまで雑多な人混みばかりを見ていた身としては、まるでそのままギターやベースに置き換わったようにも思える。

「この間、弦交換したばかりなの忘れてた。ちよつと待ってて」「ああ」

手放しに『広い』とは言えない店内に取り残される。

買い物袋を持ったまま立っているのも退屈なので、改めて辺りを見渡す。

「そういえば、一度も入ったことはなかったな」

振り返れば、学生時代は音楽とは無縁の生活を送っていた。従妹が長年ピアノに触っていたためか、それに纏わる話を聞くことはあった。

しかし、知識面で言えば中学時代で止まったままで、あの五人がバンドを始めてようやく多少なりとも意識するようになった程度だ。

率直に言うと、いささか場違いのように思えてしまう。

仕方がないので、蘭が歩いていった方向に足を運ぶと………ふと、あのものに目がいった。

「……………これは」

「お待ちせ。どうしたの？」

丁度いいところに、目当ての物を見つけた蘭が戻ってきた。  
買い物の邪魔するのは忍びないが、ここは有識者に尋ねるとしよ  
う。

「蘭、これは何だ？」

「今更何言ってるの？ ギターでしょ。あ、これ結構いいやつだ」

「む、お前たちが持っているものと違う気がするぞ」

「……………嘘でしょ。アコギとエレキの違いすら知らないって、マジ？」

……………そんな信じられない物を見るような目をされても、俺は困  
るしかないわけだが。

仕方ない、と言った様子で、蘭が各々のギターの違いを説明してく  
れた。

個人的にはぎっくりとした程度で充分だったのだが、何やら蘭が饒  
舌に語り始めた。

情報過多なことこの上ない。しかし、俺が興味を持ってくれたこと  
が予想以上に蘭を刺激したようだ。

「なるほど、理解した。だが、お前は持っていないのか？」

「……………まあ、今のところは。もういいでしょ。早くつぐみたちの  
ところ行こう」

やや興奮していたことを恥じながら踵を返す蘭についていく。

改めて、アコギとやらを眺めながら、手元に近いものの弦をひとつ、  
弾いてみる。

重く、沈むように染み渡る低音。

それでいて、どこか懐かしい音色は、かつての親を想起させる。

「そうか。これも、ギターだったのだな」



古い記憶に浸りたい欲求を振り切り、場を後にする。  
今は、いつもより歩幅を小さく、スローペースで歩きたい気分だった。

「おや、友希那。起きていたのか。浮かない顔をしているけど、何か悩みでもあるのか?」

「お父さん……実は、今日、ショッピングモールで新しくできたカフェに行ったの」

「へえ、楽しそうだな」

「その近くで偶然会った後輩と話をしていたら、向かいの店から出てきたトナカイを名乗る馬にダメ出しされながら猫耳をつけられて、そのまま後輩が引きずられていったの。おかげでカフェで出費が二割抑えられたのだけど……私、どうしたらいいのかしら?」

「ココアでも入れよう。きつと練習で疲れているんだ。夜ふかししないで、早く寝なさい」

「……………ええ、そうするわ」

## 幕間 二人っきりの誕生日（つぐみ誕生日回）

夜の商店街は、実に静かだ。

馴染み深い北沢精肉店や、やまぶきベーカリーなど、日が昇る前から仕込みを始めるような店は言わずもがな。それ以外の店も、シャツターが閉まっていたり、もう片付けを始めていたりしている。

つい最近まで、慌ただしかった商店街も、徐々に落ち着きを見せ始めている。あちこちにあつた締め縄や門松も、既に押し入れの中。空を見上げてみれば、あれだけ見えていたオリオン座も姿を消し、寒さも幾ばくか和らいでいることから、これから一気に春の陽気になるのかと錯覚してしまいそうにもなる。

「おっ、つぐみちゃん！ そう言えば今日は誕生日だったね！ おめでどう！」

「あつ、ありがとうございます！」

ちょうど、子供の頃からのお得意さんが店じまいをしているところに出くわした。

そう。

恥ずかしながら、今日は私の誕生日なのです。

振り返ってみると、色んな人から祝福をもらってしまったと思う。

毎年祝ってくれる幼馴染は、今日のためにささやかなパーティーを

開いてくれた。

偶然居合わせていたあちゃんと紗夜さん、さらにお客さんからもお祝いしてもらっちゃった。ひまりちゃんには一本取られちゃったかな。

その後、練習のためにみんなでCIRCLEに行くと、パスパレとハロハピにばったり会った。イヴちゃんと千聖さん、花音さんも含めて、全員が『おめでどう』って言ってくれた。こころちゃんが盛大にパーティー開こうとして、それに日菜先輩が悪ノリしちやっつて練習どころじゃなくなっちゃったけど……………。

「はあ〜……………」

祝福されっぱなしの一日だけど、私からは溜息がひとつ溢れる。実を言うと、家に帰る足取りは軽くない。

高校生になってから色んな人たちにお祝いしてもらえようになつたことは心の底から嬉しい。ただ、肝心の人からはまだ不穏な動きしかないことが心にのしかかる。

「お兄ちゃん、大丈夫かなあ……」

頭に浮かぶのは、少し困った兄の顔。

幼馴染と誕生パーティーをした羽沢珈琲店はおろか、ここ三日ほど家を離れていた。

どこ行くのー、と聞いてみると「南だ」と一言だけの簡潔すぎる回答だけ。

行き先は不明。ちよつと寂しくなつたから電話をかけてみると、無機質な機械音が返るばかり。

そんな話を幼馴染みなにしてみると、そろつて苦笑いが出てくる始末。

「……………はあ」

我ながら期待しすぎかもしれないなあ、と心中で自嘲する。もう高校生になつたんだから、家族からのお祝いから卒業する頃合いなのかもしれない。

……………でも、一番祝ってもらいたい兄ヒトから関心を寄せられない事実を突きつけられるかもしれないと思うと、気分が落ち込むのも無理ないと思う。

そんな取り留めのない思考に参っていると、もう家の近くに着いてしまった。

羽沢珈琲店ちも、もう店じまいしている時間帯。

にもかかわらず、ぼんやりとした光が窓から漏れる。  
この明かりの付け方だけで、誰がいるのかわかってしまった。

「あっー！」

みんなから貰ったプレゼントを胸に抱えて駆け出す。さっきの足の重さが嘘のようだ。

店の前で一度立ち止まる。

ガラスに反射している自分の口元が緩んでいないか確認して、扉をゆっくりと引く。

「あつ、おかえり、お兄ちゃん！」

——やっぱりいた！

キッチンで洗い物をしている姿を見て駆け寄る。それに気づいたのか、お兄ちゃんの鉄面皮も仄かに崩れた。

「おかえり、と言うべきなのは俺の方だろう」

「そうだけど！ 帰るなら帰るって言つてよ！」

テーブルに乗り出して顔を覗き込む。

今まで離れていた距離が、このカウンター越しになっただけで安心感が一気にこみ上げてくる。我ながら子供っぽいかもしれないけど、ここは大目に見て欲しい。

「まあいいや。それよりどこ行つてたの？ あと、今何してるの？」

みんな心配していたよっ！」

「待て。一気に質問されるとさすがに返答に困る」

「あ、ごめんね」

つい、はしゃいでしまった。自省して、カウンター席に座つて一息

つくと、そつとカップが目の前に差し出される。

香りからして、ホットココアかな。ありがとう、とお礼を言いながら一口分、口に含むと、いつもと違う風味を感じた。

「あれ、これ深みあるね。どうしたの?」

「新作だ。少し南の方に行ったとき、ついでに調達してきた」

「調達……あつー!」

ようやく腑に落ちた。

突然の旅行の目的は慰安ではなく、新しい仕入先の開拓だったみたいだ。

「うん! これだったらうちでも出せるね! あれ、ついででつて?」

「……………明日まで黙っているつもりだったが、仕方ないか」

ココアに続いて差し出されたのは、手のひらサイズの円形のケーキ。

チョコソースでハ長調の記号が描かれ、白い皿に鎮座するそれは、今まで見たことのないザツハトルテだった。

「すごい手が込んでるね。これも新作? お母さん、これ作れるかな……………」

「叔母が作れる必要ない。これを最初で最後に口にするのはお前だからだ」

「えっ?」

首を傾げる。

また言葉が足りてないのか、さっきのお兄ちゃんの発言を反復しようとする、逆にお兄ちゃんの方から補足が入った。

目の前のザツハトルテに、ホワイトチョコでデコレーションされたプレートを添える形で。

「お前のために作ったと言っている。つぐみ」

ぽかん、としてしまった。

その意図を正確に飲み込めたのは、その数秒後だった。

——あ、そうだ。私、誕生日だった。

「……………呆れたな。まさか忘れていたとは」

「え、えへへ……………さつきまで頭一杯だったんだけど……………」

パタパタと、火照る顔を手で仰ぐ。

帰ってきてくれたことに安心して、ぽっかり忘れてしまったみたいだ。お兄ちゃんからしたら、それも筒抜けなんだろうな。

恥ずかしいけど、嫌な心地は一切しない。

「本来なら明日出すつもりだったのだが、こうなったら背に腹は替えられん」

「そうなんだ……………あれ？」

……………明日？

なんで今日じゃなくて明日なんだろう？

「お兄ちゃん。今日って何日？」

「何を言っている。六日だろう」

「……………七日、なんだけど」

——ぴしり、と、何かが固まる音がした。

流れる動作でポケットからスマホを取り出すお兄ちゃん。表情は変わっていないため、一見落ち着いているように見える。

「……………七日、だな」

「あ、あははは……………」

意味深な間からはどれだけショックを受けたのかが察せられる。

誕生日は覚えていても、お兄ちゃんの中では昨日を生きていると思っていたみたいだ。

「面目ない。まさか時差ボケに惑わされるとはな」

「あ、そうなんだ。時差ならしょうがないよね…………えっ？ 海外にいたの？」

「ああ。だが、結果的に駆け込みで祝う形になってしまったな。本当なら一番最初に祝うことができればよかったのだが…………」

「き、気にしないで！ 私はそれでも嬉しいから！」

「そうしてもらえると助かる。そうすると、もう誕生日パーティーでたらしく食べた後か。ならば、このケーキは明日にした方が良さそうだ。今片付ける」

「あつ」

しょんぼりと落ち込んだまま、目の前のケーキを取り上げられる。形を崩さないようにラップを被せたそれを冷蔵庫の中に放り込み、同時に途中だった洗い物もあつという間に片付けてしまった。

…………余程悔いているのか、その手際の前には口を挟む余裕すら与えてくれなかった。

「渡したいものがある。一時間後に部屋に行く。悪いが、それまで風呂にでも入っていてくれ」

「ちよつ、お兄ちゃん！」

時間がない、とばかりに、言いたいことだけ言って自室に戻るお兄ちゃん。

僅かな明かりが灯る店内に、ぽつんと取り残される。飲み干してし

まったホットココアのカップも既に乾燥機の中で、あるのは幼馴染みんから貰った入浴材セットだけ。

「しようがないなあ、もう」

呆れ半分、期待半分の感想を吐露する。

待ち望んでいたのも事実なので、ここはお兄ちゃんに合わせることにした。

一時間あれば、お風呂も問題なく楽しめる。

せっかくなので、早速貰った入浴材のどれかを楽しむことにした。

………んだけど、ちよつとした問題がひとつ。

「……………」

無意識に、視線が羽沢珈琲店の冷蔵庫に向いてしまう。

あのホットココアと見せつけられたザツハトルテが呼び水になったのか、ちよつとだけ——ほんのちよつとだけ、小腹が空いちやつたみたいだった。

………あのケーキ、そこまで大きくなかったよね？

『ケーキは生菓子だからね。その日に食べないと味は落ちるし、食感も変わっちゃうよ。それに、見たところアレ、出来たてだから超美味しいことは間違いなし。もう、今日は年に一度の誕生日なんだから……ゆー、食べちゃいなよー』

こんな時、巴ちゃんはひまりちゃんが誘惑してくる、って言ったけど、私だとモカちゃんが誘惑してくる……。

いけない。モカちゃんは太りにくい体質みたいだから……言い方は悪いけど、あてにしてはいけない。誘惑は振り切らないと。

『そうだよ、つぐー！ この時間帯にケーキはダイエットの天敵中の天敵』



敵！　まあ、今日くらい良いよねっ”が積み重なると、あとで体重計に乗った後の後悔につながるんだから！　ここはぐつと堪えて、日を改めてゆつくり食べるべきだよ、絶対！』

あああ、私の中のひまりちゃんが守ってくれる……。

そ、そうだよねっ。私のために作ってくれたケーキだから、間違ってお母さんが勝手に食べたりしないよねっ。

……………でも、ひまりちゃん。

もし、ひまりちゃんが私の立場だったら、これ、我慢できる？

『……………むりです』

『もく、つぐく。今度からはストッパーはひーちゃんじゃなくて蘭かトモチんにしないと』

そうだね。気をつけるよ、モカちゃん。

今度から、紗夜さんをお願いするね



「食べたのか」

ここは私のお部屋。

今、時間通りに訪ねてきたお兄ちゃんのジト目から必死に目を逸らしている最中でございます。

せつかくお風呂上がりなのに、冷や汗をかきそうなくらいに追い詰

められています。お兄ちゃん自身、そんな意図はないけど。

「それもいいだろう。俺から言うことは、無理な追い込みだけはしないようにしておけ……というくらいだ」

だからこそ、この優しさが余計に自責を促す。肯定される度に、自分の耐え症のなさが露わにさせられているみたいで居た堪れなくなる。もういつそのこと、説教してくれた方が楽になれるかもしれない。

「まあ、俺も準備のできなかつた側だからな。とにかく、これを受け取ってほしい」

「は、はいっ!」

変な返事とともに手渡しされたモノ。

片手サイズに収まる無地の黒い箱からは、大人っぽい上品な雰囲気がある。

正直、私が負けちゃっているかと思ってしまう程に、似合っていないのではないかと思ってしまう。

「あ、開けていい……かな?」

「好きにしろ」

許しを得る必要なんてないのに、わざわざ聞いてしまう。開けるにしても、誰かの保障が欲しかった。

恐る恐る、箱を開けてみる。

中身を見て——私は目を奪われてしまった。

「ネットレスと……ブレスレットだ!」

「いささか派手すぎるかもしれないが」

やや遠慮気味に言われたとおり、意匠は派手な部類だった。チェーン部分からヘッドにかけて、眩しいくらいのゴールドで基調され、アクセントとしてルビーやガーネットのような色彩の装飾ががちこちになされている。ヘッドの部分は、円形の枠に方位磁針のような針が時計のように張り巡らされている。モチーフは太陽のようだ。見たところ、お兄ちゃんの嗜好をベースに、できるだけ私の趣味に合わせてくれた……。のだと思う。それでも、私の方に傾倒し切れない不器用さが、逆にお兄ちゃんらしくて自然に笑みが溢れてしまう。高校生が身につけるにしては少し大人すぎるかもしれないけど……幼馴染みんなと比べて個性が薄い私にとっては、これくらいの派手さがちょうど良いのかもしれない。

「……それにしても、これ良く出来てるね。もしかして、すごい高かった？」

「いや、元手はかかっていない。自作だからな」

「そうなんだー……………えっ」

今、とんでもないことを言われた気がする。

自作……………つまり、このアクセサリーを、目の前にいるお兄ちゃんが作った。認識の違いがなければ、そういうことになってしまう。

「旅先で会った職人に教えてもらった。製作期間の割には、会心の出来だと思っている」

「ぷっ……………今、すごいドヤ顔してるよ、お兄ちゃん」

「……………それだけ、自信があったんだ」

口を閉ざしながら、恥ずかしそうに頬をかくお兄ちゃん。見ていると、こっちも自然に口元が緩んでしまう。

確かに、出来は良すぎるくらいだった。それこそ、市販で売ってると言われても騙されてしまいそうなほどに。

けれど、ここにあるのは世界にひとつだけのモノ。悩みながら必死

に作ってくれたものが嬉しくないはずがない。

「——うん、ありがとう、お兄ちゃん。大切にするね」

だから、今日一番の笑顔でお礼を言葉にした。

お兄ちゃんは、返事の代わりとばかりに満足そうに微笑んだ。

改めて、ネックレスとブレスレットを見比べる。その輝きは、照明の光が反射するどころか、眺める自分すら写してしまいそうなほどに澄んでいる。

「でも、これが手作りなんて言われても誰もわからないんじゃないかな。このゴールドとか純金みたいだもん」

「当然だ。純金ホンモリだからな」

「そっかー。なら当たりま——えっ?」

……………お互い、目を見合わず。

「……………純金ホンモリ?」

「ああ」

「……………正真正銘?」

「そうだと言っている」

「で、でも、手作りって言ったよね?」

「手作りだ」

何をそんなに驚く、と疑問符が浮かんでいるお兄ちゃん。

……………いやいやいや。

待って。何か、色々と、おかしい気がする。

「……………お兄ちゃんって、どこから作ったの?」

「始めからだ」

「えっと……………せ。設計図から?」

「ああ。そこから素材調達から加工まで全て俺だ」

「も、元手がかからなかった、つてつまり……」

「自力で調達したからな。強いて挙げるなら、道中の旅費や飲食代程度か」

「き、金つて、そんな簡単に採れるものなの？」

「少なくとも日本では採れないな。だからわざわざ南の方へ行った。たまたま装飾に使える宝石の原石も採れたのは僥倖だったな」

——頭が痛くなった。

つまり、突然の旅行の目的は、羽沢珈琲店の仕入先の開拓じゃなくて、向こうで金を採るためだった、と言うことになる。

じゃあなんだ。電話して繋がらなかったのは、海外にいたことと、本当に電波の届かない鉱山とかにいたから？

「常連の黒服の男を知っているだろう。あの男が金が採れる鉱山や、この手の装飾品の職人を斡旋してくれた。お前のプレゼントを用意できるついでに、仕入先の開拓もできて一石二鳥だった以上、これに乗るしかないと思い立ったわけだ。プレゼントの他にも実にいい刺激を……どうした？　なぜ震えている？」

「おおおおお、お兄ちゃん、その、なんていうか……ひ、ひとつ言っついていっ……」

「遠慮する必要はない。何が言いたい？」

「その………プレゼントにしては、ちよつと重すぎるよ、これ」「重い？　ネックレスは六グラム程度だぞ」

物理的な意味じゃないよ。精神的な意味で重すぎるって意味だよもう。

純金かつ、装飾もビーズじゃなくて本物の宝石とか、完全に高校生が手にしちやいけないものだよもう。

恐る恐る、震える手で元のケースに戻す。傷つけてしまっはいいけない。これは机の奥底に眠らせることにした。

「……………そうか。どうやらまた俺は間違えてしまったようだな。気の利いたプレゼントのひとつもできない従兄あにとは、何とも情けないばかりだ」

無表情のように見えるけど、間違いなくしょんぼりしているお兄ちゃんに心が痛む。

どうすればいいか、右往左往している間にも、お兄ちゃんは部屋を後にしようとしている。

こんな顔にさせたくない。

プレゼントが嬉しいのは、偽りのない本心だ。でも、これはさすがに私一人がもらうにしては荷が重すぎる。とてもじゃないけど、身につけられるものじゃない。

——ひとりで抱え込む必要なんてないだろ。

ふと、いつか聞いたような、そんな言葉が舞い降りてきた。

「お兄ちゃん！」

呼び止めた後の動きは、我ながらかなり自然体だったと思う。

一度は封をしたそれを、再び手に取る。

その内のひとつを取り出し、ちよつとばかり背伸びをすればいいだけ。

「……………つぐみ？」

「ちよつと待ってね……………うん、こっち向いていいよ」

お兄ちゃんが振り向くと同時に、左手首を見せる。そこには、貰ったばかりのブレスレットがひとつだけ巻かれている。サイズはぴったりだ。

もうひとつ、セットのネックレスは——目の前に吊るされている。

「……………なぜ俺にこれを」

「えへへっ」

いたずらっぽく、笑ってみる。

見立ても通り、チエーンが長めだったことと、細身だったためか、レディースでも問題ない。むしろ、私とは比較にならないほどに似合っている。それこそ、まるで初めから身体の一部だったような錯覚を覚えるほどに自然だ。

「やっぱ、私が身につけるにしては重すぎるよ。とてもじゃないけど、今の私だと着せられちゃうよ。」

……………けど、お兄ちゃんが片方付けてくれるなら、もう片方は私も持てるから！ だから、それはお兄ちゃんにあげるっ！」

あれこれ理由は言ったけど、正直言ってこれはただの願望とこじつけだ。

このアクセサリーはお兄ちゃんの方が似合うと思ったから、これをつけたお兄ちゃんを見たかったことがひとつ。

そして、お兄ちゃんが付けてくれれば、その妹の「証」として、私もこれを身につけていられると思ったことがひとつ。

……………弱い私はこうでもしないと、この贈り物には向き合えそうになかった。

——後日、この兄妹パールックについて幼馴染みんなに死ぬほどイジられる羽目になることになるけど、それは別の話。

「」

今日のお兄ちゃんはよく表情が顔に出る。

さつきの残念そうな顔といい、今の面食らった顔といい、普段なら偶に出る程度の変化が、こうも度重なる日は、過去を遡っても存在しないかもしれない。

「そうか……そうか——そうなのか」

噛みしめるように、何度も呟く。

幼馴染は知っているかわからないし、本人はバレてないと思っ  
ているみただけど、お兄ちゃんは心が揺さぶられると、同じ言葉を繰り返す傾向がある。

過去の最高記録は三回。当時、何に揺さぶられたのかは残念なことに覚えていないけど——

「承知した。なら、これは俺が預かろう。ただ、プレゼントの半分を受け取ってしまった以上、もう半分の埋め合わせをしなければな」

「もう、そんな気にしなくてもいいのに……あ、なら旅行のお土産話を聞かせて！ 小さかった頃みたいに、寝ながらお話しようよ！」

「そんなこともあったか。だが、あの頃はお前の方が一方的に話をしていた記憶しかないぞ」

「だから、今日はお兄ちゃんにいっぱいお話してもらおうからねっ！」

「……………難しいな。だが、頑張ってみよう」

「やたっ！ なら、枕はこのクッション使って！」

……………こうして夜は更けていく。

たどたどしいお話を聞きながら思う。

幼馴染たちの「いつも通り」が確認できる羽沢珈琲店が好き。

私に変化をくれる人達が来てくれる羽沢珈琲店が、前よりずっと好き。



………そして、こんなにも私を愛してくれて、いつも私を信じてくれる家族がいてくれる羽沢珈琲店が――

「――やっぱり、大好き！」

私は信じている。

来年は、もっと、もっと、羽沢珈琲店が大好きになっていることを